

四
戸
遺
跡

「本文編2」

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二〇

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



四 戸 遺 跡

— 本文編 2 —

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

四 戸 遺 跡

－本文編 2－

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2020

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

本文編2 目 次

本文編2 目次	3区24号竪穴建物	50
本文編2 挿図目次・表目次		
第4章 検出された遺構と遺物		
第3節 3区の遺構と遺物		3
第1項 縄文時代の遺構と遺物		4
(1)概要		4
(2)竪穴建物		4
3区3号竪穴建物		4
3区8号竪穴建物		4
3区25号竪穴建物		7
(3)土坑		9
(4)遺構外出土遺物		10
第2項 弥生時代の遺構と遺物		12
(1)概要		12
(2)竪穴建物		12
3区5号竪穴建物		12
(3)遺構外出土遺物		13
第3項 古墳時代の遺構と遺物		14
(1)概要		14
(2)竪穴建物		14
3区1号竪穴建物		14
3区2号竪穴建物		14
3区4号竪穴建物		16
3区6号竪穴建物		18
3区7号竪穴建物		21
3区9号竪穴建物		22
3区11号竪穴建物		23
3区12号竪穴建物		29
3区13号竪穴建物		33
3区15号竪穴建物		37
3区18号竪穴建物		43
3区19号竪穴建物		43
3区20号竪穴建物		47
3区21号竪穴建物		47
3区23号竪穴建物		50
3区24号竪穴建物		50
第4項 古代(7世紀後半以降)の遺構と遺物		54
(1)概要		54
(2)竪穴建物		54
3区10号竪穴建物		54
3区14号竪穴建物		56
3区16号竪穴建物		56
3区17号竪穴建物		60
(3)土坑		63
(4)遺物集中箇所		68
(5)溝		69
第5項 中世以降の遺構と遺物		76
(1)概要		76
(2)土坑		76
(3)井戸		109
(4)ピット		109
(5)焼土遺構		109
(6)溝		110
(7)畠		117
第6項 遺構外出土遺物		123
(1)土器類		123
(2)石製品		123
(3)金属製品		123
第4節 4区の遺構と遺物		127
第1項 縄文時代の遺構と遺物		128
(1)概要		128
(2)遺構外出土遺物		128
第2項 弥生時代の遺構と遺物		129
(1)概要		129
(2)竪穴建物		129
4区1号竪穴建物		130
4区2号竪穴建物		131
4区3号竪穴建物		141
4区4号竪穴建物		142

4区7号竪穴建物	147	(3)復旧坑	244
4区8号竪穴建物	151	(4)溝	246
4区11号竪穴建物	156	(5)畠	247
4区12号竪穴建物	158	第6項 遺構外出土遺物	253
4区14号竪穴建物	162	(1)土器類	253
4区17号竪穴建物	164	(2)金属製品	253
4区18号竪穴建物	164	第5章 自然科学分析	255
4区19号竪穴建物	168	第1節 火山灰分析(1区)	256
4区20号竪穴建物	169	第2節 火山灰分析(2区)	258
4区21号竪穴建物	170	第3節 樹種同定(1区)	264
4区22号竪穴建物	171	第4節 樹種同定(2・4区)	268
4区24号竪穴建物	177	第5節 放射性炭素年代測定	270
4区25号竪穴建物	185	第6節 出土人骨鑑定	274
4区31号竪穴建物	185	第6章 調査の成果(総括)	277
(3)竪穴遺構	189	第1節 集落の変遷について	277
(4)土坑	189	第2節 縄文時代の土器について	285
(5)遺構外出土遺物	190	第3節 四戸遺跡出土の 弥生時代の土器について	288
第3項 古墳時代の遺構と遺物	191	第4節 弥生時代の家屋構造	296
(1)概要	191	第5節 特異な遺物と四戸遺跡	300
(2)竪穴建物	191	第6節 四戸遺跡出土の墨書・刻書土器	302
4区9号竪穴建物	191	第7節 四戸遺跡周辺の地質について	307
4区10号竪穴建物	194	第8節 まとめ	318
4区16号竪穴建物	199	報告書抄録	
4区26号竪穴建物	199		
4区27号竪穴建物	201		
4区32号竪穴建物	206		
第4項 古代(7世紀後半以降)の遺構と遺物	208		
(1)概要	208		
(2)竪穴建物	208		
4区5号竪穴建物	208		
4区6号竪穴建物	210		
4区13号竪穴建物	210		
4区23号竪穴建物	215		
4区28号竪穴建物	215		
4区29号竪穴建物	216		
4区30号竪穴建物	218		
(3)土坑	223		
第5項 中世以降の遺構と遺物	228		
(1)概要	228		
(2)土坑	228		

插图目次

第367图	3区 第1~2面 遺構配置図	1·2	第422图	3区16号溝 出土遺物(2)	74
第368图	3区 3区 區区劃り図	3	第423图	3区17~19号溝 平・断面図	75
第369图	3区 3号型穴建物 床面 平・断面図	5	第424图	3区1~6、9号土坑 平・断面図	97
第370图	3区 3号型穴建物 出土遺物	6	第425图	3区7、10~13号土坑 平・断面図	98
第371图	3区 8号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	7	第426图	3区14~17、19、20号土坑 平・断面図	99
第372图	3区 25号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	8	第427图	3区21~22、25~26、28~29、31号土坑 断面図	100
第373图	3区 115号土坑 平・断面図、出土遺物	9	第428图	3区27·30·32~35·39号土坑 平・断面図	101
第374图	3区 縄文時代遺構外出土遺物(1)	10	第429图	3区36~38、41、43~46、51、53号土坑 断面図	102
第375图	3区 縄文時代遺構外出土遺物(2)	11	第430图	3区54~58、60号土坑 平・断面図	103
第376图	3区 5号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	12	第431图	3区59、64~66、69、71号土坑 平・断面図	104
第377图	3区 弥生時代遺構外出土遺物	13	第432图	3区72、74、76、78号土坑 平・断面図	105
第378图	3区 1号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	15	第433图	3区79~81、84~86号土坑 平・断面図	106
第379图	3区 2号型穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物	17	第434图	3区83、87~91号土坑 平・断面図	107
第380图	3区 4号型穴建物 床面、床面下 平・断面図	19	第435图	3区92~95、97、117、118号土坑 平・断面図	108
第381图	3区 4号型穴建物 出土遺物(1)	20	第436图	3区 1号井戸 平・断面図、出土遺物	109
第382图	3区 4号型穴建物 出土遺物(2)	21	第437图	3区 2号溝 平・断面図、出土遺物	113
第383图	3区 6号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	22	第438图	3区 3·6、20号溝 平・断面図、出土遺物	114
第384图	3区 7号型穴建物 床面、カマド 平・断面図	24	第439图	3区 7·9·10·13号溝 平・断面図	115
第385图	3区 7号型穴建物 床面下 平面図、出土遺物(1)	25	第440图	3区11·12·14·15号溝 平・断面図	116
第386图	3区 7号型穴建物 出土遺物(2)	26	第441图	3区 3·7号高 平・断面図、出土遺物	120
第387图	3区 7号型穴建物 出土遺物(3)	27	第442图	3区 4·6·8·11号高 平面図、6·8·11号高断面図	121
第388图	3区 9号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	28	第443图	3区 5·9·10号高 平面図、5·9号高 断面図	122
第389图	3区 11号型穴建物 床面、床面下 平・断面図	30	第444图	3区 古墳時代以降遺構外出土遺物(1)	123
第390图	3区 11号型穴建物 カマド 平・断面図、出土遺物(1)	31	第445图	3区 古墳時代以降遺構外出土遺物(2)	124
第391图	3区 11号型穴建物 出土遺物(2)	32	第446图	4区 第2、2面遺構配置図	125·126
第392图	3区 11号型穴建物 出土遺物(3)	33	第447图	4区 區区劃り図	127
第393图	3区 12A号型穴建物 床面 平・断面図	34	第448图	4区 縄文時代遺構外出土遺物(1)	128
第394图	3区 12B号型穴建物 床面 平・断面図、12A号型穴建物出土遺物(1)	35	第449图	4区 縄文時代遺構外出土遺物(2)	129
第395图	3区 12B号型穴建物 出土遺物(2)	36	第450图	4区 1A号型穴建物 床面 平・断面図	133·134
第396图	3区 13A号型穴建物 床面 平・断面図	38	第451图	4区 1B号型穴建物 床面 平・断面図	135
第397图	3区 13A号型穴建物 カマド 平・断面図	39	第452图	4区 1号型穴建物 床面下 平・断面図	136
第398图	3区 13A号型穴建物 出土遺物(1)	40	第453图	4区 1号型穴建物 出土遺物	137
第399图	3区 13A号型穴建物 出土遺物(2)	41	第454图	4区 2号型穴建物 床面 平・断面図	138
第400图	3区 13B号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	42	第455图	4区 2号型穴建物 床面下 平・断面図	139
第401图	3区 15号型穴建物 床面、床面下 平・断面図	44	第456图	4区 2号型穴建物 出土遺物	140
第402图	3区 15号型穴建物 出土遺物	45	第457图	4区 3A号型穴建物 床面 平・断面図	143
第403图	3区 18号型穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物	46	第458图	4区 3A号型穴建物 断面図、3B号型穴建物床面 平面図	144
第404图	3区 20号型穴建物 床面、カマド 平・断面図	48	第459图	4区 3号型穴建物 床面下 平・断面図	145
第405图	3区 20号型穴建物 出土遺物	49	第460图	4区 3号型穴建物 出土遺物	146
第406图	3区 21号型穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物	51	第461图	4区 4号型穴建物 床面 平・断面図	148
第407图	3区 23号型穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物(1)	52	第462图	4区 4号型穴建物 床面下 平・断面図	149
第408图	3区 23号型穴建物 出土遺物(2)	53	第463图	4区 4号型穴建物 出土遺物	150
第409图	3区 24号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	55	第464图	4区 7号型穴建物 床面 平・断面図	152
第410图	3区 10号型穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物	57	第465图	4区 7号型穴建物 床面下 平・断面図	153
第411图	3区 14号型穴建物 床面、カマド 平・断面図	58	第466图	4区 7号型穴建物 出土遺物	154
第412图	3区 14号型穴建物 出土遺物	59	第467图	4区 7号型穴建物 床面 平・断面図	155
第413图	3区 16号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	61	第468图	4区 8号型穴建物 床面下 平・断面図	156
第414图	3区 17号型穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物(1)	62	第469图	4区 8号型穴建物 出土遺物	157
第415图	3区 17号型穴建物 出土遺物(2)	63	第470图	4区 8号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	159
第416图	3区 98~106号土坑 平・断面図	67	第471图	4区 12号型穴建物 遺物出土図、床面 平・断面図	160
第417图	3区 107、108、112~114号土坑 平・断面図	68	第472图	4区 12号型穴建物 床面下 平・断面図、出土遺物(1)	161
第418图	3区 遺物集中箇所 平面図	69	第473图	4区 12号型穴建物 出土遺物(2)	162
第419图	3区 遺物集中箇所 出土遺物	70	第474图	4区 14号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	163
第420图	3区 16号溝 平・断面図	72	第475图	4区 17号型穴建物 床面 平・断面図	165
第421图	3区 16号溝 出土遺物(1)	73	第476图	4区 17号型穴建物 出土遺物	166
			第477图	4区 18号型穴建物 遺物出土図、床面 平・断面図	167
			第478图	4区 18号型穴建物 出土遺物	168
			第479图	4区 19号型穴建物 床面 平・断面図、出土遺物	169
			第480图	4区 20号型穴建物 床面 平・断面図	170
			第481图	4区 21号型穴建物 遺物出土図	172

第482図	4区21号竪穴建物	床面 平・断面図	173
第483図	4区21号竪穴建物	出土遺物(1)	174
第484図	4区21号竪穴建物	出土遺物(2)	175
第485図	4区22号竪穴建物	床面 平・断面図、出土遺物	176
第486図	4区24号竪穴建物	遺物出土図	178
第487図	4区24A号竪穴建物	床面 平・断面図	179
第488図	4区24B号竪穴建物	床面 平・断面図	180
第489図	4区24号竪穴建物	出土遺物(1)	181
第490図	4区24号竪穴建物	出土遺物(2)	182
第491図	4区24号竪穴建物	出土遺物(3)	183
第492図	4区25号竪穴建物	床面 平・断面図、出土遺物	186
第493図	4区31号竪穴建物	床面 平・断面図、出土遺物(1)	187
第494図	4区31号竪穴建物	出土遺物(2)	188
第495図	4区1号竪穴遺構	床面、4区128号土坑 平・断面図	189
第496図	4区弥生時代遺構外	出土遺物	190
第497図	4区9号竪穴建物	床面 平・断面図	192
第498図	4区9号竪穴建物	床面下、カマド 平・断面図	193
第499図	4区9号竪穴建物	出土遺物	194
第500図	4区10号竪穴建物	床面 平・断面図	195
第501図	4区10号竪穴建物	床面下 平・断面図	196
第502図	4区10号竪穴建物	出土遺物(1)	197
第503図	4区10号竪穴建物	出土遺物(2)	198
第504図	4区16号竪穴建物	床面、カマド 平・断面図、 出土遺物	200
第505図	4区26号竪穴建物	床面、床面下 平・断面図	202
第506図	4区26号竪穴建物	カマド 平・断面図、出土遺物	203
第507図	4区27号竪穴建物	床面 平・断面図、出土遺物	204
第508図	4区27号竪穴建物	床面下、カマド 平・断面図	205
第509図	4区27号竪穴建物	床面 平・断面図	206
第510図	4区32号竪穴建物	出土遺物	207
第511図	4区5号竪穴建物	床面、カマド 平・断面図、出土 遺物	209
第512図	4区6号竪穴建物	床面、カマド 平・断面図	211
第513図	4区6号竪穴建物	出土遺物	212
第514図	4区13号竪穴建物	床面、床面下、カマド 平・ 断面図	213
第515図	4区13号竪穴建物	出土遺物	214
第516図	4区23号竪穴建物	床面 平・断面図	215
第517図	4区28号竪穴建物	床面、カマド 平・断面図	217
第518図	4区28号竪穴建物	床面下 平・断面図	218
第519図	4区28号竪穴建物	出土遺物	219
第520図	4区29号竪穴建物	床面 平・断面図、出土遺物	220
第521図	4区30号竪穴建物	床面、カマド 平・断面図	221
第522図	4区30号竪穴建物	出土遺物	222
第523図	4区95・96・99～102号土坑	平・断面図	226
第524図	4区103～105・124～127・129～131号土坑	平・ 断面図	227
第525図	4区1～3・5・9・10号土坑	平・断面図	227
第526図	4区7・8・13・14・17～19号土坑	平・断面図	238
第527図	4区27～32・52号土坑	平・断面図	239
第528図	4区35～37・44・45・51・53・54号土坑	平・断面図	240
第529図	4区55～58・60・74・80・81・83号土坑	平・断面図	241
第530図	4区107・109・110号土坑	平・断面図	242
第531図	4区114・118・119号土坑	平・断面図、107・110号 土坑 出土遺物	243
第532図	4区1号復旧土坑	出土遺物	244
第533図	4区1・2号溝	平・断面図	247
第534図	4区1号高	平・断面図、出土遺物	248
第535図	4区2号高	平・断面図	249
第536図	4区4号高	平面図	250
第537図	4区5号高	平・断面図	251
第538図	4区3号高	平面図	252
第539図	4区古墳時代以降遺構外	出土遺物	254
第540図	時期別遺構分布図(1)		280
第541図	時期別遺構分布図(2)		281・282
第542図	時期別遺構分布図(3)		283・284

第543図	新富県内陸部の布目式土器	286
第544図	群馬県内での布目式土器	287
第545図	後葬弥生土器の器種組成	289
第546図	後葬弥生土器の時代区分	292
第547図	唐堀B遺跡出土土器	294
第548図	屋内棟持柱をもつ竪穴建物(1)	296
第549図	屋内棟持柱をもつ竪穴建物(2)	297
第550図	壁際ピットを持つ竪穴建物	298
第551図	焼失竪穴建物内の炭化材出土状況	299
第552図	中之条盆地周辺の切家断面図	307
第553図	中之条盆地の地形学図	308
第554図	吾妻川中流域の地質図	309
第555図	吾妻川流域の段丘面区分図	311・312
第556図	ボーリングと露頭図	313
第557図	①～⑦の土壌断面図	313
第558図	吾妻川における断面図(1)	314
第559図	吾妻川における断面図(2)	315

本文編2 表目次

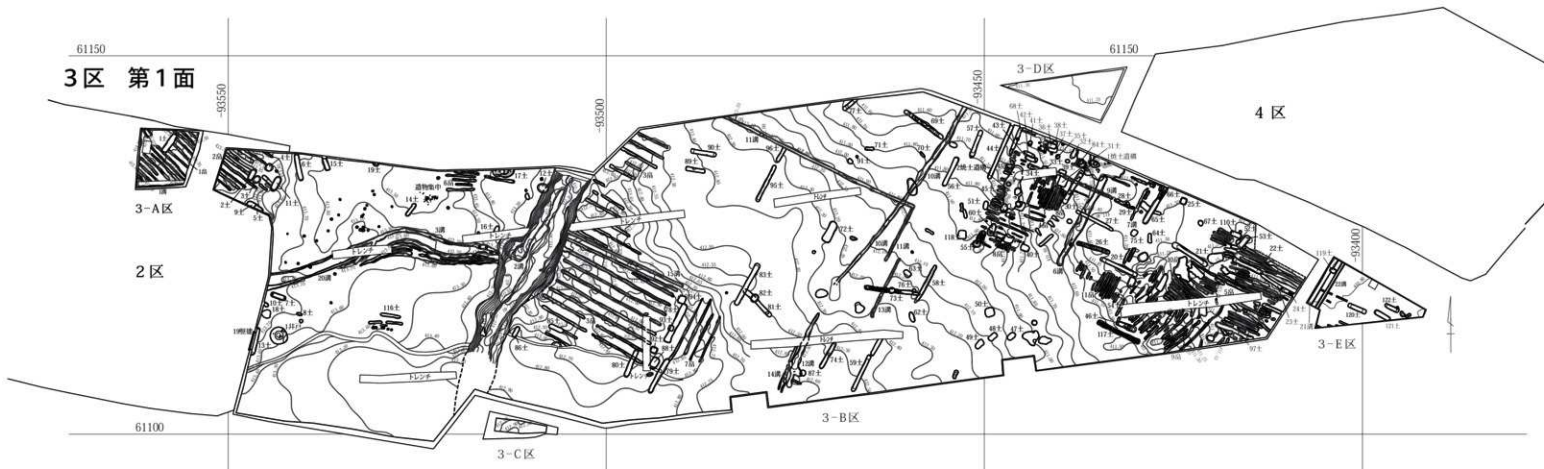
第234表	四戸遺跡出土墨書・刻書土器一覧表	302
第235表	上野国内翻牧9箇所の上比定地	305
第236表	土壌断面を参照した遺跡名	311・312

第 4 章

第 3 節 3 区の遺構と遺物

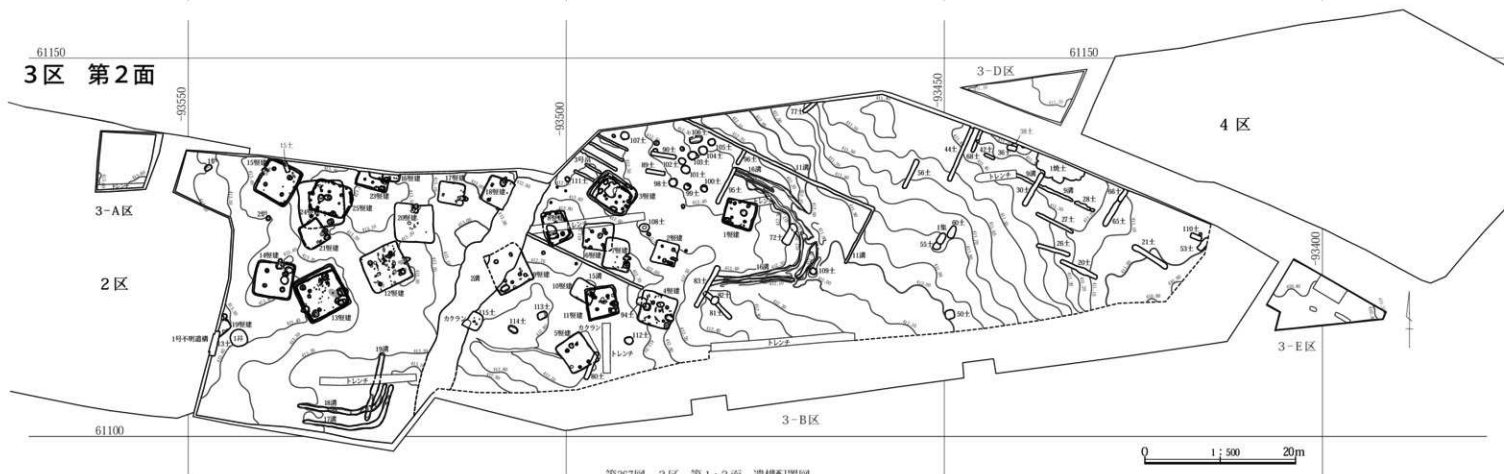
61150

3区 第1面



61150

3区 第2面



第367图 3区 第1·2面 遺構配置图

0 1:500 20m

第3節 3区の遺構と遺物

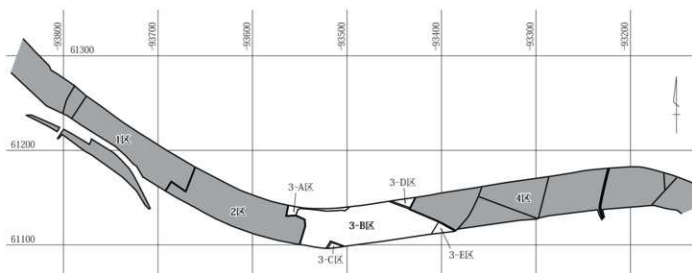
本調査区は、平成26・30年度の2カ年度に跨がり、道・水路および調査の進行上から3-A～E区の5区分して調査を行った。各年度の調査対象箇所は、3-A～D区を平成26年度に、3-E区を平成30年度である。

平成26年度調査は四戸遺跡の2年度目の調査であり、前年度(1-A区)の調査データから中・近世を対象とした第1面調査、さらに縄文時代～古代を対象とした第2ないし3面の調査が予測され、各面の調査を順次行った。その結果、第1面調査では中世から近世の土坑や溝、畝等の遺構が中心に検出され、第2面調査では縄文時代から平安時代に至る各時代の竪穴建物(住居)や竪穴遺構、土坑等の遺構・遺物が検出された。また、ローム層への旧石器時代の確認調査を行ったが、旧石器時代の遺構・遺物は出土していない。この平成26年度調査で検出された遺構は、縄文時代から平安時代の竪穴建物(住居)25棟、竪穴遺構1基、土坑17基、遺物集中1カ所、溝4条、中世以降の土坑103基、井戸1基、焼土遺構2基、溝14条、畝11区画、さらに古墳時代から中世以降のピット54基である。

平成30年度調査は、先の平成26年度調査時の未調査箇所を対象としていることから調査区名称を踏襲して3-E区とし、併せて各面の調査も同様に行った。その結果、第1面調査で中世以降の遺構が検出されたものの、縄文時代から平安時代を対象とした第2面調査では遺構が検出されなかった。依って、この平成30年度調査での検出遺構は、第1面調査での土坑4基、焼土遺構2基、溝2条、畝1区画である。

以上の結果、3区から検出された遺構は、縄文時代から平安時代の竪穴建物(住居)25棟、竪穴遺構1基、土坑17基、遺物集中1カ所、中世以降の土坑103基、井戸1基、溝14条、畝11区画、さらに古墳時代から中世以降のピット54基である。(第367図を参照)

以下、各時代ごとに記述する。



第368図 3区 3区細区割り図

第1項 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

先に調査が行われた西側の1区で縄文時代の遺物が出土していることから、本調査区においても縄文時代の遺構ないし遺物の存在が想定されていた。3区の基本層序Ⅵ層上面を遺構確認面とした3-B区第2面調査において、古墳時代や古代の遺構と共に縄文時代の竪穴建物と土坑を検出した。また、遺構確認時には多くの土器・石器も出土している。

(2) 竪穴建物

本調査区で検出された縄文時代の竪穴建物(住居)は、第2面調査において3-B区に前期の竪穴建物3棟、竪穴遺構1基が検出された。

以下、各建物ごとに記述する。(第20表 3区竪穴建物一覧を参照)

3区3号竪穴建物

(第369・370図、第20・166表、PL.101・241・242)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置する。南西側約5mに3区8号竪穴建物がある。

グリッド：Z・2A-99・100

座標値：X=61,129~61,135 Y=93,490~93,497

形状：長方形

規模：長軸5.81m 短軸4.51m 壁高32~43cm

長軸方向：N-55°-W 床面積：21.21㎡

埋没土：1・2層に分層した黒褐色土を主体とする。

床面・壁：床面はローム土中にあり、概ね平坦となるが、硬化は弱い。壁際および床面上には周溝を確認できる。

床面の中央付近となるが、大型の地山礫が露出する。また、床面の一部には、自然礫層が露出する部分もある。壁高は32~43cmを測り、直立ぎみに立ち上がる。

炉：炉は床面中央からやや上方に位置し、地床が浅い掘り込みをもち、炉底面は自然礫層が露出する。炉の規模は、長さ2.22m、幅1.54m、深さ14cmを測り、不定形状をなす。

柱穴：ピットは計11基を確認した。この内、主柱穴とし

てP1~4の4本で構成され、さらにP5・6が伴うと考えられる一群。それとは別にP7~9で構成される一群とがある。共に長方形を呈する。P1・2は楕円形で大きく、長軸70~75cm、短軸50~55cm、深さ20cm。P3・4・7~9は円形で、径27~32cm前後、深さ25~30cmを測る。これらの埋土は黒褐色土を主体とする。

周溝：途切れながらも壁際をほぼ一周めぐる周溝と、その内側を南西壁を共用するようにめぐる二重の周溝を確認した。周溝の埋土は、共に黒褐色土である。この二重にめぐる周溝や主柱穴の状態から、拡張建物の可能性が考えられる。

入口施設：南東壁の中央付近にP5・6を確認した。拡張後の建物に伴う可能性をもつ。

遺物：遺物の出土量は少なく、その大方が埋土中からである。1は口頸部文様に撫糸側面圧痕や円形刺突を施す二ツ木式土器。2は口頸部文様に半截竹管による横位平行沈線やコンパス文を交互施し、小突起下に縦位区画を施す黒浜式新段階の土器。7は胴部に0段多条の閉端環付縄で羽状に多段施文する土器。3~6・8~11は、口縁部以下の胴部に羽状縄文や斜行縄文を施す土器である。

石器として3点を図示した。12はデイサイトガラス製の石鎌(凹基無茎鎌)、13は黒色頁岩製の石匙、14は粗粒輝石安山岩製の表裏面に敲打による凹みをもつ磨石である。

未掲載遺物には、同時期の土器片、石器にスクレイパーや二次加工ある剥片、さらに剥片類がある。

所見・時期：周溝や主柱穴の状態から、拡張建物の可能性が考えられる。本建物の時期は、出土土器から縄文時代前期中葉と考えられる。

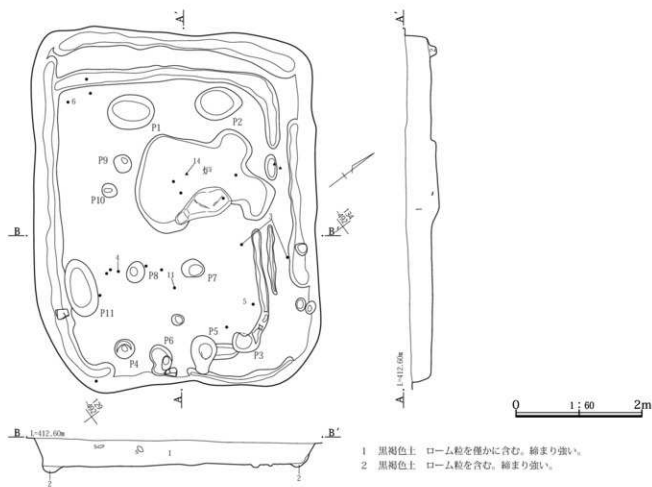
3区8号竪穴建物(第371図、第20・171表、PL.104・244)

平成26年度の調査で検出した。3区15号溝と重複する。また、竪穴建物の中央を東西に、試掘トレンチが横断する。

位置：3-B区の中央やや北寄りに位置する。北東側約5mに3区3号竪穴建物がある。

グリッド：Z-100・101

座標値：X=61,125~61,129 Y=93,499~93,503



第369図 3区3号整穴建物 床面 平・断面図

重複：本建物の南西隅に3区15号溝が重複している。その新旧は、遺構確認および埋没土から、本建物の方が古い。

形状：長方形

規模：長軸4.51m 短軸3.41m 壁高10～34cm

長軸方向：N-12°-W 床面積：12.72㎡

埋没土：1層とした黒褐色土を主体とし、壁際にローム粒を多く含む2層の黒褐色土が埋土となる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体に硬化している。壁際付近には周溝を確認できる。壁高は20～26cmを測り、直立ぎみに立ち上がる。

炉：試掘トレンチにより不明な点はあるが、中軸上のやや上方に位置する浅い落ち込みが炉の可能性をもつ。焼土は確認されていない。

柱穴：主柱穴は北壁際のP1・2、中央南側のP3・4の4本で構成され、細長い長方形を呈する。主柱穴上面は概ね円形を呈し、径30～46cm前後、深さ30～52cmを測る。主柱穴の埋土は、暗褐色土である。

周溝：壁際付近を一部で途切れるものの、ほぼ一周する。途切れる部分は、長軸両端辺の中央部付近の2カ所である。周溝は、幅15cm前後、深さ5～10cm前後を測る。

床面下：床下土坑が建物南西側の床面下に検出されている。歪んだ楕円形を呈し、上面は硬化した床面を確認している。規模は、長軸1.88m、短軸1.12m、深さ26cmを測り、底面は平坦。埋土は、暗褐色土と褐色土である。

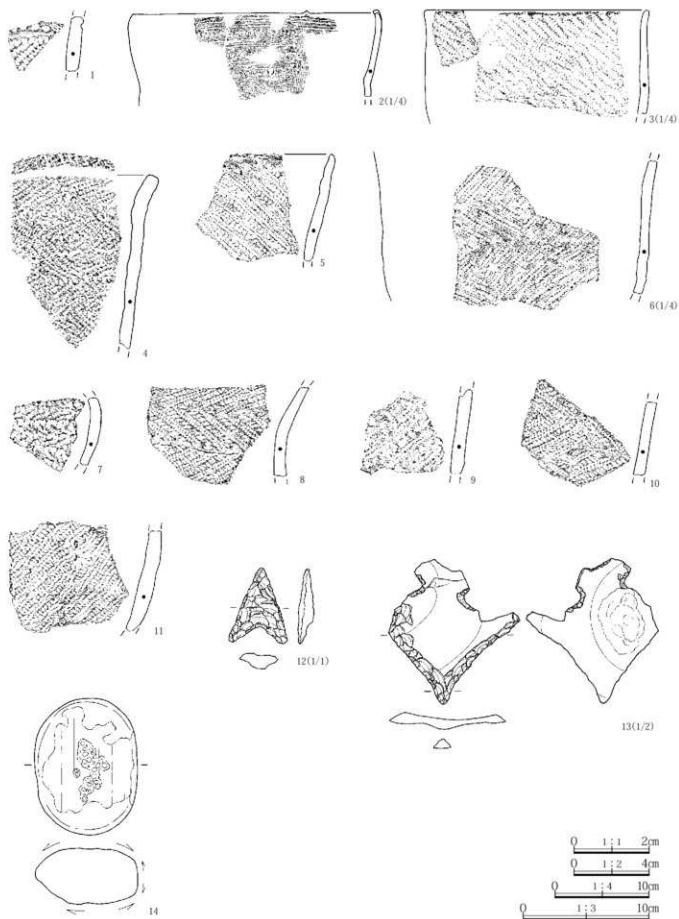
遺物：出土した土器量は極めて少なく、埋土中からである。1は胴部に原体幅の短い羽状縄文を施す土器。2は胴部に組紐縄文を施す土器である。

石器として1点を図示した。3はチャート製の石鏝(凹基無茎鏝)である。

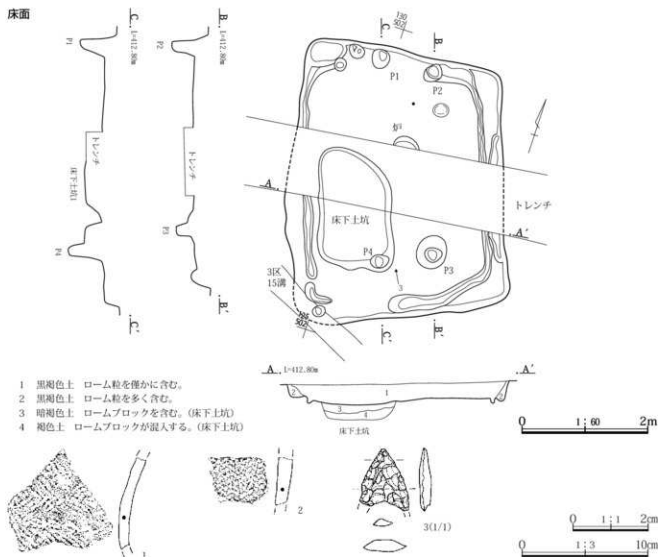
未掲載遺物には、僅かではあるが同時期の土器片、石器に石鏝の未製品や石匙、二次加工ある剥片、台石、さらに剥片類がある。

所見・時期：本建物の時期は、出土土器から縄文時代前期前葉と考えられる。

第4章 検出された遺構と遺物



第370図 3区3号竪穴建物 出土遺物



第371図 3区8号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

3区25号竪穴建物

(第372図、第20・187表、PL.113・253)

平成26年度の調査で検出した。3区24号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区西側の北壁付近に位置する。3区24号竪穴建物の東側に大きく重複する。

グリッド：Z・2A-106・107

座標値：X=61,128~61,134 Y=93,528~93,534

重複：本建物は3区24号竪穴建物の東側に大きく重複していることから、残存状態は良くない。その新旧は、遺構確認および土層断面の確認から、本建物の方が古い。

形状：長方形

規模：長軸5.70m 短軸4.37m 壁高26~51cm

長軸方向：N-86°-W 床面積：20.59㎡

埋没土：黒褐色土を主体とする。

床面・壁：床面はローム土中であり、ほぼ平坦で、特に中央付近は硬化が著しい。壁際には部分的に周溝を確認でき、併せて壁柱穴となる小さなビットが連なる。壁高は10~34cmを測り、直立ぎみに立ち上がる。

枡：建物の中軸上やや上方に位置し、地床が浅い掘り込みをもち、枡内中央には棒状の枕石を短軸方向に据えている。枡底面は、被熱により焼土化が進む。枡の規模は、長軸1.0m、短軸0.76m、深さ8cmを測る。

柱穴：主柱穴は枡を囲むようにP1~4の4本で構成され、歪んだ長方形を呈する。主柱穴は概ね円形を呈し、径22~34cm、深さ38~50cmを測り、埋土は黒褐色土である。他にP5・6を検出しているが、性格は不明。

第4章 検出された遺構と遺物

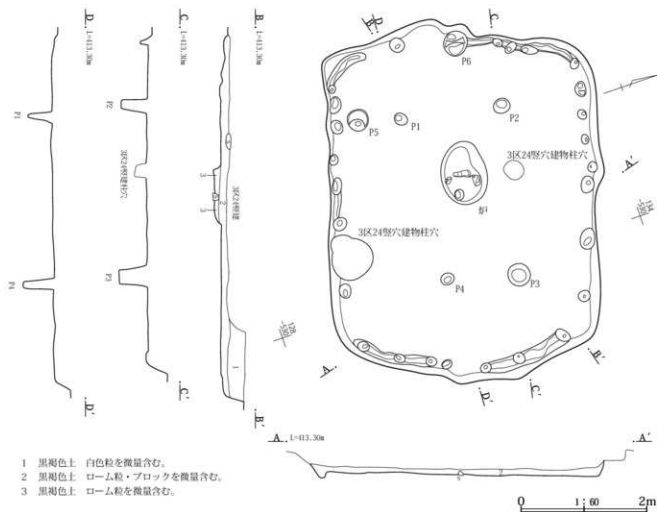
遺物: 遺物の出土量は極めて少なく、埋土中からである。

1は胴部に0段多糸の閉端環付縄で羽状に多段施文する土器。2は波状口縁の口縁部以下に羽状縄文を施す土器である。

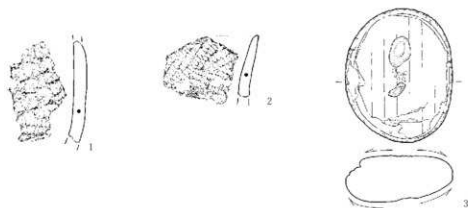
石器として1点を図示した。3は粗粒輝石安山岩製の表裏面に敲打による凹みをもつ磨石である。

未掲載遺物には、僅かではあるが同時期の土器片、石器に楔形石器や二次加工ある剥片、さらに剥片類がある。

所見・時期: 本建物の時期は、出土土器から縄文時代前期前葉と考えられる。



- 1 黒褐色土 白色粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ブロックを微量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒を微量含む。



第372図 3区25号穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

(3)土坑

本調査区で検出された縄文時代の土坑は、第2面調査において3-B区に1基検出された。なお、通常の土坑よりも大きく、小竪穴遺構とするべき規模であるが、土坑として本項で扱う。

3区115号土坑(第373図、第21・188表、PL.119・254)

平成26年度の調査で、小竪穴遺構として検出した。3区2号溝と重複する。

位置：3-B区の中央東側に位置する。3区2号溝と重複し、土坑の西半を欠く。

グリッド：W・X-103

座標値：X=61,113~61,116 Y=-93,511~93,513

検出状況：3区の基本土層VI層上面を遺構確認面とした第2面調査で、攪乱および3区2号溝に壊された状態で検出された。溝との新田は、遺構確認からも明らかに本土坑の方が古い。底面は概ね平坦となるが、壁寄

りはやや傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩い傾斜。遺物の出土は多い。

形状：長方形か

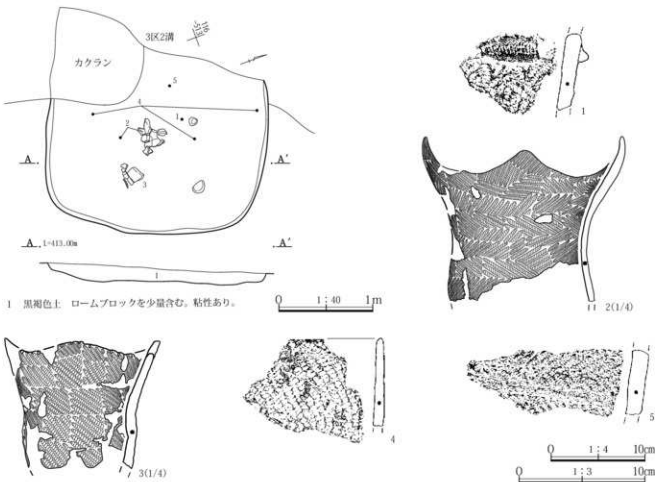
規模：長軸(2.15)m 短軸2.34m 深さ17cm

長軸方向：N-59°-W

埋没土：黒褐色土を主体とする。

遺物：出土した土器量は意外に多く、底面直上から2・3が出土している。1は口縁部文様帯を刻み隆帯で区画し、以下の胴部に特異な縄文を施す。2は大きな波状口縁の口縁部以下に数種類の縄文原体で羽状縄文を施す。3は口唇部に刻みをもち、緩い波状口縁の口縁部以下に縄文を施す。4は平口縁の口縁部以下に縄文を施し、5は胴部に幅狭な羽状縄文を施す。これらの土器は、前期の二ツ木式土器である。

所見・時期：本土坑の時期は、出土土器から縄文時代前期前葉と考えられる。



第373図 3区115号土坑 平・断面図、出土遺物

(4) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物として、前期から後期までの各時代の土器および石器が出土している。その代表的な遺物を第374・375図に示した。

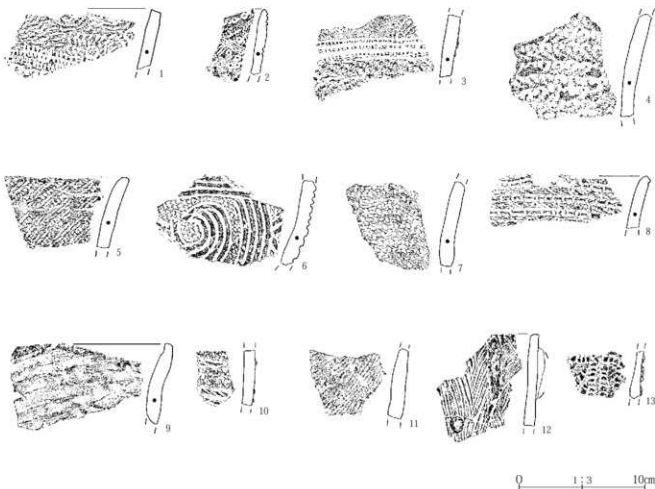
土器(第374・375図、第196表、PL.255・256)

まず、前期に位置づけられる土器に1~13があり、前葉の二ツ木式土器に燃系側面圧痕等を施す1~4、関山式土器に組紐縄文等を施す5~7、前期中葉の黒浜式土器に8・9、前期後葉の諸磯式土器に刻み降線やボタン状貼付文・結節浮線文を施す10~13がある。そして、中期の土器として14~24があり、中期初頭の五箇ヶ台式土器に14~18、中期前葉~中葉に位置づけられる19~24がある。さらに、後期前葉の堀之内式に位置づけられる25

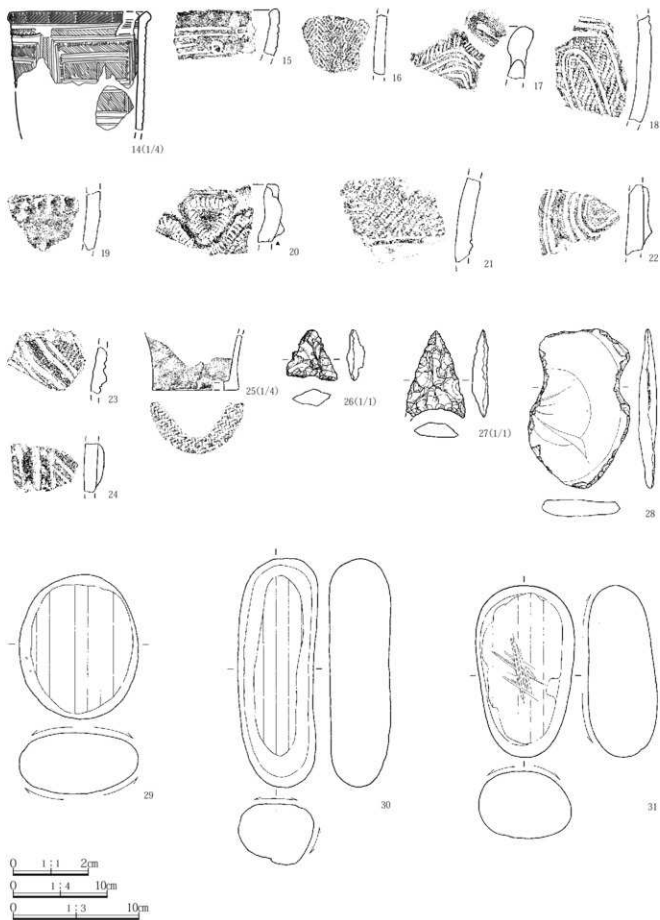
の底部がある。これら諸型式の中で、最も出土量が多いのは、前期前葉の二ツ木式土器である。

石器(第375図、第196表、PL.256)

石鐮には黒曜石製の26とチャート製の27があり、共に無茎鐮。28は粗粒輝石安山岩製の打製石斧で、裏面に自然面を大きく残し、素材剥片の周辺部にのみ片面加工が施される。そして、29~31は粗粒輝石安山岩製の磨石で、31の表面中央には線条痕が集中する。他に、黒曜石や黒色頁岩等の石材を主とした石鏃・未製品、石匙、楔形石器、スクレイパー、打製石斧、二次加工ある剥片、石核、粗粒輝石安山岩製の凹石、磨石、石皿、台石があり、そして多くの剥片が出土している。



第374図 3区縄文時代遺構外出土遺物(1)



第375図 3区縄文時代遺構外出土遺物(2)

第2項 弥生時代の遺構と遺物

(1) 概要

先の調査では弥生時代の遺構・遺物は出土していなかったが、3区の基本層序Ⅵ層上面を遺構確認面とした3-B区第2面調査において、遺構確認時に土器の出土を確認していた。そうした中、第2面調査で縄文時代や古墳時代、古代の遺構と共に、弥生時代の竪穴建物1棟を検出した。後述する4区で検出された弥生時代後期の集落からは距離をおくものの、一連の集落の西端にあたるものと考えられる。

(2) 竪穴建物

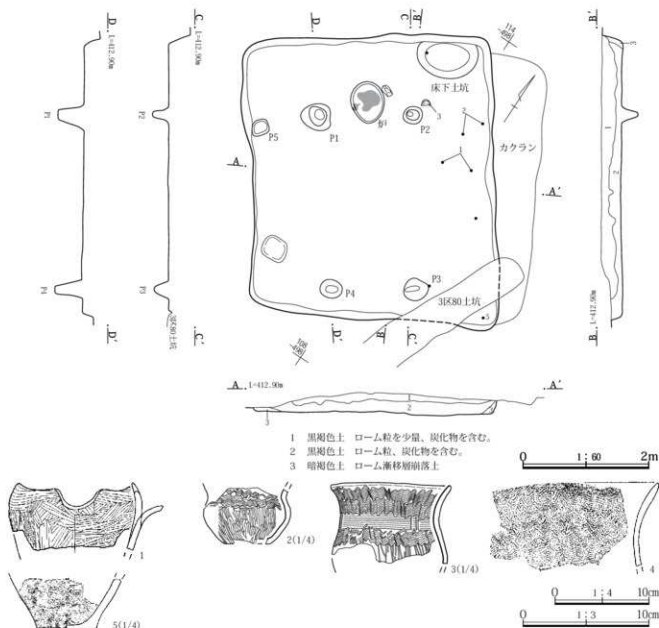
本調査区で検出された弥生時代の竪穴建物(住居)は、第2面調査において3-B区に後期の竪穴建物1棟を検出した。

3区5号竪穴建物

(第376図、第20・168表、PL.102・103・242)

平成26年度の調査で検出した。3区80号土坑と重複する。

位置：3-B区の中央南側に位置する。3区80号土坑と重複し、建物の南東部の一部を欠く。なお、建物の北



第376図 3区5号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

東側には攪乱があり、上部の一部が壊されていた。
 グリッド：V・W-100・101
 座標値：X=61,108~61,113 Y=93,495~93,501
 重複：本建物の東側に3区80号土坑が重複する。その新
 旧は、遺構確認および埋没土から、本建物の方が古い。
 形状：長方形
 規模：長軸4.65m 短軸4.04m 壁高11~32cm
 長軸方向：N-35°-W 床面積：16.18㎡
 埋没土：1・2層の黒褐色土を主体とし、壁際と3層と
 に分層できる。

床面・壁：床面はローム土中であり、ほぼ平坦で、中央
 付近は硬化が著しい。壁高は11~32cmを測り、直立ぎ
 みに立ち上がる。

枡：建物の中軸上の上方に位置し、主柱穴P1・2より
 壁寄りにある。楕円形を呈する地床枡で、浅い掘り込
 みをもち、枡底面は被熱して焼土化が著しい。枡の規
 模は、長軸65cm、短軸54cm、深さ4cmを測り浅い。

柱穴：主柱穴はP1~4の4本で構成され、長方形状
 を呈する。主柱穴は楕円形ないし円形で、長軸36~
 56cm、短軸28~44cm、深さ28~42cmを測り、埋土は黒
 褐色土である。他に、南西壁際にP5を確認した。

床面下：床面下は、全体に僅かな掘り込みがみられる
 ものの、床面とのレベル差はほとんどない。底面には、
 僅かな凹凸状の掘り込みが確認され、北隅付近に
 床下土坑を確認した。楕円形を呈し、長軸98cm、短軸
 60cm、深さ18cmを測る

遺物：遺物の出土量は多くなく、埋土中からほとんど
 で、床面上に扁平な大型礫が残されていただけである。

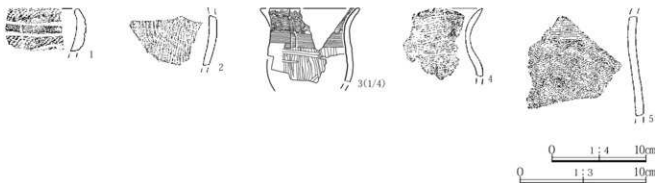
出土遺物として、土器5点を図示した。土器は全て
 弥生時代後期の樽式土器で、1は片口鉢。2は小型台
 付甕で、括れ部に櫛描波状文を施す。3~5は甕であ
 り、4・5は小型甕。口縁下に櫛描波状文や櫛描連雁
 文を施す。

所見・時期：本建物の時期は、出土土器から弥生時代後
 期後半の樽式期である。

(3) 遺構外出土遺物(第197表、PL.256)

遺構に伴わない代表的な遺物を第377図に示した。1
 は口縁部に方形の入組文、2は胴部に縦位の条痕文を
 施す弥生時代中期の土器である。3~5は後期の樽式土
 器で、口縁下に櫛描波状文や櫛描連雁文を施しており、
 3・4は小型甕、5は甕となる。

他に未掲載ではあるが、石器として変質安山岩製の石
 鎌が出土している。



第377図 3区弥生時代遺構外出土遺物

第3項 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

先に調査が行われた西側の1区で古墳時代の竪穴建物も多く調査していることから、本調査区においても古墳時代の遺構の存在が想定されていた。3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした3-B区第2面調査において、4世紀から7世紀にかけての集落が検出された。この集落を構成する遺構は、竪穴建物15棟がある。検出された竪穴建物の分布状況から、全体としては1・2区から続く規模の大きい集落の東端にあたり、調査区外となる北・南側にまで展開するものと推測される。また、段丘東側の温川西岸沿いに点在する四戸の古墳群の存在に、大きく関わる大規模な集落が展開していたものと考えられる。

以下、検出された各遺構について記述する。

(2) 竪穴建物

本調査区で検出された古墳時代の竪穴建物は、第2面調査において3-B区に15棟の建物が出された。

以下、各建物ごとに記載する。(第20表 3区竪穴建物一覧を参照)

3区1号竪穴建物

(第378図、第20・164表、PL.100・241)

平成26年度の調査で検出した。残存状況は余り良くない。

位置：3-B区中央のやや北東よりに位置し、2区から続く竪穴建物群の東端にあたる。

グリッド：Z・2A-95・96

座標値：X=61,127~61,131 Y=93,474~93,479

形状：長方形

規模：長軸4.17m 短軸3.66m 壁高6~10cm

長軸方向：N-77°-W 床面積：13.69㎡

埋没土：1層の黒褐色土を主体とし、壁際ないし周溝内の2層とした黒褐色土に分層できる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、建物中央付近は著しく硬化する。また、床面中央部には細かな炭化物が集中し、床面上にも炭化材が多く出土している。壁高は10cmを測り、やや垂直ぎみに立ち上が

る。

炉：明確な炉は検出されていないが、細かな炭化物が集中するあたりに可能性がある。

貯蔵穴：建物の南西隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸0.9m、短軸0.56m、深さ40cmを測り、黒褐色土を埋土とする。底面は裸層が露出する。

柱穴：主柱穴と考えられるP1~4を検出した。柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸30~50cm、短軸26~37cm、深さ30~44cmを測り、埋土は暗褐色土と黒褐色土を主体とする。他に、P5~8の浅いピットを検出した。

周溝：北壁の一部で途切れるものの、壁際をほぼ一周する。幅15cm前後、深さ5~10cm前後を測る。

床面下：掘り込みは、北東側は浅く、中央から南西側ほど深くなり、底面は礫の抜き取り痕と思われる凹凸が著しい。3層としたロームブロックを含む黒褐色土が埋土となる。

遺物：出土した遺物量は比較的多い。2の台付鉢の完形品は貯蔵穴上面の床面と同じ位置からの出土で、1の高杯は貯蔵穴底面からの出土である。

出土遺物として、土器3点を図示した。いずれも土師器で、1は杯部の外・内面にヘラ磨きを施した高杯。2は台付鉢で、台面外面と体部内面にヘラ磨きを施す。3は甕である。

未掲載遺物には、杯や甕片、細片が多量にある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性はある。建物の時期は、カマドをもたないことと、出土土器から5世紀前半と考えられる。

3区2号竪穴建物

(第379図、第20・165表、PL.100・101・241)

平成26年度の調査で検出した。床面までは浅く、残存状況が非常に悪い。

位置：3-B区のはほぼ中央に位置し、南側に3区4号竪穴建物、西側に3区6・7号竪穴建物が近接する。

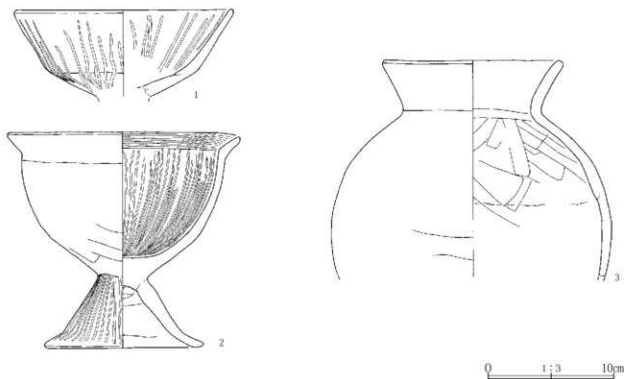
グリッド：Y・Z-98

座標値：X=61,122~61,125 Y=93,485~93,488

形状：方形

規模：長軸3.28m 短軸3.06m 壁高7cm

長軸方向：N-73°-W 床面積：8.94㎡



第378図 3区1号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

埋没土：残存状況が悪く、1層の黒褐色土を埋土とする。
床面・壁：僅かにローム土を掘り込んだ中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて著しく硬化する。壁高は5cmと浅い。

カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、主軸方位はN-106°-Eを向き、残存状態は極めて悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側に若干突き出る。袖等は不明で、底面のみが残存。残存する規模は、全長0.95m、幅0.37mを測り、焚口部から燃焼部、煙道部の底面と考えられる。埋土は、焼土粒や炭化物を多く含む明褐色土である。

貯蔵穴：建物の南東隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸0.63m、短軸0.41m、深さ24cmを測り、暗褐色土を埋土とする。また、貯蔵穴の上面には大型の長い礫が出土しており、被熱していることからカマドに使用された礫の可能性が高い。さらに、内部からは6の砥石が出土している。

柱穴：主柱穴と考えられるP1~4を検出した。柱穴上面は概ね円形で、径25~40cm、深さ12~18cmを測る。他に、P5とした大型ピット(長軸47cm、短軸38cm、深さ15cm)を検出したが、貯蔵穴の可能性もある。

床面下：10cm前後の掘り込みをもち、底面は大小の凹凸がみられる。2層としたロームブロックを含む黒褐色土が埋土となる。また、カマドの左側に、円形を呈する床下土坑を確認した。規模は径0.75m、深さ14cmを測る。

遺物：出土した遺物量は少ない。1・2の杯は、東壁際の北寄りの床面直上に正位で出土している。

出土遺物として、土器5点と石製品1点を図示した。1~5は、いずれも土師器の杯である。また、6は粗粒輝石安山岩製の砥石で、表面には砥面となる縦長の滑らかな窪みをもつ。

未掲載遺物には、土師器の細片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀前半と考えられる。

3区4号竪穴建物

(第380~382図、第20・167表、PL.101・102・242)

平成26年度の調査で検出した。3区94号土坑と重複する。残存状況は余り良くない。

位置：3-B区中央のやや南寄りに位置し、北側に3区2号竪穴建物、西側に3区11号竪穴建物が近接する。

グリッド：W・X-98・99

座標値：X=61,114~61,119 Y=93,485~93,490

重複：本建物の西壁中央付近に、3区94号土坑が重複する。遺構確認の違いからも、本建物が古いことは明らかであった。

形状：方形

規模：長軸4.80m 短軸4.41m 壁高4~22cm

長軸方向：N-92°-E 床面積：18.17㎡

埋没土：1層の黒褐色土を主に、下位に2層とした暗褐色土、壁際に3層の暗褐色土とに分層できる。なお、埋土中に拳大の礫を含むことから、人為的埋没の可能性が高い。

床面・壁：僅かにローム土を掘り込んだ中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて著しく硬化する。また、床面上には炭化材が多く出土している。壁高は17cmを測り、やや垂直直みに立ち上がる。

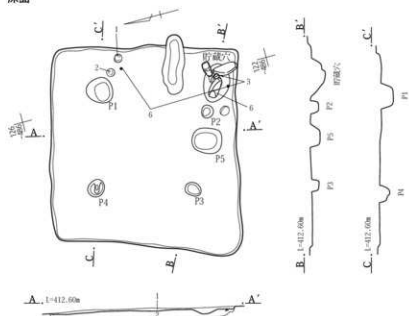
カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、主軸方位はN-111°-Eを向き、残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側に若干突き出る。残存する規模は、全長1.19m、幅1.00mを測り、袖は壁から僅かに突き出るような痕跡が残る。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より僅かに低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。埋土は、焼土や炭化物を含む褐色土である。

貯蔵穴：2基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴1は建物の南東隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸0.78m、短軸0.61m、深さ74cmを測り深く、黒褐色土を埋土とする。貯蔵穴2は西壁中央付近に位置し、上面は方形を呈する。規模は、一辺0.9m、深さ35cmを測り、埋土は褐色土を主体とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1~4を検出した。柱穴上面は概ね円形で、径28~40cm前後、深さ40~50cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。

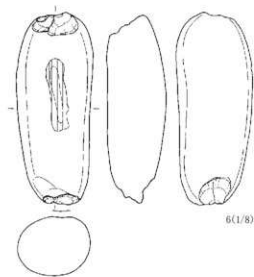
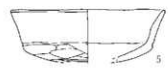
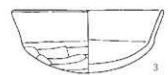
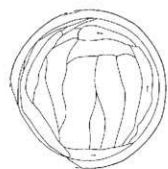
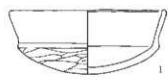
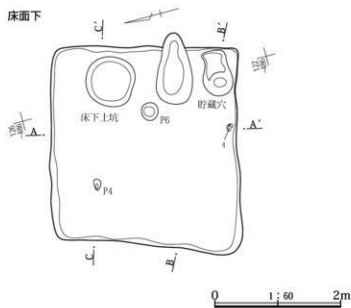
床面下：15cm前後の掘り込みをもち、底面は大小の凹凸がみられ、5層のくすんだローム粒やローム土を含む灰黄褐色が埋土となる。また、3基の床下土坑を確認した。床下土坑1はほぼ中央に位置し、楕円形で、長軸1.50m、短軸1.30m、深さ30cmを測り、黒褐色土を

床面

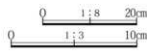


- 1 黒褐色土 くすんだローム粒、ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

床面下



6(1/8)



第379図 3区2号竪穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

埋土とする。床下土坑2は床下土坑1の北側に接するようにあり、楕円形で、長軸1.00m、短軸0.75m、深さ17cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床下土坑3は東壁の北寄りにあり、小さな楕円形で、長軸0.65m、短軸0.50m、深さ25cmを測り、黒褐色土を埋土とする。さらに、P1から北壁へ直線的に延びる床下溝1、P3から西壁へ延びる床下溝2が確認されており、共に幅18cm前後の浅い溝である。

遺物：出土した遺物量は比較的に多い。1はカマド焚き口部前の床面直上から、3・4は建物中央のほぼ床面直上から出土し、6は貯蔵穴2から出土している。10はカマド内出土と貯蔵穴2内出土の接合による甕である。また、12の石製紡錘車(紡輪)はP1の北東側の床面直上から、13・14は北壁付近の床面付近から出土している。

出土遺物として、土器10点と石製品7点、金属製品1点の計18点を図示した。

土器はいずれも土師器である。1～7は杯で、6の底部内面には剣線状の工具痕があり、7の内面はへら磨きを施す。8は小型壺と考えられ、9は甕の可能性をもつ。10は甕である。

石製品には、12～14の紡輪と15～18の白玉がある。12は蛇紋岩製で逆台形状(厚型)をなし、表裏面とも研磨され光沢をもち、径4.6cm、厚さ2.2cm、孔径約6mm、重さ61.7gを測る。13は蛇紋岩製で逆台形状(厚型)をなし、表裏面とも研磨され光沢をもち、径5.0cm、厚さ2.6cm、孔径約6mm、重さ77.9gを測る。14は蛇紋岩製で逆台形状(厚型)をなし、表裏面とも研磨され僅かに光沢をもち、側面には鋸歯文が線刻されている。径4.6cm、厚さ2.2cm、孔径約7mm、重さ62.9gを測る。そして、15は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.3cm、孔径約3mm、重さ0.3gを測る。16は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.7cm、厚さ0.3cm、孔径約2mm、重さ0.2gを測る。17は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.3cm、孔径約2mm、重さ0.2gを測る。18は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.6cm、孔径約6mm、重さ0.7gを測る。

金属製品には、11の鉄製板状製品がある。

未掲載遺物には、土師器の杯や甕片が多量にある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼土家屋の可能性がある。建物の時期は、出土土器から6世紀前半と考えられる。

3区6号竪穴建物

(第383図、第20・169表、PL.103・242)

平成26年度の調査で検出した。竪穴建物の北側を試掘調査トレンチで壊され、床面までは浅かったため、残存状況は非常に悪い。また、3区7号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区の中央付近に位置し、南東側に重複する3区7号竪穴建物、南側に3区11号竪穴建物がある。

グリッド：Y・Z-99・100

座標値：X=61,124~61,128 Y=93,493~93,497

重複：本建物の南東隅に重複する3区7号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が古い。

形状：方形

規模：長軸4.00m 短軸3.70m 壁高1~7cm

長軸方向：N-6°-E 床面積：(12.76)m²

埋没土：1層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土中に床面があり、遺構確認に極めて近く浅い位置にある。建物中央付近に、硬化した面および灰を確認したことから床面と判断した。床面はほぼ平坦で、床面上には炭化材が僅かに出土している。壁高は最大で7cmを測る。

炉：建物の中央付近に位置し、地床炉で浅い掘り込みをもつ。炉内中央には棒状の枕石が東西方向に据えられ被熱している。炉底面は、焼土化が弱い。炉の規模は、長さ63cm、幅55cm、深さ3cmを測り、楕円形を呈する。

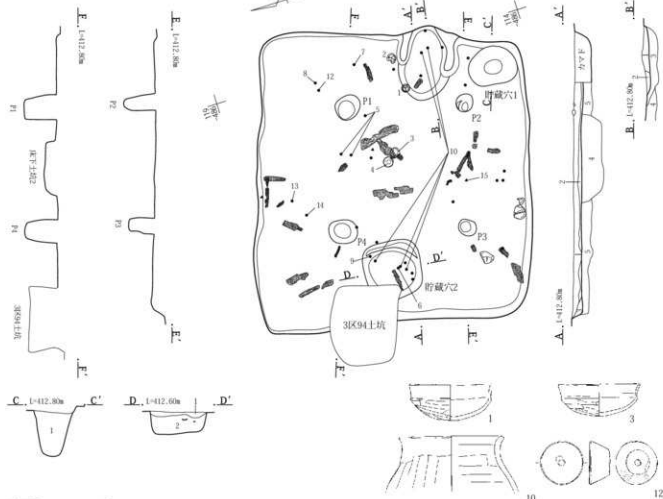
柱穴：主柱穴と考えられるP1~4を検出した。柱穴上面は楕円形で、径37cm前後、深さ54~65cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。他に、P5~7の3基のピットを検出した。

床面下：床面下の掘り込みの可能性から調査を行ったが、3層としたくすんだローム土を少量含む黒褐色土であり、明確な床下構造をもつかは不明。底面は、ローム上面となる。

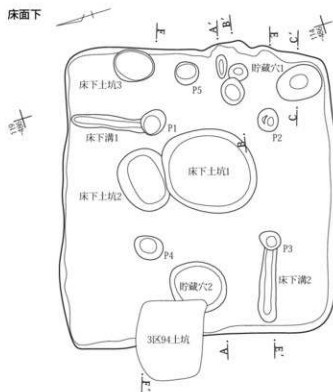
遺物：出土した遺物は極めて少ないが、埋土が浅いことから、床面付近からの出土と考えられる。

出土遺物として、1の肩部に横線が巡る台付甕がある。

床面



床面下



A-A'

- 1 黒褐色土 ローム小粒、焼土粒、炭化物を含む。
- 2 暗褐色土 ローム小粒が多い。
- 3 暗褐色土 ローム漸移層の崩落上。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。(床下土坑1)
- 5 灰黄褐色土 くすんだローム粒、ローム上を含む。(床下土)

B-B'

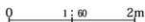
- 1 褐色土 焼土粒・ブロック、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、炭化粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土を少量、炭化粒、ローム粒を微量含む。
- 4 灰黄褐色土 くすんだローム粒、ローム上を含む。(建物5層と同じ)

C-C'

- 1 黒褐色土 ロームブロック、炭化物を多く含む。

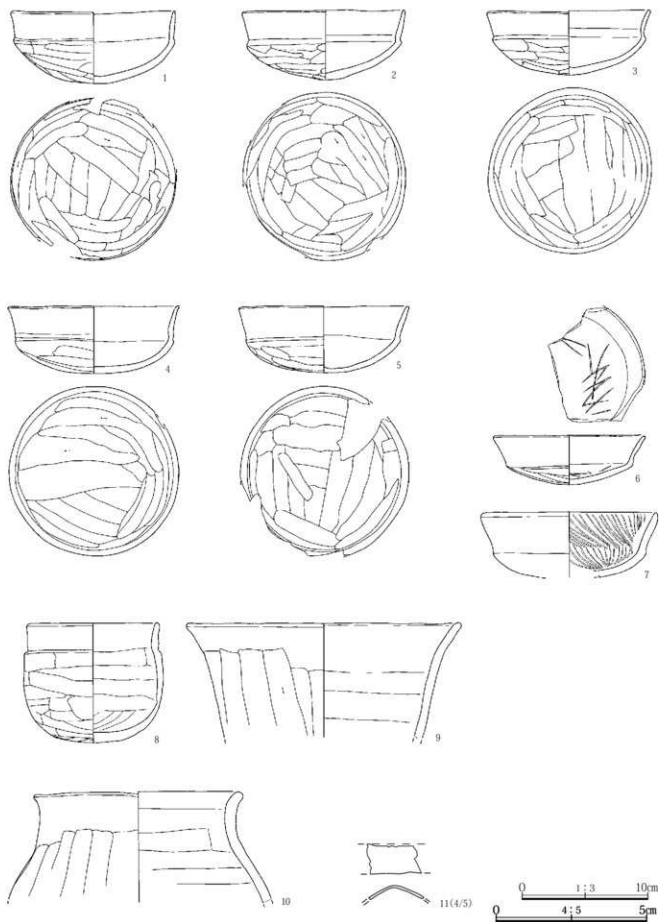
D-D'

- 1 黒褐色土 焼土粒、炭化粒を僅か含む。
- 2 褐色土 焼土ブロック、ローム粒、炭化粒を多く含む。

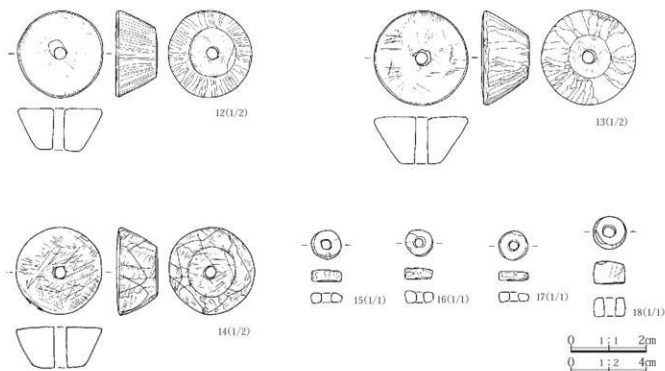


第380図 3区4号壁穴建物 床面、床面下 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第381图 3区4号竖穴建物 出土遺物(1)



第382図 3区4号竪穴建物 出土遺物(2)

未掲載遺物にも、同様な台付甕の胴部片が数点ある。所見・時期：少量ではあるが出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性もある。建物の時期は、出土土器から4世紀と考えられる。

3区7号竪穴建物

(第384～387図、第20・170表、PL.103・104・243・244)
平成26年度の調査で検出した。3区6号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区の中央付近に位置し、北西側に重複する3区6号竪穴建物があり、東側に3区2号竪穴建物、南側に3区11号竪穴建物が近接する。

グリッド：Y-Z-99・100

座標値：X=61,121～61,126 Y=93,491～93,495

形状：長方形

重複：本建物の北西隅に重複する3区6号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が新しい。

規模：長軸4.08m 短軸3.63m 壁高14cm

長軸方向：N-10°-E 床面積：12.46㎡

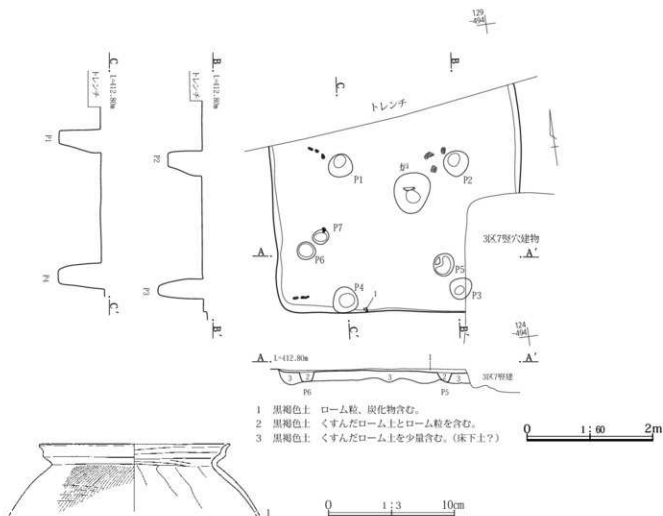
埋没土：1層の黒褐色土を主に、下位に褐色土ブロックを混入する2層の黒褐色土に分層できる。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土下位に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけてよく硬化している。特に、床面にはロームブロックが目立ち、締まっている。壁高は14cmを測り、やや垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁のほぼ中央に位置し、主軸方位はN-90°-Eを向き、残存状態は余り良くない。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側に若干突き出る。残存する規模は、全長1.03m、幅0.86mを測り、右袖の先端には袖石がそのままに、左袖石は原位置を止めていない。袖は壁から突き出るように痕跡が残る。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より僅かに低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。埋土は、上層に暗褐色土、下層に焼土や炭化物を多量に含む褐色土である。

貯蔵穴：カマドの右脇となる南東隅付近に位置し、概ね円形を呈する。規模は、径0.80m前後、深さ18cmを測り、黒褐色土を埋土とする。甕や甔等の遺物の出土が多い。

床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。埋土の上位にロームブロックを多く含むことから、床面となる上面は硬く締まる。底面には大小の凹凸がある。建物中央の西側には、楕円形の床下土坑が検出



第383図 3区6号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

されている。その規模は、長軸1.48m、短軸1.28m、深さ22cmを測り、床面構築後の所作による。

遺物：出土した遺物量はかなり多い。特に遺物が集中するのは、カマド右袖際から貯蔵穴およびその周辺である。1の杯は逆位で貯蔵穴の脇の東壁際から、7・8・11はカマド右袖右際から、9の甕は貯蔵穴底面に正位で、6の甕は貯蔵穴内と貯蔵穴脇の床面直上から出土して接合した土器である。

出土遺物として、土器11点と石製品1点を図示した。

土器はいずれも土師器である。1～5の杯、6の甕、7の小型甕および8～11の甕がある。

石製品には、12の大型砥石があり、粗粒輝石安山岩製で5面の砥面をもつ。

未掘載遺物には土師器の杯や甕片が多い。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から7世紀前半と考えられる。

3区9号竪穴建物

(第388図、第20・172表、PL.104・105・244)

平成26年度の調査で検出した。3区2号溝と重複する。位置：3-B区中央の西寄り位置し、西側を3区2号溝と重複する。北側に3区18号竪穴建物が近接する。

グリッド：X-Z-101～103

座標値：X=61,118～61,125 Y=93,504～93,510

重複：本建物の西側に重複する3区2号溝との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が古い。

形状：長方形

規模：長軸5.58m 短軸5.12m 壁高15cm

長軸方向：N-25°-W 床面積：(25.82)m²

埋没土：黒褐色土を主に、1・2層に分層できる。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土下位に床面があり、ほぼ平坦で、中央付近が硬化している。壁高は15cmを

測り、やや垂直ぎみに立ち上がる。

炉：残存する壁面にカマドは確認されておらず、むしろ炉をもつ竪穴建物の可能性が高い。しかし、3区2号溝との重複により存在は不明。

貯蔵穴：南西隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸1.13m、短軸0.79m、深さ24cmを測り、黒褐色土と褐色土を埋土とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。柱穴は概ね円形で、径37cm前後、深さ18～40cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。

床面下：床面下の掘り込みの可能性から調査を行ったが、3層としたくすんだローム土を少量含む黒褐色土であり、明確な床下構造をもつかは不明。底面は凹凸をもち、一部に礫層が露出する。

遺物：出土した遺物量はあまり多くない。1の杯は南西隅の南壁際に床面近く、2の高杯は南東隅の南壁際に床面直上から、4の甕は南西隅の西壁際に床面直上から逆位に出土している。

出土遺物として、土器4点を図示した。いずれも土師器である。1の杯は外面に横位、内面に放射状のヘラ磨きを施す。2は高杯の杯部で、外・内面にヘラ磨きを施し、内面口唇下に刷毛目をもつ。3は高杯の脚部で外面はヘラ磨き、4は甕の上半部である。

未掲載遺物には土師器の甕片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、カマドをもたないことと、出土土器から5世紀前半と考えられる。

3区11号竪穴建物

(第389～392図、第20・174表、PL.105・106・245・246)
平成26年度の調査で検出した。3区10号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区のほぼ中央に位置し、西側に3区10号竪穴建物が重複する。北側に3区7号竪穴建物、東側に3区4号竪穴建物が近接する。

グリッド：X-99・100

座標値：X=61,115～61,119 Y=93,493～93,497

重複：本建物の西側に重複する3区10号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が旧い。

形状：正方形

規模：長軸4.17m 短軸4.11m 壁高32cm

長軸方向：N-10°-W 床面積：14.94㎡

埋没土：黒褐色土を主に、1・2層に分層できる。埋土中に大中の礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけてよく硬化している。特に、床面にはロームブロックが目立ち、締まっている。壁高は32cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-82°-Eを向き、残存状態は極めて良好。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ僅かに出張る。カマドに伴う遺物の出土状況も良好で、カマド内からは支脚に乗るような状態で9の完形の甕が正位で出土し、その右側からは10の甕が散乱した状態で出土している。この甕の出土状態から、カマドには並列した2個の甕が掛けられていたものと推定される。また、焚き口部の天井石が割れてずり落ちた状態にあった。カマドの規模は、全長1.07m、幅0.88mを測り、袖は壁から65～70cmほど突出する。両袖の先端には袖石が、袖の付け根部分にも構築石が残存していた。焚口部から燃焼部の底面にかけて、建物床面より僅かに低くなり、燃焼部底面には9の甕が掛かる支脚石が残る。そして、煙道部は短く、底面は燃焼部から斜位に立ち上がる。

貯蔵穴：カマドの右脇となる南東隅に位置し、方形を呈する。規模は、一辺0.64m前後、深さ36cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

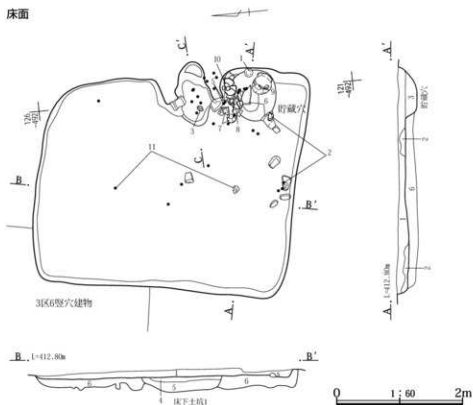
柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。円形ないし楕円形で、長軸35～40cm、短軸35cm、深さ18～45cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。他に、P4脇にP5のピットを検出した。

周溝：カマド部分を除く壁際に、幅15cm前後、深さ10cm前後の周溝が巡り、埋土は黒褐色土を主体とする。

床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。埋土の上位にロームブロックを多く含むことから、床面となる上面は硬く締まる。底面は中央部が周囲よりやや高くなり、全体に凹凸をもつ。建物中央の北寄りに円形の床下土坑が検出され、径0.75m、深さ30cmを測り、褐色土を埋土とする。この床下土坑は、床

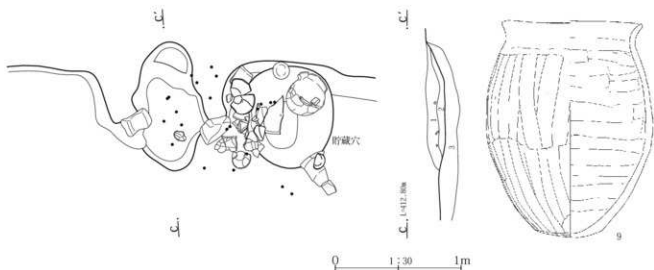
第4章 検出された遺構と遺物

床面



- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を多く含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物を多く、褐色土ブロックが混入する。
- 3 黒褐色土 ローム粒を少量含む。(貯蔵穴)
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量混入する。(床下土坑)
- 5 黒褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。(床下土坑)
- 6 黒褐色土 ロームブロックを上位により多く含む。(床下土)

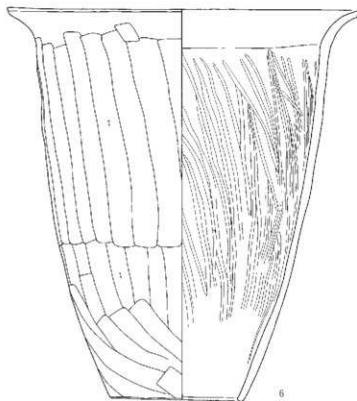
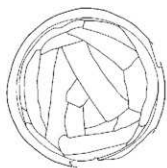
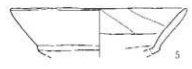
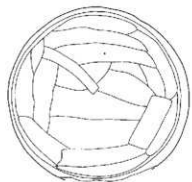
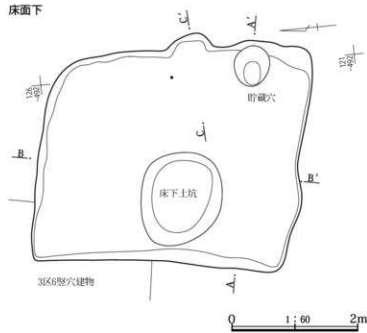
カマド



- 1 暗褐色土 焼土粒、ローム粒を少量含む。(建物1層に相当)
- 2 褐色土 焼土粒・ブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 暗灰黄褐色土ブロックを少量含む。(建物6層に相当)

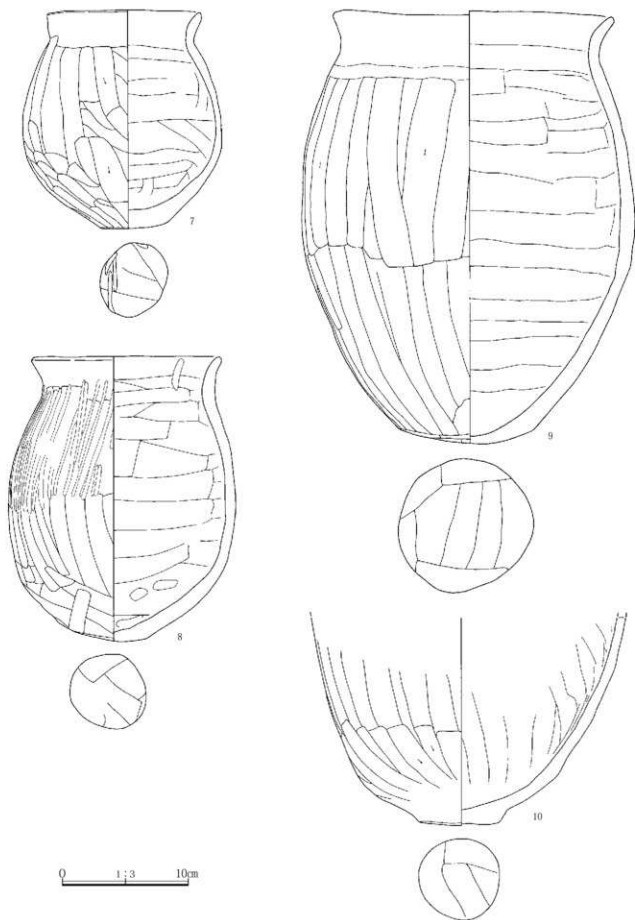
第384図 3区7号穴建物 床面、カマド 平・断面図

床面下

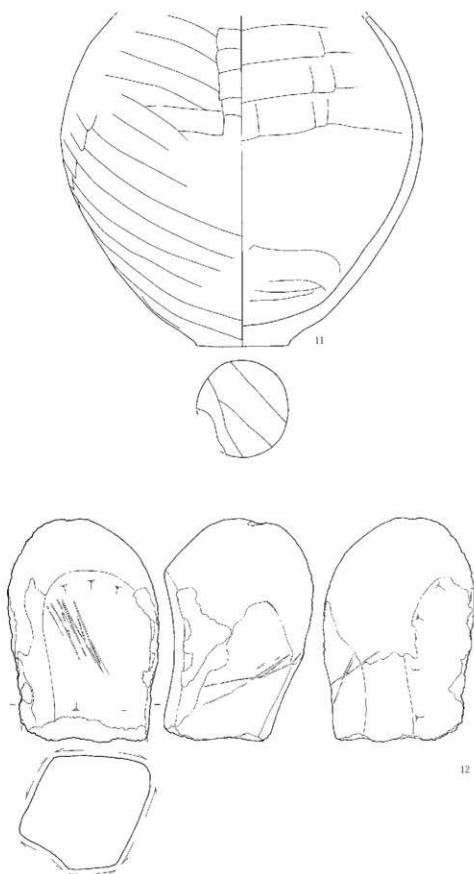


0 1:3 10m

第385図 3区7号建物 床面下 平面図、出土遺物(1)

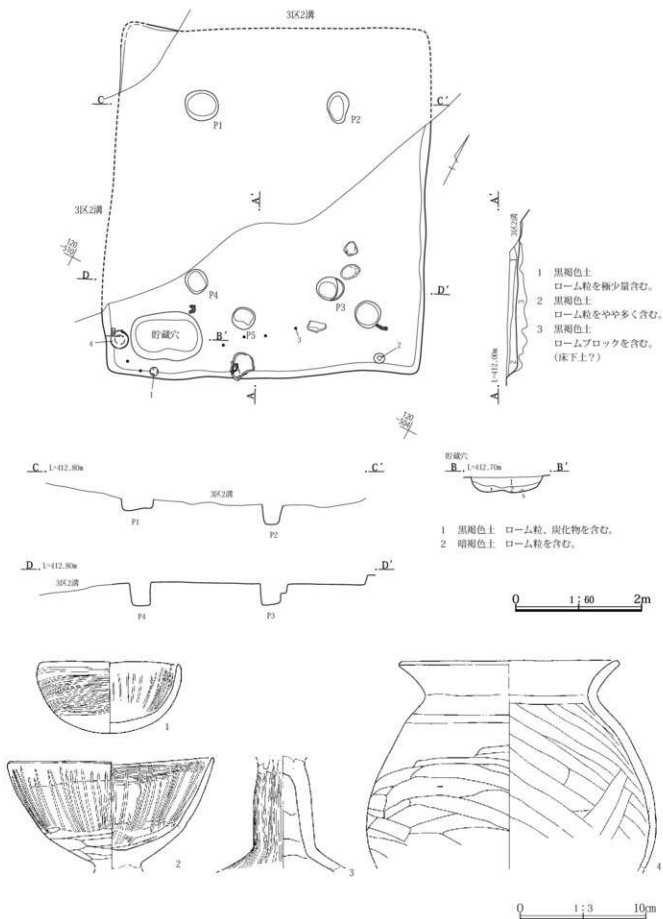


第386図 3区7号竪穴建物 出土遺物(2)



第387図 3区7号竖穴建物 出土遺物(3)

0 1:3 10cm



第388図 3区9号貯穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

面構築後の所作による。

遺物：出土した遺物量は比較的多い。先述したように9・10の甕はカマド内から出土し、1の杯はカマド右側の壁際から、13の白玉はカマド左脇の床面直上に出土している。また、7の甕はP1脇の床面直上に潰れて出土している。他にも、多くの遺物が埋土中から出土している。

出土遺物として、土器12点と石製品1点を図示した。土器はいずれも土師器で、1～5は杯である。1～4の内面にはへら磨きが施され、5にもへら磨きが施される。6は小型壺で、外面上半に左傾きのへら磨きが施されている。7・8は甕で、9～12は甕である。

石製品に13の白玉があり、滑石製で暗オリーブ灰色をなし、表面は平坦で、径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径約2mm、重さ0.2gを測る。

未掲載遺物には土師器の杯・甕片が多量にある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から5世紀後半と考えられる。

3区12(A・B)号竪穴建物(第393～395図、第20・175表、PL.106・107・246・247)

平成26年度の調査で検出した。整理時に床面下を検討した結果、拡張を伴う竪穴建物であることが判明した。拡張後を12A竪穴建物、拡張前を12B竪穴建物として記述する。なお、調査時は、12号竪穴建物として調査した。

位置：3-B区西側の中央付近に位置し、北側に3区20号竪穴建物が接するように、南西側に3区13号竪穴建物が近接する。

グリッド：X～Z-105・106

座標値：X=61,118～61,120 Y=93,520～93,527

形状：正方形

12A竪穴建物規模：長軸5.72m 短軸5.38m

壁高24～38cm

12A竪穴建物長軸方向：N-63°-E

12A竪穴建物床面積：27.72㎡

12A竪穴建物埋没土：1・2層の黒色土を主に、壁際ないし床面付近の3層とした黒褐色土とに分層できる。埋土中に大中の礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。また、炭化材や炭化物を多く含む。

12A竪穴建物床面・壁：僅かにローム土を掘り込んだ中

に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて著しく硬化する。また、床面上には炭化材が多く出土している。壁高は24～38cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

12A竪穴建物カマド：東壁のほぼ中央に位置し、カマドの主軸方位はN-73°-Eを向き、残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ突出する。残存する規模は、全長1.01m、幅1.04mを測る。袖は僅かに残存する。燃焼部の底面は建物床面よりやや低くなり、煙道部は斜位に立ち上る。

12A竪穴建物貯蔵穴：カマドの右脇となる南東隅付近の南壁際に位置し、方形を呈する。規模は、一辺0.66m前後、深さ48cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

12A竪穴建物柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。円形ないし楕円形で、長軸37～56cm、短軸34～50cm、深さ48～56cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。

12A竪穴建物床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。埋土の上位にロームブロックを含むことから、床面となる上面は硬く締まる。底面は中央部から南側にかけてやや高くなり、全体に小さな凹凸をもつ。また、拡張前の12B竪穴建物の痕跡を残す。

12A竪穴建物遺物：出土した遺物量は多いが、そのほとんどが埋土中からの出土である。

出土遺物として、土器11点と石製品2点を図示した。

1～3は土師器の杯で、1・3の内面にはへら磨きが施される。4は須恵器の杯である。5・6は土師器の高杯で、7～11は土師器の甕である。

石製品には12の白玉と、13の小玉がある。12は滑石製で灰白色をなし、表面は平坦で、径0.7cm、厚さ0.3cm、孔径約3mm、重さ0.3gを測る。13は葉蠟石製で緑色をなし、両面穿孔の可能性があり、径1.1cm、厚さ0.7cm、孔径約3mm、重さ1.1gを測る。

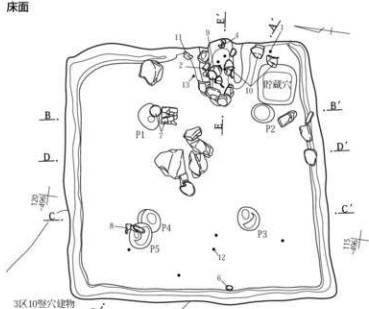
未掲載遺物には土師器の杯・甕片が多量にある。

12B竪穴建物規模：12A竪穴建物の床下面に残る痕跡のみであるため詳細は不明であるが、貯蔵穴と主柱穴の配置から、東壁およびカマド位置をそのままに、一辺4.4m前後の正方形を呈する竪穴建物が想定される。

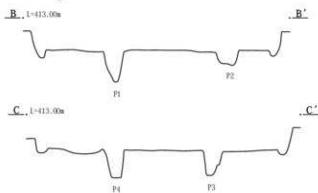
12B竪穴建物貯蔵穴：12A竪穴建物に伴う貯蔵穴の左側に位置し、方形を呈する。規模は、一辺0.56m前後、

第4章 検出された遺構と遺物

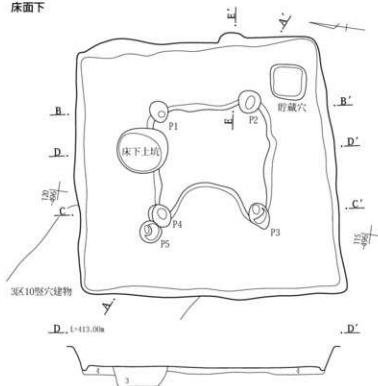
床面



3区10号貯穴建物

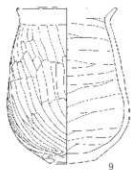
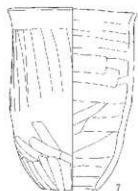


床面下



3区10号貯穴建物

D., l=413.00m

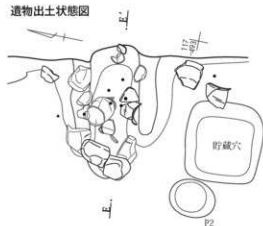


- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒、炭化物を僅かに含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を含む。
- 3 褐灰色土 ローム粒を含み、粘質で締まる。(床下土坑)
- 4 黒褐色土 ロームブロックを含む。(床下土)

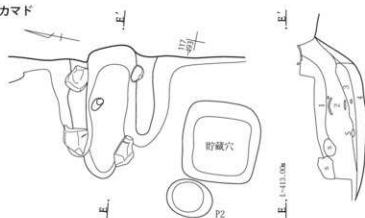
0 1:60 2m

第389図 3区11号貯穴建物 床面、床面下 平・断面図

遺物出土状態図

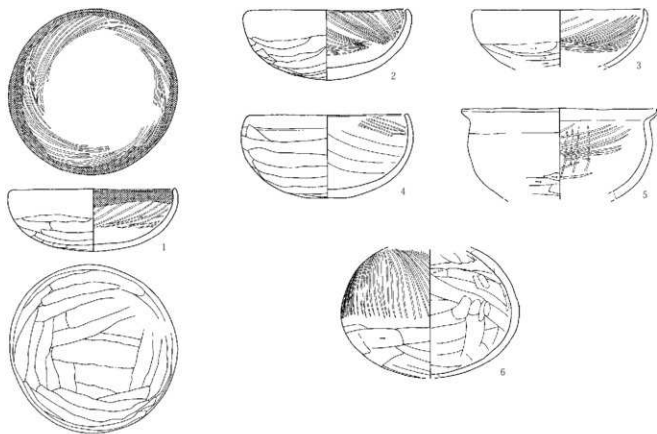


カマド



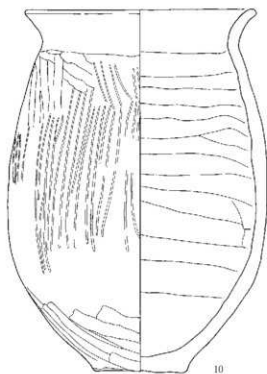
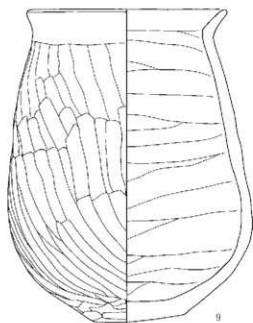
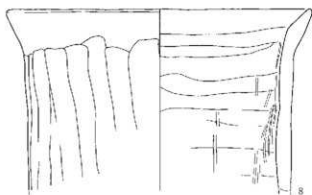
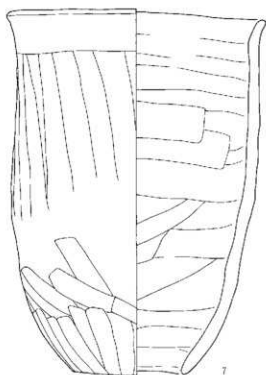
- 1 黒褐色土 焼土粒、灰黄褐色粘土粒を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、灰黄褐色粘土粒を微量含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒を微量含む。
- 4 赤褐色土 焼土ブロックを多く微量含む。

0 1:30 1m



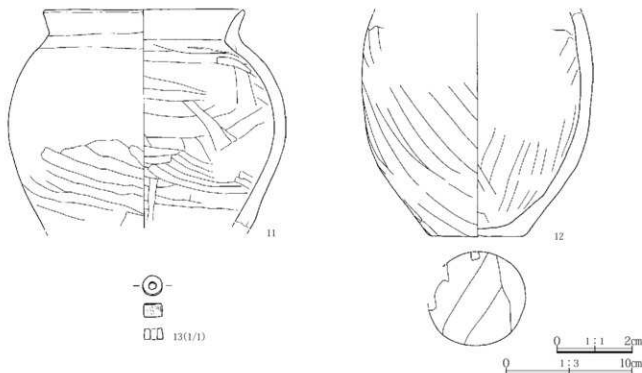
0 1:3 10cm

第390図 3区11号竪穴建物 カマド 平・断面図、出土遺物(1)



0 1:3 10cm

第391図 3区11号竪穴建物 出土遺物(2)



第392図 3区11号竪穴建物 出土遺物(3)

深さ35cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

12B竪穴建物柱穴：12A竪穴建物に伴う主柱穴の内側にP5～8を検出した。円形ないし楕円形で、長軸36～50cm、短軸31～38cm、深さ30～47cmを測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。

所見・時期：拡張を伴う竪穴建物で、主柱穴や貯蔵穴の配置から、東壁およびカマド位置をそのままに、北壁を若干、南・西壁を大きく拡張させて改築した結果が12A竪穴建物であると考えられる。また、出土した炭化材の状況から、12A竪穴建物は焼失家屋の可能性がある。建物の時期は、出土土器から6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

3区13(A・B)号竪穴建物(第396～400図、第20・176・177表、PL.107・247～249)

平成26年度の調査で検出した。拡張を伴う竪穴建物で、拡張後を13A竪穴建物、拡張前を13B竪穴建物として記述する。なお、調査時は、13B竪穴建物を3区22号竪穴建物として調査した。

位置：3-B区西側の中央付近に位置する。北側に3区21号竪穴建物、東側に3区12号竪穴建物が近接し、西側に3区14号竪穴建物が接するようである。

グリッド：W～Y-106～108

座標値：X=61,114～61,122 Y=93,528～93,536

13A竪穴建物形状：正方形

13A竪穴建物規模：長軸6.18m 短軸6.10m

壁高42～50cm

13A竪穴建物長軸方向：N-62°-E

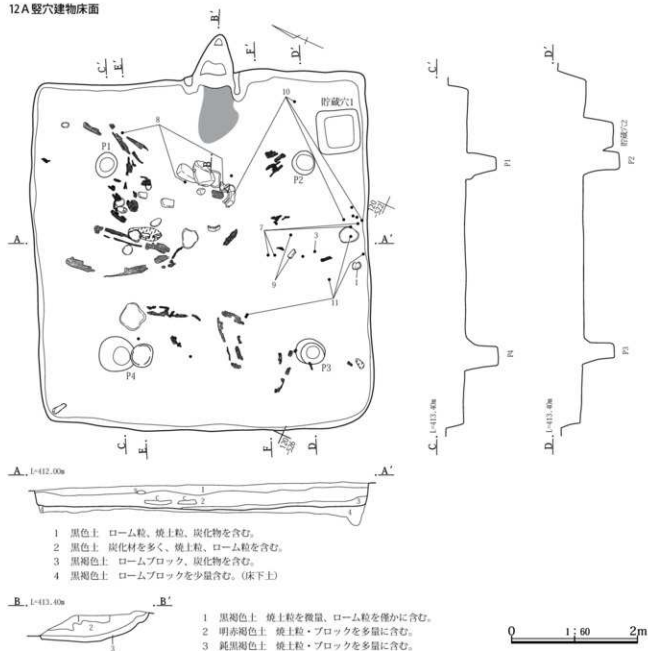
13A竪穴建物床面積：33.28㎡

13A竪穴建物埋没土：1・2層の黒褐色土を主に、壁際の3層および周溝内の4層とした黒褐色土とに分層できる。埋土中に中型礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

13A竪穴建物床面・壁：ローム土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて広く著しく硬化する。壁は拡張前の東・南壁をそのままに、北・西壁を少しずつ外側へ拡張させる。壁高は42～50cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

13A竪穴建物カマド：東壁中央の南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-85°-Eを向き、残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ突出する。残存する規模は、全長1.37m、幅1.29mを測る。袖は低く残存する。燃焼部の底面は建物床面よりやや低くなり、煙道部は斜位に立ち上る。カマド内およびカマ

12A 竪穴建物床面

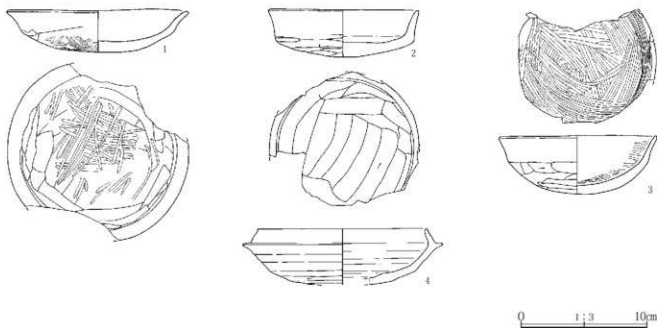
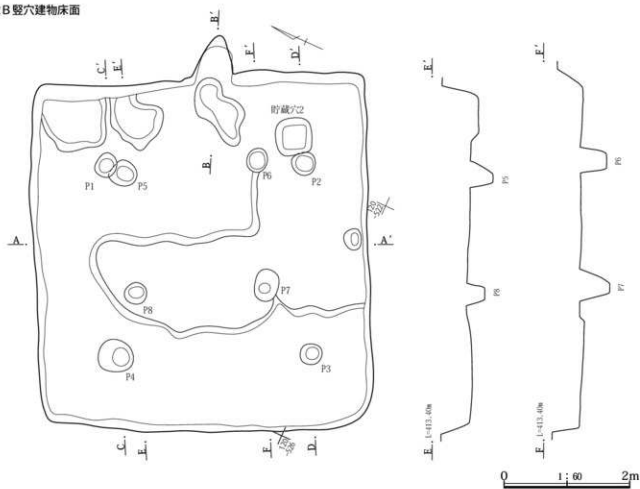


- 1 黒色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
- 2 黒色土 炭化材を多く、焼土粒、ローム粒を含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック、炭化物を含む。
- 4 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。(床下土)

- 1 黒褐色土 焼土粒を微量、ローム粒を僅かに含む。
- 2 明赤褐色土 焼土粒・ブロックを多量に含む。
- 3 鈍黒褐色土 焼土粒・ブロックを多量に含む。

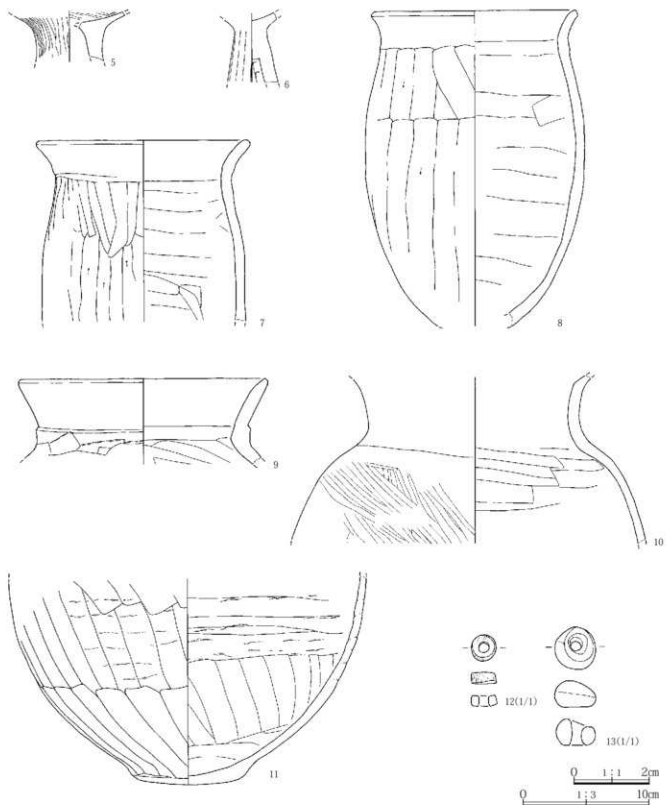
第393図 3区12A号竪穴建物 床面 平・断面図

12B 竪穴建物床面



第394図 3区12B号竪穴建物 床面・断面図、12A号竪穴建物 出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第395図 3区12A号竪穴建物 出土遺物(2)

下前に遺物の出土が多い。

13A 竪穴建物貯蔵穴：カマドの右脇となる南東隅に位置し、楕円形を呈する。西側をP2と重複し、規模は、長軸(0.74)m、短軸0.62m、深さ45cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

13A 竪穴建物柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。P2は貯蔵穴の西側に重なる。柱穴は円形ないし楕円形で、長軸70～90cm前後、短軸70～85cm、深さ55cm前後を測る。これらの柱穴は黒褐色土が埋土となり、礫層を掘り込んでいる。

周溝：カマド部分を除く壁際に、幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝が巡り、埋土は黒褐色土を主体とする。なお、東壁際と南壁際の周溝は拡張前と同じ。

13A 竪穴建物床面下：床面下には、13B 竪穴建物がある。

13A 竪穴建物遺物：出土した遺物量は極めて多く、その多くが埋土中からの出土である。建物に伴う遺物としては、18の甕はカマド内とカマド前の床面直上から出土し、24・27の甕はカマド内から、13の高杯はカマド前の床面直上から出土している。また、23の甕は床面付近に広く散乱した状態で出土している。

出土遺物として、土器28点を図示した。土器はいずれも土師器で、1～12は杯である。8の外面にはへら磨きが施される。13・14は高杯で、15は外・内面にへら磨きを施した鉢である。18・19は甕、20～28は甕である。

未掲載遺物には、土師器の杯・甕片がかなり多量にある。

13B 竪穴建物形状：方形

13B 竪穴建物規模：長軸5.87m 短軸5.56m

壁高52cm

13B 竪穴建物長軸方向：N-116°-W

13B 竪穴建物床面積：29.11㎡

13B 竪穴建物埋没土：5層の黒褐色土を埋土とし、上位にロームブロックを含むことから、13A 竪穴建物床面となる上面は硬く締まる。人為的な造作による。

13B 竪穴建物床面・壁：ローム土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけてやや硬化する。壁高は南壁で52cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

13B 竪穴建物カマド：西壁中央のやや南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-115°-Wを向き、拡張後の13

A 竪穴建物に壊され残存状態は極めて悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ突出する。残存する規模は、全長1.30m、幅1.08mを測る。袖の跡が僅かに残存する。燃焼部の底面は建物床面よりやや低くなり、煙道部は斜位に立ち上る。

13B 竪穴建物柱穴：主柱穴と考えられるP5～8を検出した。拡張後の主柱穴P1～4の内側に位置し、P8はP2と僅かに重なる。柱穴は円形ないし楕円形で、長軸36～75cm前後、短軸30～51cm、深さ46～53cmを測る。これらの柱穴は黒褐色土が埋土となり、礫層を掘り込んでいる。

周溝：カマド部分を除く壁際に、幅20cm前後、深さ10cm前後の周溝が巡り、埋土は黒褐色土。

13B 竪穴建物床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。深さは5～10cm前後。底面は部分的に自然礫が露出し、礫の抜き取痕と考えられる凹凸が著しい。

13B 竪穴建物遺物：出土した遺物量は少ない。カマド右脇の床面直上から4の甕底部が出土している。また、床下から1と5が出土している。

出土遺物として、土器5点を図示した。土器はいずれも土師器で、1・2は杯、3～5は甕である。

未掲載遺物には、土師器の細片が僅かにある。

所見・時期：拡張に伴う竪穴建物で、拡張前の13B 竪穴建物は西壁にカマドをもつ建物であったが、その後の13A 竪穴建物では東・南壁をそのままに、西壁と北壁を少しずつ拡張させて改築した建物である。また、13A・B共に同時期の土器を出土させていることから、6世紀後半に継続使用した竪穴建物と考えられる。

3区15号竪穴建物

(第401・402図、第20・179表、PL.108・109・249・250)
平成26年度の調査で検出した。3区24号竪穴建物と15号土坑と重複する。

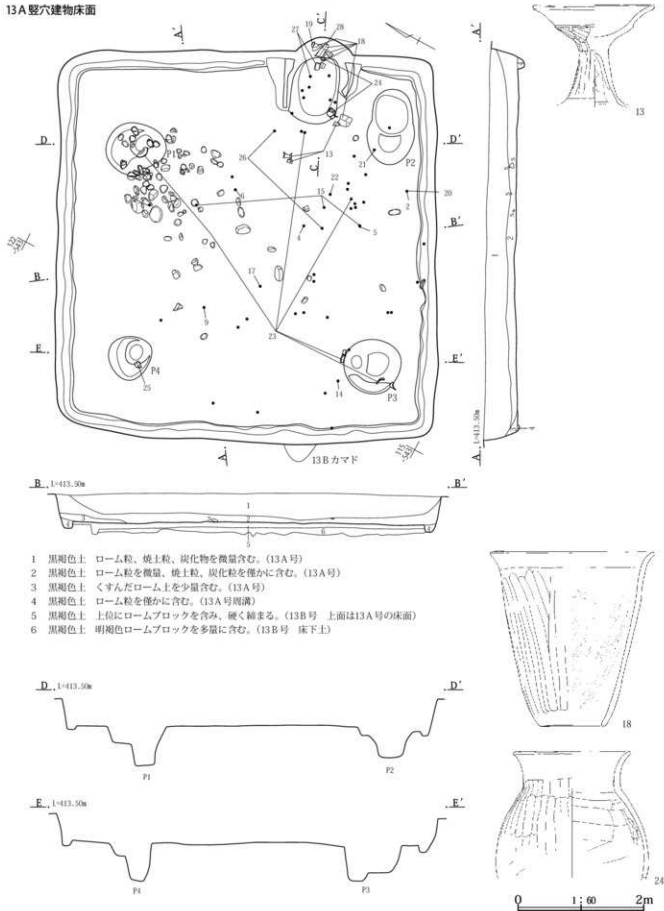
位置：3-B区西側の北西隅付近に位置し、東側に3区24号竪穴建物と僅かに重複する。南東側に3区21号竪穴建物が近接する。

グリッド：2A・2B-108・109

座標値：X=61,130-61,136 Y=93,534-93,541

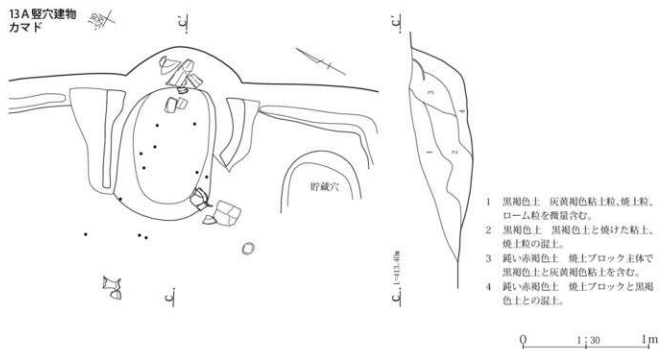
重複：本建物の東側に重複する3区24号竪穴建物との新

13A 竪穴建物床面



- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を微量含む。(13A号)
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量、焼土粒、炭化粒を僅かに含む。(13A号)
- 3 黒褐色土 くすんだローム土を少量含む。(13A号)
- 4 黒褐色土 ローム粒を僅かに含む。(13A号埋溝)
- 5 黒褐色土 上位にロームブロックを含み、硬く締まる。(13B号 上面は13A号の床面)
- 6 黒褐色土 明褐色ロームブロックを多量に含む。(13B号 床下土)

第396図 3区13A号竪穴建物 床面・断面図



第397図 3区13A号竪穴建物 カマド 平・断面図

旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が新しい。

形状：正方形

規模：長軸5.23m 短軸5.13m 壁高27～32cm

長軸方向：N-29°-E 床面積：23.06㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を主に、壁際の3層とに分層できる。埋土中に大中の礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

床面・壁：ローム土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて著しく硬化する。壁高は27～32cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北西壁の中央やや北寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-46°-Wを向き、残存状態はやや良好。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ僅かに出張る。規模は、全長0.74m、幅1.03mを測り、袖は壁から60cmほど突出し、右袖の先端には袖石が残存していた。左袖は僅かに残存するのみ。焚口部から燃焼部にかけての底面は、床面よりも僅かに低くなる。煙道部は短く、底面から急角度で立ち上がる。

貯蔵穴：カマド脇ではなく、逆の東隅に位置し、上面は長方形を呈する。規模は、長軸0.90m、短軸0.53m、深さ40cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。柱穴は

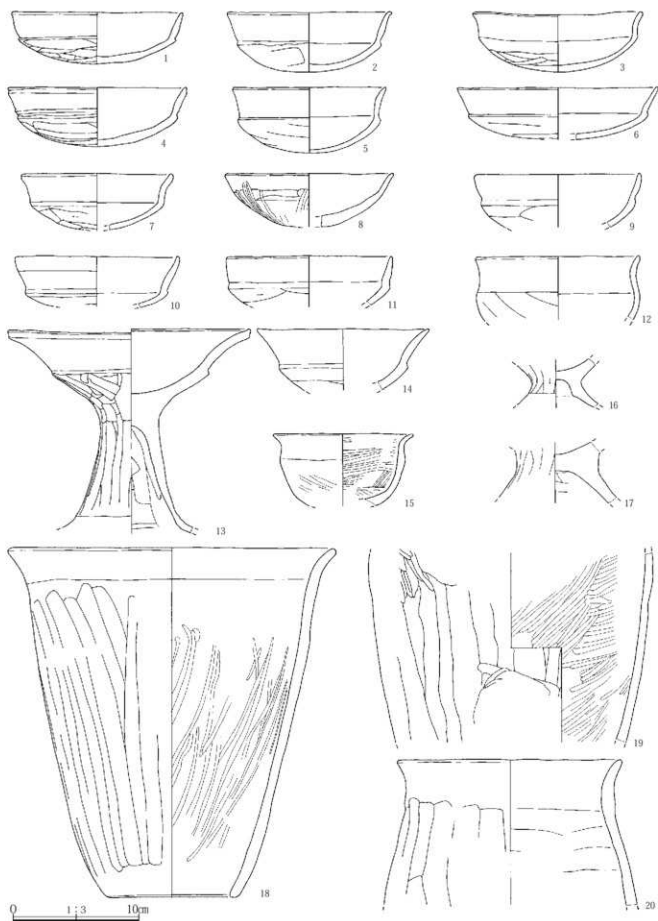
円形ないし楕円形で、長軸43～68cm前後、短軸42～55cm、深さ42～50cmを測る。これらの柱穴は黒褐色土が埋土となる。

周溝：カマド部分を除く壁際に、幅16cm前後、深さ10cm前後の周溝が巡り、埋土は黒褐色土。

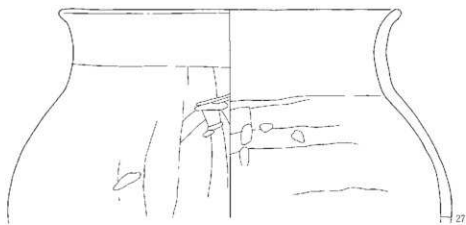
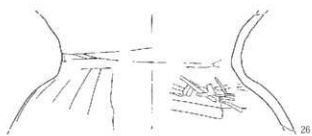
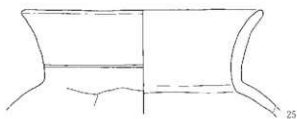
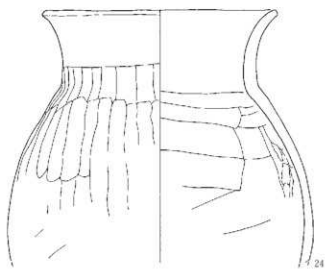
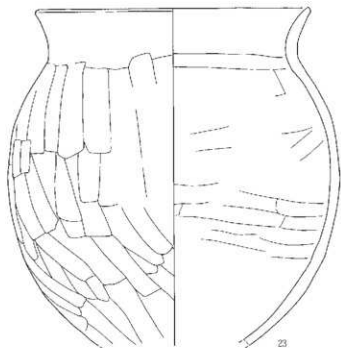
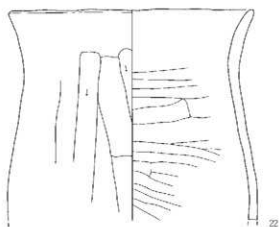
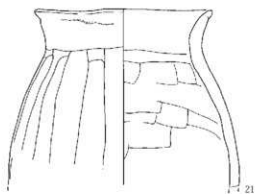
床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。埋土の上位にロームブロックを多く含むことから、床面となる上面は硬く締まる。底面は中央部が周囲よりやや高くなり、全体に凹凸をもつ。また、床下土坑を4基検出した。床下土坑1は建物中央に位置し、円形で径1.30m、深さ25cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床下土坑2は建物の南東側に位置し、不整楕円形で長軸1.33m、短軸0.90m、深さ20cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床下土坑3はカマド前付近に位置し、長方形で長軸1.45m、短軸0.65m、深さ44cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床下土坑4は北西壁際の中央西側に位置し、楕円形で長軸1.64m、短軸0.84m、深さ22cmを測り、黒褐色土を埋土とする。これら4基の床下土坑は、いずれも床面構築後の所作による。他に、ピット5～9を検出した。

遺物：出土した遺物量はやや多いが、多くは埋土中からの出土である。その中で、1・2の杯、7の高杯の杯部、9の石製模造品(有孔円板)は貯蔵穴内から出土し

第4章 検出された遺構と遺物



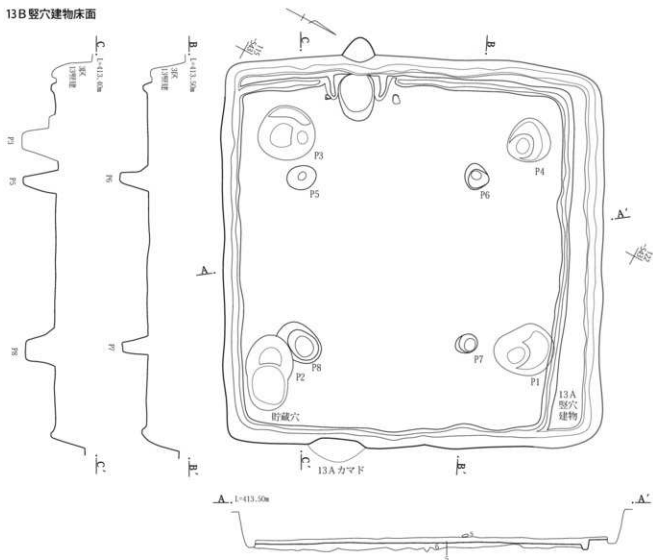
第398図 3区13A号竪穴建物 出土遺物(1)



0 1:3 10m

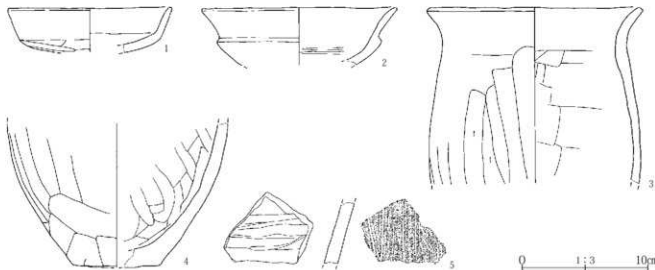
第399図 3区13A号竪穴建物 出土遺物(2)

13B 竪穴建物床面



- 5 黒周色土 上位にロームブロックを含み、硬く締まる。(13B号 上面は13A号の床面)
- 6 黒周色土 明褐色ロームブロックを多量に含む。(13B号 床下土)

0 1:60 2m



第400図 3区13B号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

ている。

出土遺物として、土器8点と石製品5点を図示した。1～7は土師器の杯で、5の内面にはへら磨きを施す。8は土師器甕の胴下半である。

石製品には2種の石製模造品と、粒状礫、白玉2点がある。9の石製模造品(有孔円板)は、蛇紋岩製で青灰色をなし、表裏・側面に擦痕が認められ、片面穿孔である。径3.4cm、厚さ0.6cm、孔径約2mm、重さ11.0gを測る。10の石製模造品(有孔方板)は、滑石製で灰白色をなし、表面に擦痕が認められる。長さ3.8cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、孔径約2mm、重さ8.4gを測る。11は表面の下部に線条痕が認められるチャート製の粒状礫で、灰色をなす。長さ1.9cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm、重さ2.0gを測る。12の白玉は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.5cm、孔径約3mm、重さ0.4gを測る。13の白玉は滑石製で灰白色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.5cm、孔径約2mm、重さ0.5gを測る。

未掲載遺物には土師器片が多い。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。

3区18号竪穴建物

(第403図、第20・182表、PL.110・111・250)

平成26年度の調査で検出した。3区2号溝と重複する。位置：3-B区中央の北西側に位置し、東側を3区2号溝と重複する。南側に3区9号竪穴建物がある。グリッド：Z・2A-102・103

座標値：X=61,129～61,134 Y=-93,506～93,511

重複：本建物の東側に重複する3区2号溝との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が古い。

形状：方形か

規模：長軸3.99m 短軸(3.50)m 壁高28～35cm

長軸方向：N-27°-W 床面積：(11.87)㎡

埋没土：1層の黒褐色土と2層の鈍い黄褐色土を埋土とする。

床面・壁：ローム土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて硬化する。壁高は28～35cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北東壁のほぼ中央に位置し、カマドの主軸方位はN-28°-Eを向き、残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ僅かに出張る。規模は、全長1.32m、幅0.89mを測り、袖の先端に位置する両袖石を確認したが、共に内側に傾く。詳細については不明な点が多い。

貯蔵穴：床面下の調査時に検出した。カマドの右側となる東隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸0.64m、短軸0.50m、深さ30cmを測る。礫層を掘り込み、黒褐色土を埋土とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1・2を床面上で、P3・4を床面下で検出した。柱穴は円形ないし楕円形で、長軸34～60cm前後、短軸32～44cm、深さ20～40cmを測る。これらの柱穴は礫層を掘り込み、黒褐色土を埋土とする。

床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。深さは10cm前後。底面は部分的に自然礫が露出し、礫の抜き取痕と考えられる凹凸が著しい。また、建物中央の南西寄りに床下土坑を検出した。楕円形で長軸0.87m、短軸0.80m、深さ38cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

遺物：出土した遺物量は少なく、そのほとんどが埋土中からである。

出土遺物として、土器2点を図示した。いずれも土師器で、1は杯、2は底部を欠くが有孔鉢である。

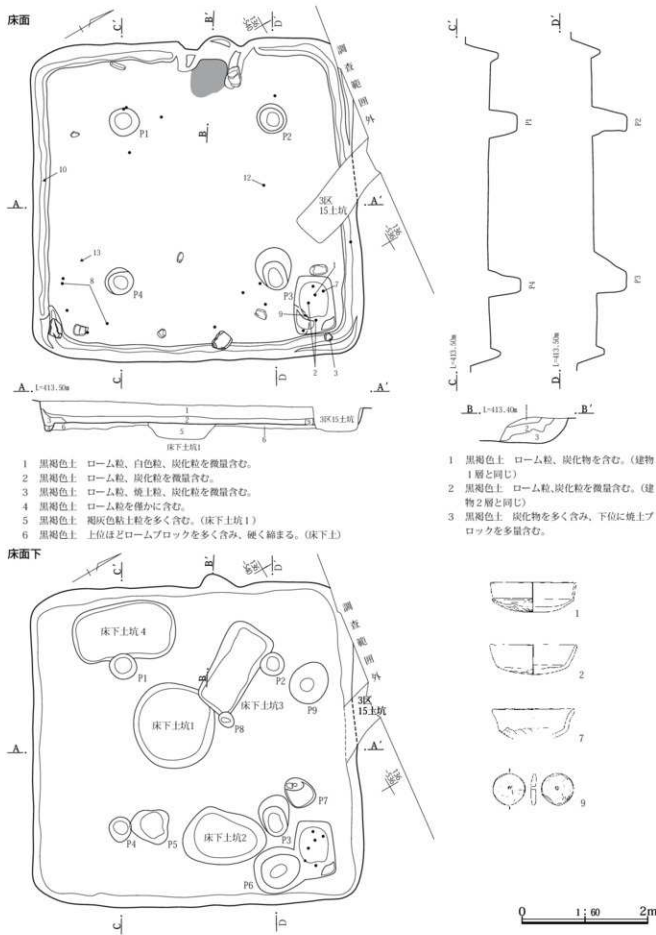
未掲載遺物には土師器片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。

3区19号竪穴建物(PL.111)

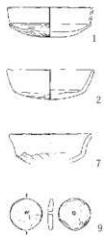
平成26年度の調査でカマドを含む東側の一部を検出したが、平成28年度調査において建物の大半となる西側を2区63号竪穴建物として調査した。そのため、記述は先述の2区63号竪穴建物を参照。

第4章 検出された遺構と遺物

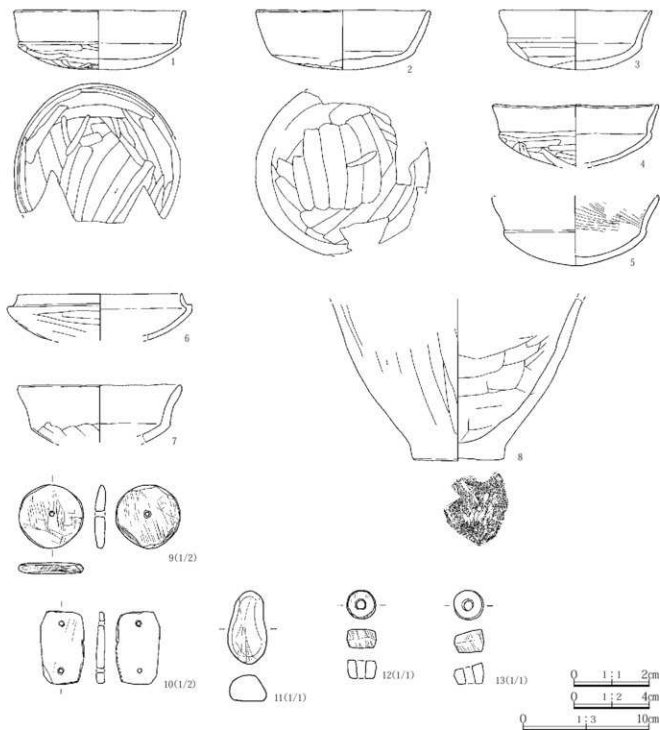


- 1 黒褐色土 ローム粒、白色粒、炭化粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を微量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化粒を微量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒を僅かに含む。
- 5 黒褐色土 褐色粘土粒を多く含む。(床下土坑1)
- 6 黒褐色土 上位ほどロームブロックを多く含み、硬く締まる。(床下土)

- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を含む。(建物1層と同じ)
- 2 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を微量含む。(建物2層と同じ)
- 3 黒褐色土 炭化物を多く含み、下に焼土ブロックを多量含む。

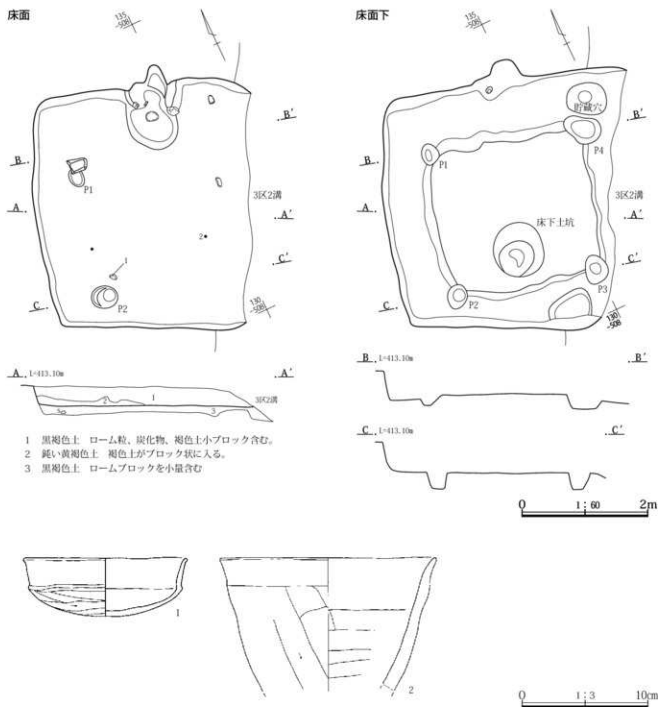


第401図 3区15号竪穴建物 床面、床面下 平・断面図



第402図 3区15号竪穴建物 出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物、褐色土小ブロック含む。
- 2 鈍い黄褐色土 褐色土がブロック状に入る。
- 3 黒褐色土 ロームブロックを少量含む

第403図 3区18号竪穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物

3区20号竪穴建物

(第404・405図、第20・183表、PL.111・112・251)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の東寄りに位置し、北西側に3区23号竪穴建物が近接し、南西側に3区12号竪穴建物が接するように隣接する。

グリッド：Z・2A-104・105

座標値：X=61,125~61,130 Y=93,517~93,522

形状：正方形

規模：長軸5.19m 短軸5.04m 壁高10~15cm

長軸方向：N-89°-E 床面積：24.58㎡

埋没土：1層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土中に床面があり、床面までは浅い。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけてやや硬化がみ。壁高は10~15cmを測り、垂直直みに立ち上がる。

カマド：北壁のほぼ中央に位置し、カマドの主軸方位はN-8°-Eを向き、残存状態は悪いが、カマド内からの遺物の出土状況は良好。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ僅かに出る。規模は、全長1.21m、幅1.17mを測り、左袖の先端に袖石状の石を確認した。焚口部から燃焼部の底面にかけて、建物床面より僅かに低くなり、燃焼部底面には支脚石が残る。そして、煙道部は短く、斜位に立ち上がる。

床面下：床面下の掘り込みの可能性から調査を行ったが、3層といたくすんだローム土を含む黒褐色土であり、明確な床下構造をもつかは不明。底面は、ローム上面となる。

遺物：出土した遺物量はやや少ない。先述したように、カマド内からは4の杯と7の甕が、煙道の上位から3の杯が出土し、1・2の杯および8の甕は建物中央の床面直上から出土している。他にも、埋土中から出土している。

出土遺物として、土器8点を図示した。土器はいずれも土師器である。1~5は杯で、3を除く杯の内面にはヘラ磨きが施されている。6は高杯の脚部であり、7は甕で、8はほぼ完形の甕である。

末掲載遺物には土師器の杯や甕片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から5世紀後半と考えられる。

3区21号竪穴建物(第406図、第20・184表、PL.112・251)

平成26年度の調査で検出した。遺構確認時は、竪穴建物のプランを確定し難かった。そのため残存状況は悪い。3区24号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区西側の北西寄りに位置し、北側に3区24号竪穴建物が重複する。南側に3区13号竪穴建物が近接する。

グリッド：Y・Z-107・108

座標値：X=61,124~61,128 Y=93,531~93,535

重複：本建物の北側に重複する3区24号竪穴建物との新旧は、土層断面の観察および出土遺物から本建物の方が新しい。

形状：不整形

規模：長軸3.48m 短軸3.41m 壁高25cm

長軸方向：N-60°-E 床面積：10.26㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を主に、カマド脇の3層とに分層できる。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土下位に床面があり、重複する3区24号竪穴建物との床面の差はほとんどない。床面はほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて硬化する。壁高は25cmを測り、垂直直みに立ち上がる。重複する壁と南東壁は不明。

カマド：北東壁の中央東寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-53°-Eを向き、残存状態は悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ僅かに出出る。規模は、全長0.79m、幅0.57mを測り、両袖石を確認した。また、右袖石の奥に燃焼部の内壁石をも確認した。焚口部から燃焼部の底面にかけて、建物床面より僅かに低くなり、燃焼部底面には支脚石が残る。そして、煙道部は短く、斜位に立ち上がる。

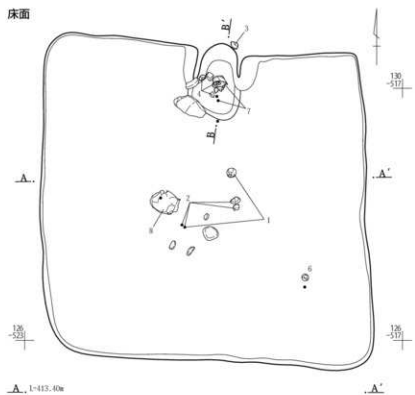
貯蔵穴：カマドの右脇となる東側に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸0.77m、短軸0.60m、深さ31cmを測り、黒褐色土を埋土とする。

床面下：床面下の掘り込みの可能性から調査を行ったが、4層といたくすんだローム土を含む褐色土であり、明確な床下構造をもつかは不明。底面は、ローム上面となる。また、建物中央に床下土坑を検出した。楕円形で長軸1.24m、短軸1.13m、深さ20cmを測り、黒褐色土を埋土とする。他に、P1・2を検出した。

遺物：出土した遺物量はやや少ない。2の杯は貯蔵穴内

第4章 検出された遺構と遺物

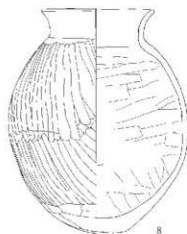
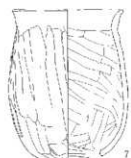
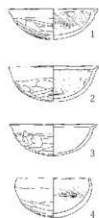
床面



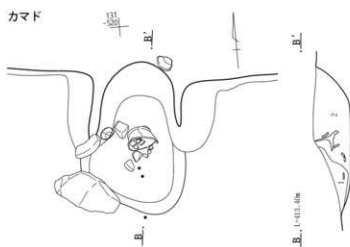
A., 1:413.40w

- 1 黒褐色土 ローム粒、白色粒を微量含む。
- 2 黒褐色土 白色粒、くすんだローム土を含む。(床下土?)

0 1; 60 2m



カマド

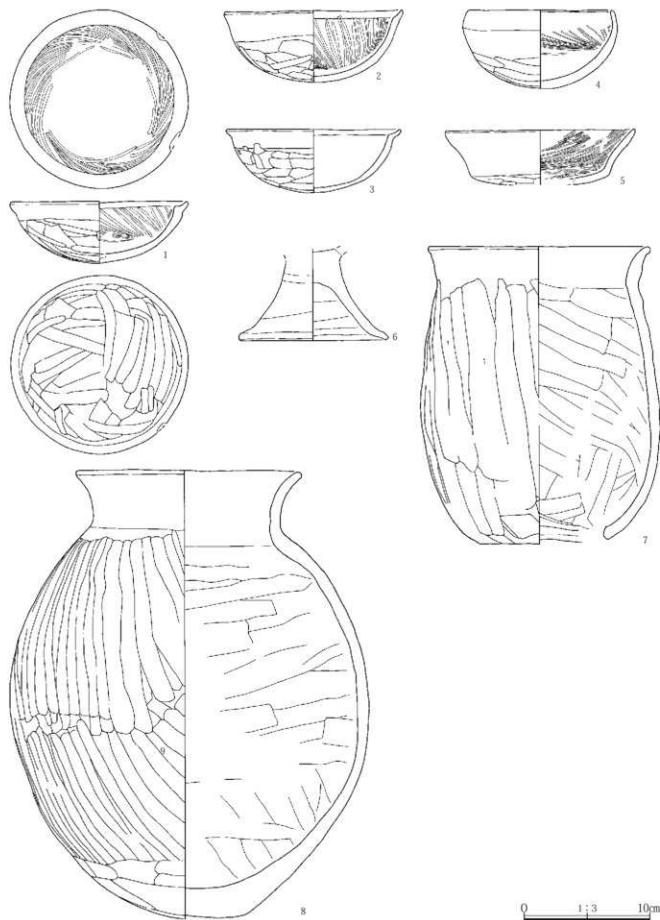


B., 1:413.40w

- 1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒を微量含む。
(建物1層に相当)
- 2 黒褐色土 焼土粒を含む。

0 1; 30 1m

第404図 3区20号竪穴建物 床面、カマド 平・断面図



第405図 3区20号竪穴建物 出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

からであり、それ以外の遺物は埋土中からの出土である。

出土遺物として、土器5点と石製品1点を図示した。土器はいずれも土師器である。1～3は杯で、3の内面にはヘラ磨きが施されている。4は小型甕であり、5は甕の胴下半である。

石製品に6の白玉があり、滑石製で灰白色をなし、表裏面は共に凹凸が認められ、径0.8cm、厚さ0.4cm、孔径約3mm、重さ0.5gを測る。

未掲載遺物には土師器の杯や甕片がある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀前半と考えられる。

3区23号竪穴建物

(第407・408図、第20・185表、PL.112・113・252・253)

平成26年度の調査で検出した。調査範囲内の北側に農業用水路があるため、竪穴建物の北半は調査できなかった。また、3区16号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区西側の北壁際に位置し、3区16号竪穴建物と大きく重複する。南東側に3区20号竪穴建物、南西側に3区24・25号竪穴建物が近接する。

グリッド：2A-105・106

座標値：X=61,132～61,135 Y=93,523～93,527

重複：本建物と大きく重複する3区16号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が古い。

形状：正方形か

規模：長軸(2.26)m 短軸4.36m 壁高30～38cm

長軸方向：N-106°-E 床面積：(8.38)㎡

埋設土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：ローム土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から中央付近にかけて硬化する。壁高は30～38cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁の中央付近に位置すると考えられるが、重複する3区16号竪穴建物に壊され、残存状態は極めて悪い。僅かに右袖石が残存するのみであった。この右袖石の位置から、燃焼部は壁の内側にあったものと考えられる。規模・詳細等は不明。

貯蔵穴：カマドの右脇となる南東隅に位置し、長方形を呈する。規模は、長軸0.74m、短軸0.50m、深さ58cm

を測り、黒褐色土を埋土とする。

柱穴：P1～3を検出したが、主柱穴と考えられるP1に対応する柱穴は確認されていない。

床面下：床面下は、暗褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。深さは10cm前後で、底面は凹凸が著しい。また、床下土坑を3基検出した。床下土坑1は建物中央に位置し、楕円形で長軸(1.06)m、短軸1.06m、深さ25cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床下土坑2は南西隅付近の南壁際に位置し、円形で径0.70m、深さ27cmを測り、灰黄褐色土を埋土とする。床下土坑3は西壁際に位置し、不整形で長軸(1.20)m、短軸0.70～0.90m、深さ27cmを測り、灰黄褐色土を埋土とする。これら3基の床下土坑は、いずれも床面構築後の所作による。

遺物：出土した遺物量は極めて多く、カマド前から右脇の床面直上に遺物が集中している。カマド前付近からは正位で1の杯、北に口縁を向けて横転した10の甕および14の甕片が出土し、カマド右脇からは正位で7の完形甕、壁に倒れかかると6の有孔鉢、南に口縁を向けて横転した9の甕、その脇に2の杯、さらに11の甕が出土している。また、埋土中からの出土も多くある。

出土遺物として、土器14点を図示した。1～5は土師器の杯で、4の内面にはヘラ磨きが施される。6は土師器の有孔鉢で、7は土師器の甕でほぼ完形品。8は土師器の小型甕、9～13は土師器の甕、14は外面に2条の横位沈線と波状文を巡らせる須恵器の甕の胴部片である。

未掲載遺物には、土師器や須恵器の杯・甕片がかなり多量にある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀後半と考えられる。

3区24号竪穴建物

(第409図、第20・186表、PL.113・253)

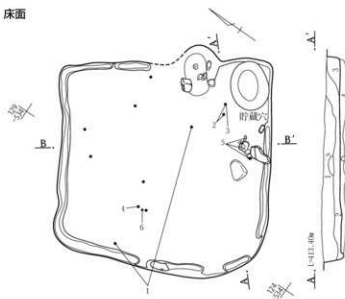
平成26年度の調査で検出した。3区15・21・25号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区西側の北西側に位置し、北西隅を3区15号竪穴建物、南西隅付近を3区21号竪穴建物、そして3区25号竪穴建物と大きく重複する。

グリッド：Z・2A-106・107

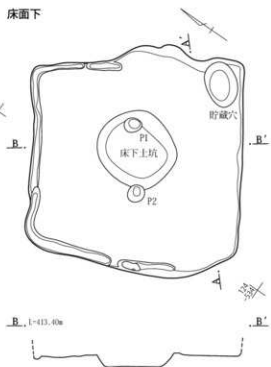
座標値：X=61,127～61,133 Y=93,529～93,535

床面

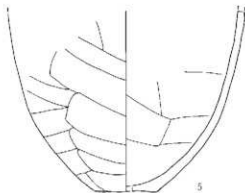
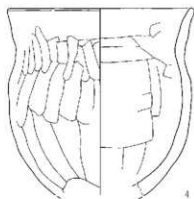
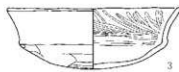
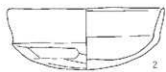


- 1 黒褐色土 ローム粒、炭化物を微量含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
- 4 褐色土 くすんだローム土を含む。(床下土?)

床面下



0 1:60 2m



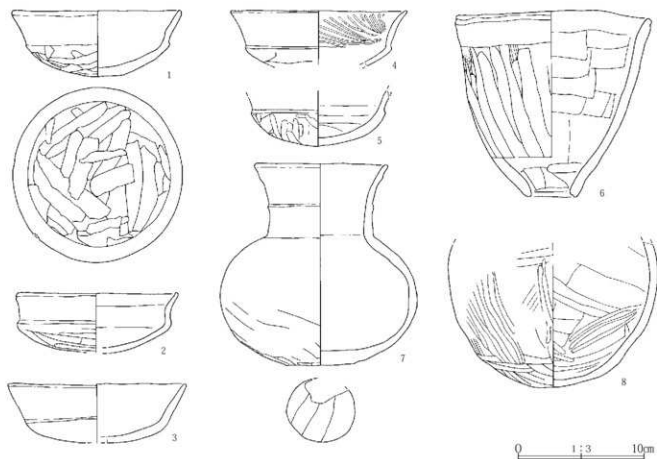
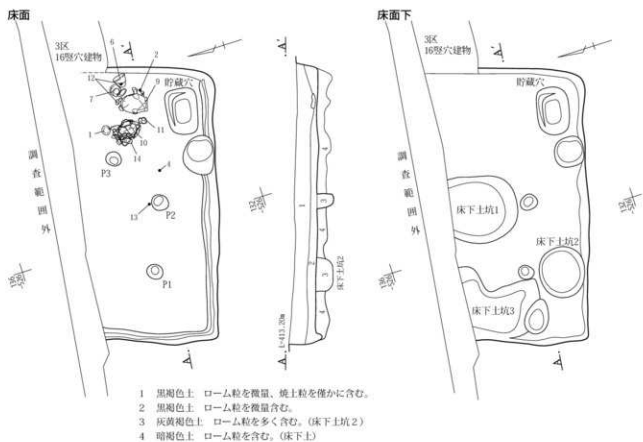
6(1/1)

0 1:1 2m

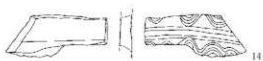
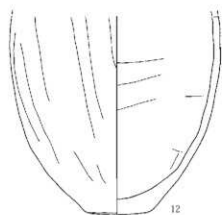
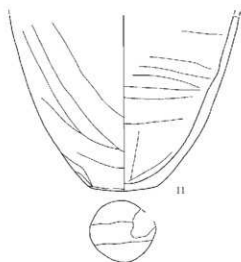
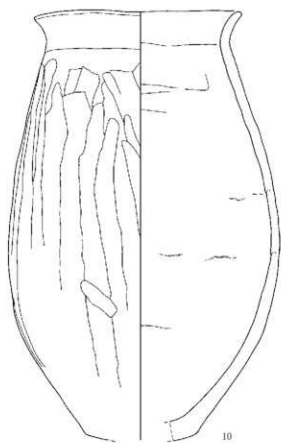
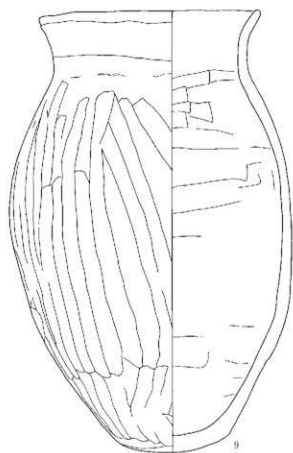
0 1:3 10cm

第406図 3区21号竪穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物



第407図 3区23号形穴建物 床面、床面下 平・断面図、出土遺物(1)



第408図 3区23号竖穴建物 出土遺物(2)

第4章 検出された遺構と遺物

重複：本建物と重複する各竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察、出土遺物から3区15・21号竪穴建物より本建物の方が旧く、3区25号竪穴建物より新しい。

形状：正方形

規模：長軸6.18m 短軸6.09m 壁高15～20cm

長軸方向：N-5°-W 床面積：(33.84)㎡

埋没土：1層の黒褐色土と2層の黒色土を主に、壁際の3層とに分層できる。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土下位に床面があり、重複する3区21号竪穴建物との床面の差はほとんどない。床面はほぼ平坦で、*が*の周辺を含む中央付近は硬化する。また、建物南側の床面上に炭化材が出土しており、焼失建物の可能性をもつ。壁高は15～20cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

が：建物の中軸上の北寄りに位置し、楕円形を呈する。地床が、浅い掘り込みをもち、*が*内南側には東西方向に据えた棒状の枕石が残存し、*が*底面は被熱してやや焼土化する。*が*の規模は、長軸92cm、短軸74cm、深さ6cmを測る。

貯蔵穴：南壁の中央東寄りに位置し、楕円形を呈する。長軸80cm、短軸64cm、深さ40cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成され、概ね正方形を呈する。主柱穴は円形で、径長軸30～40cm、深さ50cm前後を測り、埋土は黒褐色土ないし褐色土である。また、P3の脇にP5を検出した。

遺物：出土した遺物量は極めて少なく、貯蔵穴内から数点の破片が出土した以外は埋土中からである。

出土遺物として、土器4点を図示した。土器はいずれも土師器で、1は外面に刷毛目を施す台付甕の胴部片、2・3は台付甕の台部である。4は内・外面に刷毛目を残す甕の底部。

未掲載遺物には刷毛目のある甕片が僅かにある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性をもつ。建物の時期は、出土土器から4世紀と考えられる。

第4項 古代(7世紀後半以降)の遺構と遺物

(1)概要

先に調査が行われた西側の1区で古代の竪穴建物を数多く調査していることから、本調査区においても遺構の存在が想定されていた。3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした3-B区第2面調査において、7世紀後半以降の竪穴建物をはじめとする集落が検出された。この集落を構成する遺構は、竪穴建物4棟、土坑16基、遺物集中1箇所、溝1条がある。検出された竪穴建物の分布状況から、全体としては1・2区から続く竪穴建物密集地の東端にあたり、やや離れた4区での竪穴建物も含め、調査区外となる北・南側にまで展開するものと推測される。正にそれは、かなりな大規模集落の様相を呈しており、周辺地における拠点的な集落とみることができよう。

以下、検出された各遺構について記述する。

(2)竪穴建物

本調査区で検出された古代の竪穴建物は、第2面調査において3-B区に4棟の建物が検出された。

以下、各遺構ごとに記載する。(第20表 3区竪穴建物一覧を参照)

3区10号竪穴建物

(第410図、第20・173表、PL.105・244・245)

平成26年度の調査で検出した。3区11号竪穴建物と重複する。

位置：3-B区のほぼ中央に位置し、東側に3区11号竪穴建物が重複する。北側に3区6・7号竪穴建物が近接する。

グリッド：X・Y-100

座標値：X=61,117～61,120 Y=93,496～93,499

重複：本建物と重複する3区11号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が新しい。

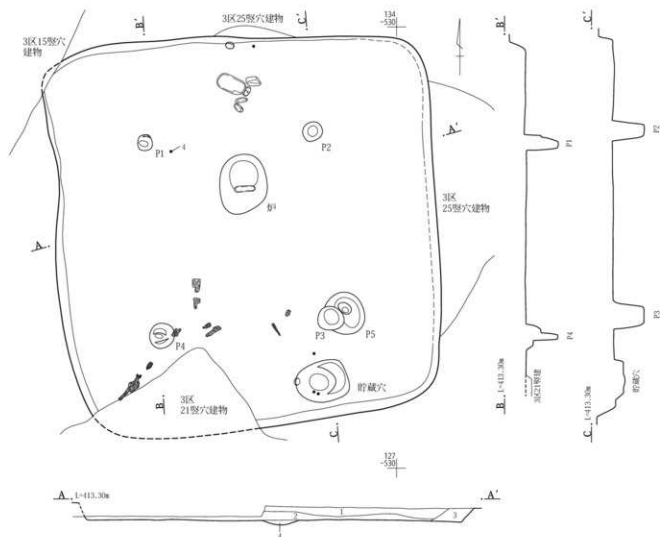
形状：方形

規模：長軸3.18m 短軸2.61m 壁高5cm

長軸方向：N-61°-W 床面積：7.10㎡

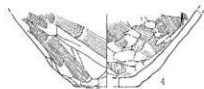
埋没土：1層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土中に床面があり、遺



- 1 黒褐色土 ローム粒、焼土、炭化物を含む。
- 2 黒色土 ローム粒、焼土、炭化物を多く含む。
- 3 黒褐色土 ローム、炭化物等を少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒、炭化物を少量含む。(B)

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第409図 3区24号穴建物 床面平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

構確認面に近く浅い位置にある。床面はほぼ平坦で、カマド前がやや硬化しており、床面上に炭化材が僅かに出土している。壁高は最大で5cmを測る。

カマド：南東壁のほぼ中央に位置し、カマドの主軸方位はN-103°-Eを向き、遺存状態は悪い。燃焼部は壁の内側から外側にあり、煙道部は外側に突出すると思われるが不明。規模は全長0.58m、幅0.63mを測る。袖は壁から30cmほど突き出るように残存し、両袖の先端付近に袖石状の石を確認したが原位置を止めていない。燃焼部の周りに扁平な垂円礫を残存するが、原位置かどうかは不明。これら壁石のカマド内面側は被熱している。燃焼部底面は、建物床面より低くなる。なお、焚き口部の天井石となる長い平石は、カマド前の床面上にずり落ちた状態で残存していた。以上の状況から、本建物のカマドは石組みのカマドである。

遺物：出土した遺物量は少ない。3～5の羽釜はカマド内および周辺から、1の皿や2の杯はカマド周辺の床面近くからの出土である。

出土遺物として、土器5点を図示した。1の須恵器の皿は高台部を欠き、2は須恵器の杯である。3は須恵器の羽釜で、4・5は土師器の羽釜である。

未掲載遺物には土師器片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から10世紀後半と考えられる。

3区14号竪穴建物

(第411・412図、第20・178表、PL.108・249)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区の西端寄りに位置し、東側に3区13号竪穴建物が接するようにある。

グリッド：X・Y-108・109

座標値：X=61,118～61,123 Y=93,535～93,541

形状：長方形

規模：長軸5.22m 短軸4.91m 壁高16～50cm

長軸方向：N-82°-W 床面積：22.50㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土下位に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から床中央にかけて硬化が著しい。床面上に炭化材が僅かに出土している。壁高は27cm前後を測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：北壁中央のやや東寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-10°-Eを向き、残存状態は比較的に良好。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は外側へ突出する。カマドの規模は、全長1.40m、幅1.12mを測り、袖は壁から65cmほど突出する。両袖の先端に袖石はなく、袖の構築上には白色粘土が混在する。焚き口から燃焼部の底面にかけて、建物床面より僅かに低くなる。そして、煙道部はやや長めで、燃焼部から斜位に立ち上がる。遺物の出土は少ない。

貯蔵穴：カマドの右脇となる北東隅に位置し、楕円形を呈する。規模は、長軸1.06m、短軸0.85m、深さ16cmを測り、白色粘土を混在する暗褐色土を埋土とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1～4を検出した。円形ないし楕円形で、長軸47～63cm、短軸45～56cm、深さ53cm前後を測る。これらの柱穴は、黒褐色土が埋土となる。

床面下：床面下は、黒褐色土を埋土とした掘り込みをもつ。埋土の上位に帯状にロームブロックを多く含むことから、床面となる上面は硬く締まる。底面は全体に凹凸をもつ。建物中央の東寄りに円形の床下土坑が検出され、径0.98m、深さ15cmを測り、白色粘土を混在する暗褐色土を埋土とする。この床下土坑は、床面構築後の所作による。

遺物：出土した遺物量はやや多いが、多くは埋土中からの出土である。その中で、4の蓋はP2脇の床面直上から出土している。

出土遺物として、土器10点を図示した。1～3は土師器の杯で、6は須恵器の杯である。4・5は須恵器の杯蓋で、4は宝珠状の握みをもつ。7は須恵器の壺の口頸部で、8は胴部外面にカキ目状のナデを残す須恵器の横腹である。9は土師器の小型甕で、10は土師器甕である。

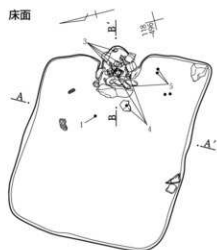
未掲載遺物には土師器・須恵器片が多い。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から7世紀後半と考えられる。

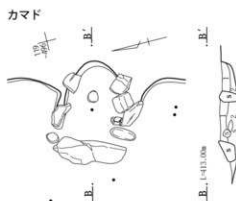
3区16号竪穴建物

(第413図、第20・180表、PL.109・110・250)

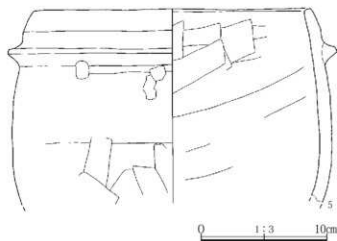
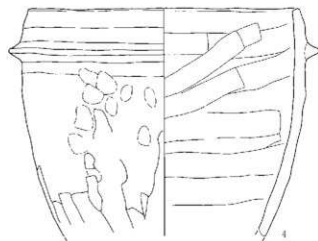
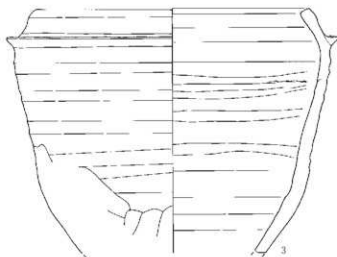
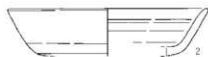
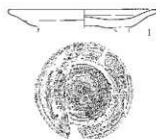
平成26年度の調査で検出した。調査範囲内の北側に農業用水路があるため、竪穴建物の北半は調査できなかつ



1 黒褐色土 焼土粒、ローム粒、炭化物を多く含む。

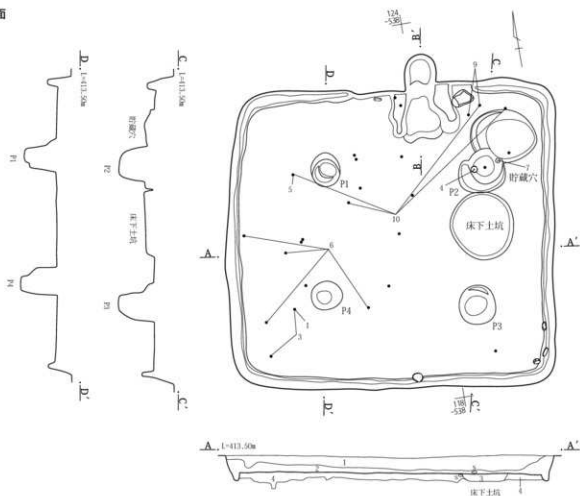


1 暗褐色土 焼土粒、炭化物を含む。
2 褐色土 ロームブロック、焼土、炭化物を含む。



第410図 3区10号竪穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物

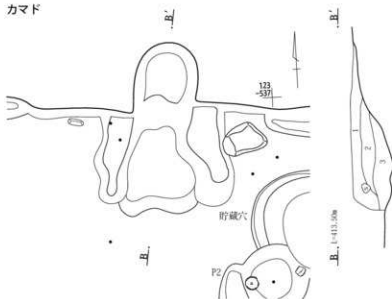
床面



- 1 黒褐色土 ローム粒、褐色土粒を含む。
- 2 黒褐色土 炭化物が多く、ロームブロックを少量混入する。
- 3 暗褐色土 灰白色粘土ブロックを多く含む。(床下土坑)
- 4 黒褐色土 上位ほどロームブロックを多く含み、硬く締まる。(床下土)

0 1:60 2m

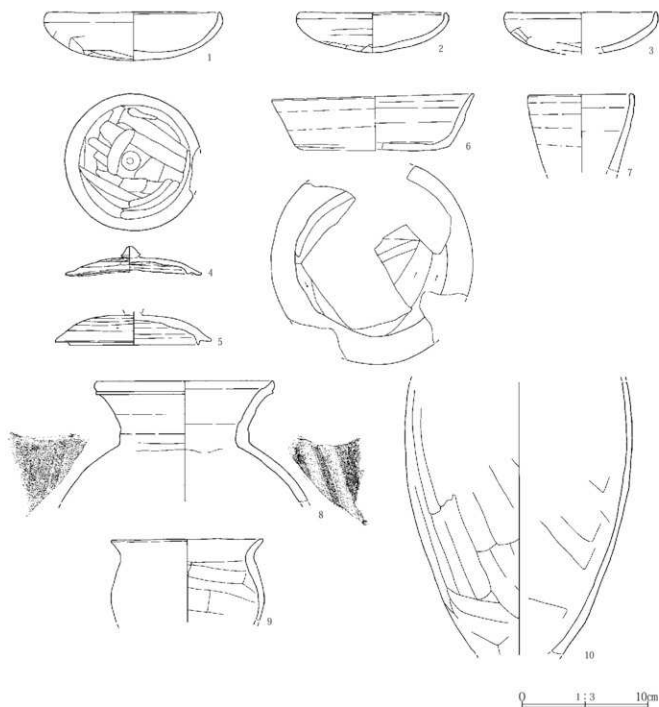
カマド



- 1 黒褐色土 炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 炭化物を多く含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を多く含む。

0 1:30 1m

第411図 3区14号壁穴建物 床面、カマド 平・断面図



第412図 3区14号竪穴建物 出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

た。また、3区23号竪穴建物と重複する。なお、調査時は南壁にカマドをもつ竪穴建物として調査したが、その部分は3区23号竪穴建物のカマドであることが後に判明した。

位置：3-B区西側の北壁際に位置し、3区23号竪穴建物と大きく重複する。南東側に3区17号竪穴建物、南側に3区20号竪穴建物が近接する。

グリッド：2A-105・106

座標値：X=61,133~61,135 Y=93,521~93,526

重複：本建物と重複する3区23号竪穴建物との新旧は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が新しい。

形状：方形か

規模：長軸4.12m 短軸(0.93)m 壁高20~28cm

長軸方向：N-99°-E 床面積：(2.69)㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土中に床面があり、ほぼ平坦で、床中央付近がやや硬化する。床面上には大型礫が点在している。壁高は20~28cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：南壁以外の壁に付くものと考えられ、遺物の出土状態から東壁に付く可能性が高い。

貯蔵穴：遺物の出土状態から南東隅に位置する可能性をもつが、詳細が不明。

床面下：床面下は、12cm前後の掘り込みをもち、黒褐色土を床下土とする。

遺物：出土した遺物量は少ないが、埋土中からが多い。その中で、1の杯、2・4碗は南東隅の床面直上から出土している。

出土遺物として、土器6点を図示した。土器はいずれも須恵器で、1は杯、2~5は碗、6は凸帯付四耳壺である。

未掲載遺物には土師器・須恵器片がある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から9世紀末から10世紀第1四半期と考えられる。

3区17号竪穴建物

(第414・415図、第20・181表、PL.110・250)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央から西側の北壁付近に位置し、東側

に3区18号竪穴建物、南西側に3区20号竪穴建物が近接する。

グリッド：2A-103・104

座標値：X=61,130~61,133 Y=93,513~93,517

形状：長方形

規模：長軸3.43m 短軸2.90m 壁高17~20cm

長軸方向：N-81°-W 床面積：8.74㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

床面・壁：基本層序VI層の黒褐色土中に床面があり、ほぼ平坦で、カマド前から床中央にかけて硬化する。床面上には大型礫が点在している。壁高は17~20cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-103°-Eを向き、遺存状態は良好。遺構確認時には大型礫が目立ったが、その多くは崩落状態にあった。燃焼部は壁の外側に大きく突出する。規模は全長1.19m、幅0.77mを測る。袖は壁から僅かに突き出るように残存し、右袖の先端に袖石を確認した。天井石と思える扁平な長い礫が残存していたが、原位置とは異なる位置であった。また、右袖石から燃焼部の内壁にかけて数石の扁平礫を立てて構築した石組みカマドであるが、その崩落礫が土器と共にカマド内に残存していた。原位置を止める壁石のカマド内面側は被熱している。焚口部から燃焼部にかけての底面は、建物床面より低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。

床面下：床面下は、15cm前後の掘り込みをもち、黒褐色土を床下土とする。

遺物：出土した遺物量はやや少なく、埋土中からの出土が多い。その中で、1の羽釜はカマド内から、2の甕は建物中央の床面直上から出土している。

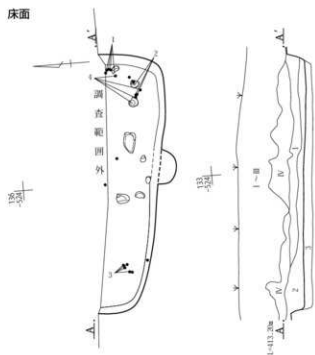
出土遺物として、土器4点と石製品1点を図示した。1は須恵器の羽釜で、2は土師器の甕胴下半、3・4は須恵器甕の胴部片である。

石製品には、6面を底面とする5の砥沢石製の砥石があり、裏面に長い線条痕が集中する。長さ12.2cm、幅5.0cm、厚さ2.5cm、重さ226.8gを測る。

未掲載遺物には土師器・須恵器片がある。

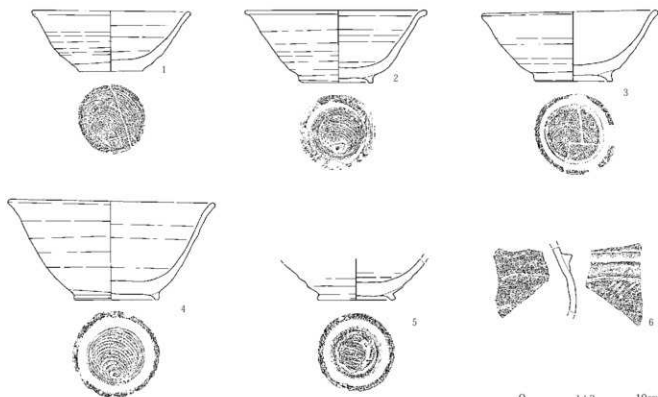
所見・時期：建物の時期は、出土土器から10世紀第1四半期と考えられる。なお、カマドは石組み構造である。

床面



- I～III 暗褐色土 基本層序に同じ。
 IV 暗褐色土 基本層序に同じ。
 1 黒褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
 2 黒褐色土 ローム粒、炭化物やや多い。
 3 黒褐色土 焼土粒、灰黄色粘土ブロックを微量含む。(床下土)

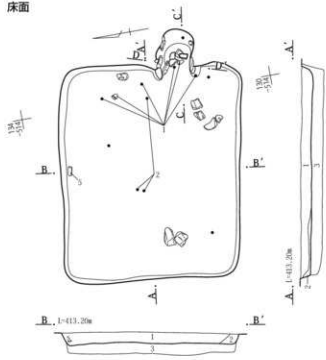
0 1:60 2m



第413図 3区16号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

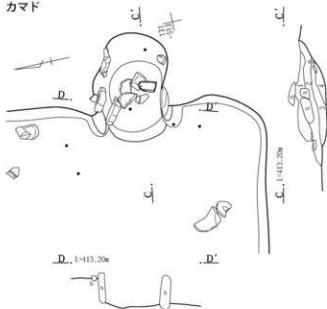
床面



- 1 黒褐色土：白色軽石、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土：ローム粒、炭化物を含む。
- 3 黒褐色土：ローム粒、白色粒を微量含む。(床下土)

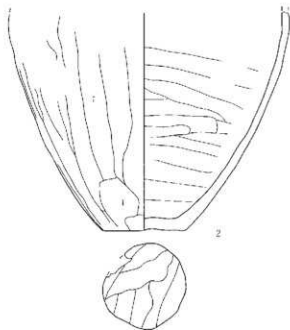
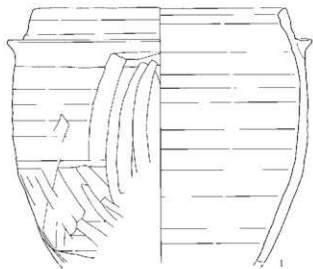
0 1:60 2m

カマド



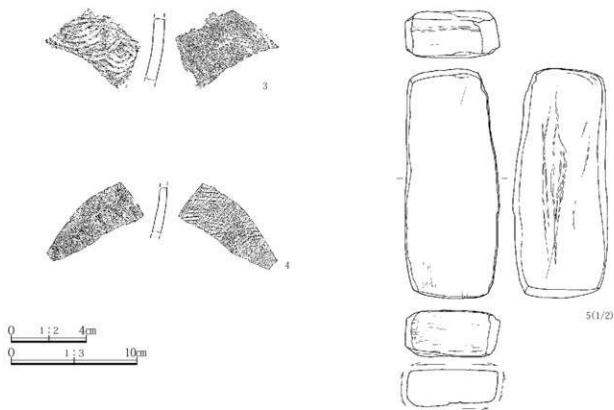
- 1 黒褐色土：焼土粒を微量含む。
- 2 暗褐色土：焼土粒と焼土ブロックを少量、炭化粒を僅かに含む。
- 3 黒褐色土：土質はほぼ均一で、僅かに焼土粒を含む。
- 4 棕色土：焼土主体で黒褐色土を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第414図 3区17号形穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物(1)



第415図 3区17号竪穴建物 出土遺物(2)

(3)土坑

本調査区で検出された古代の土坑は、第2面調査において調査区全体から検出された。その数は16基である。なお、本項では古墳時代に含まれる可能性の土坑も合わせて記述する。なお、形状分類については、円形および方形を除く長方形から長楕円形の土坑に対し、次の基準で類別した。A類：2.0m以下の短い類、B類：2.0～5.0mのやや長い類、C類：5.0～10.0mの長い類、D類：10.0mを超える極端に長い類。

以下、各土坑ごとに記載する。(第21表 3区土坑一覧を参照)

3区98号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、東側に3区99号土坑が近接し、北東側に土坑が集中する。

グリッド：2A-98

座標値：X=61,132～61,134 Y=-93,485～93,486

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.16m 短軸1.14m 深さ29cm

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区99号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、北側に3区101号土坑、東側に3区100号土坑、西側に3区98号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2A-97

座標値：X=61,132・61,133 Y=-93,483・93,484

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.97m 短軸0.85m 深さ17cm

長軸方向：N-68°-E

埋没土：1層の黒褐色土、2層の暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3K100号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、西側に3区99号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2A-97

座標値：X=61,132・61,133 Y=-93,481・93,482

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.99m 短軸0.87m 深さ15cm

長軸方向：N-30°-E

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3K101号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、北側に3区102・103号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2A・2B-97

座標値：X=61,134・61,135 Y=-93,481・93,482

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物には、未掲載遺物に土師器、細片がある。

形状：円形

規模：長軸1.21m 短軸1.04m 深さ44cm

長軸方向：N-50°-W

埋没土：黒褐色土を埋土とする。礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

所見・時期：出土遺物が少なく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3K102号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、北東側に3区103号土坑、南側に3区101号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2A・2B-97・98

座標値：X=61,135・61,136 Y=-93,484・93,485

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.95m 短軸0.81m 深さ7cm

長軸方向：N-48°-W

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3K103号土坑 (第416図、第21表、PL.118)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、北東側に3区104号土坑、南西側に3区102号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2B-97

座標値：X=61,136・61,137 Y=-93,482・93,483

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。底面には礫が露出する。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.14m 短軸1.12m 深さ36cm

長軸方向：N-80°-W

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3K104号土坑 (第416図、第21表、PL.119)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、北側に3区106号土坑、北東側に3区105号土坑、南側に3区103号土坑が近接し、土坑が集中する中にある。

グリッド：2B-97

座標値：X=61,137・61,138 Y=-93,481・93,482

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.19m 短軸1.14m 深さ30cm

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区105号土坑 (第416図、第21表、PL.119)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、南西側に3区104号土坑、西側に3区106号土坑が近接し、土坑が集まる中にある。

グリッド：2B-97

座標値：X=61,138・61,139 Y=-93,480・93,481

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.99m 短軸0.91m 深さ18cm

長軸方向：N-67°-E

埋没土：1層の黒褐色土、2層の暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区106号土坑 (第416図、第21表)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央北寄りに位置し、東側に3区105号土坑、南側に3区103・104号土坑が近接し、土坑が集まる中にある。

グリッド：2B-97

座標値：X=61,138・61,139 Y=-93,482・93,483

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物には、未掲載遺物に土師器、細片がある。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.73m 短軸(0.84)m 深さ28cm

長軸方向：N-75°-E

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

所見・時期：出土遺物が少なく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区107号土坑 (第417図、第21表、PL.119)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北壁際に位置し、南東側の土坑の集中箇所からやや離れている。

グリッド：2B・2C-99

座標値：X=61,139・61,140 Y=-93,491・93,492

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.10m 短軸1.06m 深さ44cm

長軸方向：N-54°-W

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。礫を多く含むことから、人為的埋没と考えられる。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区108号土坑 (第417図、第21表、PL.119)

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区のほぼ中央に位置し、北東側の土坑の集中箇所からやや離れている。また、南側に3区2・7号竪穴建物が近接する。

グリッド：Z-98・99

座標値：X=61,127・61,128 Y=-93,489・93,490

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.39m 短軸1.04m 深さ28cm

長軸方向：N-77°-E

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区109号土坑 (第21表、PL.119)

平成28年度の調査で検出した。3区16号溝と重複する。

位置：3-B区中央の東側に位置し、古墳時代から古代の集落域の東端にあたる。

グリッド：Y-94

座標値：X=61,121・61,122 Y=-93,466・93,467

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に、3区16号溝内に重複して検出された。その新旧は、土層確認から本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.95m 短軸0.83m 深さ33cm

長軸方向：N-62°-W

埋没土：1・2層の黒褐色土を埋土とする。

第4章 検出された遺構と遺物

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区111号土坑（第21表、PL.119）

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央北側の北壁付近に位置する。

グリッド：2A-100・101

座標値：X=61,133・61,134 Y=-93,499・93,500

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.79m 短軸0.57m 深さ20cm

長軸方向：N-33°-W

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区112号土坑（第417図、第21表、PL.119）

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央南側に位置し、北側に3区4・11号竪穴建物が近接する。

グリッド：W-99

座標値：X=61,112・61,113 Y=-93,491・93,492

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.16m 短軸1.01m 深さ36cm

長軸方向：N-83°-W

埋没土：1層の黒褐色土、2層の暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区113号土坑（第417図、第21表、PL.119）

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南西側に位置し、東側に3区10・11号竪穴建物、北西側に3区9号竪穴建物、南西側に3区114号土坑がある。

グリッド：X-101

座標値：X=61,115・61,116 Y=-93,502・93,503

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.34m 短軸0.91m 深さ18cm

長軸方向：N-57°-E

埋没土：1層の黒褐色土、2層の灰黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区114号土坑（第417図、第21表、PL.119）

平成28年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南西側に位置し、北側に3区9号竪穴建物、北東側に3区113号土坑がある。

グリッド：W-102

座標値：X=61,113・61,114 Y=-93,506・93,507

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

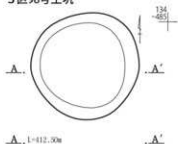
規模：長軸1.39m 短軸0.83m 深さ18cm

長軸方向：N-48°-W

埋没土：黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：出土遺物がなく不明な点もあるが、時期は古代と考えられる。

3区98号土坑



A., l=412.50m A'.

1 黒褐色土 小ローム粒を含む。

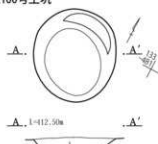
3区99号土坑



A., l=412.50m A'.

1 黒褐色土 小ローム粒を含む。
2 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

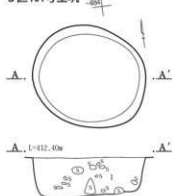
3区100号土坑



A., l=412.50m A'.

1 黒褐色土 小ローム粒を含む。

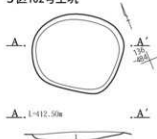
3区101号土坑



A., l=412.40m A'.

1 黒褐色土 礫を含む。やや粘性あり。

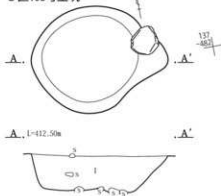
3区102号土坑



A., l=412.50m A'.

1 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

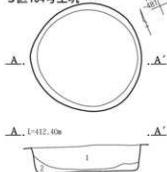
3区103号土坑



A., l=412.50m A'.

1 黒褐色土 ローム粒を僅かに含む。

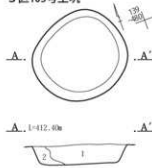
3区104号土坑



A., l=412.40m A'.

1 黒褐色土 ローム粒を含む。
2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

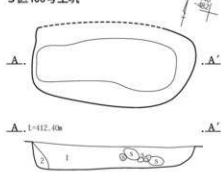
3区105号土坑



A., l=412.40m A'.

1 黒褐色土 ローム粒を含む。
2 暗褐色土 ローム粒を多く含む。

3区106号土坑



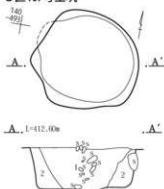
A., l=412.40m A'.

1 黒褐色土 ローム粒を含む。
2 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。

0 1:40 1m

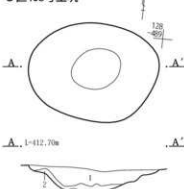
第416図 3区98～106号土坑 平・断面図

3区107号土坑



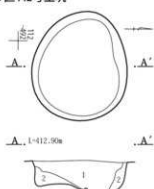
- 1 黒褐色土 礫を多く、ローム粒を含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を微量含む。

3区108号土坑



- 1 黒褐色土 ローム小粒含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。

3区112号土坑



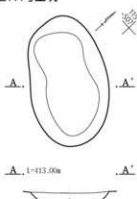
- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒・ブロックを少量含む。

3区113号土坑



- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 2 灰黄褐色土 1層とローム上との混土。

3区114号土坑



- 1 黒褐色土 ローム粒を微量含む。



第417図 3区107・108・112～114号土坑 平・断面図

(4) 遺物集中箇所

本調査区で検出された古代の遺物が集中する箇所が、平成28年度調査での第1面調査後に、第2面調査に至るまでの間に1箇所検出されている。(第418・419図、第22・189表、PL.120・253・254)

位置：3-B区西側の北壁付近に位置し、重複する3区16・23号竪穴建物と3区20号竪穴建物との間にある。

グリッド：2A-105

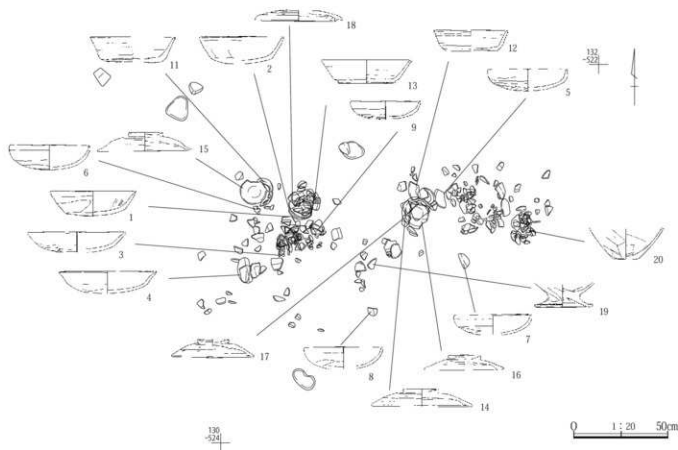
座標値：X=61,130・61,131 Y=93,5522~93,524

検出状況：3区の基本層序IV層上面での第1面調査終了後、VI層上面を遺構確認面とした第2面調査に至る間のIV層中位に検出された。3区16・20・23号竪穴建物の遺構確認面よりも高い面(標高413.47m)での検出である。遺物の集中の状態は、大きく東西2ブロックに分かれる。また、この集中箇所の周囲に掘り込みはな

く、掘立柱建物を想定する柱穴も確認されていない。依って、遺物のみが集中する遺構として扱った。

集中範囲：長軸1.39m 短軸0.83m 深さ18cm

遺物：出土した遺物はかなり多量である。東ブロックでは、最も集中する辺りに14・16・17の蓋、その脇に5や12の杯があり、ブロック中央の東側に20の甕が潰れて散乱していた。西ブロックでは、最も集中するブロック中央に6・9の杯、東ブロックと接合した3の杯があり、そのやや北寄りに正位で1・2の杯が入れ子状に重なって、さらに13の杯および18の蓋が出土している。ブロック中央の北側に正位で11の杯、その上に逆位で15の蓋が出土。ブロック中央の西側に4の杯、南側に8の杯や19の台付甕が散乱している。これら出土した遺物の器種をみると、杯と蓋が圧倒的に多く、甕類は少ない状況にある。また、出土状態のあり方から、



第418図 3区遺物集中箇所 平面図

11の杯と15の蓋はセットであると考えられる。

出土遺物として、土器20点を図示した。土師器の杯に1～10があり、1の内面にはへら磨きが施されている。11～13は須恵器の杯で、11の内面には「丈」の刻書がある。13は僅かな高台が付く。14～18は須恵器の杯蓋で、16・17の擴み部にはへら記号がある。19は土師器の台付甕で、20は土師器の甕。

未掲載遺物には、杯や蓋を主に土師器・須恵器片が多量にある。

所見・時期：遺物の出土状態のあり方や、遺物の器種が杯類や蓋が異常に多い状況から、直接地表面に置かれた祭祀等の行為の可能性が高い。その時期は、出土土器から8世紀前半と考えられる。

(5)溝

本調査区で検出された古代の溝は、第2面調査において3-B区に4条を検出した。

以下、各溝ごとに記載する。(第26表 3区溝一覧を参照)

3区16号溝

(第420～422図、第26・194表、PL.122・255)

平成26年度の調査で検出した。3区109号土坑と重複する。

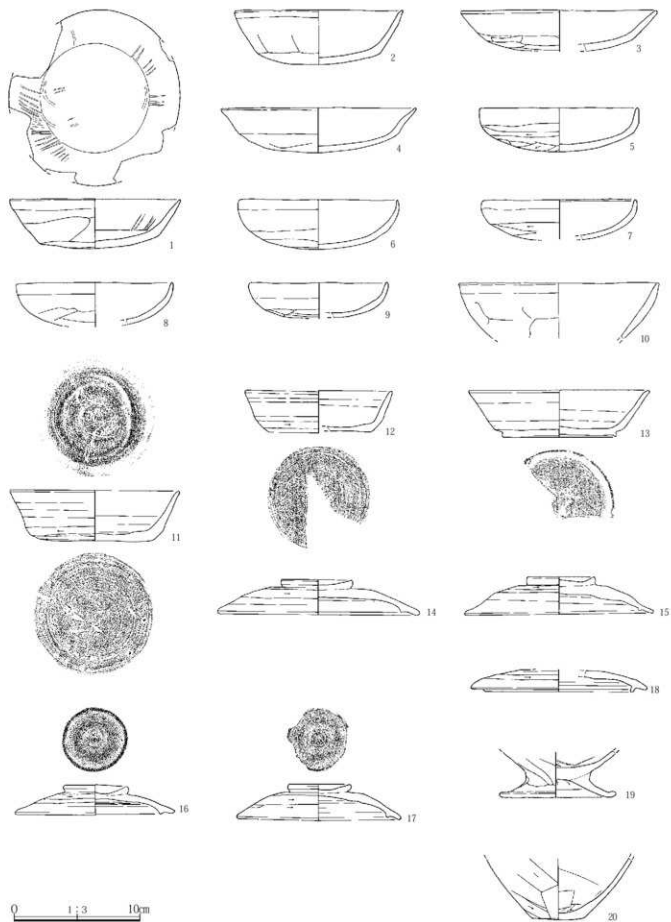
位置：3-B区中央の東側に位置し、古墳時代から古代の遺構群の東端にあたる。

グリッド：X-2 B-94-97

座標値：X=61,118～61,135 Y=93,465～93,481

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。溝形状は「つ」字状に大きく屈曲し、その両先端は不明。屈曲部付近が最も幅広く

第4章 検出された遺構と遺物



第419図 3区遺物集中箇所 出土遺物

く、底面には礫層が露出する。また、底面に3区109号土坑が検出され、その新旧は土層確認から本溝の方が新しい。遺物の出土は多い。なお、埋土の上位はAs-Kkを含む黒褐色土であるが、下位はAs-Kkを含まない黒褐色土や黒色土を主とすることから、古代から中世にいたって埋没した遺構と考えた。

規模：長軸29.6m 短軸4.9m 深さ32cm

延伸方向：N-1°-E 北に湾曲する

埋没土：上層となる2層はAs-Kkを含む黒褐色土で、3～5層はAs-Kkを含まない暗褐色土や黒褐色土、黒色土を主とする。

遺物：出土した遺物はかなり多くある。そのほとんどが、溝の屈曲部付近の底面近くからであり、埋没土4層内からの出土である。

出土遺物として、土器15点と石製品1点、金属製品1点を図示した。土器には古墳時代から古代までの土器がある。1・2は須恵器の杯、3・4は須恵器の椀、5は須恵器の長頸甕、6は土師器の甕、7は土師器の台付甕の台部である。さらに、須恵器の甕も多く出土している。8・9は口縁部片で、9の口縁部上半には沈線を巡らせ、その間に波状文を描く。10～15は胴部片で、外面に平行ないし斜格子状の叩き具痕、内面に当て具痕がみられる。

石製品には16の白玉があり、滑石製でにぶい黄褐色をなし、表裏面は平坦で、径0.8cm、厚さ0.4cm、孔径約3mm、重さ0.32gを測る。また、金属製品は17の鉄鏡がある。

未掲載遺物には、土師器や須恵器片がかなり多量にある。

所見・時期：溝の時期は、遺物の出土のありおおよび出土土器から古代の段階には存在した溝で、その下限は埋没土にAs-Kkを含むことから中世以降と考えられる。

3区17号溝（第423図、第26表）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の南壁付近に位置し、3区18号溝が北側に近接して併走する。

グリッド：U・V-105～107

座標値：X=61,100～61,106 Y=93,522～93,534

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。溝形状は東西走行から北側に大きく屈曲し、その両先端は不明。底面は北側ほど低くなる傾向で、浅く不明な点も多い。遺物等の出土はない。なお、埋土の下位がAs-Bの黄褐色火山灰であることから、古代の溝と考えた。

規模：長軸15.4m 短軸0.86m 深さ9cm

延伸方向：北に湾曲する

埋没土：上部にAs-Kkの一次堆積。下部にAs-Bの鈍い黄褐色火山灰。

所見・時期：遺物の出土もなく不明な点もあるが、埋没土から古代の溝と考えられる。

3区18号溝（第423図、第26表）

平成26年度の調査で検出した。3区19号溝と重複する。

位置：3-B区西側の南壁付近に位置し、3区17号溝が南側に近接して併走する。

グリッド：U・V-105～108

座標値：X=61,102～61,104 Y=93,523～93,535

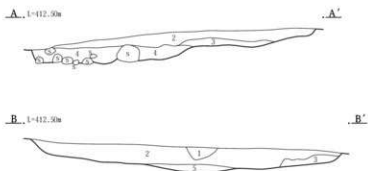
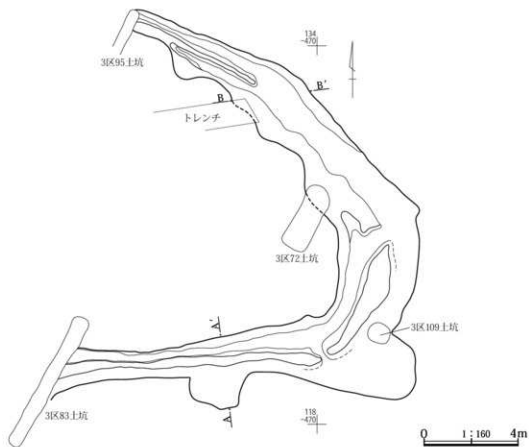
検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした第2面調査時に検出された。屈曲部辺りを3区19号溝と重複するが、その新旧は不明。溝形状は東西走行から北側に大きく屈曲し、その両先端は不明。底面は北側ほど低くなる傾向で、浅く不明な点も多い。遺物等の出土はない。

規模：長軸13.5m 短軸0.70m 深さ11cm

延伸方向：北に湾曲する

埋没土：上部にAs-Kkの一次堆積。下部にAs-Bの鈍い黄褐色火山灰。

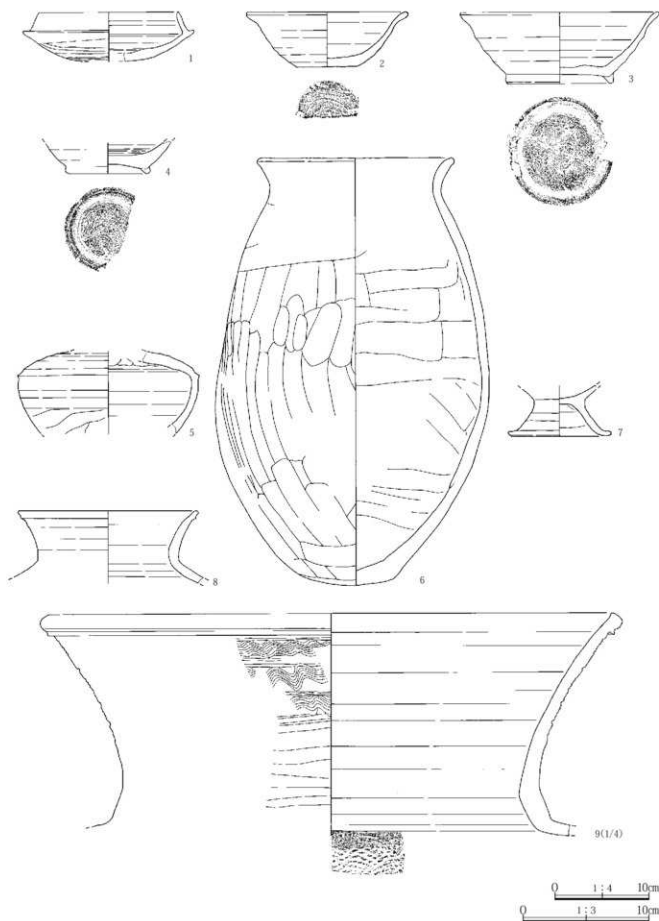
所見・時期：遺物の出土もなく不明な点もあるが、埋没土から古代の溝と考えられる。



- 1 黒褐色土 As-Kkを多く含む。
- 2 黒褐色土 As-Kkを含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
- 4 黒褐色土 粗砂、小礫を含む。
- 5 黒色土 砂粒、小礫を含む。

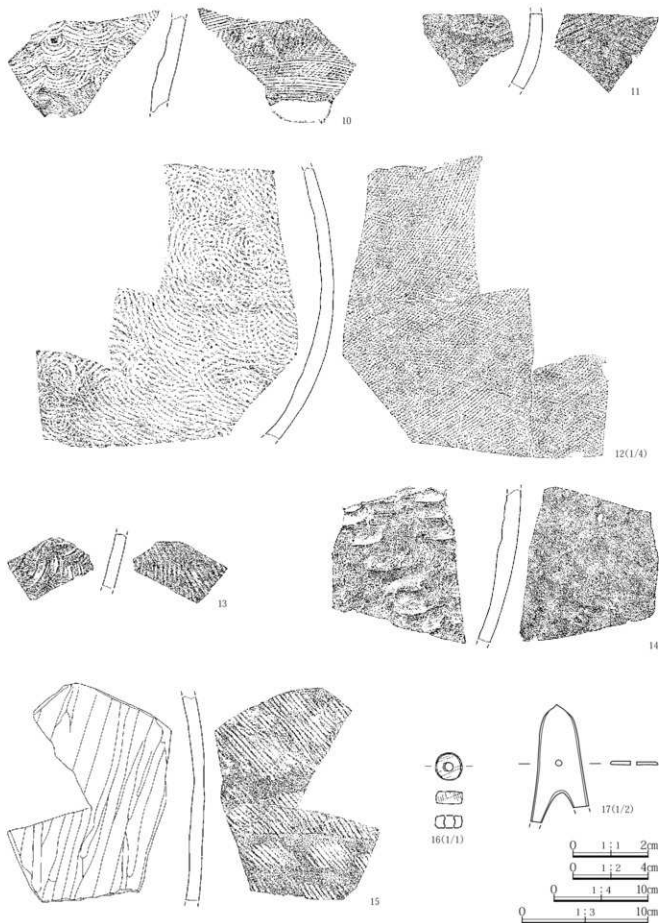


第420図 3区16号溝 平・断面図



第421図 3区16号溝 出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第422図 3区16号溝 出土遺物(2)

3区19号溝 (第423図、第26表)

平成26年度の調査で検出した。3区18号溝と重複する。

位置：3-B区西側の南壁付近に位置する。

グリッド：U~W-105・106

座標値：X=61,102~61,111 Y=-93,524~93,526

検出状況：3区の基本層序VI層上面を遺構確認面とした

第2面調査時に検出された。南側で3区18号溝と重複するが、その新旧は不明。南北方向に直線的に延びる

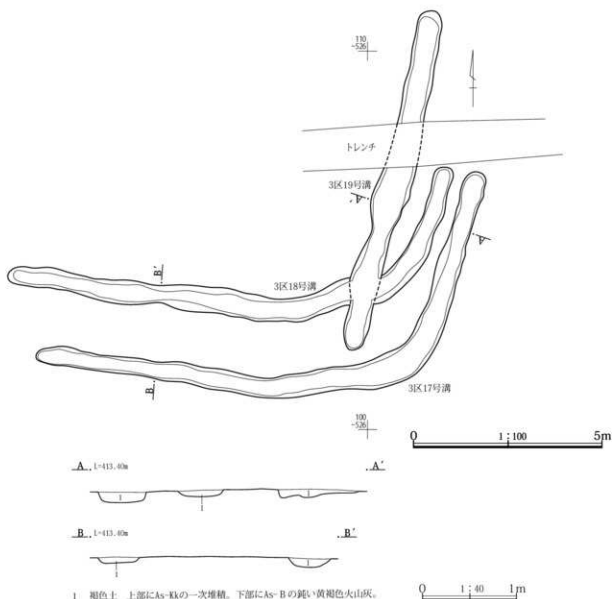
溝であるが、その両先端は不明。底面は北側ほど低くなり、浅く不明な点も多い。遺物等の出土はない。

規模：長軸9.15m 短軸0.95m 深さ14cm

延伸方向：N-14°-E

埋没土：上部にAs-Kkの一次堆積。下部にAs-Bの鈍い黄褐色火山灰。

所見・時期：遺物の出土もなく不明な点もあるが、埋没土から古代の溝と考えられる。



第423図 3区17~19号溝 平・断面図

第5項 中世以降の遺構と遺物

(1) 概要

本調査区で検出された中世以降の遺構は、土坑や溝、竪を主とし、調査区全体に広がる。基本層序とした3区IV層上面を確認面とした第1面調査で、土坑103基、井戸1基、ピット54基、溝14条、竪11区画、他に焼土遺構2基を検出した。これら各種遺構に共通する大きな特徴は、埋没土にAs-Kkが混入していることである。

(2) 土坑

検出された土坑は、調査区の西側となる3-A区から東側の4-E区に至る全域に広がり、計103基を数える。土坑には各種の形態・規模があり、その主な形態には円形、方形、長方形、楕円形、長楕円形等がある。これら各形態の中でも長方形、楕円形、長楕円形については、その規模(特に、長さ)により分類ができ、2.0m以下の短い類をA類、2.0～5.0mのやや長い類をB類、5.0～10.0mの長い類をC類、10.0mを超える極端に長い類をD類とした。

以下、各土坑ごとに記載する。(第21表 3区土坑一覧を参照)

3区1号土坑 (第424図、第21表、PL.113)

平成26年度の調査で検出した。3区1号竪と重複する。

位置：3-A区の中央北寄りに位置する。

グリッド：2B-112

座標値：X=61,137～61,139 Y=93,556～93,558

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。3区1号竪と直行するように重複するが、その新旧は不明。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.80m 短軸0.74m 深さ22cm

長軸方向：N-35°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区2号土坑 (第424図、第21表、PL.113)

平成26年度の調査で検出した。3区2号竪と重複する。

位置：3-B区西側の北西突出部に位置し、3区3号土坑が東側に隣接する。

グリッド：2A-110

座標値：X=61,133～61,135 Y=93,546・93,547

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。3区2号竪と直行するように重複するが、その新旧は不明。遺物には、土師器や須恵器の細片が多い。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.75m 短軸0.60m 深さ51cm

長軸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区3号土坑 (第424図、第21表、PL.113)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の北西突出部に位置し、3区2号土坑が西側に隣接する。

グリッド：2A-110

座標値：X=61,133・61,134 Y=93,545・93,546

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。3区2号竪と重複すると思われるが、詳細は不明。遺物には、須恵器の細片がある。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.11m 短軸0.90m 深さ44cm

長軸方向：N-47°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区4号土坑 (第424図、第21表、PL.113)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の北西突出部に位置し、南西側に3区3号土坑、南東側に3区11号土坑が近接する。

グリッド：2A・B-111

座標値：X=61,134・61,135 Y=93,544・93,545

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

面調査時に検出された。遺物には、土師器片が少量ある。

形状(分類): 楕円形(A類)

規模: 長軸1.06m 短軸0.91m 深さ25cm

長軸方向: N-52°-E

埋没土: As-Kkを含む黒褐色土や灰黄褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区5号土坑 (第424図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。3区9号土坑と重複する。

位置: 3-B区西側の北西突出部南壁際に位置し、西側に3区9号土坑が重複する。

グリッド: Z・2A-110

座標値: X=61,129・61,130 Y=93,545・93,546

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が新しい。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類): 不整形(A類)

規模: 長軸1.29m 短軸(0.42)m 深さ56cm

長軸方向: N-66°-W

埋没土: As-Kkを含む暗褐色土や黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区6号土坑 (第424図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の北西部北壁際に位置し、南西側に3区11号土坑、東側に3区15号土坑が近接する。

グリッド: 2A・2B-108・109

座標値: X=61,133~61,137 Y=93,540・93,541

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類): 長楕円形(A類)

規模: 長軸3.67m 短軸0.60m 深さ22cm

長軸方向: N-11°-W

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区7号土坑 (第425図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の西壁中央付近に位置し、南西側に3区10号土坑が近接する。

グリッド: X-109

座標値: X=61,117・61,118 Y=93,542~93,544

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が僅かにある。

形状(分類): 長楕円形(B類)

規模: 長軸2.02m 短軸0.60m 深さ62cm

長軸方向: N-71°-W

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区8号土坑 (第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の中央西寄りに位置し、西側に3区7・10号土坑が近接する。

グリッド: X-109

座標値: X=61,115・61,116 Y=93,540

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が1点ある。

形状(分類): 楕円形(B類)

規模: 長軸0.73m 短軸0.36m 深さ10cm

長軸方向: N-74°-W

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区9号土坑 (第424図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。3区5号土坑と重複する。

位置: 3-B区西側の北西突出部南壁際に位置し、東側に3区5号土坑が重複する。

グリッド: Z・2A-110

座標値: X=61,129・61,130 Y=93,545~93,547

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

第4章 検出された遺構と遺物

面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類): 楕円形(A類)

規模: 長軸0.75m 短軸0.36m 深さ25cm

長軸方向: N-74°-W

埋没土: As-Kkを含む灰黄褐色土や黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区10号土坑 (第425図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の西壁際に位置し、北東側に3区7号土坑が近接する。

グリッド: X-109・110

座標値: X=61,116・61,117 Y=93,544・93,545

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器や須恵器の細片が僅かにある。

形状(分類): 長方形(A類)

規模: 長軸(0.56)m 短軸0.48m 深さ28cm

長軸方向: N-60°-W

埋没土: As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区11号土坑 (第425図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。3区2号畠と重複する。

位置: 3-B区西側の北西突出部に位置し、西側に3区3号土坑、北東側に3区6号土坑が近接する。

グリッド: 2 A-109

座標値: X=61,132~61,134 Y=93,542~93,544

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類): 楕円形(B類)

規模: 長軸2.12m 短軸0.83m 深さ62cm

長軸方向: N-32°-E

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区12号土坑 (第425図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。3区2号溝と重複する。

位置: 3-B区西側中央の北東寄りに位置し、土坑の東側を3区2号溝と重複する。

グリッド: 2 A-102

座標値: X=61,131~61,133 Y=93,507~93,509

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類): 楕円形(A類)

規模: 長軸1.49m 短軸1.20m 深さ37cm

長軸方向: N-73°-W

埋没土: As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区13号土坑 (第425図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。3区19号竪穴建物と重複する。

位置: 3-B区西側の西壁際に位置し、北側に3区10号土坑がある。

グリッド: W-110

座標値: X=61,110~61,114 Y=93,545・93,546

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が新しい。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類): 長方形(B類)

規模: 長軸3.76m 短軸(0.38)m 深さ55cm

長軸方向: N-13°-E

埋没土: As-Kkを含む暗褐色土や黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区14号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側中央のやや北寄りに位置し、南側に3区3号溝が東西方向に延びる。

グリッド: Z・2 A-106

座標値: X=61,128~61,130 Y=93,525・93,526

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類): 長楕円形(A類)

規模: 長軸1.98m 短軸0.47m 深さ13cm

長軸方向: N-37°-E

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区15号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の北西部北壁際に位置し、西側に3区6号土坑が近接する。

グリッド: 2A・2B-108

座標値: X=61,134~61,156 Y=93,536・93,537

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類): 長方形(A類)

規模: 長軸(1.59)m 短軸0.61m 深さ76cm

長軸方向: N-12°-W

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区16号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側中央の東寄りに位置し、土坑の南側を試掘トレンチで壊される。

グリッド: Z-103

座標値: X=61,126・61,127 Y=93,514

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類): 長方形(A類)

規模: 長軸(0.73)m 短軸0.58m 深さ15cm

長軸方向: N-19°-E

埋没土: As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区17号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の北壁際に位置する。

グリッド: 2A-103・104

座標値: X=61,133~61,135 Y=93,512~93,515

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類): 不整形楕円形(B類)

規模: 長軸2.75m 短軸(0.82)m 深さ45cm

長軸方向: N-89°-E

埋没土: As-Kkを含む黒色土や黒褐色土等を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区19号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区西側の北壁際に位置する。

グリッド: 2B-106・107

座標値: X=61,135 Y=93,530

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類): 不整形(A類)

規模: 長軸0.85m 短軸(0.37)m 深さ26cm

長軸方向: N-83°-W

埋没土: 1層のAs-Kkを含む暗褐色土、下層の赤褐色土と黒褐色土を埋土とする。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区20号土坑 (第426図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置: 3-B区東側の中央付近に位置し、南側に3区54号土坑や3区11号畠、北西側に3区26号土坑が近接する。

グリッド: Y-86・87

座標値: X=61,120~1,123 Y=93,429~93,434

検出状況: 3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が僅かにある。

第4章 検出された遺構と遺物

形状(分類):長楕円形(C類)

規模:長軸5.30m 短軸0.51m 深さ69cm

長軸方向:N-64°-W

埋没土:As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期:検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区21号土坑 (第427図、第21表、PL.114)

平成26年度の調査で検出した。

位置:3-B区東側中央のやや東寄りに位置し、南東側に3区5号畠が近接する。

グリッド:Y・Z-85・86

座標値:X=61,122~61,125 Y=-93,420~93,425

検出状況:3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類):長楕円形(C類)

規模:長軸5.37m 短軸0.60m 深さ65cm

長軸方向:N-58°-W

埋没土:As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期:検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区22号土坑 (第427図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区5号畠と重複する。

位置:3-B区東側中央の東寄りに位置し、3区5号畠の区画内にあり、南東側に3区23号土坑が近接する。

グリッド:Y-83・84

座標値:X=61,121~61,123 Y=-93,413~93,417

検出状況:3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類):長楕円形(B類)

規模:長軸4.40m 短軸0.51m 深さ70cm

長軸方向:N-63°-W

埋没土:As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期:検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区23号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区24号土坑、3区5号畠と重複する。

位置:3-B区東側中央の東寄りに位置し、3区5号畠の区画内にあり、北西側に3区22号土坑が近接する。また、南東側に3区24号土坑が重複する。

グリッド:X・Y-83

座標値:X=61,119~61,121 Y=-93,410~93,413

検出状況:3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複する各遺構との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類):長楕円形(B類)

規模:長軸(3.51)m 短軸0.40m 深さ85cm

長軸方向:N-55°-W

埋没土:As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期:検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区24号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区23号土坑と重複する。

位置:3-B区東側中央の東寄りに位置し、3区5号畠の区画内にあり、北西側に3区23号土坑が重複する。

グリッド:X-82・83

座標値:X=61,118・61,119 Y=-93,408~93,410

検出状況:3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類):長楕円形(A類)

規模:長軸1.82m 短軸0.51m 深さ67cm

長軸方向:N-63°-W

埋没土:As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期:検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区25号土坑 (第427図、第21表)

平成26年度の調査で検出した。

位置:3-B区東側中央の北東寄りに位置し、東側に3区65・66号土坑が近接する。

グリッド:2A-85

座標値：X=61,130・61,131 Y=-93,423・93,424

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：正方形

規模：長軸0.86m 短軸0.81m 深さ60cm

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区26号土坑（第427図、第21表）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の中央付近に位置し、南東側に3区20号土坑、西側に3区6号溝が近接する。

グリッド：Y・Z-87・88

座標値：X=61,123~61,125 Y=-93,433~93,437

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸4.57m 短軸0.56m 深さ20cm

長軸方向：N-72°-W

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区27号土坑（第428図、第21表、PL.115）

平成26年度の調査で検出した。3区6号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央のやや北寄りに位置し、3区6号溝と重複する。

グリッド：Z-87・88

座標値：X=61,126~61,129 Y=-93,433~93,437

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、須恵器片が1点ある。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸5.46m 短軸0.39m 深さ54cm

長軸方向：N-62°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区28号土坑（第427図、第21表）

平成26年度の調査で検出した。3区29号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の北寄りに位置し、西側に同方向に延びる3区9号溝が続くようであり、3区29号土坑と重複する。

グリッド：Z・2A-87

座標値：X=61,129~61,131 Y=-93,430~93,432

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。なお、同方向に延びる西側の3区9号溝からの延長とも考えられる。

形状(分類)：不整形(B類)

規模：長軸2.33m 短軸0.33m 深さ37cm

長軸方向：N-63°-W

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期：3区9号溝の延長となる同一溝の可能性をもつ。検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区29号土坑（第427図、第21表）

平成26年度の調査で検出した。3区28号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の北寄りに位置し、3区28号土坑の東端に重複する。

グリッド：Z・2A-87

座標値：X=61,129・61,130 Y=-93,430・93,431

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.91m 短軸(0.48)m 深さ10cm

長軸方向：N-20°-W

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土等を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区30号土坑（第428図、第21表、PL.115）

平成26年度の調査で検出した。3区9号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央の北西寄りに位置し、西側に3

第4章 検出された遺構と遺物

区31・39号土坑と3区8号畝が近接する。また、3区9号溝とは直行するように重複する。

グリッド：2A-88

座標値：X=61,130~61,134 Y=-93,436~93,439

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸4.94m 短軸0.62m 深さ56cm

長軸方向：N-30°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土等を主とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区31号土坑 (第427図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区9号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央の北西寄りに位置し、北側に3区39号土坑、南側に3区8号畝が近接する。また、3区9号溝とは直行するように重複する。

グリッド：2A-88-89

座標値：X=61,132~61,134 Y=-93,438~93,440

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸(1.26)m 短軸1.06m 深さ12cm

長軸方向：N-22°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土等を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区32号土坑 (第428図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の北壁際に位置し、南東側に3区84号土坑、西側に3区35号土坑が近接する。

グリッド：2B-88

座標値：X=61,136・61,137 Y=-93,437・93,438

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(A類)

規模：長軸(1.42)m 短軸0.45m 深さ23cm

長軸方向：N-33°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区33号土坑 (第428図、第21表)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、土坑の南側を試掘トレンチで壊される。また、東側に3区39号土坑、西側に3区34号土坑が近接する。

グリッド：2B-89

座標値：X=61,135 Y=-93,441・93,442

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：不整形(A類)

規模：長軸0.82m 短軸(0.31)m 深さ33cm

長軸方向：N-89°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区34号土坑 (第428図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、土坑の南東側を試掘トレンチで壊される。また、東側に3区33号土坑、北側に3区42・43号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-89

座標値：X=61,134・61,135 Y=-93,442~93,444

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、須恵器片が1点ある。

形状(分類)：長楕円形(A類)

規模：長軸(1.53)m 短軸0.49m 深さ58cm

長軸方向：N-69°-W

埋没土：As-Kkを多量含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区35号土坑 (第428図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、北西側に3区36～38号土坑が近接する。

グリッド：2 B-89

座標値：X=61,136 Y=-93,440

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.65m 短軸0.51m 深さ44cm

長軸方向：N-24°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区36号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区37・38号土坑と重複する。

位置：3-B区東側の北壁際付近に位置し、土坑の北側を3区38号土坑、南側を3区37号土坑と重複する。また、南東側に3区35号土坑が近接する。

グリッド：2 B-89

座標値：X=61,137・61,138 Y=-93,440・93,441

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、いずれの土坑よりも本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.31m 短軸0.65m 深さ29cm

長軸方向：N-79°-W

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区37号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区36号土坑と重複する。

位置：3-B区東側の北壁際付近に位置し、土坑の北側を3区36号土坑と重複する。また、南東側に3区35号土坑が近接する。

グリッド：2 B-89

座標値：X=61,137・61,138 Y=-93,440・93,441

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.26m 短軸(0.89)m 深さ17cm

長軸方向：N-80°-W

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区38号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区36号土坑と重複する。

位置：3-B区東側の北壁際付近に位置し、土坑の南側を3区36号土坑と重複する。

グリッド：2 B-89

座標値：X=61,138 Y=-93,440・93,441

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸(0.63)m 短軸0.72m 深さ28cm

長軸方向：N-66°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区39号土坑 (第428図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。3区9号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央の北西寄りに位置し、土坑の南側を3区9号溝と重複する。また、南側に3区31号土坑が近接する。

グリッド：2 A-88・89

座標値：X=61,134 Y=-93,439・93,440

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器や須恵器の細片が僅かにある。

形状：方形

第4章 検出された遺構と遺物

規模：長軸0.96m 短軸(0.46)m 深さ6cm

長軸方向：N-69°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区40号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央のやや西寄りに位置し、西側に3区4・8号畠が近接する。

グリッド：Y・Z-89・90

座標値：X=61,124・61,125 Y=-93,444・93,445

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、須恵器片が1点ある。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.11m 短軸0.79m 深さ15cm

長軸方向：N-69°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区41号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、北壁付近にある。南側に3区42・43号土坑が近接する。

グリッド：2B-89

座標値：X=61,138 Y=-93,443・93,444

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：不整形(A類)

規模：長軸0.72m 短軸0.46m 深さ36cm

長軸方向：N-34°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区42号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、北側に3区41

号土坑、南側に3区43号土坑が近接する。

グリッド：2B-89

座標値：X=61,136・61,137 Y=-93,443・93,444

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.53m 短軸0.38m 深さ45cm

長軸方向：N-68°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区43号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西に位置し、北側に3区42号土坑、南側に3区34号土坑が近接する。

グリッド：2B-89

座標値：X=61,135・61,136 Y=-93,443・93,444

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.39m 短軸0.49m 深さ23cm

長軸方向：N-70°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区44号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西で、北壁際に位置し、東側に併走する3区68号土坑が近接する。

グリッド：2A~2C-90

座標値：X=61,133~61,141 Y=-93,446~93,449

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。かなり長い、溝状の土坑である。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸(7.58)m 短軸0.46m 深さ42cm

長軸方向：N-24°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土と黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区45号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の西側に位置し、3区4号畠と重複する。北側に3区2号焼土遺構が近接する。

グリッド：Z-90

座標値：X=61,128・61,129 Y=-93,446・93,447

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：正方形

規模：長軸0.58m 短軸0.56m 深さ13cm

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区46号土坑 (第429図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南寄りに位置し、北側に3区9号畠、南側に3区117号土坑が近接する。

グリッド：W-86・87

座標値：X=61,113・61,114 Y=-93,429~93,432

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.77m 短軸0.59m 深さ46cm

長軸方向：N-67°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区47号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南西側に位置し、西側に3区48号土坑が近接する。

グリッド：W-90

座標値：X=61,112・61,113 Y=-93,445・93,446

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.22m 短軸0.71m 深さ12cm

長軸方向：N-49°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区48号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南西側に位置し、東側に3区47号土坑、西側に3区49号土坑、北側に3区50号土坑が近接する。

グリッド：W-90

座標値：X=61,112・61,113 Y=-93,448・93,449

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.25m 短軸0.66m 深さ10cm

長軸方向：N-48°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区49号土坑 (第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南西側に位置し、東側に3区48号土坑が近接する。

グリッド：W-91

座標値：X=61,111・61,112 Y=-93,450・93,451

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.28m 短軸0.70m 深さ15cm

長軸方向：N-48°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区50号土坑 (第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

第4章 検出された遺構と遺物

位置：3-B区東側中央の南西側に位置し、南側に3区48号土坑が近接する。

グリッド：X-90

座標値：X=61,115・61,116 Y=-93,448・93,449

検出状況：3区の基本層IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸1.23m 短軸1.18m 深さ15cm

長軸方向：N-75°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区51号土坑（第429図、第21表、PL.116）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南側に位置し、東側に3区4号倉が隣接する。

グリッド：Z・2A-90・91

座標値：X=61,129・61,130 Y=-93,449・93,540

検出状況：3区の基本層IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土器の細片が1点ある。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.11m 短軸0.58m 深さ12cm

長軸方向：N-9°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区52号土坑（第21表、PL.116）

平成26年度の調査で検出した。3区53号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の北東側に位置し、東側に3区53号土坑と重複する。北側に3区110号土坑が近接する。

グリッド：Z-84

座標値：X=61,125 Y=-93,416

検出状況：3区の基本層IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：不整形(A類)

規模：長軸(0.47)m 短軸0.73m 深さ12cm

長軸方向：N-61°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区53号土坑（第429図、第21表、PL.116）

平成26年度の調査で検出した。3区52号土坑および3区5号倉と重複する。

位置：3-B区東側中央の北東側に位置し、西側に3区52号土坑、3区5号倉と重複する。北西側に3区110号土坑が近接する。

グリッド：Y・Z-83・84

座標値：X=61,124~61,126 Y=-93,414~93,416

検出状況：3区の基本層IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.98m 短軸0.79m 深さ42cm

長軸方向：N-44°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区54号土坑（第430図、第21表、PL.116）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の中央付近に位置し、東側の3区9号倉と西側の3区11号倉との間にあり、北側に3区20号土坑が近接する。

グリッド：X・Y-86・87

座標値：X=61,119・61,120 Y=-93,429~93,431

検出状況：3区の基本層IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.29m 短軸0.90m 深さ12cm

長軸方向：N-26°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区55号土坑 (第430図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。3区118号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の西側に位置し、北側に3区118号土坑と重複する。東側に3区4号冪が近接する。

グリッド：Y・Z-91

座標値：X=61,124・61,125 Y=93,450・93,451

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸(1.47)m 短軸0.66m 深さ30cm

長軸方向：N-45°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区56号土坑 (第430図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西側に位置し、北東側に同方向の3区57号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-91・92

座標値：X=61,132~61,136 Y=93,453~93,455

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸4.18m 短軸0.51m 深さ67cm

長軸方向：N-26°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区57号土坑 (第430図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西側に位置し、南西側に同方向の3区56号土坑、東側に3区44号土坑が近接する。

グリッド：2B・2C-91

座標値：X=61,136~61,140 Y=93,450・93,451

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.88m 短軸0.48m 深さ81cm

長軸方向：N-22°-E

埋没土：1層のAs-Kkを含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区58号土坑 (第430図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。3区76号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の西側に位置し、南側に3区76号土坑の東端と重複する。

グリッド：X・Y-92

座標値：X=61,117~61,122 Y=93,456~93,459

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸5.62m 短軸4.40m 深さ26m

長軸方向：N-30°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区59号土坑 (第431図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南東側に位置し、南壁付近にある。

グリッド：V・W-93・94

座標値：X=61,105~61,110 Y=93,464~93,467

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸5.31m 短軸0.46m 深さ60cm

長軸方向：N-27°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むこ

第4章 検出された遺構と遺物

とから、時期は中世以降と考えられる。

3区60号土坑 (第430図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。3区4号冪と重複する。位置：3-B区東側中央の西側に位置し、3区4号冪と交差するようにあり、南西側に3区55号土坑が近接する。

グリッド：Z-90

座標値：X=61,126・61,127 Y=93,448・93,449

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。未掲載遺物には、土師器の細片が1点ある。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.71m 短軸0.73m 深さ36cm

長軸方向：N-24°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土と暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区62号土坑 (第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南東側に位置し、北側に3区58号土坑が近接する。

グリッド：W・X-92

座標値：X=61,115 Y=93,459

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.38m 短軸0.60m 深さ16cm

長軸方向：N-18°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区63号土坑 (第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の東側に位置し、東側に3区58号土坑、南側に3区73・76号土坑が近接する。

グリッド：Y-92・93

座標値：X=61,120・61,121 Y=93,459・93,460

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.08m 短軸0.66m 深さ9cm

長軸方向：N-41°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区64号土坑 (第431図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央のやや北東寄りに位置し、北側に3区65号土坑、西側に3区75号土坑が近接する。

グリッド：Z-86

座標値：X=61,125・61,126 Y=93,427・93,428

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.23m 短軸0.43m 深さ8cm

長軸方向：N-2°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区65号土坑 (第431図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。3区66号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の北壁付近に位置し、北側に3区66号土坑と重複する。南側に3区64・75号土坑が近接する。

グリッド：Z・2A-86

座標値：X=61,127~61,131 Y=93,426~93,429

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が僅かある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸(3.77)m 短軸0.58m 深さ79cm

長軸方向：N-32°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ66号土坑 (第431図、第21表、PL.116)

平成26年度の調査で検出した。3区65号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の北壁際に位置し、南側に3区65号土坑と重複する。

グリッド：2A-86

座標値：X=61,131・61,132 Y=-93,425~93,427

検出状況：3区の基本層序Ⅳ層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(A類)

規模：長軸(1.75)m 短軸0.57m 深さ61cm

長軸方向：N-30°-E

埋没土：As-Kkと礫を多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ67号土坑 (第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北東側に位置し、東側に3区5号溝がある。

グリッド：Z-85

座標値：X=61,127・61,128 Y=-93,421・93,422

検出状況：3区の基本層序Ⅳ層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.80m 短軸0.67m 深さ11cm

長軸方向：N-24°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ68号土坑 (第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北西で、北壁際に位置し、西側に併走する3区44号土坑が近接する。

グリッド：2B・2C-89・90

座標値：X=61,137~61,140 Y=-93,444~93,446

検出状況：3区の基本層序Ⅳ層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸(3.11)m 短軸0.42m 深さ33cm

長軸方向：N-23°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ69号土坑 (第431図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北東側に位置し、東側に3区10号溝が近接する。

グリッド：2B・2C-92・93

座標値：X=61,139~61,142 Y=-93,455~93,460

検出状況：3区の基本層序Ⅳ層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸6.22m 短軸0.48m 深さ67cm

長軸方向：N-54°-W

埋没土：As-Kkと礫を多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ70号土坑 (第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北東側に位置し、東側に3区10号溝が近接する。

グリッド：2B-92

座標値：X=61,136・61,137 Y=-93,457・93,458

検出状況：3区の基本層序Ⅳ層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.91m 短軸0.29m 深さ21cm

長軸方向：N-43°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3Ⅹ71号土坑 (第431図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北東側に位置し、南西側に3区91

第4章 検出された遺構と遺物

号土坑が近接する。

グリッド：Z-92

座標値：X=61,137 Y=-93,464・93,465

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.20m 短軸0.32m 深さ13cm

長軸方向：N-88°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多く含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区72号土坑 (第432図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央のやや東側に位置する。

グリッド：Z-94・95

座標値：X=61,125~61,128 Y=-93,469~93,471

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.90m 短軸1.00m 深さ23cm

長軸方向：N-28°-E

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区73号土坑 (第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区76号土坑と重複する。

位置：3-B区中央の東側に位置し、3区76号土坑の中間に重複する。西側に3区13号溝が近接する。

グリッド：X-93

座標値：X=61,118・61,119 Y=-93,461・93,462

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.79m 短軸0.71m 深さ38cm

長軸方向：N-12°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区74号土坑 (第432図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南東側に位置し、南西側に3区87号土坑が近接する。

グリッド：V・W-94・95

座標値：X=61,108~61,112 Y=-93,469~93,471

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.91m 短軸0.49m 深さ60cm

長軸方向：N-30°-E

埋没土：As-Kkを多量を含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区75号土坑 (第21表)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の中央付近に位置し、北側に3区65号土坑が近接する。

グリッド：Z-86・87

座標値：X=61,126・61,127 Y=-93,429・93,430

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.89m 短軸0.76m 深さ5cm

長軸方向：N-37°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区76号土坑 (第432図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区58・73号土坑と重複する。

位置：3-B区中央の東側に位置し、本土坑の東端に3区58号土坑、中間に3区73号土坑、西側に3区13号溝が重複する。

グリッド：X-92-94

座標値：X=61,118・61,119 Y=-93,458~93,465

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、いずれも不明。上位に礫が多く出土した。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸7.37m 短軸0.40m 深さ39cm

長軸方向：N-82°-W

埋没土：As-Kkと礫を含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区77号土坑 (第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北壁際に位置する。

グリッド：2C-94

座標値：X=61,142~61,144 Y=-93,466~93,468

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸(2.21)m 短軸0.49m 深さ45cm

長軸方向：N-50°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区78号土坑 (第432図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区93号土坑と重複する。

位置：3-B区中央の南側に位置し、3区93号土坑と重複する。また、北側に3区94号土坑が隣接する。

グリッド：W-X-98・99

座標値：X=61,112~61,117 Y=-93,489~93,492

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸5.61m 短軸0.73m 深さ15cm

長軸方向：N-28°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区79号土坑 (第433図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区7号畠と重複する。

位置：3-B区中央の南寄りに位置し、北端を3区7号畠と重複する。また、西側に3区88号土坑が近接する。

グリッド：V-W-99

座標値：X=61,105~61,109 Y=-93,491~93,494

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸5.13m 短軸0.57m 深さ52cm

長軸方向：N-29°-E

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む黒褐色土、2層にAs-Kkを含まない灰黄褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区80号土坑 (第433図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区3号畠と重複する。

位置：3-B区中央の南側に位置し、3区3号畠と直行するように重複する。また、東側に3区88・92号土坑が近接する。

グリッド：V-W-100

座標値：X=61,107~61,111 Y=-93,495~93,497

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、須恵器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.96m 短軸0.52m 深さ43cm

長軸方向：N-26°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区81号土坑 (第433図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区82・83号土坑と重

第4章 検出された遺構と遺物

複する。

位置：3-B区の中央付近に位置し、本土坑の中央に3区82号土坑、西端に3区83号土坑が重複する。

グリッド：X-96・97

座標値：X=61,115~61,119 Y=-93,478~93,481

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、いずれも不明。

遺物には、土師器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸(4.96)m 短軸0.47m 深さ62cm

長軸方向：N-46°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区82号土坑 (第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区81号土坑と重複する。

位置：3-B区の中央付近に位置し、3区81号土坑の中央に重複する。

グリッド：X-97

座標値：X=61,117・61,118 Y=-93,479・93,480

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.11m 短軸0.91m 深さ51cm

長軸方向：N-37°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区83号土坑 (第434図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区81号土坑と重複する。

位置：3-B区の中央付近に位置し、3区81号土坑の西端に重複する。

グリッド：X・Y-96・97

座標値：X=61,117~61,122 Y=-93,479~93,483

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、

土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸6.16m 短軸0.55m 深さ71m

長軸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区84号土坑 (第433図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区1号焼土遺構と重複する。

位置：3-B区東側の北壁付近に位置し、3区1号焼土遺構の西側に重複する。

グリッド：2B-88

座標値：X=61,135・61,136 Y=-93,436・93,437

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.62m 短軸0.54m 深さ56m

長軸方向：N-80°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土と黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区85号土坑 (第433図、第21表、PL.117)

平成26年度の調査で検出した。3区3号畠と重複する。

位置：3-B区中央の南西側に位置し、3区3号畠の南西端に重複する。

グリッド：W-102

座標値：X=61,113・61,114 Y=-93,505~93,507

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.03m 短軸0.56m 深さ32cm

長軸方向：N-65°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K86号土坑 (第433図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南西側に位置し、西側に3区2号溝が近接する。

グリッド：W-103

座標値：X=61,112~61,114 Y=93,511・93,512

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物には、土師器の細片が1点ある。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.49m 短軸0.53m 深さ27cm

長軸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K87号土坑 (第434図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南側に位置し、北東側に3区74号土坑が近接する。

グリッド：V-95

座標値：X=61,107・61,108 Y=93,473・93,474

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.78m 短軸0.74m 深さ20cm

長軸方向：N-16°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K88号土坑 (第434図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南寄りに位置し、東側に3区79号土坑、北側に3区92号土坑が近接する。

グリッド：V・W-99

座標値：X=61,108~61,110 Y=93,492~93,494

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.69m 短軸0.99m 深さ22cm

長軸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K89号土坑 (第434図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北側に位置し、北側に3区90号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-98

座標値：X=61,134・61,135 Y=93,486~93,489

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.51m 短軸0.49m 深さ27cm

長軸方向：N-81°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K90号土坑 (第434図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北側に位置し、南側に3区89号土坑が近接する。

グリッド：2B-98

座標値：X=61,136・61,137 Y=93,485~93,488

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が1点ある。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸3.35m 短軸0.50m 深さ39cm

長軸方向：N-80°-W

埋没土：As-Kkを僅かに含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3K91号土坑 (第434図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の北東側に位置し、北東側に3区71

第4章 検出された遺構と遺物

号土坑が近接する。

グリッド：Y-92

座標値：X=61,135・61,136 Y=93,467・93,468

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.72m 短軸0.66m 深さ9cm

長軸方向：N-48°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区92号土坑（第435図、第21表、PL.118）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南寄りに位置し、東側の3区7号冪と西側の3区3号冪の間にあり、南側に3区88号土坑が近接する。

グリッド：W-99

座標値：X=61,110・61,111 Y=93,493・93,494

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状：正方形

規模：長軸0.89m 短軸0.84m 深さ61cm

埋没土：褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面であることから、時期は中世以降と考えられる。

3区93号土坑（第435図、第21表、PL.118）

平成26年度の調査で検出した。3区78号土坑と重複する。

位置：3-B区中央のやや南寄りに位置し、東側の3区7号冪と西側の3区3号冪の間にあり、3区78号土坑と重複する。

グリッド：W-99

座標値：X=61,113・61,114 Y=93,491

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状：正方形

規模：長軸0.66m 短軸0.64m 深さ90cm

埋没土：褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面であることから、時期は中世以降と考えられる。

3区94号土坑（第435図、第21表、PL.118）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区の中央付近に位置し、東側の3区7号冪と西側の3区3号冪の間にあり、南側に3区78号土坑が隣接する。

グリッド：X-98・99

座標値：X=61,117・61,118 Y=93,489・93,490

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物には、土師器の細片が僅かある。

形状：方形

規模：長軸0.96m 短軸0.92m 深さ81cm

埋没土：褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面であることから、時期は中世以降と考えられる。

3区95号土坑（第435図、第21表、PL.118）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央のやや北寄りに位置し、北側に3区96号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-96・97

座標値：X=61,130~61,135 Y=93,477~93,480

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸5.29m 短軸0.44m 深さ22cm

長軸方向：N-27°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区96号土坑（第21表、PL.118）

平成26年度の調査で検出した。3区11号溝と重複する。

位置：3-B区中央の北側に位置し、北端を3区11号溝と直行するように重複する。南側に3区95号土坑が隣接する。

グリッド：2B-96

座標値：X=61,135~61,137 Y=-93,476・93,477

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸(2.14)m 短軸0.43m 深さ18cm

長軸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区97号土坑 (第435図、第21表、PL.118)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の南東隅で、南壁際に位置し、北側に3区5号畠が隣接する。

グリッド：W-84

座標値：X=61,112 Y=-93,415・93,416

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸(0.58)m 短軸(0.41)m 深さ21cm

長軸方向：N-72°-W

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区110号土坑 (第21表、PL.119)

平成26年度の調査で検出した。3区5号畠と重複する。

位置：3-B区東側中央の北東側に位置し、3区5号畠の北側に重複する。南東側に3区52・53号土坑が近接する。

グリッド：Z-84

座標値：X=61,125・61,126 Y=-93,415~93,417

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.49m 短軸0.63m 深さ65cm

長軸方向：N-69°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区116号土坑 (第21表)

平成26年度の調査で検出した。調査時は3区4号溝として扱った。

位置：3-B区西側の中央付近に位置する。

グリッド：X-104~106

座標値：X=61,115 Y=-93,527~93,529

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.70m 短軸0.32m 深さ2cm

長軸方向：N-79°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区117号土坑 (第435図、第21表、PL.115)

平成26年度の調査で検出した。調査時は3区8号溝として扱った。

位置：3-B区東側中央の南寄りに位置し、北側に3区46号土坑が近接する。

グリッド：W・X-87・88

座標値：X=61,111~61,115 Y=-93,429~93,435

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸6.15m 短軸0.51m 深さ18cm

長軸方向：N-64°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区118号土坑 (第435図、第21表、PL.119)

平成26年度の調査で検出した。調査時は3区1号集石として扱った。

位置：3-B区東側中央の西側に位置し、南側に3区55号土坑と重複する。東側に3区4号畠が近接する。

第4章 検出された遺構と遺物

グリッド：Z-90・91

座標値：X=61,125・61,126 Y=-93,449~93,451

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。上位に中型礫が密集して出土している。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.54m 短軸1.86m 深さ28cm

長軸方向：N-36°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土と暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区119号土坑 (第21表)

平成30年度の調査で検出した。3区21号溝と重複する。

位置：3-E区の西壁際付近に位置し、西側に3区21号溝と重複する。東側に3区22号溝が近接する。

グリッド：Y-81

座標値：X=61,121 Y=-93,403・93,404

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸0.85m 短軸0.60m 深さ49cm

長軸方向：N-59°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区120号土坑 (第21表、PL.119)

平成30年度の調査で検出した。

位置：3-E区の中央付近に位置し、東側に3区121・122号土坑が近接する。

グリッド：X-80・81

座標値：X=61,115~61,117 Y=-93,399~93,401

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.50m 短軸0.55m 深さ60cm

長軸方向：N-68°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むこ

とから、時期は中世以降と考えられる。

3区121号土坑 (第21表、PL.119)

平成30年度の調査で検出した。

位置：3-E区の南壁際に位置し、西側に3区120号土坑、北側に3区122号土坑が近接する。

グリッド：X-80

座標値：X=61,115・61,116 Y=-93,396~93,398

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.30m 短軸0.60m 深さ52cm

長軸方向：N-68°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区122号土坑 (第21表、PL.119)

平成30年度の調査で検出した。

位置：3-E区の東側に位置し、西側に3区120・121号土坑が近接する。

グリッド：X-80

座標値：X=61,116・61,117 Y=-93,395~93,397

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

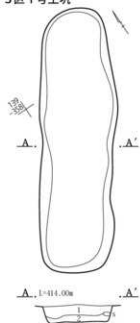
規模：長軸2.00m 短軸0.57m 深さ22cm

長軸方向：N-68°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

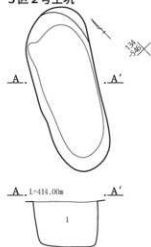
所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区1号土坑



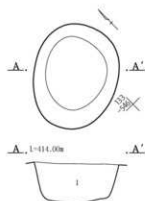
- 1 黒褐色土 As-Kkを多く含む。
2 黒褐色土 As-Kkを少量含む。

3区2号土坑



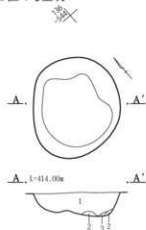
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区3号土坑



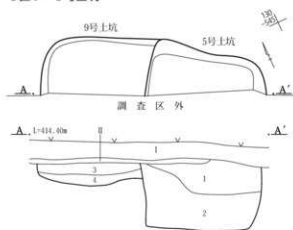
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区4号土坑



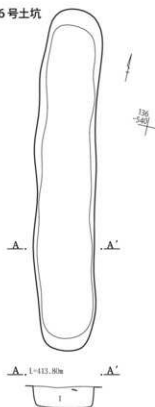
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 As-Kkを少量含む。
3 灰黄褐色土 As-Kkを多量含む。

3区9・5号土坑



- I 表上(現耕作上)
II 旧表上(旧耕作上)
1 暗褐色土 As-Kkを少量含む。(5号土坑)
2 黒褐色土 As-Kkを多量含む。(5号土坑)
3 灰黄褐色土 As-Kkを多量含む。(9号土坑)
4 黒褐色土 As-Kkを微量含む。(9号土坑)

3区6号土坑

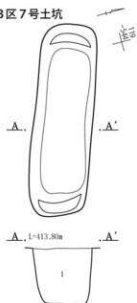


- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

0 1:40 1m

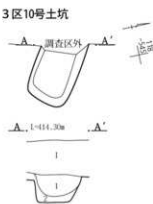
第424図 3区1～6・9号土坑 平・断面図

3区7号土坑



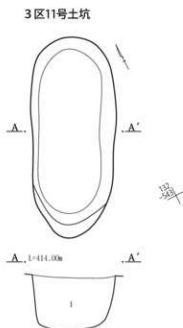
1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区10号土坑



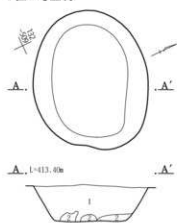
1 表土(現耕作土)
1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 As-Kkを含む。

3区11号土坑



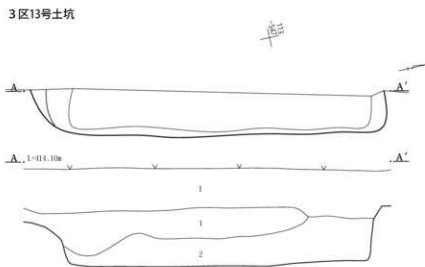
1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区12号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 締まり弱く、粘性あり。

3区13号土坑

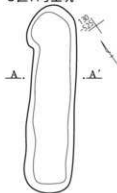


1 表土(現耕作土)
1 暗褐色土 As-Kkを少量含む。
2 黒褐色土 As-Kkを多量含む。



第425図 3区7・10～13号土坑 平・断面図

3区14号土坑

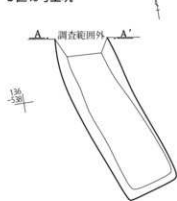


A., l=413.70m A'-A'



1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区15号土坑

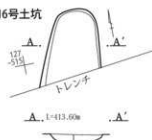


A., l=414.10m A'-A'



1 表土(現耕作土)
2 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区16号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区19号土坑

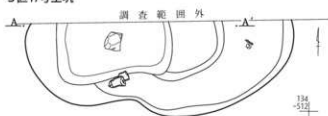


A., l=413.00m A'-A'

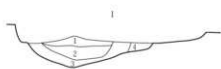


1 表土(現耕作土)
2 暗褐色土 As-Kkを含む。
3 赤褐色土 焼土層、灰が上部に溜まる。
4 黒褐色土 炭化物を含む粘質土。

3区17号土坑

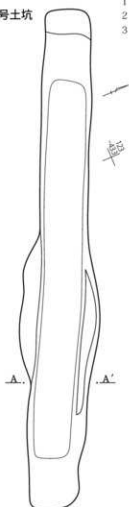


A., l=414.00m A'-A'



1 表土(現耕作土)
2 黒色土 As-Kkと炭化物、焼土を多く含む。
3 黒褐色土 As-Kkを少量、炭化物・焼土粒を僅かに含む。
4 褐灰色土 焼土粒を少量、炭化物を微量含む。
5 暗褐色土 As-Kkを僅かに含む。

3区20号土坑



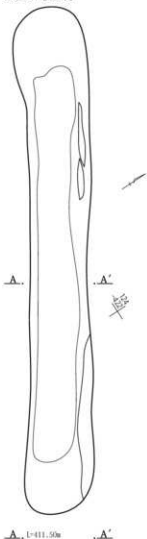
A., l=411.50m A'-A'

1 暗褐色土 As-Kkを含む。

0 1:40 1m

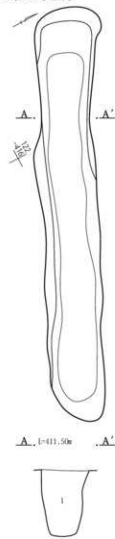
第426図 3区14～17・19・20号土坑 平・断面図

3区21号土坑



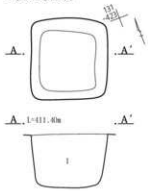
1 暗褐色土 As-Kkを含む。

3区22号土坑



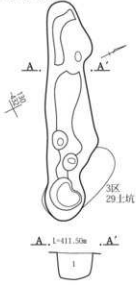
1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。

3区25号土坑



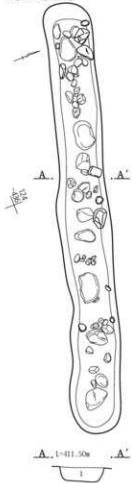
1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。

28号土坑



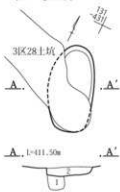
1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。

3区26号土坑



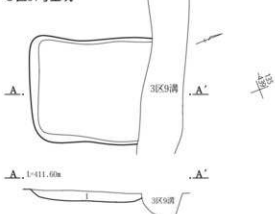
1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。

3区29号土坑



1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。(28土坑)
2 暗褐色土 1層より小粒なAs-Kkを含む。

3区31号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。



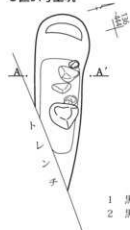
第427図 3区21・22・25・26・28・29・31号土坑 平面図

3区27号土坑



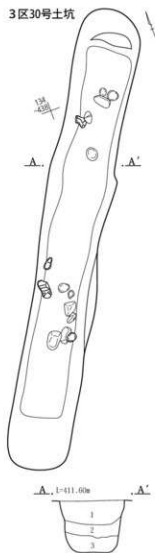
- 1 暗褐色土 As-Kk軽石粒を含む。

3区34号土坑



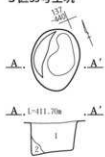
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 As-Kkを少量含む、やや粘質。

3区30号土坑



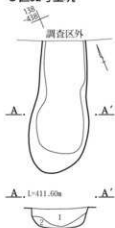
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量、As-Kkを微量含む粘質土。
3 黒褐色土 As-Kk、粘質土ブロックを少量含む。

3区35号土坑



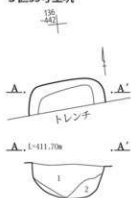
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 As-Kkを少量含む、やや粘質。

3区32号土坑



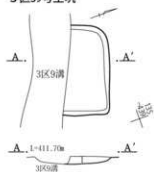
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む粘質土。

3区33号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む粘質土。

3区39号土坑

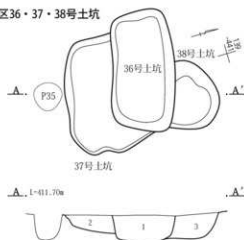


- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

0 1:40 1m

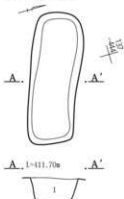
第4章 検出された遺構と遺物

3区36・37・38号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを少量、褐色土を僅かに含む。(36号土坑)
- 2 黒褐色土 As-Kkを少量含む。(37号土坑)
- 3 黒褐色土 As-Kkを多量含む。(38号土坑)

3区43号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区45号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区41号土坑



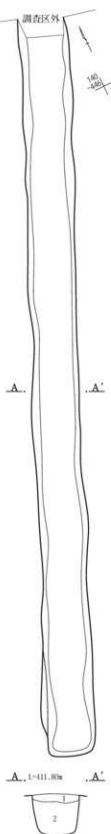
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区46号土坑



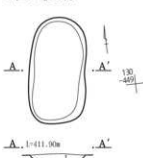
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。
- 2 黒褐色土 1層よりAs-Kk少ない。

3区44号土坑



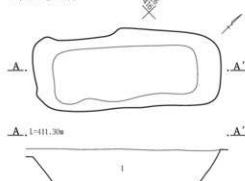
- 1 暗褐色土 褐色土ブロックを少量、As-Kkを微量含む。
- 2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量、As-Kkを微量含む粘質土。

3区51号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区53号土坑

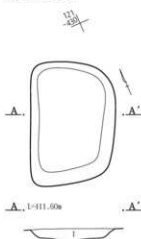


- 1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

0 1:40 1m

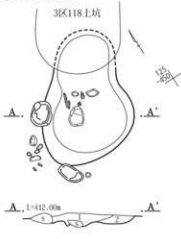
第29図 3区36～38・41・43～46・51・53号土坑 平面図

3区54号土坑



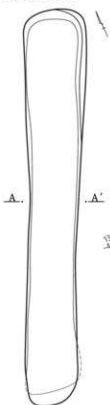
1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区55号土坑



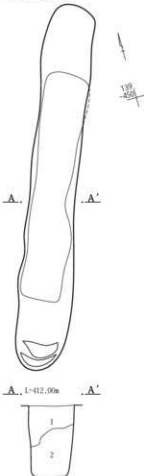
1 黒褐色土 As-Kk、焼土粒、炭化物を含む。
2 黒褐色土 焼土を少量、As-Kk軽石を含む。

3区56号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 暗褐色土 黒褐色土を含む粘質土。

3区57号土坑



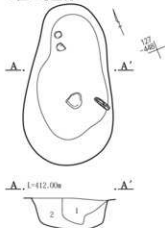
1 黒褐色土 As-Kkを少量含む。
2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。

3区58号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 暗褐色土 黒褐色土を含む粘質土。

3区60号土坑

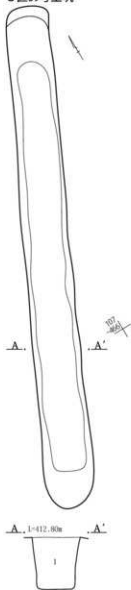


1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 暗褐色土 焼土とAs-Kkを含む。



第430図 3区54～58・60号土坑 平・断面図

3区59号土坑



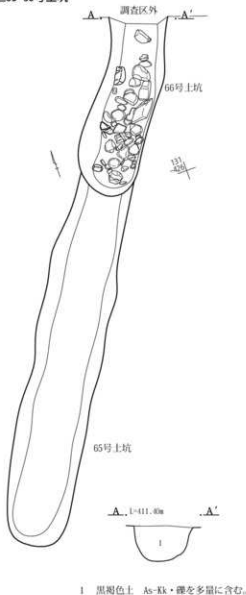
1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区64号土坑



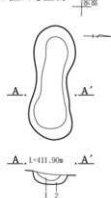
1 黒褐色土 As-Kkを多量含む。

3区65・66号土坑



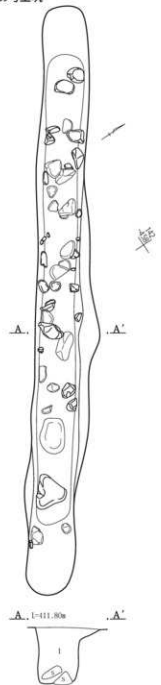
1 黒褐色土 As-Kk・礫を多量に含む。

3区71号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多く含む。
2 暗褐色土 粘質土。

3区69号土坑

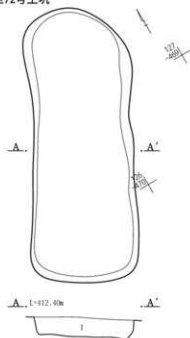


1 黒褐色土 As-Kk・礫を多量に含む。

0 1:40 1m

第431図 3区59・64~66・69・71号土坑 平・断面図

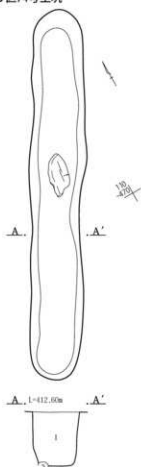
3区72号土坑



A. 1.012.40m

1 黒褐色土 As-珪を少量含む。

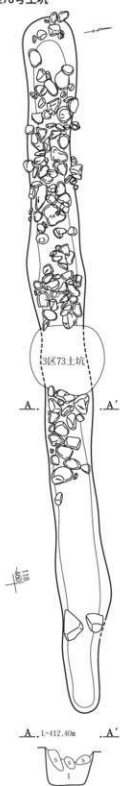
3区74号土坑



A. 1.012.60m

1 黒褐色土 As-珪を多量に含む。

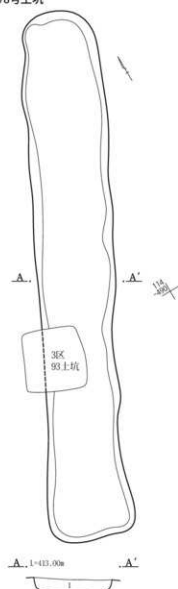
3区76号土坑



A. 1.012.40m

1 黒褐色土 As-珪を少量、礫を多量含む。

3区78号土坑



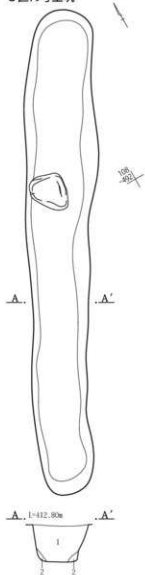
A. 1.013.00m

1 黒褐色土 As-珪を多量に含む。

0 1:40 1m

第432図 3区72・74・76・78号土坑 平・断面図

3区79号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 灰黄褐色土 ローム土を含む粘質土。

3区84号土坑



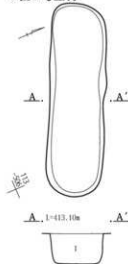
- 1 暗褐色土 As-Kkを含む粘質土。
2 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区80号土坑



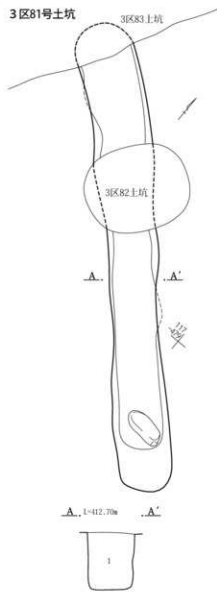
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区85号土坑



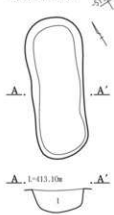
- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区81号土坑



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区86号土坑

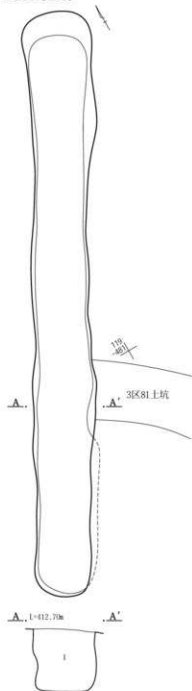


- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

0 1:40 1m

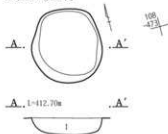
第433図 3区79～81・84～86号土坑 平・断面図

3区83号土坑



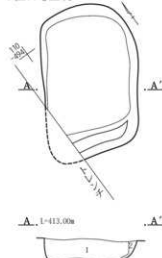
1 黒褐色土 As-Kkを多量、ローム小ブロック含む。

3区87号土坑



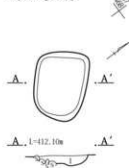
1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区88号土坑



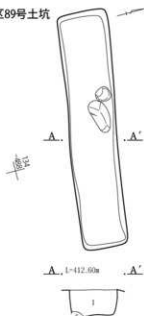
1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 黒褐色土 As-Kkを少量含む。粘性あり。

3区91号土坑



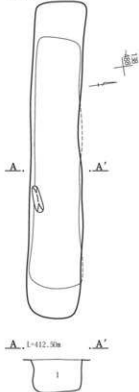
1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区89号土坑



1 黒褐色土 As-Kk、ロームブロックを僅かに含む。

3区90号土坑



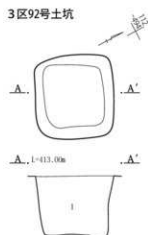
1 黒褐色土 ロームブロック、As-Kkを僅かに含む。

0 1:40 1m

第434図 3区83・87～91号土坑 平・断面図

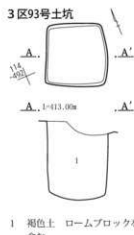
第4章 検出された遺構と遺物

3区92号土坑



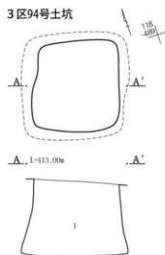
1 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

3区93号土坑



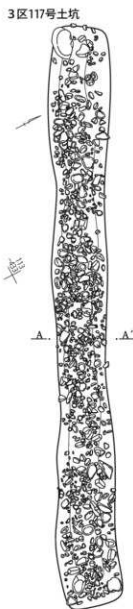
1 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

3区94号土坑



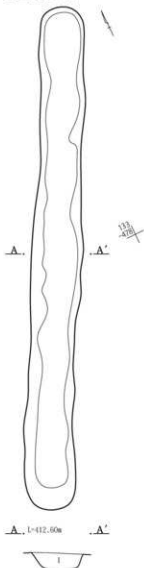
1 褐色土 ロームブロックを多量に含む。

3区117号土坑



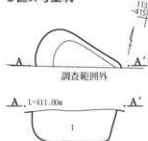
A, 1-411.60m A'

3区95号土坑



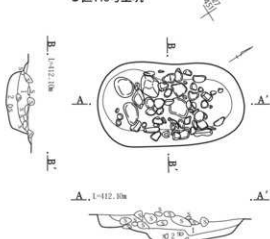
1 暗褐色土 As-Kkを少量、ロームブロックを含む。

3区97号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

3区118号土坑



1 黒褐色土 As-Kkを多量、炭化物を含む。
2 極暗褐色土 炭化物を多量、As-Kk・焼土を含む。

A, 1-411.60m A'

0 1:40 1m

第435図 3区92~95・97・117・118号土坑 平・断面図

(3) 井戸

検出された井戸は、3-B区の西端に1基検出している。

3区1号井戸 (第436図、第23・190表、PL.121・254)

位置：3-B区西側の西壁付近に位置する。

グリッド：W-109

座標値：X=61,111~61,114 Y=93,542~93,544

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。湧水がひどく、底面は確認できていない。断面形は、漏斗状を呈する。遺物には、図示した1の砥沢石製の砥石があり、他に土師器や須恵器の細片が多量にある。

形状：円形

規模：径2.20m 深さ60cm

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は中世以降と考えられる。

(4) ビット

検出されたビットは計54基を数える。3区全体に広がりを見せるが、3-B区東側に多く、他は極めて散漫に

分布する。これらビットの埋土は暗褐色土が圧倒的に多く、併せて軽石(As-Kk)を含む例がほとんどである。しかも、土師器の細片が僅かに混入する例があるものの、出土遺物で時期を決定できるビットはない。埋土からすれば、大方のビットが中世以降と考えられるため、ビットについては本項で扱うに至った。(第24表 3区ビット一覧を参照)

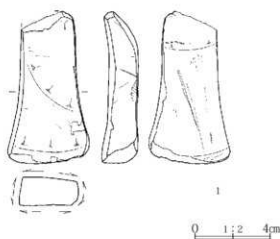
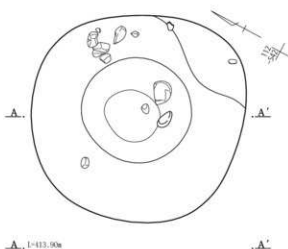
(5) 焼土遺構

焼土遺構とは、ある程度の広がりをもった浅い掘り込み内の底面が被熱により焼土化したもので、農作業を含めた火を用いた作業の結果の遺構と考えられる。検出された焼土遺構は、3-B区に2基検出された。いずれの埋没土もAs-Kkを含む暗褐色土である点は同じで、時間差の少ない間の遺構と考えられる。

以下、各遺構ごとに記載する。(第25表 3区焼土遺構一覧を参照)

3区1号焼土遺構 (第25表)

平成30年度の調査で検出した。3区84号土坑、3区6号溝と重複する。



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
2 黒褐色土 1層より暗く、As-Kkを多量に含む。



第436図 3区1号井戸 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

位置：3-B区東側の北壁際に位置し、遺構は北側の現道下に続く。

グリッド：2A・2B-87・88

座標値：X=61,133~61,138 Y=93,431~93,437

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は、3区84号土坑より本遺構の方が新しく、3区6号溝とは不明。底面の状態は、かなり凹凸が激しく、被熱による焼土化が極めて著しい。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量ある。

形状：不整形

規模：長軸13.38m 短軸(4.10)m 深さ40cm

長軸方向：N-70°-W

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は近世か。

3区2号焼土遺構 (第25表)

平成30年度の調査で検出した。3区4号畠と重複する。

位置：3-B区東側の北西に位置し、3区4号畠の中央から北側に重複する。

グリッド：Z~2B-89・90

座標値：X=61,129~61,135 Y=93,444~93,447

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明であるが、畠よりも新しい可能性もある。底面の状態は、かなり凹凸が激しく、被熱による焼土化が極めて著しい。遺物には、土師器や須恵器の細片が僅かある。

形状：不整形

規模：長軸12.85m 短軸1.93m 深さ47cm

長軸方向：N-23°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを含むことから、時期は近世か。

(6) 溝

検出された溝は計14条を数え、3区全体に広がりを見せる。3-B区中央の西寄りを南北方向に延びる大溝(3区2号溝)があり、その大溝と同方向に延びる溝、さらに大溝方向に直交するような東西方向に延びる溝があ

る。また、西側調査区となる2区から延びる溝も確認されている。

以下、各溝ごとに記載する。(第26表 3区溝一覧を参照)

3区2号溝 (第437図、第26・191表、PL.121・254)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の西寄りに位置し、東側に面して3区3号畠がある。本溝の途中から直行するように南東へ延びる3区15号溝、西からの3区3・20号溝が取り付くようにある。

グリッド：U~2B-101~105

座標値：X=61,102~61,135 Y=93,502~93,520

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。土層断面および底面形状から、本溝自体に新旧が存在するようであるが、詳細は不明。底面は南側が高く、緩い北勾配となり、一部に礫層が露出する。遺物には、図示した須恵器の杯蓋、土師器の甕、須恵器の甕の胴部片があり、他にも土師器や須恵器片が多量に出土している。

規模：長軸35.2m 短軸8.3m 深さ90cm

延伸方向：N-22°-E

埋没土：As-Kkを含む灰黄褐色土を主に、As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられ、長期に存在した可能性が高い。

3区3号溝 (第438図、第26・192表、PL.121・254)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の中央付近に位置し、南側に3区20号溝が近接して併走する。

グリッド：X~Z-103~109

座標値：X=61,119~61,127 Y=93,514・93,544

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。西側調査区での2区6号溝から続く溝で、併走する3区20号溝と共に東端が3区2号溝に達する。底面は西側が高く、緩い東勾配となる浅い溝である。遺物には、図示した須恵器の皿、須恵器の甕の胴部片があり、他にも土師器や須恵器片が多

量に出土している。

規模：長軸31.0m 短軸3.68m 深さ20cm

延伸方向：N-86°-E

埋没土：As-Kkを含む褐色土と黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区6号溝 (第438図、第26・193表、PL.121・254)

平成26年度の調査で検出した。3区27号土坑、3区1号焼土遺構、3区9号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央のやや北寄りに位置し、東西に走行する3区9号溝と直行するように交差する。

グリッド：Y-2 A-87-89

座標値：X=61,122-61,134 Y=93,433-93,440

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。浅い溝で、底面の高低差は北側ほど低くなる傾向。遺物には、図示した鉄製紡錘車の軸(端部)があり、他に土師器や須恵器片が少量出土している。

規模：長軸13.4m 短軸1.25m 深さ35cm

延伸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区7号溝 (第439図、第26表、PL.121)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の北寄りに位置し、3区6号溝の東側に併走するようである。

グリッド：Z・2 A-86・87

座標値：X=61,128-61,132 Y=93,428-93,430

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。浅い溝で、底面の高低差はほとんどない。遺物等の出土はない。

規模：長軸5.6m 短軸0.68m 深さ1cm

延伸方向：N-29°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区9号溝 (第439図、第26表、PL.122)

平成26年度の調査で検出した。3区30・31・39号土坑、3区6号溝と重複する。

位置：3-B区東側中央の北側に位置し、南北に走行する3区6号溝と交差する。また、南側には3区8号高が近接する。

グリッド：Z・2 A-86-89

座標値：X=61,129-61,134 Y=93,429-93,440

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。底面は凹凸をもち、高低差はほとんどない。遺物等の出土はない。

規模：長軸12.6m 短軸0.46m 深さ18cm

延伸方向：N-64°-W

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を主とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区10号溝 (第439図、第26表、PL.122)

平成26年度の調査で検出した。3区11号溝と重複する。

位置：3-B区中央の東寄りに位置し、3区2号溝と同様に調査区を横断する。また、溝の中間で3区11号溝と交差する。

グリッド：X-2 C-91-95

座標値：X=61,119-61,143 Y=93,452-93,469

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。底面の高低差は、北側がやや低くなる。遺物には、土師器や須恵器の小片が多量に出土している。

規模：長軸29.0m 短軸1.05m 深さ16cm

延伸方向：N-36°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。なお、南西側の延長方向には3区12号溝があり、同一溝の可能性をもつ。

3区11号溝 (第440図、第26表、PL.122)

平成26年度の調査で検出した。3区96号土坑、3区10号溝と重複する。

第4章 検出された遺構と遺物

位置：3-B区東側中央の北側に位置し、本溝の東側で南北に走行する3区10号溝と交差する。

グリッド：Y~2C-92~97

座標値：X=61,122~61,141 Y=93,459~93,484

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。底面の高低差は、西側がやや低い傾向となる。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量出土している。

規模：長軸35.9m 短軸0.5m 深さ32cm

延伸方向：N-1°-E 南西方向へ直角に曲がる

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区12号溝（第440図、第26表、PL.122）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南側に位置し、西側に3区14号溝が走行する。

グリッド：V~X-95・96

座標値：X=61,106~61,115 Y=93,471~93,476

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。浅い溝で、底面の高低差はほとんどない。遺物等の出土はない。

規模：長軸10.06m 短軸1.75m 深さ18cm

延伸方向：N-22°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。なお、北東側の延長方向には3区10号溝があり、同一溝の可能性をもつ。

3区13号溝（第439図、第26表、PL.122）

平成26年度の調査で検出した。3区76号土坑と重複する。

位置：3-B区東側中央の東側に位置し、3区11号溝が東側で直角に曲がった東部分と併行するようである。また、中間に3区76号土坑と交差する。

グリッド：X・Y-93・94

座標値：X=61,115~61,123 Y=93,461~93,465

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

面調査時に検出された。重複の新旧は不明。底面の高低差は、北側がやや低い。遺物には、土師器の細片が少量出土している。

規模：長軸8.7m 短軸0.46m 深さ11cm

延伸方向：N-26°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区14号溝（第440図、第26表、PL.122）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区中央の南側に位置し、東側に3区12号溝が走行する。

グリッド：V・W-95・96

座標値：X=61,105~61,111 Y=93,474~93,477

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。浅い溝で、底面の高低差はほとんどない。遺物等の出土はない。

規模：長軸6.4m 短軸0.6m 深さ8cm

延伸方向：N-19°-E

埋没土：As-Kkを多量に含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区15号溝（第440図、第26表、PL.122）

平成26年度の調査で検出した。3区3号畠と重複する。

位置：3-B区中央のやや東寄りに位置し、3区3号畠の中間に延伸方向がほぼ同じにある。

グリッド：X~Z-99~102

座標値：X=61,119~61,127 Y=93,489~93,505

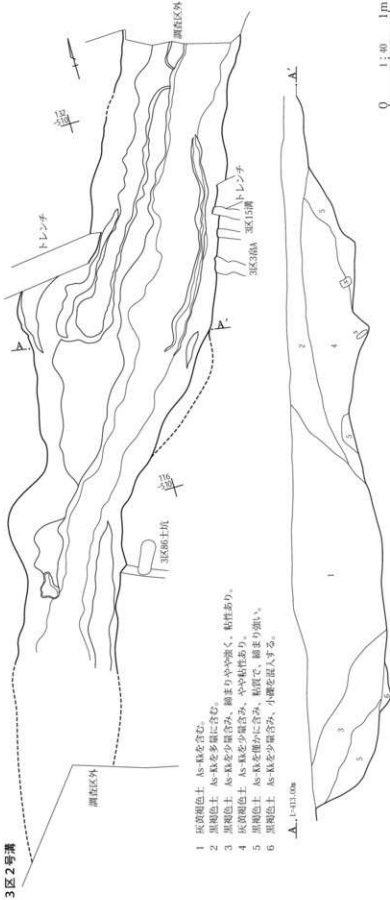
検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。西端が3区2号溝に達し、底面の高低差はほとんどない。遺物には、土師器の細片が少量出土している。

規模：長軸17.0m 短軸0.46m 深さ55cm

延伸方向：N-65°-W

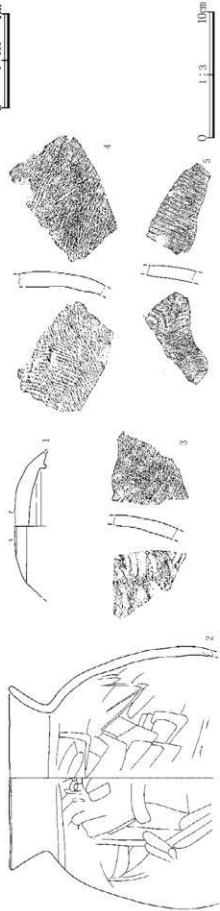
埋没土：As-Kkを含む黒褐色土と褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。



- 1 灰黄褐色土 As-粘を含む。
- 2 黒褐色土 As-粘を多量に含む。
- 3 黒褐色土 As-粘を少量含む、粘まりや強く、粘性あり。
- 4 灰黄褐色土 As-粘を少量含む、粘性あり。
- 5 黒褐色土 As-粘を僅かに含む、粘質で、粘まり強い。
- 6 黒褐色土 As-粘を少量含む、小礫を混入する。

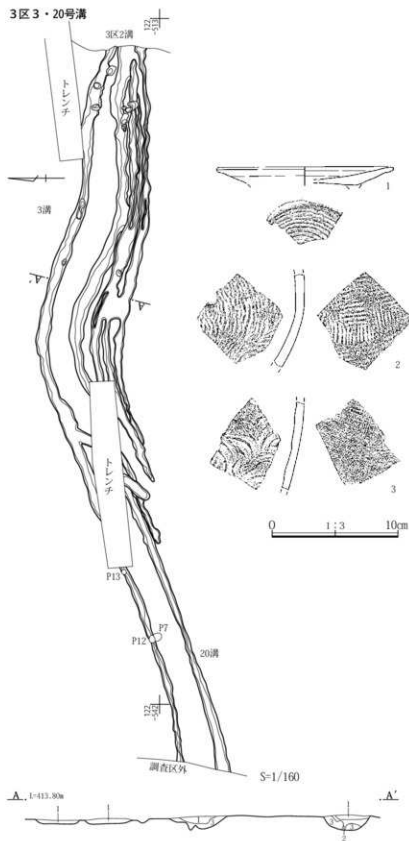
A. 1:413.00m



第437図 3区2号溝 平・断面図、出土遺物

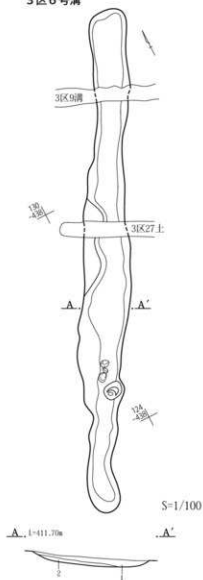
3区2号溝

3区3・20号溝

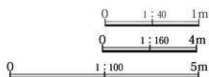
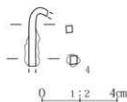


- 1 褐色土 As-Kkを多量に含む。
- 2 褐色土 As-Kkを少量含む。
- 3 黒褐色土 As-Kk、粗砂を含む。

3区6号溝

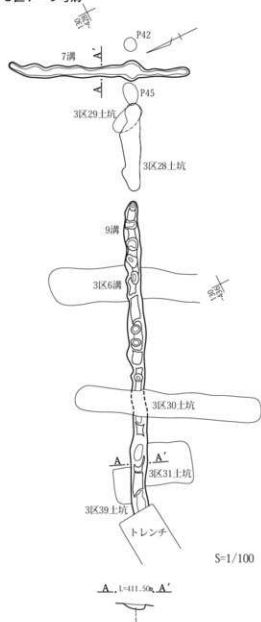


- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。
- 2 黒褐色土 As-Kkを僅かに含み、粘質。

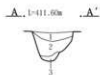


第438図 3区3・6・20号溝 平・断面図、出土遺物

3区7・9号溝



1 黒褐色土 As-Kkを少量、褐色ローム土を含む。

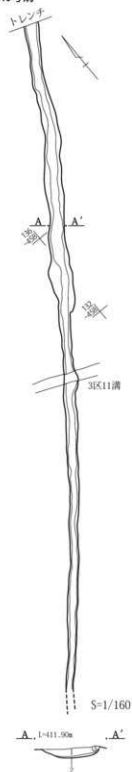


1 黒褐色土 As-Kkを少量、褐色ローム土を含む。

2 黒褐色土 As-Kkを少量含む。

3 黒褐色土 土質均一で粘質土。

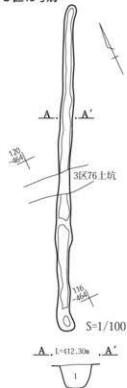
3区10号溝



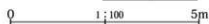
1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

2 黒褐色土 純い黄褐色ローム土を少量含む。

3区13号溝

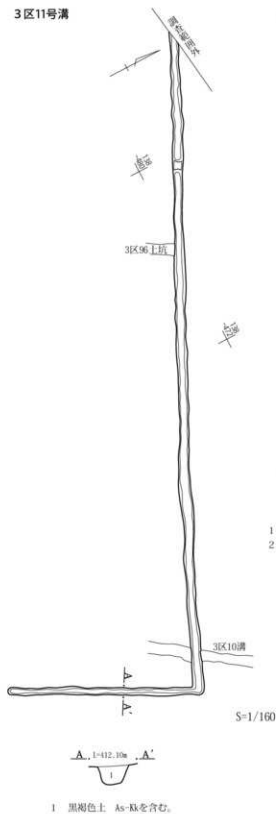


1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。

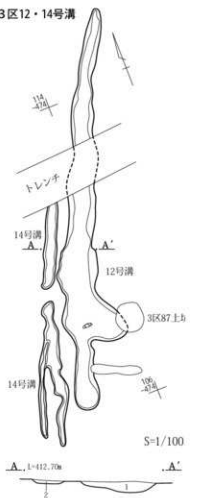


第439図 3区7・9・10・13号溝 平・断面図

3区11号溝

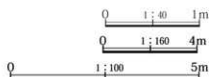
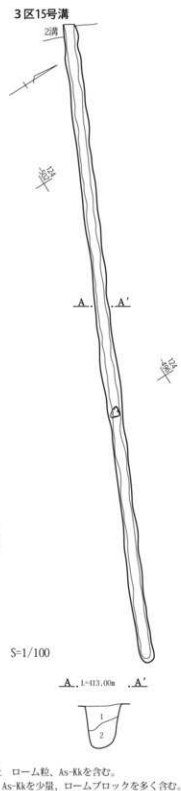


3区12・14号溝



- 1 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。(3-12号溝)
- 2 黒褐色土 As-Kkを多量に含む。(3-14号溝)

3区15号溝



第440図 3区11・12・14・15号溝 平・断面図

3区20号溝 (第438図、第26表、PL.121)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の中央付近に位置し、北側に3区3号溝が近接して併走する。

グリッド：X・Y-107~109

座標値：X=61,119~61,123 Y=93,532~93,544

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。西側調査区での2区7号溝から続く溝で、併走する3区3号溝と共に東端が3区2号溝に達する。底面は西側が高く、緩い東勾配となる浅い溝である。遺物等の出土はない。

規模：長軸12.8m 短軸0.62m 深さ7cm

延伸方向：N-71°-E

埋没土：As-Kkを含む黒褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区21号溝 (第26表)

平成26年度の調査で検出した。3区119号土坑と重複する。

位置：3-E区の西側に位置し、東側に3区22号溝が近接して併走する。

グリッド：X・Y-81・82

座標値：X=61,117~61,123 Y=93,403~93,407

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。底面等の詳細は不明。遺物等の出土はない。

規模：長軸6.90m 短軸0.60m 深さ36cm

延伸方向：N-32°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

3区22号溝 (第26表)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-E区の西側に位置し、西側に3区21号溝が近接して併走する。

グリッド：X・Y-81・82

座標値：X=61,116~61,122 Y=93,402~93,406

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1

面調査時に検出された。底面等の詳細は不明。遺物等の出土はない。

規模：長軸6.85m 短軸0.40m 深さ38cm

延伸方向：N-32°-E

埋没土：As-Kkを含む暗褐色土を埋土とする。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土に軽石(As-Kk)を含むことから、時期は中世以降と考えられる。

(6)畠

検出された畠は計11区画を数え、3区全体に広がりを見せる。調査では、これら畠の畝間が連続した溝状に検出されており、その畝間の方向や間隔の違いから各畠区画を確定させた。また、As-Kkを含む黒褐色土ないし暗褐色土を埋土としている点は、全ての畝間に共通する。

以下、各畠ごとに記載する。(第27表 3区畠一覧を参照)

3区1号畠 (第27表、PL.122)

平成26年度の調査で検出した。3区1号土坑と重複する。

位置：3-A区の全面に広がる。

グリッド：2A~2C-111~113

座標値：X=61,132~61,137 Y=93,544~93,551

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。畝間の方向が東側で検出された3区2号畠とはほぼ同方向で、畝間間隔が概ね同様であることから、両畠は同一の畠と考えられる。遺物には、土師器や須恵器の細片が少量出土している。

区画規模：長さ9.21m、幅8.45m

畝長8.45m 畝間間隔78.0cm前後

畦高5cm 畦数14条

畝間方向：N-46°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。なお、本畠は、3区2号畠、さらに西側調査区で検出された2区7号畠から続く同一畠と考えられる。

第4章 検出された遺構と遺物

3区2号畠 (第27表、PL.122)

平成26年度の調査で検出した。3区2号土坑と重複する。

位置：3-B区西側の北西突出部に位置する。

グリッド：2A・2B-109~111

座標値：X=61,167~61,175 Y=93,265~93,281

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。畝間の方向が西側で検出された3区1号畠とほぼ同方向で、畝間間隔が概ね同様であることから、両畠は同一の畠と考えられる。遺物には、土師器の細片が僅かに出土している。

区画規模：長さ7.52m、幅7.04m

畝長7.52m 畝間間隔58.0cm前後

畦高21cm 畦数10条

畝間方向：N-53°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。なお、本畠は、3区1号畠、さらに西側調査区で検出された2区7号畠から続く同一畠と考えられる。

3区3号畠 (第441図、第27・195表、PL.123・255)

平成26年度の調査で検出した。3区80・85号土坑、3区15号溝と重複する。

位置：3-B区中央の西寄りに位置し、西側に3区2号溝が面する。また、本畠の畝間方向と同方向の3区15号溝が、畠の南北を分断するように重複する。

グリッド：V~2B-98~102

座標値：X=61,109~61,139 Y=93,490~93,508

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。3区内で、最も畝間間隔が広い畠である。遺物には、図示した鉄製の釘があり、他に土師器や須恵器の細片が少量出土している。

区画規模：長さ29.40m、幅16.15m

畝長16.15m 畝間間隔23.40cm前後

畦高10cm 畦数22条

畝間方向：N-63°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

3区4号畠 (第442図、第27表、PL.123)

平成26年度の調査で検出した。3区45・60号土坑、3区2号焼土遺構、3区8号畠と重複する。

位置：3-B区東側中央の北西側に位置し、本畠の中央から北側に3区2号焼土遺構が重複する。また、本畠の南側と北側に畝間方向が異なる3区8号畠が重複するようにある。

グリッド：Y~2B-89~91

座標値：X=61,124~61,137 Y=93,444~93,450

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。多くの遺構と重複し、残存状況は極めて悪い。遺物には、土師器や須恵器の細片が僅かに出土している。

区画規模：長さ12.91m、幅6.80m

畝長6.80m 畝間間隔70.0cm前後

畦高12cm 畦数24条

畝間方向：N-66°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

3区5号畠 (第443図、第27表、PL.124)

平成26年度の調査で検出した。3区22・53・110号土坑、3区21・22号溝と重複する。

位置：3-B区東側の東端から3-E区にかけて位置し、本畠の南西側に畝間方向がやや異なる3区10号畠、大きく異なる3区9号畠が面する。

グリッド：W~Z-81~85

座標値：X=61,112~61,127 Y=93,401~93,422

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。3-E区の残存状況は極めて悪い。遺物等の出土はない。

区画規模：長さ19.93m、幅11.98m

畝長42m 畝間間隔42.0cm前後

畦高11cm 畦数27条

畝間方向：N-64°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

3区6号畠 (第442図、第27表、PL.124)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区西側の北壁際に位置する狭い区画。

グリッド：2A-103~105

座標値：X=61,132~61,134 Y=93,517~93,521

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。北側の調査区外に続く区画であり、詳細は不明。遺物等の出土はない。

区画規模：長さ3.99m、幅2.14m

畝長3.99m 畝間間隔52.0cm前後

畦高8cm 畦数4条

畝間方向：N-86°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本島の時期は中世以降と考えられる。

3区7号畠（第441図、第27表、PL.123）

平成26年度の調査で検出した。3区79号土坑と重複する。

位置：3-B区中央の南寄りに位置し、西側に畝間方向と同方向の3区78号土坑を挟んで3区3号畠が面する。

グリッド：V-X-98・99

座標値：X=61,109~61,117 Y=93,484~93,491

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

区画規模：長さ9.41m、幅3.57m

畝長9.41m 畝間間隔9.60cm前後

畦高8cm 畦数4条

畝間方向：N-28°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本島の時期は中世以降と考えられる。

3区8号畠（第442図、第27表、PL.123）

平成26年度の調査で検出した。3区4号畠と重複する。

位置：3-B区東側中央の北西側に位置し、本島の中央に畝間方向が異なる3区4号畠が重複するようにある。

グリッド：Y-2A-88~90

座標値：X=61,124~61,134 Y=93,439~93,448

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。重複の新旧は不明。遺物等の

出土はない。

区画規模：長さ11.75m、幅5.44m

畝長11.75m 畝間間隔46cm前後

畦高8cm 畦数16条

畝間方向：N-22°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本島の時期は中世以降と考えられる。

3区9号畠（第443図、第27表、PL.124）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の南東寄りに位置し、北側に畝間方向がやや異なる3区10号畠、大きく異なる3区5号畠が面するようにある。

グリッド：W-Y-84~87

座標値：X=61,110~61,122 Y=93,418~93,432

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

区画規模：長さ10.49m、幅8.45m

畝長10.49m 畝間間隔78.0cm前後

畦高8cm 畦数18条

畝間方向：N-45°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本島の時期は中世以降と考えられる。

3区10号畠（第443図、第27表、PL.1124）

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側中央の東寄りに位置し、畝間方向がやや異なる3区5号畠が北側に、大きく異なる3区9号畠が南側に面するようにある。

グリッド：X・Y-85・86

座標値：X=61,117~61,121 Y=93,420~93,426

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。試掘トレンチで南側を壊される。遺物等の出土はない。

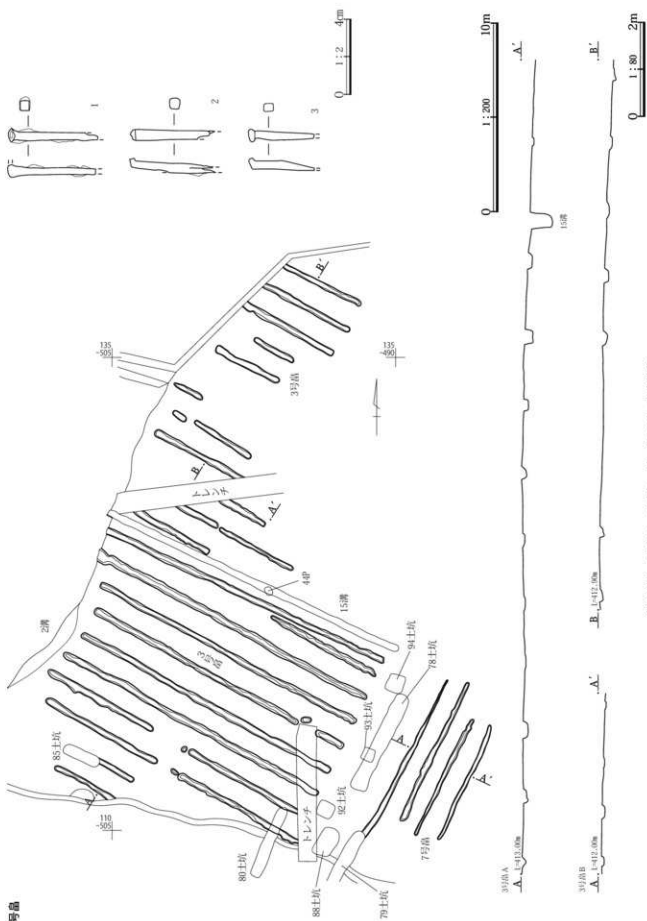
区画規模：長さ4.81m、幅3.49m

畝長4.81m 畝間間隔22.0cm前後

畦高7cm 畦数9条

畝間方向：N-45°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本島の時期は中世以降と考えられる。

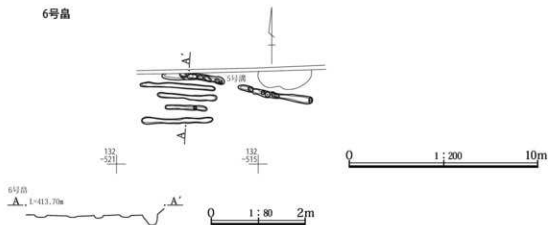


第441図 3区3・7号品 平・断面図、出土遺物

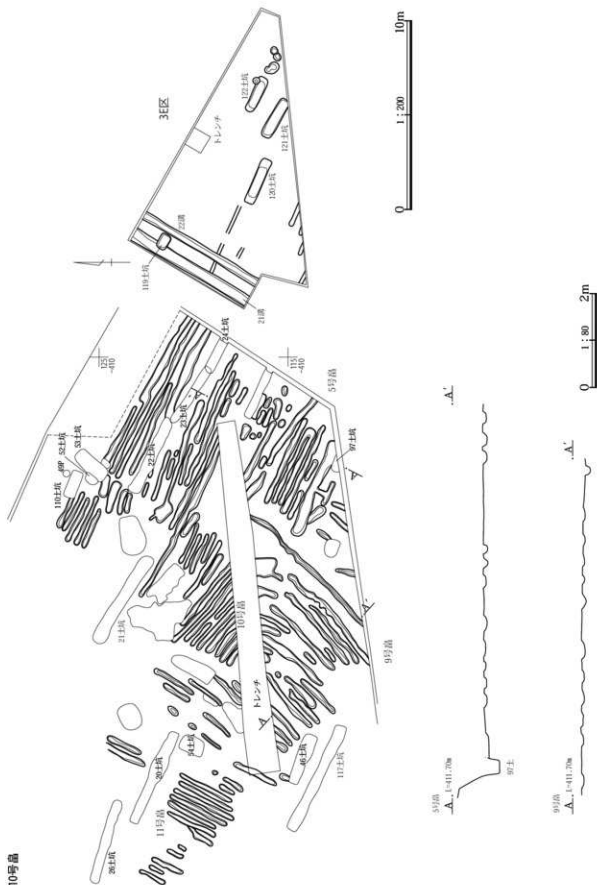
4・8・11号畠



6号畠



第442図 3区4・6・8・11号畠 平面図、6・8・11号畠 断面図



第43図 3区5・9・10号品 平面図、5・9号品 断面図

3K11号畠 (第442図、第27表)

平成26年度の調査で検出した。

位置：3-B区東側の中央に位置し、東側に畝間方向がやや異なる3区9号畠が面する。

グリッド：X・Y-87・88

座標値：X=61,117~61,124 Y=-93,430~93,437

検出状況：3区の基本層序IV層上面を確認面とした第1面調査時に検出された。遺物等の出土はない。

区画規模：長さ7.56m、幅6.55m

畝長7.56m 畝間間隔49.0cm前後

畦高7cm 畦数14条

畝間方向：N-28°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

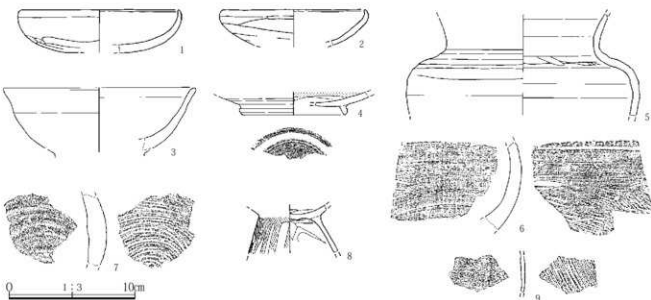
第6項 遺構外出土遺物

本調査区での第1・2面調査で出土した、古墳時代以降の遺構に伴わない遺物を扱う。遺構外出土遺物には、土器類をはじめ、石製品および金属製品がある。

以下、種別ごとに記載する。

(1)土器類(第444・445図、第198表、PL.256)

計22点を図示した。いずれも第2面調査時に出土した。



第444図 3区古墳時代以降遺構外出土遺物(1)

土師器・須恵器

1・2は土師器の杯で、3は須恵器の椀、4は灰釉陶器の椀である。5は須恵器の短頸壺であり、6の須恵器の壺の外面にはカキ目や叩き具痕を残す。7は胴部外面に同心円状のカキ目を残す瓶。8・9は土師器の台付甕で刷毛目を施す。また、刷毛目を施す土師器の甕として10~15があり、16は刷毛目の上にヘラ磨きを施す甕の底部。17~21は須恵器の甕の胴部で、外内面に叩き具痕や当て具痕を残す。

土製品

22は羽口片であり、外面はやや被熱している。

(2)石製品(第445図、第198表、PL.256)

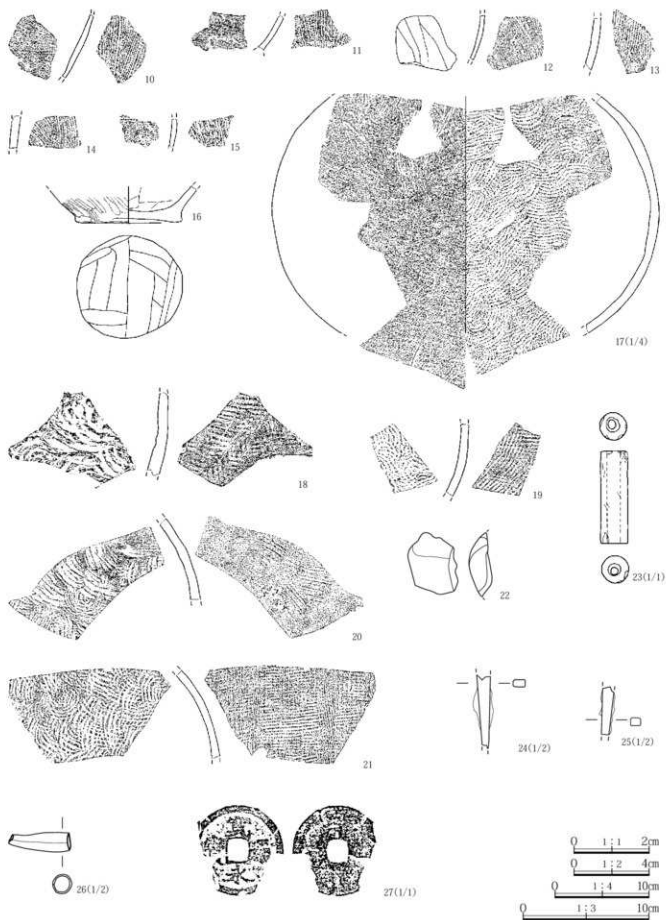
図示した石製品は1点である。23は第2面調査時に出土した。珪質頁岩製の管玉であり、淡緑色で長さ2.5cm、厚さ0.8cm、孔径約3mm、重さ2.0gを測り、丁寧な研磨整形により光沢をもち、両面穿孔である。時期は古墳時代と考えられる。

(3)金属製品(第445図、第198表、PL.256)

図示した金属製品は4点である。いずれも第1面調査時に出土した。

鉄製品として24の鉄銚、25の釘があり、銅製品に26のキセルの雁首、銭貨に27の「寛永通寶」がある。

第4章 検出された遺構と遺物

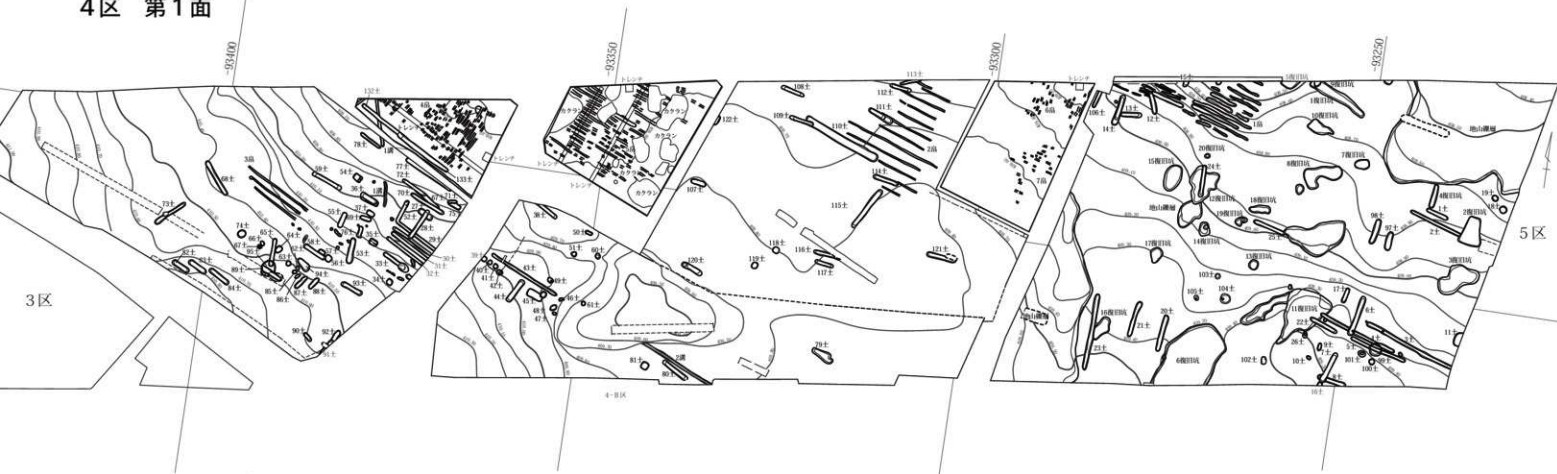


第445図 3区古墳時代以降遺構外出土遺物(2)

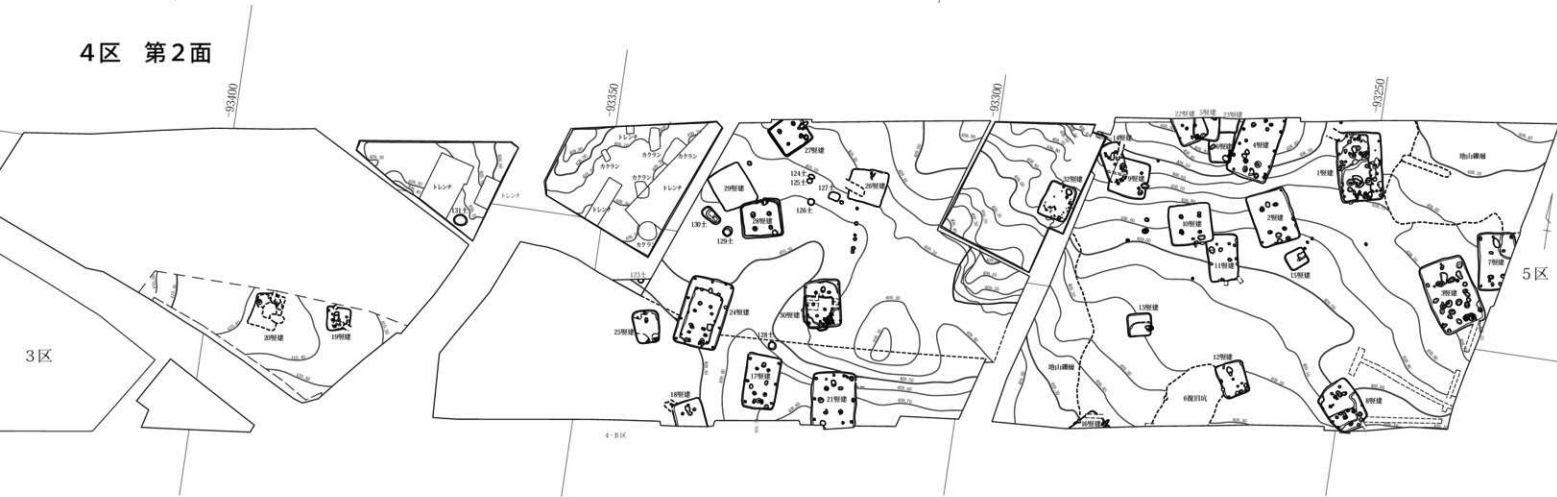
第 4 章

第 4 節 4 区の遺構と遺物

4区 第1面



4区 第2面



0 1:500 20m

第4節 4区の遺構と遺物

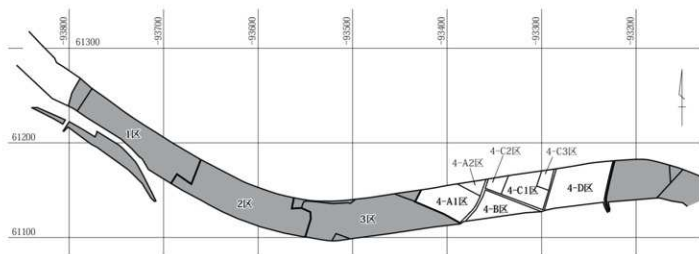
本調査区は、道路および調査の進行上から4-A～D区と4区分し、さらに各調査区を調査年度により細分した。調査は、平成27・30年度の2ヶ年度に跨って行われた。各年度の調査対象箇所は、4-A1区、4-B区、4-C1区、4-D区の調査を平成27年度に、4-C2・3区の調査を平成30年度に行った。

平成27年度調査は四戸遺跡の3年度目の調査であり、以前の調査データから中・近世を対象とした第1面調査、さらに縄文時代・古墳時代～古代を対象とした第2ないし3面の調査が予測され、各面の調査を順次行った。その結果、第1面調査では中世から近世の土坑や復旧坑、溝、高等の遺構が中心に検出され、第2面調査では弥生時代から平安時代に至る各時代の竪穴建物(住居)や土坑等の遺構・遺物が検出された。さらに、第2面調査時に縄文土器が出土したことから、縄文時代を対象とした第3面調査を部分的に行ったが遺構は検出されなかった。なお、ローム層への旧石器時代の確認調査を行ったが、旧石器時代の遺構・遺物は出土していない。この平成27年度調査で検出された遺構は、弥生時代から平安時代の竪穴建物(住居)30棟、竪穴遺構1基、土坑1基、中世以降の土坑112基、復旧坑20基、溝2条、畝3区画、さらに古墳時代から中世以降のピット33基である。

平成30年度調査は、先の平成27年度調査時の未調査箇所を対象としていることから各調査区名称を踏襲し、併せて各面の調査も同様に行った。検出された遺構は、弥生時代の竪穴建物(住居)1棟、弥生時代から古代の土坑1基、中世以降の土坑2基、溝1条、畝4区画、さらに古墳時代から中世以降のピット33基である。

以上の結果、4区から検出された遺構は、弥生時代から平安時代の竪穴建物(住居)31棟、竪穴遺構1基、土坑1基、中世以降の土坑132基、復旧坑20基、溝2条、畝4区画、さらに古墳時代から中世以降のピット33基である。他に遺構は検出されていないが、縄文時代の遺物が出土している。(第446図を参照)

以下、各時代ごとに記述する。



第447図 4区 細区割り図

第1項 縄文時代の遺構と遺物

(1)概要

先に調査が行われていた西側の3区で縄文時代前期の竪穴建物(住居)が検出されており、本調査区においても縄文時代の遺構の存在が想定されていた。また、4-D区第2面の遺構確認や各遺構調査において、縄文時代の土器・石器が出土していた。このため、自然礫層部を避けてローム層の安定している箇所を対象に、基本層序とした4-D区北壁および南壁でのV層下面(ローム上面)を確認とした第3面の調査を行った。

その結果、縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺物の出土はあった。

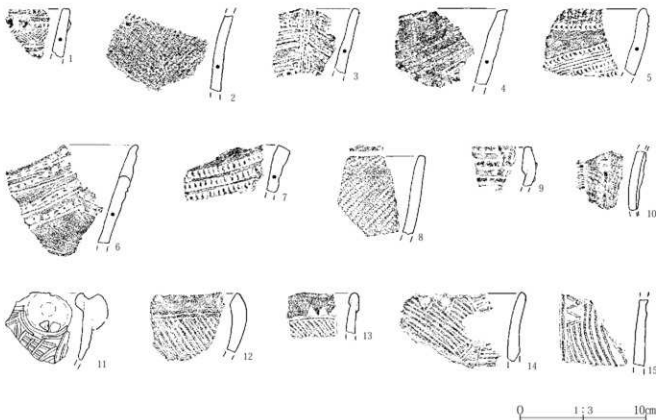
以下、出土した遺物を記述する。

(2)遺構外出土遺物

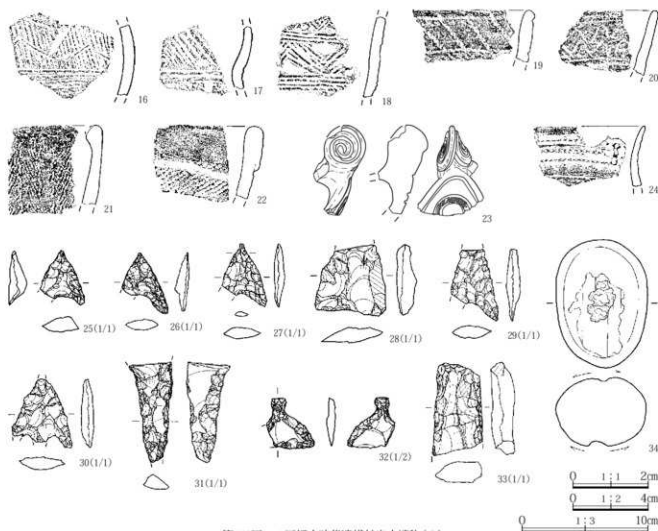
遺構に伴わない遺物として、前期から後期までの各時期の土器および石器が出土している。その代表的な遺物を第448・449図に示した。(第231表、Pl.275・276)

まず、前期前葉の土器として関山式に位置づけられる1・2、前期中葉の有尾式に位置づけられる3~7、前期後葉の諸磯式に位置づけられる8、前期末葉の十三菩提式に位置づけられる9・10。そして、中期初頭の五領ヶ台式に位置づけられる11~21、中期後葉の加曾利E式に位置づけられる22。さらに、後期前葉の堀之内式に位置づけられる23・24がある。

石器には、石鏃として無茎鏃の25~29、有茎鏃の30があり、石材は全て黒曜石が使用されている。31は石錐で黒曜石製。32は珪質頁岩製の石匙。33はひん岩製の打製石斧である。そして、34は磨面をもつ粗粒輝石安山岩製の凹石である。他に、黒曜石や黒色頁岩等の石材を主とした石鏃・未製品、楔形石器、打製石斧、二次加工ある剥片、石核、そして多くの剥片が出土している。



第448図 4区縄文時代遺構外出土遺物(1)



第449図 4区縄文時代遺構外出土遺物(2)

第2項 弥生時代の遺構と遺物

(1)概要

本調査区で検出された弥生時代の遺構は、調査区の西寄りとなる4-A区に少なく、調査区中央から東側の4-B～D区に広く点在している。基本順序とした4-A区北壁IV層上面、4-B区北西壁VII層上面、4-D区北壁および南壁でのVI層中位を確認面とした第2面調査で、4-A区に竪穴建物が2棟、4-B～D区に竪穴建物を主とする集落が検出された。結果、弥生時代の遺構としては、竪穴建物(住居)18棟、竪穴遺構1基、土坑1基が検出されたこととなる。

なお、検出された竪穴建物の配置状況から、集落の広がり調査区外となる北・東・南側にまで展開するものと推測に堅く、四戸遺跡が立地する段丘の東側となる温川寄りに集落が形成されていたものと考えられよう。

(2)竪穴建物

本調査区で検出された弥生時代の竪穴建物(住居)は、第2面調査において4-A区に中期の竪穴建物2棟、4-B～D区に後期の竪穴建物16棟、計18棟の竪穴建物が検出された。特に、後期の竪穴建物では、長軸が9.0mを超過大型竪穴建物5棟、長軸7.0m前後の中型竪穴建物8棟、長軸5.0m前後の小型竪穴建物4棟からなり、この中には拉張を伴う竪穴建物4棟が含まれている。

以下、各建物ごとに記述する。(第28表 4区竪穴建物一覧を参照)

4区1(A・B)号竪穴建物

(第450～453図、第28・199表、PL.129・130・257)

平成27年度の調査で検出した。拡張を伴う大型建物で、拡張後を1A竪穴建物、拡張前を1B竪穴建物として記述する。

位置：4-D区中央の北東寄りに位置し、南東側10.5mに4区3号竪穴建物、南西側6.5mに4区2号竪穴建物、西側8.0mに4区4号竪穴建物がある。

グリッド：2H～2J-50～52

座標値：X=61,167～61,176 Y=-93,248～93,255

重複：本建物の北西隅から東南東方向に、第1面調査時の4区1号復旧坑が溝状に重複する。調査面の違いや土層断面の観察から、明らかに本建物の方が古い。

形状：拡張後の1A竪穴建物は、隅丸長方形を呈する大型建物で、拡張前の1B竪穴建物の西壁を共有し、北・南方向に僅かに広げ、東方向に1.5mほど広げた状況であり、全体的には片側へ大きく拡張させた形となる。その結果、拡張前の1B竪穴建物は、1A竪穴建物の内側にあり、やや幅狭な隅丸長方形を呈する。

1A竪穴建物規模：長軸0.18m 短軸5.98m 壁高16～41cm

1A竪穴建物長軸方向：N-13°-W

1A竪穴建物床面積：46.69㎡

1A竪穴建物埋没土：1層の白色鈣物粒と明褐色鈣物粒を混入する黒褐色土を主体とし、一部に重複する1号復旧坑(第1面調査)の埋土を確認した。また、埋土中には、人頭大の大型礫から中型の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

1A竪穴建物床面・壁：床面はローム土中にあるが、拡張前の1B竪穴建物部分では黒褐色土(土層断面4層)上面が床面を構成し、ほぼ平坦で、建物中央から炉周辺にかけて硬化が著しい。南側ほど壁の遺存は良好で41cmを測り、部分的であるが壁面に地山礫層が露出する。また、南壁中央のやや東寄りには、壁から飛び出る形で一辺50cm程の大型地山角礫が上面を平に残存している(壁内に食い込み、人為的に据えた状況ではない)。

1A竪穴建物炉：建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2の北側にある。地床が浅い掘り込みをも

ち、炉内南側には棒状の枕石を東西方向に据えている。炉底面は、被熱して焼土化が著しい。炉の規模は、長さ61cm、幅52cm、深さ14cmを測る。

1A竪穴建物柱穴：主柱穴はP1～4の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP5から構成され、細長い五角形状を呈する。主柱穴上面は楕円形ないし不整形(長軸80～90cm、短軸65～80cm)で、中位以下は楕円形(長軸45cm、短軸30cm)となり、深さ80～85cmを測り、埋土は黒褐色土と褐色土に分層できる。P5は径50cm、深さ60cmを測り、黒褐色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P6とP15、P7とP16、P8とP17、P11とP18、P12とP19)が確認され、他に南側の東壁付近にP9・10が補助的に配置されている。これら壁柱穴は、概ね円形で、径25～35cm、深さ30～50cmを測り、黒褐色土を主体としながらも褐色土とに分層できるピットもある。

1A竪穴建物貯蔵穴：南壁の中央東寄りに位置し、入口施設の東隣にある。P22が該当し、長軸60cm、短軸52cm、深さ16cmを測り、やや浅い楕円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

1A竪穴建物入口施設：南壁のほぼ中央に位置し、壁際から20cmほど内側に2基のピット(P20・21)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、底面が北側に寄る形で、ピットの南側の立ち上がりは南壁へ向かって斜めとなる。埋土は黒褐色土を主体に、暗褐色土や下半の鈍い黄褐色土に分層できる。このP20とP21の間隔は、芯々で115cmを測る。なお、1A竪穴建物の南壁中央に接した建物外には、遺構確認面に中小の地山礫が方形形状に露出し、あたかも入口施設的な状況にあるが、作うとは考え難い。

1B竪穴建物規模：長軸(8.30)m 短軸4.56m 壁高22～41cm

1B竪穴建物長軸方向：N-13°-W

1B竪穴建物床面積：32.33㎡

1B竪穴建物埋没土：1A竪穴建物への拡張前の建物であり、明らかな埋土は確認されていない。

1B竪穴建物床面・壁：床面は1A竪穴建物の床面とほぼ同一面であり、建物北半ではローム土中にあるが、南半は黒褐色土(土層断面4層)上面が床面を構成し、ほぼ平坦で、建物中央から北半の炉周辺にかけての硬

化が著しい。壁は、建物の拡張により北・東・南の三方向の壁をなくすが、床面下調査でその痕跡を確認した。西壁については、1A竪穴建物と共有する。なお、1A竪穴建物南壁に露出する大型礫は、拡張前の南壁の外側(建物外)にあって、露出していないものと考えられる。

1B竪穴建物¹：建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P23・24のやや北側にある。地床¹で、楕円形の浅い掘り鉢状の掘り込みをもち、¹底面の中央と南側は被熱して焼土化が著しい。¹の規模は、長さ96cm、幅71cm、深さ13cmを測る。

1B竪穴建物柱穴：主柱穴はP23～26の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP27で構成され、細長い五角形状を呈する。主柱穴P23・24の上面は円形(径40cm前後)で、P23～26の深さは100～70cmを測る。P27は径30cm、深さ55cmを測る。これらの埋土は、黒褐色土を主体にしながらも、暗褐色土や褐色土に分層され、P27では柱の周囲を根巻き状に明黄褐色土が強く巡り、柱痕が確認できた。また、P23とP26の北側延長上にP28、P24とP25の北側延長上にP29が、補助的に配置されている。さらに、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P30とP33、P31とP34)を確認した。埋土は黒褐色土を主体としている。

1B竪穴建物貯蔵穴：南西隅付近に位置し、入口施設の西隣にある。P35が該当し、長軸68cm、短軸56cm、深さ15cmを測り、浅い楕円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

1B竪穴建物入口施設：P36・37が該当し、南壁のほぼ中央付近に位置するものと考えられ、両ピットからやや南側に南壁際が想定される。P36・37は共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、底面が北側に寄る形で、ピットの南側の立ち上がりは南へ向かって斜めとなる。このP20とP21の間隔は、芯々で70cmを測る。埋土は黒褐色土を主体に、暗褐色土や下半の鈍い黄褐色土に分層できる。

床面下：1A竪穴建物の拡張部分にあたる床面下は、僅かな凹凸状の掘り込みとピットが数基確認された。拡張前の1B竪穴建物の床面下では、1A竪穴建物との拡張境部に僅かな段差を確認でき、さらに南半が大きく低くなり、その埋土は黒褐色土(土層断面4層)が主

体となる。掘り方の底面は、全体に地山礫を露出させ、凹凸の著しい状況となる。また、地山礫を除去した凹みも確認されている。

出土遺物：遺物の出土量は、比較的が多い。そのほとんどが1A竪穴建物からであり、埋土中出土は元より、床に近くの出土が目立ち、床直出土の土器も多い。特に、建物の南東側に集中し、貯蔵穴P22の脇には1が、やや北側に離れて2が床直で出土している。また、1B竪穴建物の出土遺物は極めて少なく、¹内から数点の土器が出土している。なお、掘り方底面からガラス小玉が1点出土している。

出土遺物として、土器11点と石器1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に外面と内面口頸部を赤色塗彩した1、櫛描T字文を施す7、そして底部の5がある。甕には、折返し口縁で櫛描連簾文と櫛描波状文を施した2があり、3のボタン状貼付文を併せもつ台付甕、4は粗雑な櫛描波状文を施す小型甕、8～11の櫛描波状文や櫛描連簾文を施した口縁部片がある。

石器には、12のひん岩製の打製石斧がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに石核(燧安山岩)、二次加工剥片(黒曜石)、剥片(黒曜石)が多く出土し、青色のガラス小玉1点がある。

所見・時期：地山礫層に達する掘り込みをもつ建物で、1B竪穴建物から1A竪穴建物への拡張を伴う大型建物である。その時期は出土土器から、弥生時代後期後半の樽式期である。

4区2号竪穴建物

(第454～456図、第28・200表、PL.130・131・257・258)
平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区中央の北寄りに位置し、北側1.0mに4区4号竪穴建物と近接、北東側6.5mに4区1号竪穴建物、南西側2.5mに4区11号竪穴建物がある。

グリッド：2F～2H-52～54

座標値：X=61,159～61,167 Y=93,258～93,266

形状：隅丸長方形を呈する中型建物。

規模：長軸7.10m 短軸5.41m 壁高23～47cm

長軸方向：N-26°-W 床面積：34.23㎡

埋没土：1層の白色鈹物粒と明褐色鈹物粒を混入する黒

第4章 検出された遺構と遺物

褐色土を主体とし、壁際の2層とに分層できる。埋土中には、大型や中型の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあるが、黄褐色ロームブロックを含む褐色土(土層断面3層)上面が床面となる。ほぼ平坦で、壁際を除くほぼ全面が硬化し、特に建物中央からが周辺にかけての硬化が著しい。南側の壁の遺存は良好で47cmを測り、部分的であるが壁面に地山礫層が露出する。また、東壁中央の南寄りには壁面に大型地山礫が存在し(壁内に食い込み、人為的に据えた状況ではない)、その壁面から飛び出た上面の平坦面が砥石状に研磨されていた。

炉：建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2の北側にある。地床炉で浅い掘り込みをもち、炉内南側には棒状の枕石を東西方向に据えている。炉底面は、被熱して焼土化が著しい。炉の規模は、長さ74cm、幅59cm、深さ9cmを測り浅い。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP5から構成され、細長い五角形形状を呈する。主柱穴上面は楕円形ないし円形(長軸60～65cm、短軸45～55cm)で、中位以下は東西方向に長い楕円形(長軸32～48cm、短軸25～30cm)となり、深さ60～70cmを測り、埋土は黒褐色土(上位)と褐色土ないし黄褐色土(下位)に分層できる。P5は径50cm、深さ64cmを測り、黄褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P6とP11、P8とP12、P9とP13)が配置されている。これら壁柱穴は、概ね円形で径20～30cm、深さ22～30cmを測り、黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

貯蔵穴：南壁の中央東寄りに位置し、入口施設の東隣にある。P14が該当し、長軸63cm、短軸50cm、深さ32cmを測る楕円形を呈し、炭化材が出土している。埋土は黒褐色土を主体とする。

入口施設：南壁のほぼ中央に位置し、壁際から25cmほど内側に2基のピット(P15・16)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、底面が北側に寄る形で、ピットの南側の立ち上がりは南壁へ向かって斜めとなる。埋土はローム粒とロームブロックを多く含む暗褐色

土を主体とする。このP15とP16の間隔は、芯々で90cmを測る。

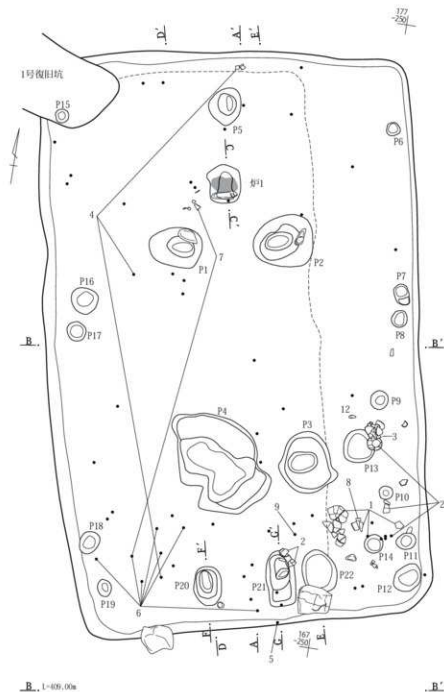
床面下：床面下は、全体に僅かな掘り込みをもち、中央から北西側および南東側が一段低くなる。底面には、僅かな凹凸状の掘り込みやピットが確認され、南側の入口施設付近にP17(長軸70cm、短軸62cm、深さ18cm)、南西隅付近にP18(長軸70cm、短軸54cm、深さ7cm)、北壁中央東寄りにP19(長軸76cm、短軸58cm、深さ22cm)の土坑状の掘り込みを検出した。埋土は黄褐色ロームブロックを含む褐色土(土層断面3層)が主体となる。また、掘り方底面は、全体に地山礫を多く露出させて凹凸が著しく、地山礫を除去した凹みも確認されている。

出土遺物：遺物の出土量は、埋土中出土は元より、床近くの出土が目立ち、床直出土の土器も多い。特に、建物の南東隅付近に集中し、2や6・7が横位に潰れた状態で、5は逆位に出土している。また、炉の北側においても11が床直で出土している。また、南西隅付近では、大型の板状礫(砥石)14が南壁に立て掛かるように出土している。P2内からは、1が出土している。

出土遺物として、土器13点と石器1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に括れ部から肩部に櫛描T字文や沈線充填の銘南文を描き、文様施文部を除く外面を赤色塗彩した1がある。壺には2～7があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連環文を施す。また、8は同様の文様を施す台付甕で、9・10は小型台付甕である。さらに、11は高杯の体部で、12は外面を赤色塗彩した高杯の脚部である。13は小型鉢である。石器として、表面の中央に非常に滑らかな砥面をもつ粗粒輝石安山岩製の板状礫(砥石)14がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片(黒曜石・黒色頁岩)、磨石(粗粒輝石安山岩)、剥片(黒曜石・黒色頁岩・赤碧玉・流紋岩凝灰岩)が出土している。

所見・時期：地山礫層に達する掘り込みをもつ建物で、出土土器から弥生時代後期後半の樽式である。



B, L=49.00m

B'

C, L=68.50m

C'

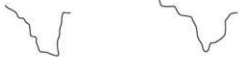
E, L=49.00m

E'

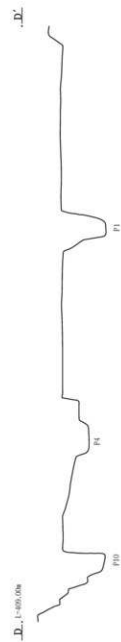
G, L=49.00m

G'

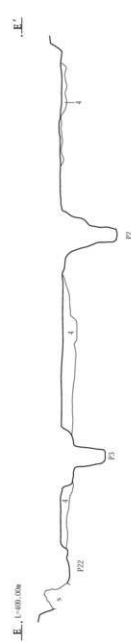
1 黒褐色土 焼土ブロックが珪に混入する。



A, L=49.00m

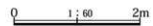


D, L=49.00m



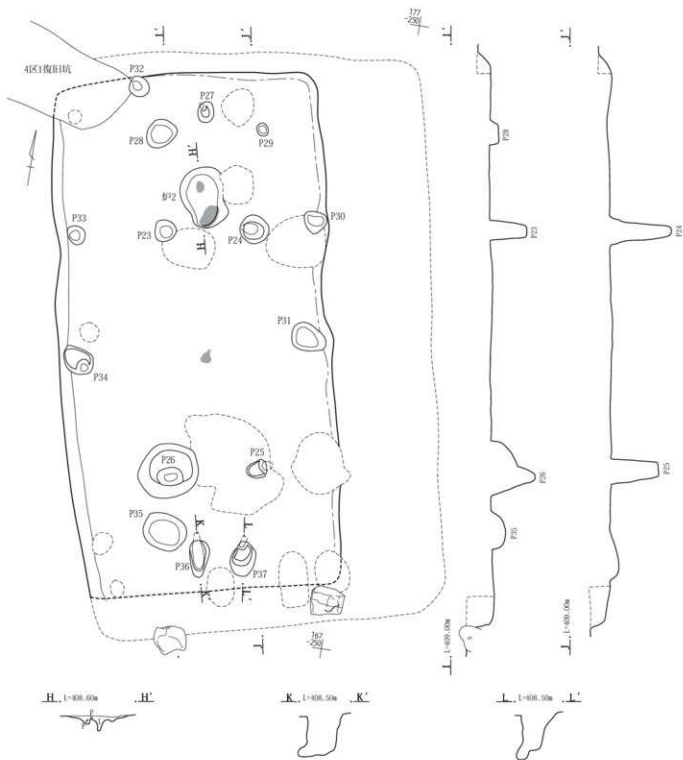
E, L=49.00m

- 1 黒褐色土 1号復旧坑の覆土
- 2 黒褐色土 白色・明褐色鉱物粒を全体に含み、大小の礫が少量混入。締まりあり。
- 3 明赤褐色土 黄褐色土ブロックを多量に含む。締まりあり。
- 4 黒褐色土 黄褐色土大ブロックを少量含む。締まりあり。(床下土)



第450図 4区1 A号竪穴建物 床面・断面図

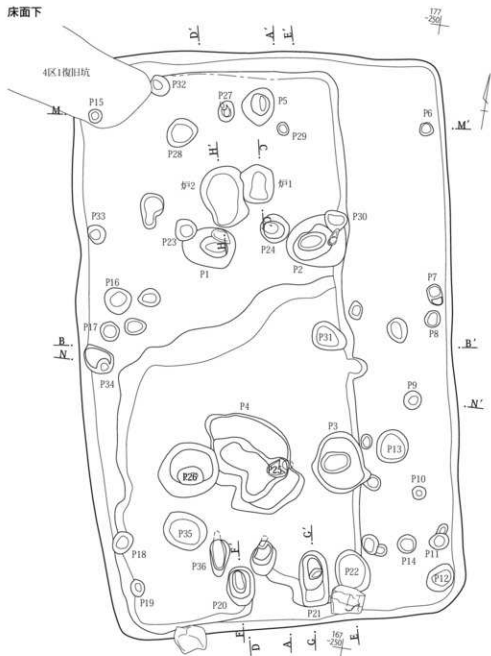
1 B号竪穴建物床面



1 黒褐色土 焼土粒、黄褐色土ブロック、土器片を含む。

第451図 4区1 B号竪穴建物 床面 平・断面図

床面下



M. 1-089.00m

M'



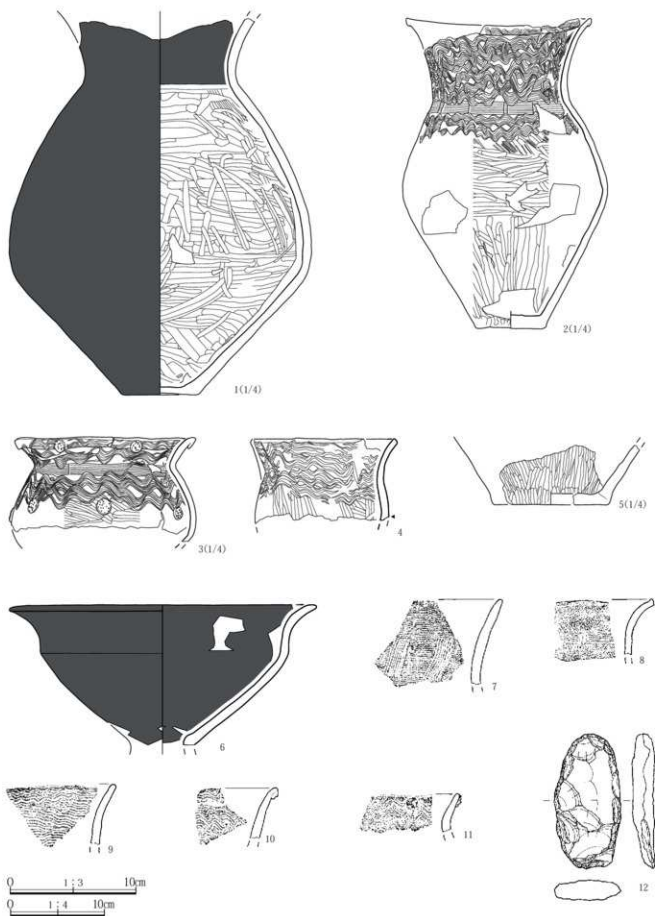
N. 1-089.00m

N'



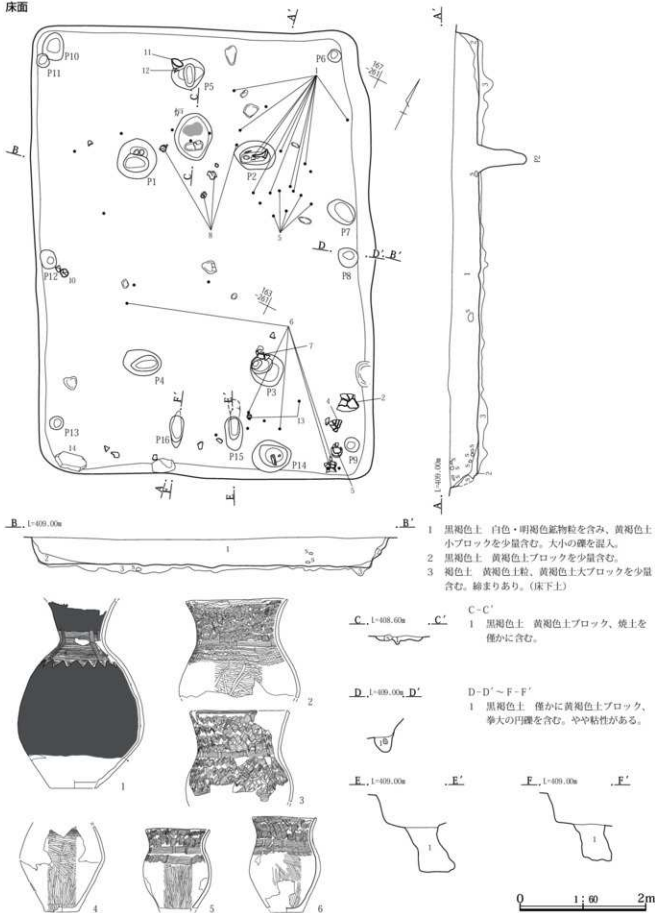
0 1:60 2m

第452図 4区1号竪穴建物 床面下 平・断面図



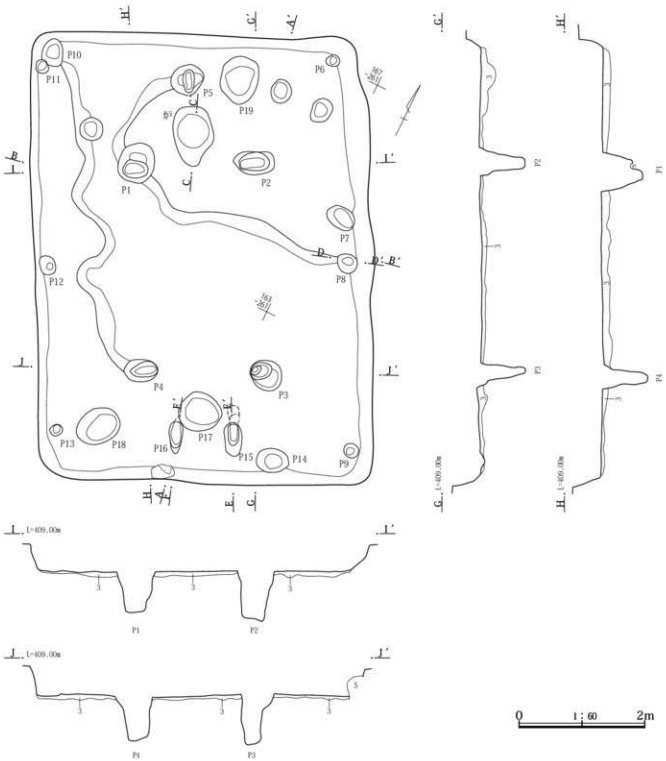
第453図 4区1号竪穴建物 出土遺物

床面

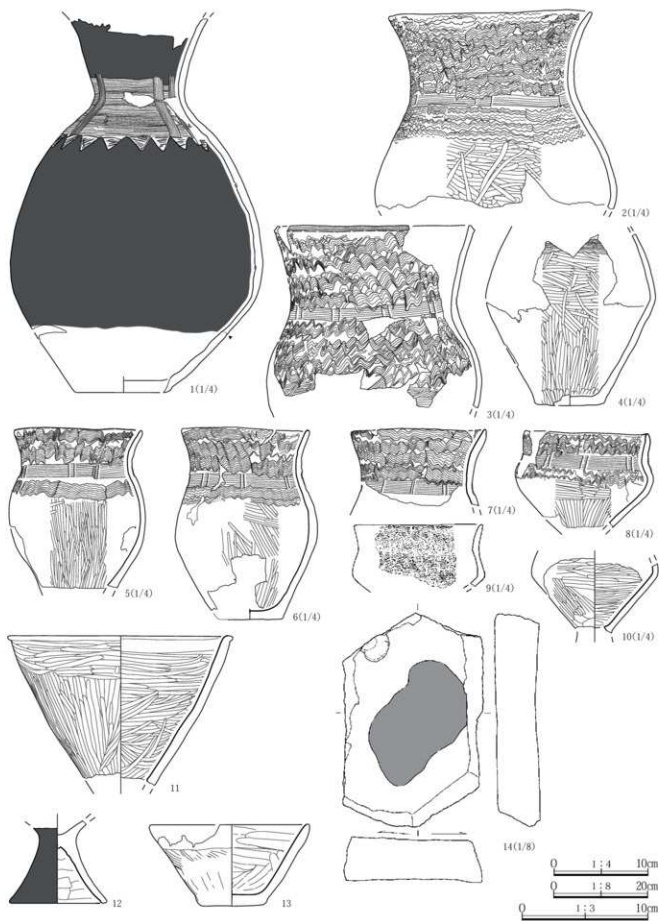


第454図 4区2号竪穴建物 床面 平・断面図

床面下



第455図 4区2号竪穴建物 床面下 平・断面図



第456図 4区2号竪穴建物 出土遺物

4区3(A・B)号竪穴建物

(第457～460図、第28・201表、PL.132・133・258・259)

平成27年度の調査で検出した。拡張を伴う大型建物と考えられ、拡張後を3A竪穴建物、拡張前を3B竪穴建物として記述する。

位置：4-D区東端に位置し、北東側に4区7号竪穴建物が隣接、南西側14.0mに4区8号竪穴建物、西側15.0mに4区1号竪穴遺構、北西側10.5mに4区1号竪穴建物がある。

グリッド：2E～2G-47～49

座標値：X=61,151～61,162 Y=-93,232～93,242

形状：拡張後の3A竪穴建物は、隅丸長方形を呈する大型建物で、拡張前の3B竪穴建物の西壁を共有し、北・東・南方向に僅かに広げたものと考えられる。結果、拡張前の3B竪穴建物は、3A竪穴建物の内側にあり、同様な隅丸長方形を呈していたものと考えられる。

3A竪穴建物規模：長軸6.60m 短軸6.54m 壁高22～56cm

3A竪穴建物長軸方向：N-28°-W

3A竪穴建物床面積：48.20㎡

3A竪穴建物埋没土：1層の白色鉱物粒と黄褐色鉱物粒を混入する黒褐色土を主体とし、黄褐色ブロックを少量含む下層の黒褐色土、さらに壁際の褐色土との3層に分層できる。また、埋土中には、自然礫が多く含まれることから、人為的な埋没と考えられる。

3A竪穴建物床面・壁：床面はローム土中にあるが、黄褐色ロームブロックを含む黒褐色土(土層断面4層)上面が床面となる。ほぼ平坦で、ほぼ全面が硬化し、特に建物中央から炉周辺にかけての硬化が著しい。南側の壁の遺存は良好で、東壁土層断面では床面から上位に56cmまで立ち上がることを確認している。また、壁面下位には多くの地山礫が露出している。

3A竪穴建物炉：3箇所を炉を検出した。炉1は建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2のやや北側にある。3B竪穴建物の炉と重複し、地床炉で浅い掘り込みをもち、炉底面は自然礫が露出する。炉の規模は、長さ・幅90cm前後を測る。炉2はP4の北西側にあり、長軸80cm、短軸62cm、深さ20cmを測り、楕円形を呈する。炉底面は、被熱して焼土化が進む。炉3は炉2の東に近接し、P4の北側にある。径80cm前後の

不整形円形を呈し、炉底面は、被熱して焼土化している。

3A竪穴建物柱穴：主柱穴はP1～4の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP5から構成され、細長い五角形状を呈する。主柱穴上面は楕円形(長軸80cm前後、短軸70cm)で、底面は東西方向に長い楕円形(長軸30～40cm、短軸20cm前後)となり、深さ55～62cmを測り、埋土は黒褐色土が主体となる。P5は長軸62cm、短軸38cm、深さ26cmを測り、黄褐色土ブロックを含む暗褐色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P7とP10、P8とP11、P9とP12)が配置されている。これら壁柱穴は、楕円形ないし円形で長軸40～72cm、短軸35～55cm、深さ24～36cmを測り、黒褐色土を主体としている。

3A竪穴建物貯蔵穴：南壁の中央東寄りに位置し、入口施設の東隣にある。P14が該当し、長軸90cm、短軸70cm、深さ25cmを測る楕円形を呈する。底面には自然礫が露出し、埋土は黒褐色土を主体とする。なお、このP14の周囲(南壁側を除く)には、土手状に床面よりも一段高く盛り、貯蔵穴を区画している。

3A竪穴建物入口施設：南壁のほぼ中央に位置し、壁際から40cmほど内側に2基のピット(P15・16)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、底面がやや北側に寄る形で、ピットの南側の立ち上がりは南壁へ向かって斜めに立ち上がる。埋土は黒褐色土を主体に、混入物の差から3層に分層できる。このP15とP16の間隔は、悉くで1.0mを測る。

3B竪穴建物規模：長軸6.00m以上 詳細不明。

3B竪穴建物長軸方向：N-28°-W

3B竪穴建物床面積：不明。

3B竪穴建物埋没土：3A竪穴建物への拡張前の建物であり、明らかな埋土は確認されていない。

3B竪穴建物床面・壁：3A竪穴建物の床面と同一面であったと考えられ、黄褐色ロームブロックを含む黒褐色土(土層断面4層)上面が床面となると想定されるが、詳細は不明。

3B竪穴建物炉：3A竪穴建物の炉1南側に重複し、3B竪穴建物の中軸上中央北側で、主柱穴P17・18の間からやや北側にある。楕円形を呈する地床炉で、浅い掘り込みをもち、炉底面は被熱して焼土化している。

3B竪穴建物柱穴：主柱穴はP17～20の4本で構成され、

第4章 検出された遺構と遺物

細長い四角形を呈する。主柱穴上面は楕円形(長軸62~90cm、短軸50~75cm)で、深さ50~58cmを測る。埋土は黒褐色土が主体となるが、P19では下層の暗褐色土と分層できる。なお、壁柱穴等は判然としない。

3 B 竪穴建物貯蔵穴：検出されていない。

3 B 竪穴建物入口施設：主柱穴はP19・20の南側に位置したP21・22が該当する。建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、埋土は黒褐色土を主体とする。両ピットの間隔は、芯々で75cmを測る。また、ピットの位置関係から、南壁はP21・22の南側数十cmあったと考えられる。

床面下：床面下は全体に浅い掘り込みをもち、底面は地山礫を多く露出させ、大小の凹凸が著しい。特に、中央付近や南側にみられる大型の凹みは、大型の地山礫を除去した際に生じた凹みと考えられ(床土土坑ではない)、その形状や底面のあり方は一定しない。掘り方埋土は、黄褐色ロームブロックと黄白色土粒の混土層となる黒褐色土(土層断面4層)が主体となる。

出土遺物：遺物の出土量は、やや少ない。貯蔵穴内やその周辺に多く出土する傾向はあるが、床直出土や床近くの出土は少なく、その多くは埋土中からである。

出土遺物として、土器16点と石器2点、ガラス玉1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に10の口唇部に刻み目を施し、折返しの複合口縁部となる口縁部片。11の短く折返した複合口縁部に櫛描波状文を施した口縁部片がある。甕には1~5と12~16があり、1・2では口縁下に櫛描波状文や櫛描連塵文を施す。また、4は無文の小型甕であり、12は台付甕である。さらに、6は無文の短頸甕で、内面の一部に赤色塗彩が残存する。7・8は高杯で、7は内外面共に赤色塗彩が施される口縁部で、8には外面脚部および内面の杯底部に赤色塗彩が施されている。そして、9は無文の有孔鉢で、底面に径5~7mmの穿孔をもつ。

石器には、粗粒輝石安山岩製の17の砥石片と18の敲石がある。また、19のガラス玉がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに混入と考えられる石籾とその未製品(黒曜石)、石匙(流紋岩凝灰岩)を含め、多くの剥片が出土している。

所見・時期：地山礫層に達する掘り込みをもつ建物で、3 B 竪穴建物の平面プランは明瞭ではないが、その柱

穴や炉の配置から、3 B 竪穴建物から3 A 竪穴建物への拡張を伴う大型建物である。その時期は出土土器から、弥生時代後期後半の樽式期である。

4区4号竪穴建物

(第461~463図、第28・202表、PL.133・134・259)

平成27年度の調査で検出した。建物の北端部は調査区外となり、4区6号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の北端中央付近の北壁際に位置し、東側8.0mに4区1号竪穴建物、南側1.0mに4区2号竪穴建物が近接、同南側7.5mに4区11号竪穴建物、南西隅付近の西壁を4区6号竪穴建物と重複し、さらに西側に4区5・22・23号竪穴建物の重複建物が近接する。

グリッド：2 H~2 J-50~52

座標値：X=61,167~61,176 Y=93,262~93,269

重複：本建物南西隅付近の西壁を、4区6号竪穴建物のカマドを含めた南東隅部と重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：隅丸長方形を呈する大型建物であるが、北辺を欠く。

規模：長軸(8.98)m 短軸5.59m 壁高17~80cm

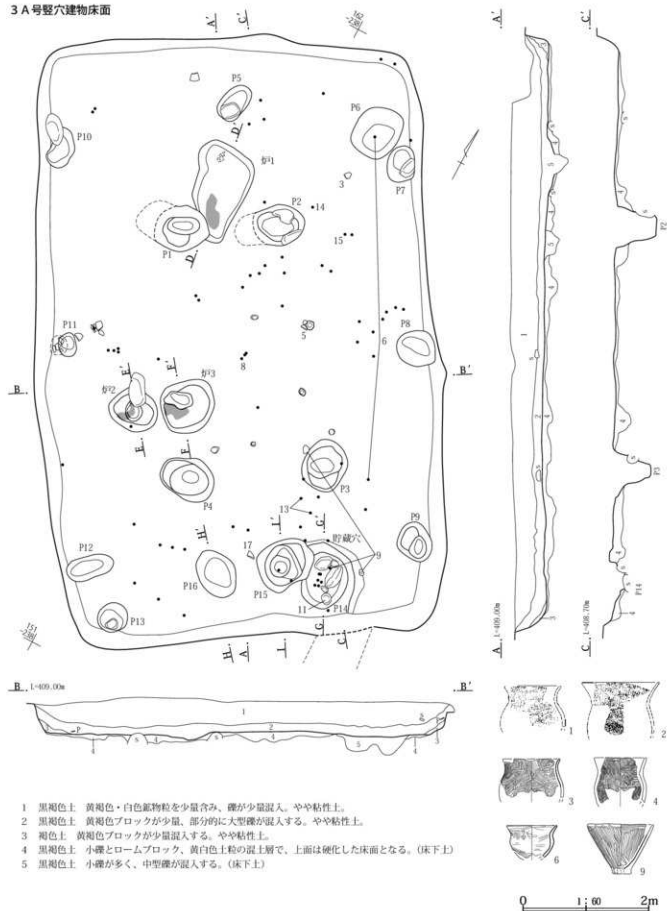
長軸方向：N-8°-E 床面積：(41.65)㎡

埋没土：1層の黄褐色・白色・赤褐色鉱物粒を少量含む黒褐色土を上層とし、2層の黄褐色土・褐色土ブロックを含む暗褐色土で主体をなし、3層とした壁際の暗褐色土とに分層できる。埋土中には、大型や中型の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあるが、黄褐色ローム土を含む黒褐色土(土層断面4層)上面が床面となる。ほぼ平坦で、ほぼ全面が硬化し、特に建物中央から炉脚辺にかけての硬化が著しい。壁高は南壁で68cmを測り、北壁土層断面では床面から上位に80cmまで立ち上ることを確認している。なお、部分的であるが壁面に地山礫層が露出する。

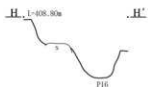
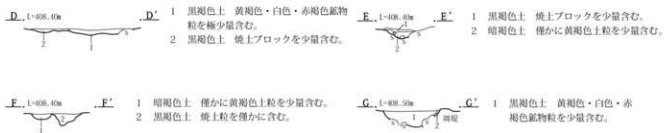
炉：2箇所に炉を検出した。炉1は建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2のやや北側にある。地床炉で浅い掘り込みをもち、炉内中央には棒状の枕石が短軸方向に据えられ被熱している。炉底面は、被熱して焼土化が著しい。炉の規模は、長さ50cm、幅44cm、

3 A号竪穴建物床面

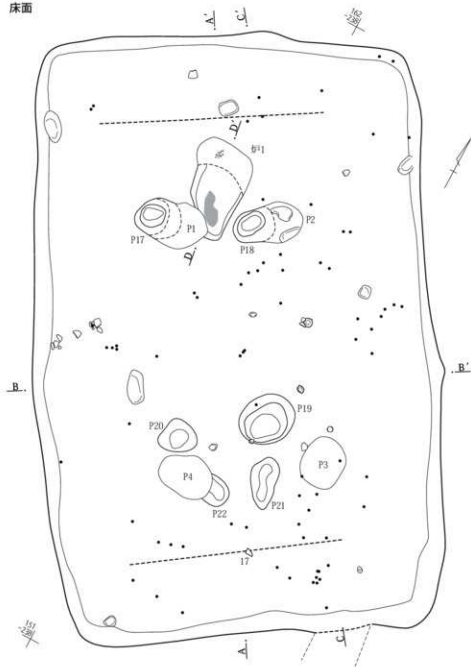


第457図 4区3A号竪穴建物 床面 平・断面図

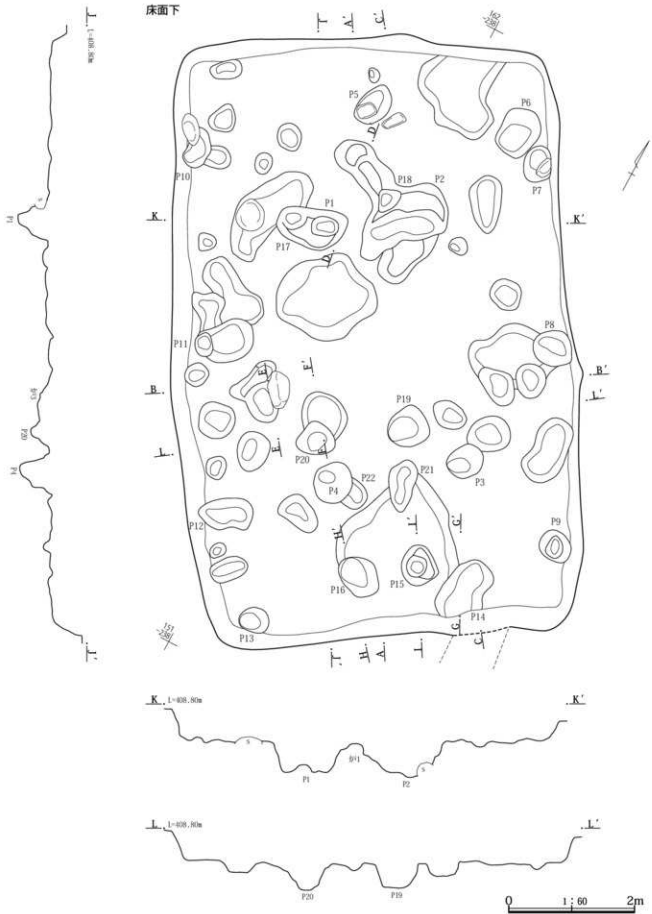
第4章 検出された遺構と遺物



床面

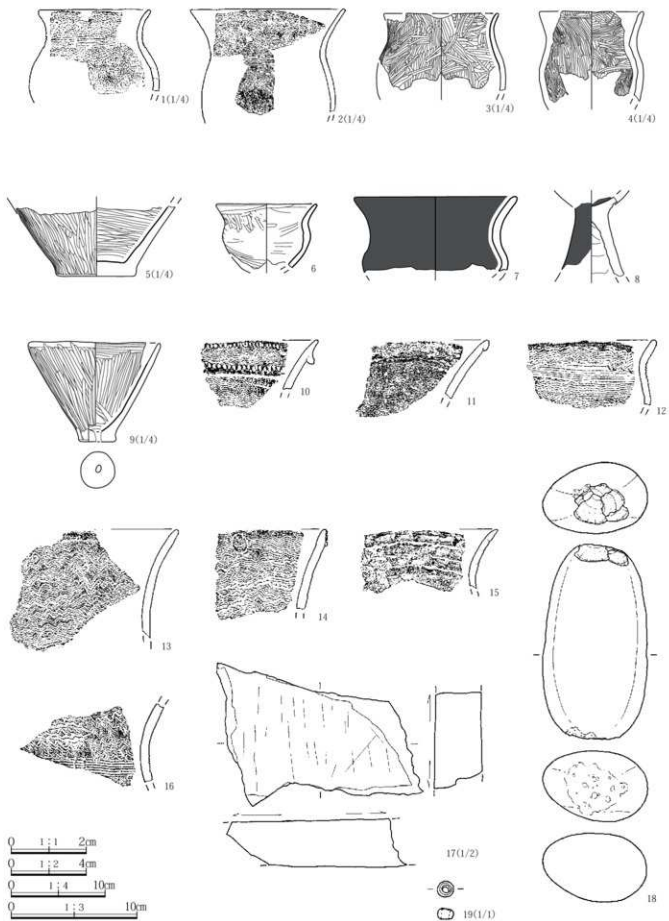


第458図 4区3A号竪穴建物 断面図・3B号竪穴建物 床面 平面図



第459図 4区3号竪穴建物 床面下 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第400図 4区3号竪穴建物 出土遺物

深さ6cmを測る不整楕円形を呈する。竪2はP4の北側にあり、長軸74cm、短軸49cm、深さ9cmを測る。楕円形を呈し、竪内中央には棒状の枕石が短軸方向に据えられ被熱している。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本と考えられ、細長い歪んだ四角形を呈する。主柱穴上面は円形を呈し、径50～80cm、深さ68～80cmを測り、埋土は上位の暗褐色土(ロームブロックを含む)と下位の暗褐色土(汚れたロームが主体)に分層できる。P5およびP6も主柱穴状ではあるが、P6は他の主柱穴に比べて浅い。また、東壁際にはP8～12、西壁際にはP13～15の壁柱穴が配置されている。これら壁柱穴は、概ね円形で径25～35cm、深さ20～60cmを測る。埋土は、上位に暗褐色土(ロームブロックを含む)と下位に暗褐色土(汚れたロームが主体)である。

貯蔵穴：南壁の中央東寄りに位置し、入口施設の東隣にある。P16が該当し、径65cm前後、深さ55cmを測る円形を呈し、炭化材が出土している。埋土は黒褐色土を主体とする。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置し、壁際から24～46cmほど内側に2基のピット(P17・18)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈する。埋土はローム粒やロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。このP17とP18の間隔は、芯々で70cmを測る。

床面下：床面下は、全体に僅かな掘り込みをもち、中央がやや低くなる。底面には小さな凹凸が確認される。埋土は黄褐色ローム土を含む黒褐色土(土層断面4層)が主体となり、堅く締まっている。

出土遺物：遺物の出土量はやや多く、埋土中や床面に近くの出土が目立ち、床直出土の土器もある。床直出土の土器は、建物の南東隅付近からで、1は横位に潰れた状態で、3は口縁部から胴部上半が正位で出土している。

出土遺物として、土器11点と石器1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1の括れ部に櫛描T字文、肩部に櫛描波状文と各T字文下にポタン状貼付文を配する土器。2の短く折返す複合口縁がある。壺には3～6があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連籬文を施し、4の口縁下には輪積み痕を残す。また、7は無文の台付甕の脚部である。さらに、8～

10は高杯で、8・9の内外面に赤色塗彩が施され、10は脚部である。そして、11は無文の小型鉢である。

石器としては、12の粗粒輝石安山岩製の打製石斧がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに打製石斧(粗粒輝石安山岩)、石核(粗粒輝石安山岩)、二次加工剥片(黒曜石・黒色頁岩)、剥片(黒色頁岩・赤碧玉)が出土している。

所見・時期：本建物は大型建物であるが、主柱穴の配置や建物方向等から拡張を伴う可能性は低い。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区7号竪穴建物

(第464～466図、第28・205表、PL.135・136・260)

平成27年度の調査で検出した。建物の南東側は調査区外となる。

位置：4-D区の東端中央の東壁際に位置し、南西側に4区3号竪穴建物が隣接し、西北西側13.5mに4区1号竪穴建物がある。

グリッド：2F～2H-46～48

座標値：X=61,157～61,165 Y=93,229～93,235

形状：隅丸長方形を呈する中型建物と考えられるが、建物の南東側を欠く。

規模：長軸7.66m 短軸5.06m 壁高27～61cm

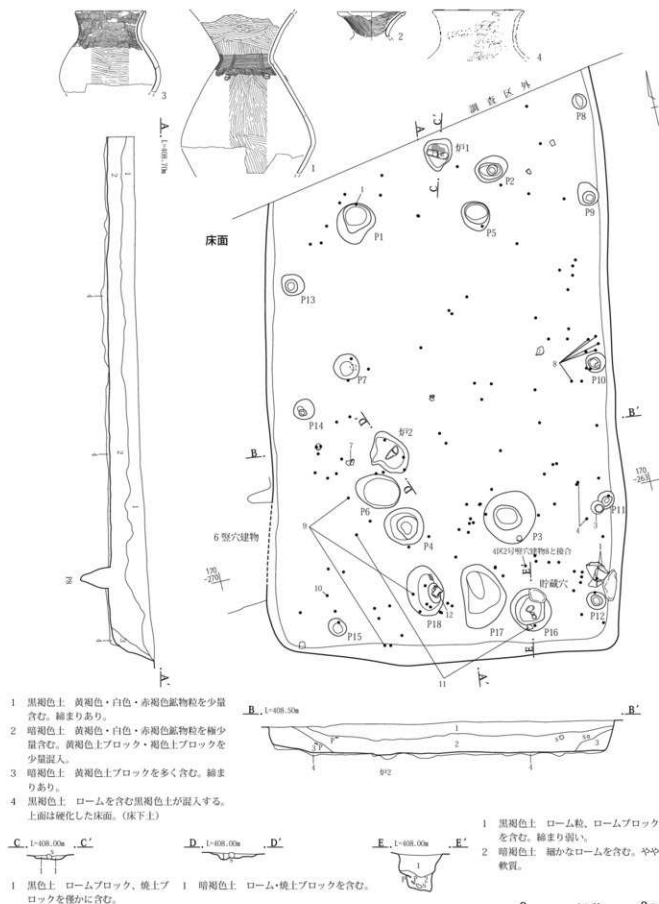
長軸方向：N-10°-W 床面積：推定34.38㎡

埋没土：1・2層とした黒褐色土を主体とし、3層とした壁際の黄褐色ロームブロック(壁崩落土)を含む褐色土とに分層できる。2層中には、大小の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

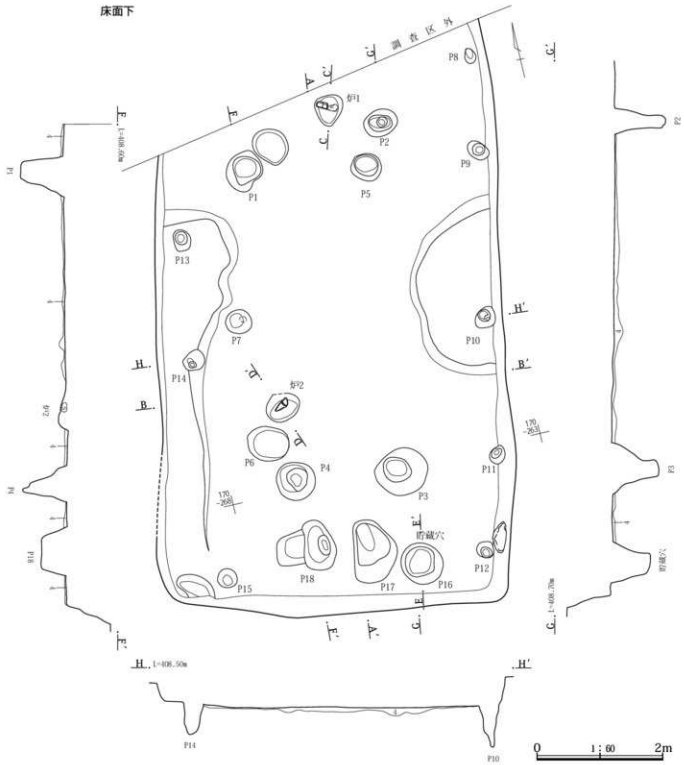
床面・壁：床面はローム土および礫層中にあり、黄褐色ローム土を含む暗褐色土(土層断面4層)上面が床面となる。概ね平坦となるが、北東部はやや高く、ほぼ全体が硬化し、特に竪穴建物中央からが周辺にかけての硬化が著しい。壁高は27～61cmを測り、南壁が最も高く、全体に垂直気味に立ち上がる。南北の両壁面には、地山礫層が露出する。

竪：建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2の北側にある。地床がで、規模は長軸139cm、短軸80cm、深さ10cmの長楕円形を呈し、掘り鉢状に緩く凹む。底

第4章 検出された遺構と遺物

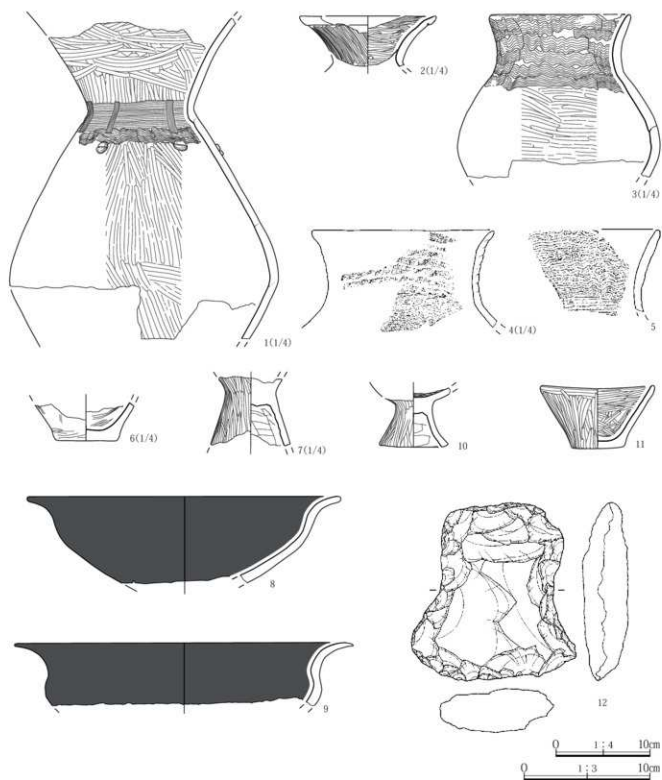


第461図 4区4号竪穴建物 床面 平・断面図



第462図 4区4号竪穴建物 床面下 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第463図 4区4号竪穴建物 出土遺物

面の南寄りには被熱して焼土化が著しい。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP5から構成され、細長い五角形状を呈する。主柱穴上面は円形ないし楕円形を呈し、長軸40～70cm前後、短軸30～50cm前後、深さ45～55cmを測り、底面が礫層となる。主柱穴の埋土は、褐色土を主に、暗褐色土、黄褐色土の3層に分層できる。P5は径30cm、深さ10cmを測り、他の主柱穴に比べて浅い。また、壁柱穴が配置され、北東隅と北西隅のP6とP10、P7とP11が対応し、同様に南西隅のP12に対応する南東隅の壁柱穴が想定される。これら壁柱穴は、概ね円形で径30～40cm、深さ15～25cmを測り、黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置すると考えられ、壁際から24cmほど内側に2基のピット(P14・15)が平行して並ぶ。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、埋土は黒褐色土を主体とする。このP14とP15の間隔は、芯々で1.0mを測る。

床面下：床面下は僅かな掘り込みをもち、中央が高く、北側と南側がやや低くなる。中央の高い底面には小さな凹凸が確認され、南北両側の低い底面には壁面に露出した地山礫が続く。これらの凹凸や掘り込みは、地山礫を除去によるものと考えられる。床面下の埋土は、黄褐色ローム土を含む黒褐色土(土層断面4層)が主体となり、堅く締まっている。なお、主柱穴P1とP2の間に、円形を呈する床下土坑(径80cm、深さ23cm)が1基検出された。

出土遺物：遺物の出土量は少なく、そのほとんどが埋土中からの出土である。

出土遺物として、土器12点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1と6があり、1は口縁下に粗雑な櫛描波状文を施し、6は肩部に櫛描波状文やT字文とボタン状貼付文を配する。甕には3～5・7・8があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連糜文を施すもので、3は台付甕となる。また、9～11は高杯で、9は口縁下に僅かな稜をもち、10・11の内外面には赤色塗彩が施されている。また、12は無文の蓋ないし鉢の底部である。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに石器として石核(変質安山岩)、二次加工剥片(黒曜石)、剥片(黒

曜石・赤碧玉)が出土している。

所見・時期：地山礫層に達する掘り込みをもつ建物で、その時期は出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区8号竪穴建物

(第467～469図、第28・206表、PL.136・137・261)

平成27年度の調査で検出した。西辺のみを拡張させた可能性をもつ。

位置：4-D区南東の南壁際に位置し、北東側14.0mに4区3号竪穴建物、西側9.0mに4区12号竪穴建物がある。

グリッド：2B・2C-50・51

座標値：X=61,136～61,143 Y=93,246～93,252

形状：隅丸長方形を呈する中型建物で、西辺がやや歪む。

規模：長軸6.79m 短軸5.05m 壁高20～44cm

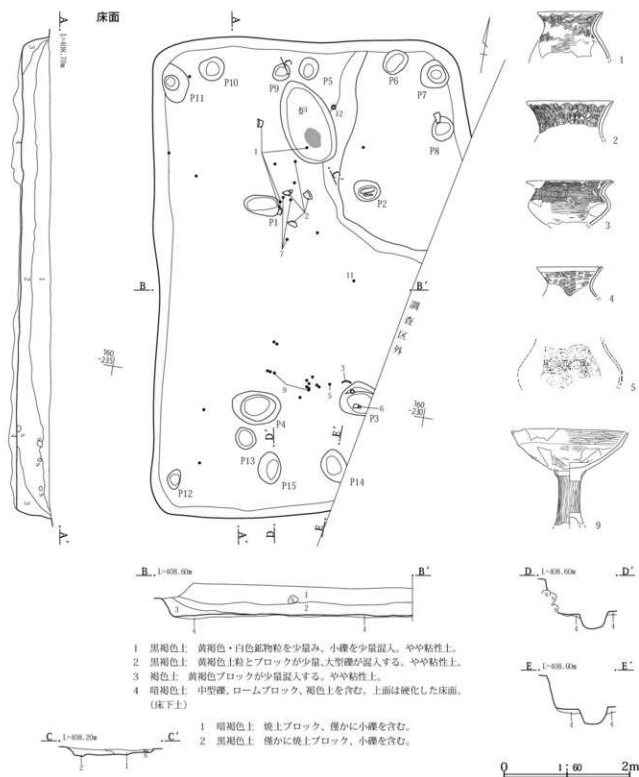
長軸方向：N-43°-W 床面積：26.66㎡

埋没土：1・2層とした黒褐色土を主体とし、3層とした壁際の黄褐色土粒を含む暗褐色土とに分層できる。1層中には、大小の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

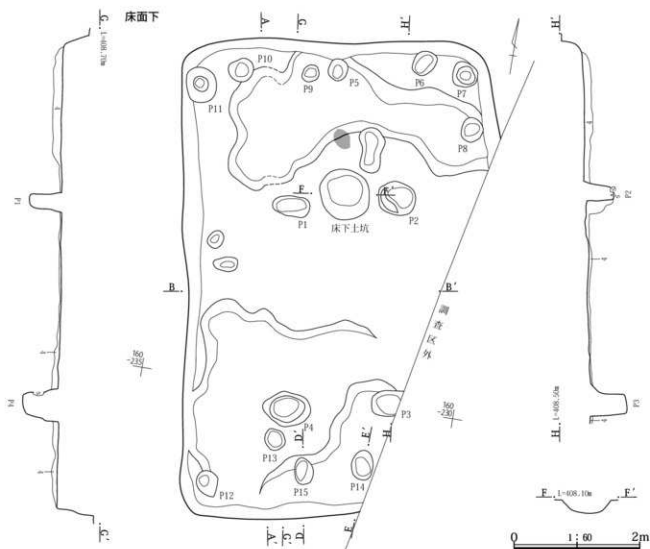
床面・壁：床面はローム土中にあり、概ね平坦で、全体が硬化している。但し、北西隅には、床面より一段高い土壇状の箇所が存在する。また、建物中央と西壁付近の床面には、被熱して焼土化した部分を確認した。建物中央の焼土部分は、120×90cmと範囲が広いものの、炬とは異なる(量は少ないが、床面上に炭化材を出土していることから、焼失に伴う焼土化の可能性をもつ)。なお、床面には、大型地山礫の上面が露出する箇所が点在する。壁高は20～44cmを測り、全体にやや垂直気味に立ち上がり、部分的に上部が開く。

炬：建物の長軸方向北側に位置し、P1とP2の中間北寄りにある。規模は長軸90cm、短軸45cm、深さ4cmの長楕円形を呈し、掘り鉢状に緩く凹む。中央には棒状礫を枕石として据え、底面は被熱して赤色に焼土化している。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成する長方形を呈するが、P1・4の西側にP9・10を配して建物西辺の出張り部を補助する状況で、変形な上層構造が想定で



第464図 4区7号竪穴建物 床面 平・断面図



第465図 4区7号竪穴建物 床面下 平・断面図

きる。主柱穴上面は円形ないし楕円形を呈し、P1は極端に小さく長軸36cm、短軸18cm、深さ44cmを測り、P2～4は長軸60～70cm前後、短軸46cm前後、深さ45～60cmを測る。主柱穴の埋土は、黒褐色土と暗褐色土ないし鈍い黄褐色土に分層できる。P9・10は径40cmの円形で、深さ30～45cmを測り、埋土は主柱穴と同様である。一方で、P5・6はそれぞれ主柱穴の長軸上にあるが、柱穴の途中に床面下部の地山礫が露出して浅く、埋土が汚れた黄褐色ロームブロックを多量に含む硬く締まった暗褐色土であることから、柱穴として使用していない状況が窺える。また、壁柱穴として、東壁にP14、西壁にP17～22が配置されている。これら壁柱穴は、概ね円形で径22～30cm、深さ15cm前後を測り、黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

貯蔵穴：南東隅付近に2基検出された。貯蔵穴1は、径

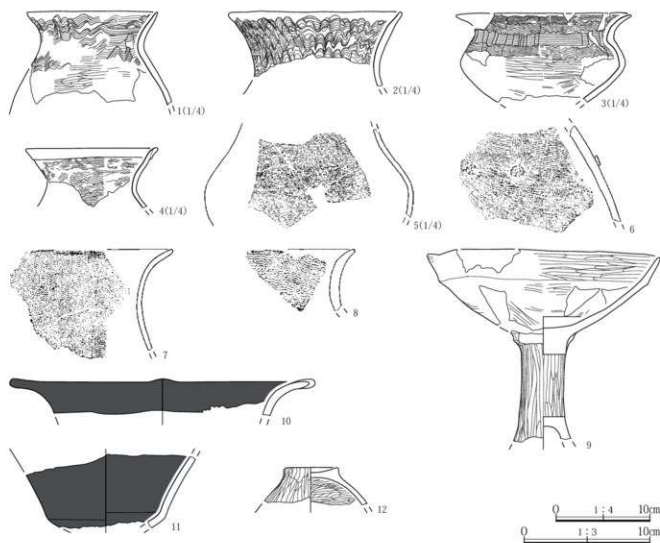
56cm、深さ36cmを測る円形を呈し、底面は礫層中にある。埋土は黒褐色土と暗褐色土に分層でき、拳大の礫を混在する。貯蔵穴2は、長軸56cm、短軸45cm、深さ27cmを測る楕円形を呈し、底面は礫層面にある。

入口施設：P15・16の2基のピットが南壁中央付近に確認されているが、両者は南壁に平行していない。共に底面北側が深くなるように北傾斜していることから、梯子穴の可能性が高いか疑問も残る。

その他の施設：北西隅に、床面より一段高い土壇状の箇所をもつ。この土壇上面にはP21・22が検出され、土壇自体は堅く締まり、ローム土に僅かに暗褐色土を含む褐色土で構築されている。

床面下：床面下は、僅かな掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。南半ほど凹凸の著しい底面となる。底面は礫層上面に近く、床面に露出した大型礫や、大

第4章 検出された遺構と遺物



第466図 4区7号竪穴建物 出土遺物

小の礫が露呈する。特に、南西側西壁付近に露出した大型礫の周囲には、大型礫を取り巻くように大きく掘り込んだ状況が認められ、大型礫の除去を試みたことを窺わせる。床面下の埋土は、黄褐色土とロームブロックの混在土で、上面は硬い床面を構築している。

出土遺物：遺物の出土量はやや多く、埋土中や床面に近くの出土が目立ち、床直出土の土器もある。床直出土の土器は、建物の南東隅付近からで、5は口縁部から胴部上半が正位で、1は横位に出土している。また、貯蔵穴1内からは、甕の胴下半が出土している。

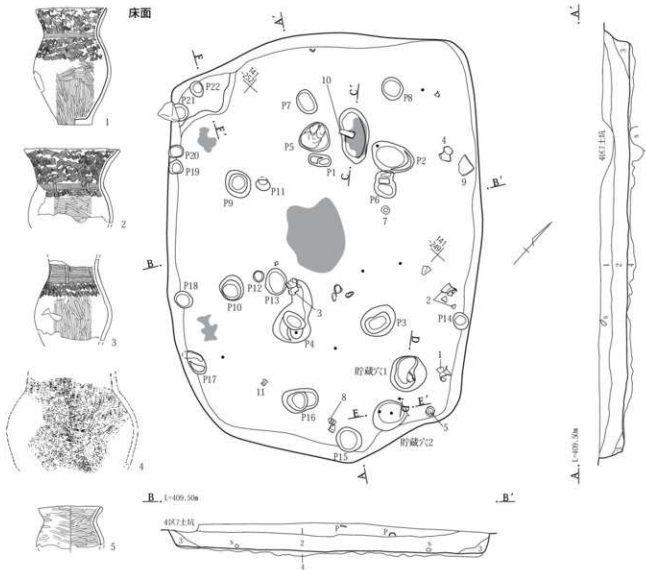
出土遺物として、土器8点と石器2点、石製品1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に6の折返し複合口縁片と、7の底部がある。甕には1～5があり、口縁下に柳描波状文や柳描連塵文を施すもので、5は無文の甕。また、8は高杯で、内外

面に赤色塗彩が施されている。

石器はいずれも礫石器の砥石で、9は変質安山岩製、10は粗粒輝石安山岩製である。また、石製品として粗粒輝石安山岩製の11がある。

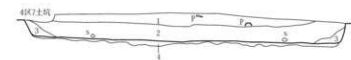
未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片(黒曜石)、剥片(黒曜石・黒色頁岩)が多く出土している。

所見・時期：本建物は、当初の段階では短軸が4m前後の隅丸長方形を呈し、その後に西辺のみを拡張させた結果、P9・10の補助的な柱穴を加え、さらに北西隅の土壇状の施設を増設したものと考えられる。また、床面上に出土した炭化材や焼土化した床面の状況から、焼失家屋の可能性が極めて高い。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。



B, 1=409.50m

B'



A, 1=409.50m

- 1 黒褐色土 赤褐色・黄褐色・白色鉱物粒を少量含み、中型礫を多く含む。
- 2 黒褐色土 1層よりも鉱物粒子が多く混入し、黄褐色土ブロックを微量含む。締まりあり。
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒が混入している。締まりあり。
- 4 黄褐色土 黄褐色土、ロームブロックを含む。上面は硬化した床面。(床下上)



C, 1=409.00m C'

1 鈍い黄褐色土 焼土ブロックを多く含む。



D, 1=409.00m D'

- 1 褐色土 小ブロック以下の白色・黄褐色鉱物粒を少量含む。締まりのある上。
- 2 暗褐色土 黄褐色土小ブロック、拳大の円礫を少量含む。締まりのある上。



E, 1=409.00m E'

1 黒褐色土 白色・黄褐色鉱物粒、褐色土ブロックを少量含む。



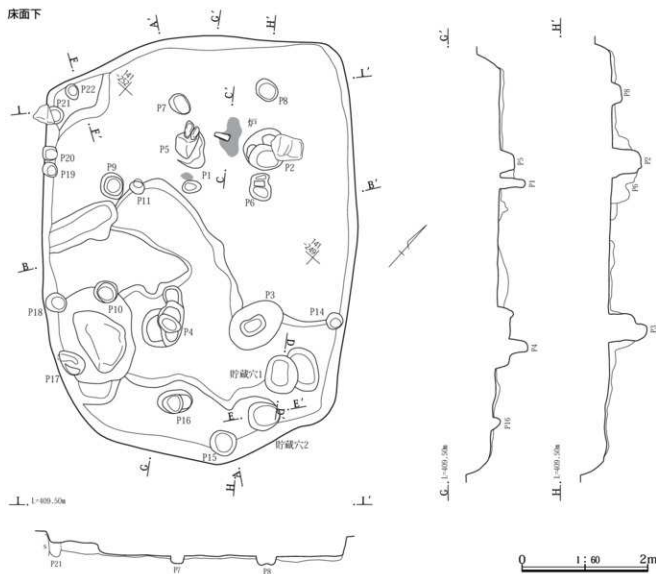
F, 1=409.30m F'

1 褐色土 ローム土を主体とし、僅かに暗褐色土を含む。



第467図 4区8号竪穴建物 床面 平・断面図

床面下



第468図 4区8号竪穴建物 床面下 平・断面図

4区11号竪穴建物

(第470図、第28・209表、PL.139・264)

平成27年度の調査で検出した。4区10号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の中央付近に位置し、時期の異なる4区10号竪穴建物と重複する。北東側2.5mに4区2号竪穴建物、北側7.5mに4区4号竪穴建物、南側11.0mに4区12号竪穴建物がある。

グリッド：2 E～2 G-54・55

座標値：X=61,153～61,160 Y=93,265～93,270

重複：本建物の北西隅に、4区10号竪穴建物の南東隅が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

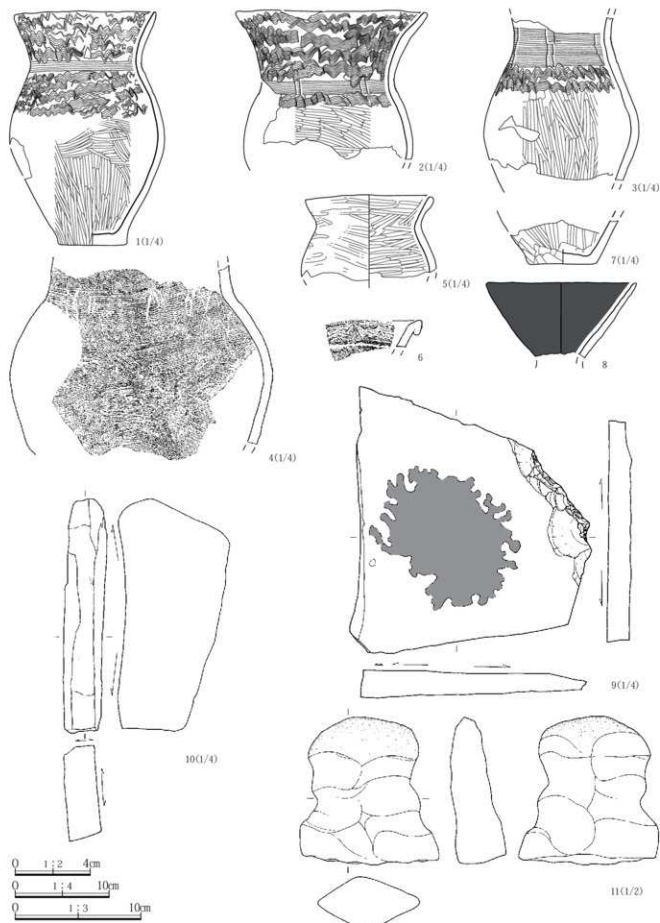
形状：隅丸長方形を呈するが、短軸側となる南辺より北辺の方がやや広い。

規模：長軸6.16m 短軸4.08m 壁高17～30cm

長軸方向：N-12°-W 床面積：推定22.12㎡

埋没土：1層とした黒褐色土(下位に黄褐色土ブロックが多い)を主体とし、層中に人頭火を含む大小の礫を多量に含む。

床面・壁：床面はローム土および礫層中にあり、床面の状態は建物の北半と南半で大きく異なる。北半の床面と南端中央部分は比較的平坦な状態にあるが、建物の中央および西寄り地山礫がむき出しとなり(平面図には、礫の状態は図示していない。PL.139参照)、凹凸が激しく、床面が構築されたとは考え難い。また、



第469図 4区8号竪穴建物 出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

北半の床面もほとんど硬化していない。壁は、南半の東・南壁が緩い立ち上がりとなり、壁高は17~30cmを測る。

炬：検出されていない。

柱穴：主柱穴はP1~4の4本で構成する長方形を呈するが、規模は径40cm前後の円形で、深さ15cmを測り、かなり浅い。他に4基のピットを確認したが、礫の抜き取り痕の可能性もある。柱穴およびピットの埋土は、暗褐色土が主体となる。

貯蔵穴：礫の抜き取りによる落ち込みの可能性を残すが、ここでは貯蔵穴として扱う。北半の西側壁寄りであり、長軸92cm、短軸70cm、深さ27cmを測る楕円形を呈する。埋土は暗褐色土を主体とし、大小の礫を混在する。

入口施設：検出されていない。

床面下：床面が認められた北半および南端部では、地山礫を除去した凹みを確認した。南ほど凹みが著しい底面となり、地山礫が剥き出しとなる。床面下の埋土は、北半はロームブロック混じりの黒褐色土で、南端は鈍い黄褐色土。

出土遺物：遺物の出土量は極めて少ない。土器6点を図示した。

土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に2の折返し複合口縁片がある。甕には1・3~5があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連雁文を施すもので、5は小型台甕である。また、6は高杯の脚部で、外面に赤色塗彩が施されている。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに石器として剥片(黒曜石・黒色頁岩)が出土している。

所見・時期：検出された床面および柱穴の状態、さらに炬が無いことから、建物として使用されたとは考え難く、むしろ未完成の遺構の可能性が高い。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区12号竪穴建物

(第471~473図、第28・210表、PL.139~141・264)

平成27年度の調査で検出した。地山礫層を掘り込んだ竪穴建物である。

位置：4-D区の中央南側に位置し、北側11.0mに4区11号竪穴建物、東側9.0mに4区8号竪穴建物がある。

グリッド：2B・2C-53・54

座標値：X=61,138~61,143 Y=93,262~93,266

形状：隅丸長方形を呈する。

規模：長軸4.58m 短軸3.73m 壁高24~47cm

長軸方向：N-26°-W 床面積：13.86㎡

埋没土：1・2層とした黒褐色土を主体とし、3層とした壁際のロームブロックを僅かに含む暗褐色土とに分層できる。1・2層中には、大小の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。建物中央北側の炬周辺と中央南側の床面には、被熱して焼土化した部分を数カ所確認した。また、建物中央付近から南側の床面上には、多くの炭化材を出土しており、焼失に伴う床面の焼土化と考えられる。なお、床面および壁面には、大型地山礫の上面なし礫層が露出する箇所がある。地山礫層は、建物北半を西側から東側へと延びるようにあり、その礫層を分断するように竪穴建物が構築された結果、東・西壁の一部が石垣状に礫層が露出した壁を構成する。壁高は24~47cmを測り、全体にやや垂直気味に立ち上がる。

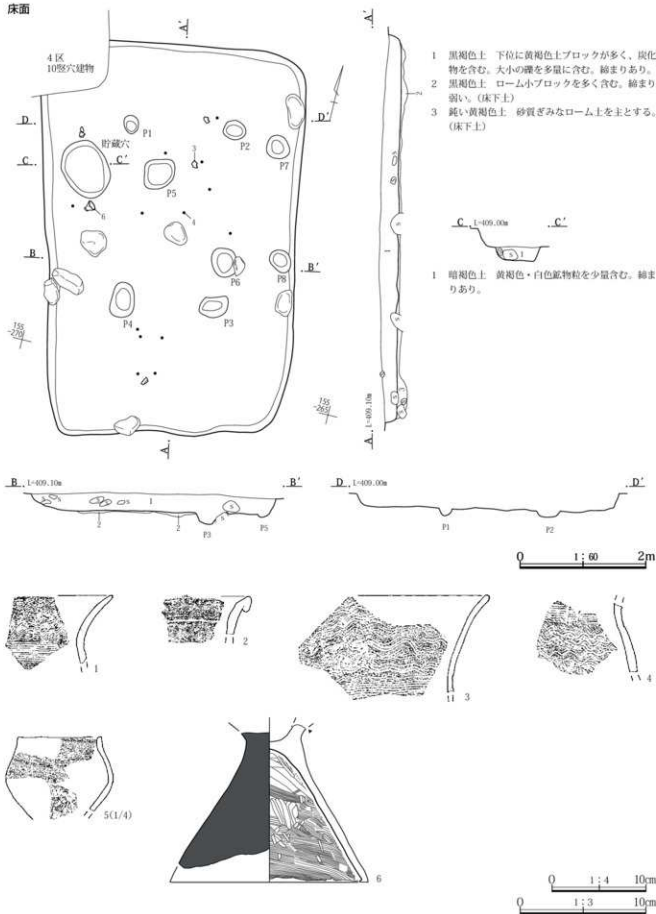
炬：建物の長軸方向北側に位置し、規模は長軸128cm、短軸73cm、深さ8cmを測る不整な長楕円形を呈する。中央南寄りには、枕石として棒状礫を長軸に直行するように据えている、底面は焼土化していない。

柱穴：床面調査でP1~6のピットを確認したが、主柱穴とは考え難い。各々、径25~30cm、深さ10~18cmを測る円形を呈するが、地山礫の抜き取り痕の可能性もある。埋土は、黒褐色土や鈍い黄褐色土である。

貯蔵穴：南東隅付近に2基検出した。貯蔵穴1は南壁に露出する地山礫際で、入口施設と考えられる南壁中央に位置する大型礫の東脇にある。規模は長軸56cm、短軸45cm、深さ22cmを測る楕円形を呈する。埋土は、黄褐色土ブロックを少量混入する黒褐色土。貯蔵穴2は東壁際にあり、長軸60cm、短軸46cm、深さ15cmを測る楕円形を呈する。埋土は、白色鉱物粒、焼土粒、炭化物を少量含む黒褐色土。

入口施設：大型礫を南壁中央際に据えて入口施設としている。大型礫は、礫の平坦な面を上面とし、掘り込み

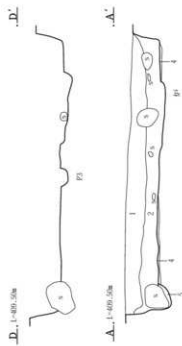
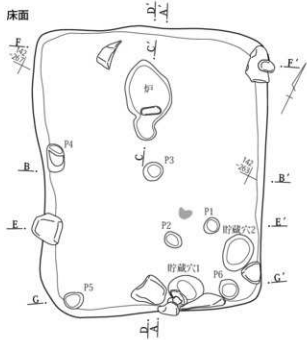
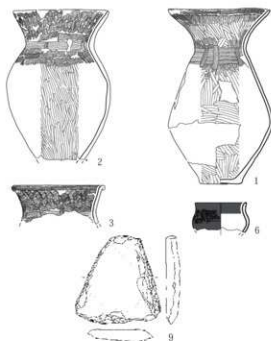
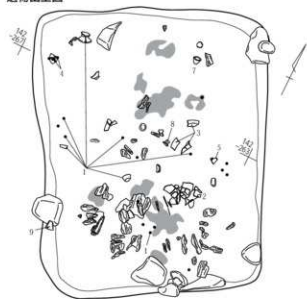
床面



第470図 4区11号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

遺物出土図



- 1 黒褐色上 赤褐色・黄褐色・白色鉱物粒を少量含む。締まり強い。
- 2 黒褐色上 赤褐色・黄褐色・白色鉱物粒を含む。
- 3 暗褐色上 ロームブロックを僅かに含む。
- 4 鈍い黄褐色上 ロームを含み、上面は硬化した床面。(床下土)
- 5 黒褐色上 白色鉱物粒、焼土粒、炭化物を少量含む。締まりあり。(床下土)

C-C'

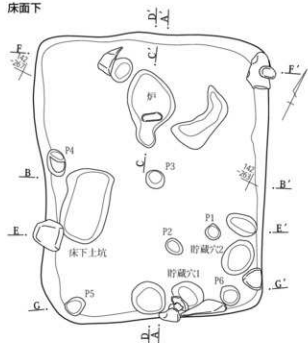
- 1 黒褐色上 焼土・黄褐色上ブロック、炭化物を少量含む。

0 1:60 2m

第471図 4区12号竪穴建物 遺物出土図、床面 平・断面図

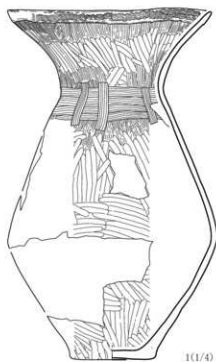


床面下

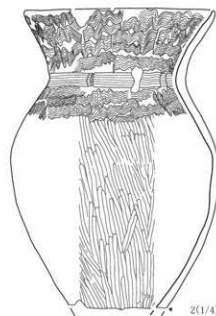


4 鈍い黄褐色土 ロームを含み、上面は硬化した床面。(床面上)

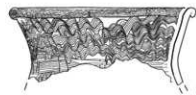
0 1:60 2m



1(1/4)



2(1/4)



3(1/4)



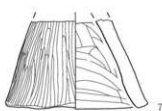
4(1/4)



5



6(1/4)



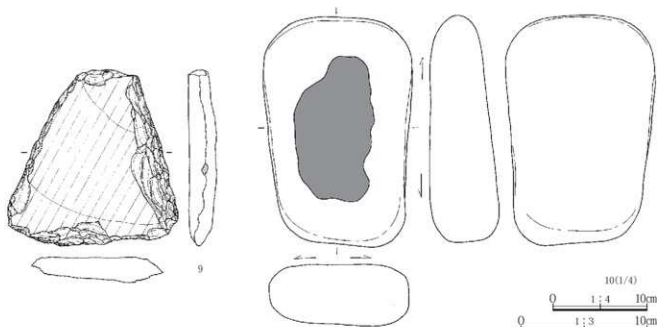
7



8

0 1:4 10cm
0 1:3 10cm

第472図 4区12号壺穴建物 床面下 平・断面図、出土遺物(1)



第473図 4区12号竪穴建物 出土遺物(2)

内に据えて安定させている。床面から上端面までの高さ(段差)は20cmを測る。

床面下：床面下に土坑を確認した。この床下土坑は建物中央西壁際に位置し、長軸118cm、短軸74cm、深さ10cmを測り、隅丸長方形を呈する。埋土は、白色鉱物粒、焼土粒、炭化物を少量含む黒褐色土。また、床面下には僅かに掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面は凹凸が多く、部分的に大小の礫が露呈する。床面下の埋土は鈍い黄褐色土で、上面は硬化し床面となる。

遺物：遺物の出土量は比較的多く、埋土中や床面に近くの出土も目立ち、床面直上の土器も多い。1や4・7は埋土中から出土。床直出土の土器は、建物中央付近から、2および5は横位に潰れた状態、3は口縁部が散乱した状態で出土している。

出土遺物として、土器8点と石器2点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1の短く折返す複合口縁と櫛描波状文を施し、括れ部に櫛描T字文を施す土器があり、6は櫛描波状文を施しながらも内外面に赤色塗彩を施した短頸壺。甕には2～5があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連簾文を施すもので、5は台付甕の脚部である。また、7は高杯の脚部であり、8は無文の蓋の握み部である。

石器には9の細粒輝石安山岩製の石鎌と、10の石英閃緑岩製の砥石がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片(変質安山岩)、台石(細粒輝石安山岩)、剥片(黒曜石)が出土している。

所見・時期：床面上の焼土や多量の炭化材を伴うことから、焼失建物と考えられる。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区14号竪穴建物

(第474図、第28・212表、PL.142・265)

平成27年度の調査で検出した。4区9号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の北西隅に位置し、時期の異なる4区9号竪穴建物と重複する。北東側7.5mに4区22号竪穴建物、東側16.0mに4区2号竪穴建物、南東側14.5mに4区11号竪穴建物がある。

グリッド：2G-2I-57・58

座標値：X=61,164~61,170 Y=93,282~93,286

重複：本建物の南東側を、4区9号竪穴建物の西側が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：隅丸長方形を呈する。

規模：長軸(5.35)m 短軸2.92m 壁高12~32cm

長軸方向：N-24°-W 床面積：(12.29)m²

埋没土：1・2層とした黒褐色土を主体とし、3層とした壁際のロームブロックを僅かに含む暗褐色土とに分

層できる。1・2層中には、大小の自然礫が多く含まれ、人為的に投棄された状況にあった。依って、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。壁高は12~32cmを測り、全体にやや垂直気味に立ち上がる。

炬：建物の長軸方向北側に位置し、規模は長軸100cm、短軸52cm、深さ4cmを測る不整な長楕円形を呈する。中央北寄りには、枕石として棒状礫を長軸に直直ぎみに据え、底面は被熱して赤色に焼土化している。

柱穴：床面調査でP1を確認したが、主柱穴とは考え難い。規模は、径30cm、深さ18cmを測る円形を呈する。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置すると考えられ、壁際からやや内側に2基のピット(P2・3)が平行して並ぶ。共に円形を呈し、埋土は黒褐色土ないし黒色

土を主体とする。このP2とP3の間隔は、芯々で50cmを測る。

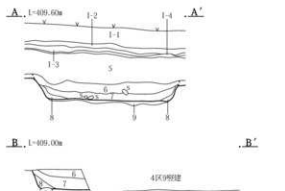
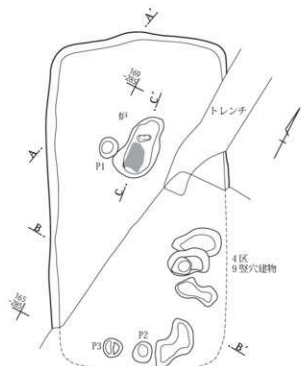
床面下：床面下には僅かな掘り込みと、地山礫を除去した浅い凹みを確認した。地山礫層を底面とする南東半では、大小の礫が露呈して凹凸が多い。床面下の埋土は黄褐色土で、上面は硬化した床面となる。

遺物：遺物の出土量は極めて少なく、土器が埋土中から出土している。石器は出土していない。

出土した土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、甕の破片4点を図示した。口縁下に櫛描波状文や櫛描連雁文を施すものである。

未掲載遺物には、同時期の土器片があるものの、石器類の出土はない。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。



- 1-1 黒褐色土 As-珪軽石を少量含む。
- 1-2 黄褐色土 As-珪軽石を多量含む。
- 1-3 鈍い黄褐色土 鈍い黄褐色火山灰土。
- 1-4 黒褐色土 僅かにAs-B珪軽石を含む。
- 5 黒褐色土 混入物はない。上面が第1面の遺構確認面。下位が第2面の遺構確認面。
- 6 暗褐色土 白色鉱物粒、礫を少量含む。
- 7 黒褐色土 ロームブロック、礫を微量含む。
- 8 褐色土 ロームブロックを主体とする。
- 9 暗褐色土 ロームブロック、小礫を含む。上面は硬化した床面。(床下土)

- 1 黒褐色土 焼土粒、焼土ブロック、炭化物を僅かに含む。



0 1:60 2m

0 1:4 10cm
0 1:3 10cm

第474図 4区14号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

4区17号竪穴建物

(第475・476図、第28・214表、PL.143・144・266)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の東寄りに位置し、北東側5.5mに4区31号竪穴建物、東側4.5mに4区21号竪穴建物、南西側5.0mに4区18号竪穴建物、北西側4.5mに4区24号竪穴建物がある。

グリッド：Z～2B-65・66

座標値：X=61,128～61,135 Y=93,323～93,328

形状：隅丸長方形

規模：長軸7.23m 短軸4.48m 壁高30～52cm

長軸方向：N-1'-W 床面積：28.36㎡

埋没土：1層の黒褐色土と2層の暗褐色土を主体とし、

3層とした壁際のロームブロックを含む暗褐色土とに分層できる。1・2層中には、大小の自然礫が少量含まれ、人為的な埋没の可能性が高い。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。壁高は30～52cmを測り、全体に垂直気味に立ち上がる。また、壁面全体には、縦に筋状となる痕跡が確認され、精査の結果、壁際に25cm前後の間隔をもって巡る径10cm程の壁際ピットを計54カ所検出した。この壁際ピットの深さは30cm前後を測り、床面下には達しない。

炉：3箇所に炉を検出した。炉1は建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2のやや北側にある。地床炉で浅い掘り込みをもち、炉内中央には棒状の枕石が短軸方向に据えられ被熱している。炉底面は、一部が被熱して焼土化している。炉の規模は、長さ60cm、幅55cm、深さ10cmを測る楕円形を呈する。炉2はP4の北西側にあり、長軸65cm、短軸47cm、深さ5cmを測る楕円形を呈し、枕石なく、底面は被熱している。炉3はP2・3の中間にあり、長軸63cm、短軸50cm、深さ5cmを測る楕円形を呈し、底面は被熱している。

柱穴：主柱穴は、P1～4の4本で構成する長方形を呈する。主柱穴上面は楕円形ないし円形(長軸40～52cm、短軸30～47cm)で、底面は東西方向に長い楕円形(長軸15～25cm、短軸10～16cm)となり、深さ58～70cmを測り、埋土は黒褐色土と褐色土に分層できる。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P5とP8、P6とP9、P7とP10)が配置されている。こ

れら壁柱穴は、概ね円形で径30cm前後、深さ25～35cmを測り、黒褐色土を主体としている。

貯蔵穴：南東隅付近の南壁際に検出した。規模は長軸54cm、短軸48cm、深さ40cmを測る楕円形を呈する。埋土は、黄褐色土ブロックを混入する黒褐色土で、円礫を混入する。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置し、壁際から50cmほど内側に2基のピット(P12・13)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈する。埋土はローム・黄褐色土ブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。このP12とP13の間隔は、芯々で105cmを測る。また、両ピットの間には、P11とした土坑状の施設が検出されている。

床面下：ローム面が床面となり、床面下は存在しない。

遺物：遺物の出土量は少なく、そのほとんどが埋土中からの出土である。

出土遺物として、土器5点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1の外面と内面口頸部に赤色塗彩を施した土器。甕に2の口縁下に櫛描波状文や櫛描連文を施すもの、3の小型台付甕がある。また、4・5は高杯の脚部である。

未掲載遺物には、同時期の土器片があるものの、石器類の出土はない。

所見・時期：壁際および壁面に見られた壁際ピットは、本建物以外でも4区18号竪穴建物や4区21・24号竪穴建物においても確認されており、建物に伴う施設と考えられ、建物の壁構造を補う痕跡と推測できよう。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区18号竪穴建物

(第477・478図、第28・215表、PL.144・145・266)

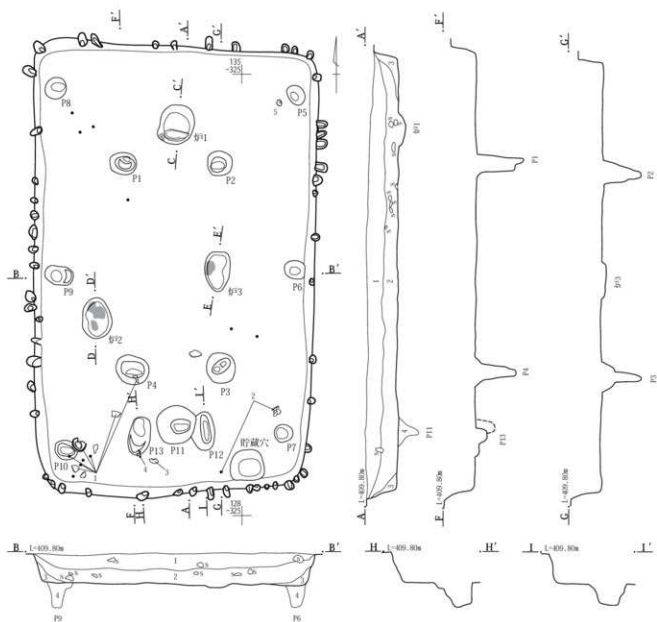
平成27年度の調査で検出した。建物の南半は調査区外となる。

位置：4-B区の中央南壁際に位置し、北側6.5mに4区24号竪穴建物、北東側5.0mに4区17号竪穴建物、北北西側8.7mに4区25号竪穴建物がある。

グリッド：Y・Z-67・68

座標値：X=61,124～61,128 Y=93,332～93,337

形状：隅丸長方形



- 1 黒褐色土 白色・赤褐色鉱物粒と褐色土ブロックを含み、大小の礫が少量混入する。やや軟弱土。
- 2 暗褐色土 1層よりも混入物が多く、礫の混入は少ない。締まりあり。
- 3 暗褐色土 黄褐色土小ブロックが混入する。やや締まりあり。
- 4 黒褐色土 ロームブロック・黄褐色土ブロックが多く、礫を少量含む。(壁柱穴)



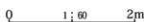
- 1 黒褐色土 焼土・黄褐色土ブロック、炭化物を混入する。



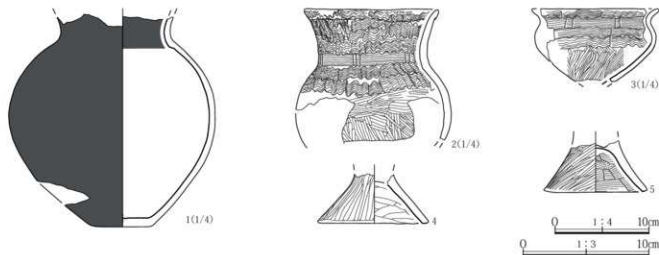
- 1 黒褐色土 焼土・黄褐色土ブロック、炭化物が少量混入する。



- 1 黒褐色土 焼土・黄褐色土ブロック、炭化物が少量混入する。



第475図 4区17号壁穴建物 床面 平・断面図



第476図 4区17号竪穴建物 出土遺物

規模：長軸(3.92)m 短軸4.05m 壁高38～46cm

長軸方向：N-27°-W 床面積：(12.38)㎡

埋没土：1層としたAs-Kkを含む暗褐色土(基本土層1層)、2層のAs-Kkを含まない黒褐色土の下に、3層の暗褐色土を主体とし、4層のローム粒を多く含む明褐色土とに分層できる。3層中には、多くの炭化物や炭化材、さらには多量の遺物が出土している。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。壁高は38～46cmを測り、全体に垂直気味に立ち上がる。また、東壁面は被熱して焼土化が著しい。さらに、壁面全体には、縦に筋状となる痕跡が確認され、精査の結果、壁際に粗密はあるが25cm前後の間隔をもって巡る径10cm程の壁際ピットを計28カ所検出した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。

炉：建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2のやや北側から中間にかけてにある。地床炉で浅い掘り込みをもち、炉底面は一部が被熱して焼土化している。炉の規模は、長さ138cm、幅64cm、深さ6cmを測る不整な長楕円形を呈する。

柱穴：主柱穴となるP1・2を確認した。4本で構成する、長方形を呈する主柱穴と考えられる。P1・2の上面は楕円形ないし円形(長軸35～45cm、短軸35cm前後)で、底面は東西方向に長い楕円形(長軸12cm前後、短軸7～10cm)となり、深さ57～72cmを測り、埋土は中心部の黒褐色土と周囲の暗褐色土とに分層できる。

床面下：ローム面が床面となり、床面下は存在しない。

遺物：遺物の出土量は非常に多い。土器の出土は、床面直上からの出土はもちろんであるが、埋土中からの出土もかなり多い。3は北東隅付近の床直、6は南側の東壁際の床付近から出土し、完形品に近い1は埋土中からの出土である。一方、大小の炭化材も多く出土している。なお、5の高杯には4区24号竪穴建物出土の土器と接合している。

出土遺物として、土器8点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に2と8があり、2は口縁部の内外面に赤色塗彩が施され、8は肩部に櫛描T字文と斜線を充填した三角文やボタン状貼付文を配している。甕には1・3・4・7があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連雁文を施すもの。また、5は高杯で、外面および杯部内面に赤色塗彩が施されている。さらに、6は無文の鉢である。

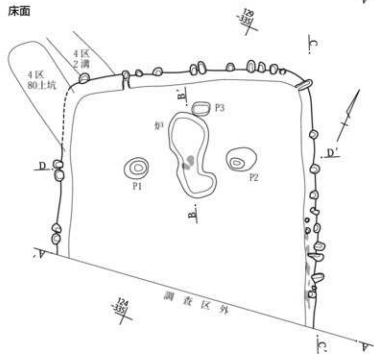
未掲載遺物には、同時期の土器片があるものの、石器類の出土はない。

所見・時期：壁際および壁面に見られた壁際ピットは、本建物以外でも4区17号竪穴建物や4区21・24号竪穴建物に確認されており、建物に伴う壁構造を補う痕跡と推測できる。また、出土した炭化材や焼土化した壁面の状況から、焼失家屋の可能性が極めて高い。一方、出土土器の接合状況からすると、近接する4区24号竪穴建物出土の土器と接合している例があり、建物の存在が極めて近い時間帯にあったことを窺わせている。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

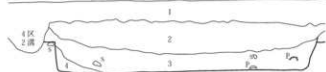
遺物出土図



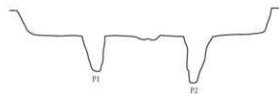
床面



A. L=410.50m



D. L=410.00m



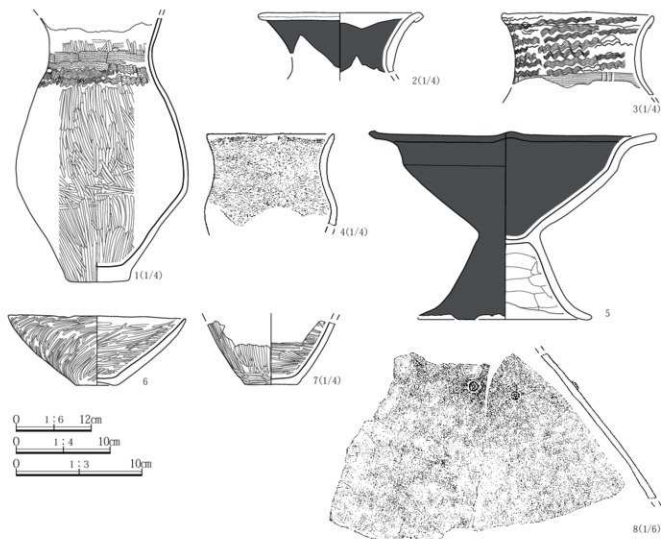
B. L=409.30m

- 1 黒褐色土 焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、黄褐色土ブロックを少量含む。



- 1 暗褐色土 (基本土層1層)As-Kkを少量含む。
- 2 黒褐色土 As-Kkは含まない。小礫を少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒、中型礫を少量。炭化物を含む。2層よりも明るく、やや粘質で締まりあり。
- 4 明褐色土 ローム粒を多く含む明るい。

第477図 4区18号竪穴建物 遺物出土図、床面 平・断面図



第478図 4区18号竪穴建物 出土遺物

4区19号竪穴建物

(第479図、第28・216表、PL.145・266)

平成27年度の調査で検出した。攪乱や他遺構との重複によって、極めて残存状況の悪い建物である。

位置：4-A 1区の南東寄りに位置し、西側6.0mに4区20号竪穴建物がある。

グリッド：2A-77

座標値：X=61,130~61,133 Y=-93,381~93,384

重複：本建物の北東隅に、4区96号土坑が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：不整形

規模：長軸3.19m 短軸3.14m 壁高0.2~11cm

長軸方向：N-7°-W 床面積：8.00㎡

埋没土：1層の黒褐色土と2層のローム小ブロックを少量含む暗褐色土とに分層できる。

床面・壁：建物南半の一部に、硬化した床面を検出した。

床面はローム土中にあり、ほぼ平坦と思われるが、詳細は不明。壁高は2~11cmとかなり浅く、床面が削平された状況にある。

炉：建物の中央付近に位置し、地床炉で浅い掘り込みをもち、炉底面の一部が被熱して焼土化している。炉の規模は、長さ85cm、幅67cm、深さ5cmを測る不整な楕円形を呈する。

柱穴：床面調査でP1~6の6基を確認したが、支柱穴とは考え難い。規模は、径30cm前後、深さ18~35cmを測る円形を呈し、暗褐色土を主体にする。

床面下：床面下には僅かな掘り込みと、地山礫を除去した浅い凹みを確認した。地山礫層を底面とし、大小の礫が露呈して凹凸が多い。床面下の埋土は、3層とした暗褐色土で、上面は硬化し床面となる。

遺物：遺物の出土量は少なく、埋土中からの出土が大半である。

出土遺物として、土器3点と石器1点を図示した。土器は弥生時代中期後半期の土器で、壺に2と3があり、2は頸部に鋸歯文や横線文を描き、LR縄文を充填する。3は胴部に連弧文を描き、LR縄文を充填する。また、壺の1は、胴部に櫛状具で縦位羽状文を施す土器である。

石器には、4の細粒輝石安山岩製の節理面を残した打製石斧がある。

未掲載遺物には、同時期の土器細片、石器には粗粒輝石安山岩製の台石や、珪質頁岩製および黒色安山岩製の剥片がある。

所見・時期：残存状況の悪い建物であるが、出土土器から時期は弥生時代中期後半期と考えられ、後述の4区20号竪穴建物と共に本遺跡における弥生時代の建物としては最も古い建物である。

4区20号竪穴建物（第480図、第28表、PL.145）

平成27年度の調査で検出した。3基の土坑との重複および削平を受け、極めて残存状況の悪い建物である。

位置：4-A1区の南東寄りに位置し、東側6.0mに4区19号竪穴建物がある。

グリッド：Z・2 A-78・79

座標値：X=61,129~61,134 Y=93,389~93,394

重複：本建物のほぼ中央に4区95号土坑、北側に4区65号土坑、東側に4区89号土坑が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物が最も旧く、4区65・89号土坑が最も新しい。

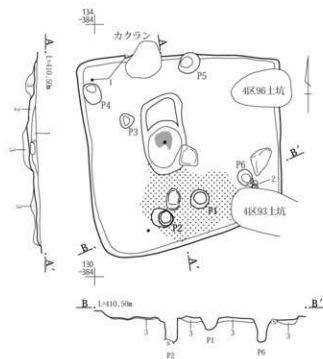
形状：不整形

規模：長軸(4.70)m 短軸(3.77)m 壁高0.8cm

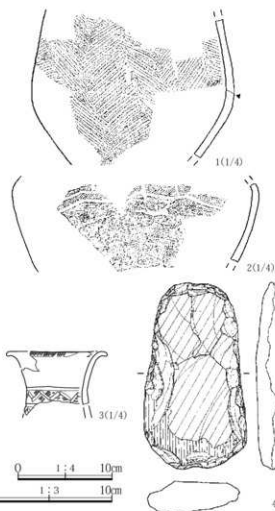
長軸方向：N-6°-E 床面積：(16.64)m²

埋没土：削平により、埋土の詳細は不明。

床面・壁：全体的に削平を受け、建物北半に硬化した床面を検出した。壁の大半も不明瞭である。



- 1 黒褐色土：白色泥物粒、焼土ブロックを少量含む。やや粘性土。
- 2 暗褐色土：焼土粒、炭化物・ローム小ブロックを少量含む。やや粘性土。
- 3 暗褐色土：ローム粒・ブロックを少量含む。やや粘性土。



第479図 4区19号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

が、建物中央の北寄り付近に焼土を検出したが、本来の炉の位置は建物中央付近にあるものと考えられ、4区95号土坑に壊されている可能性が高い。

柱穴：P1～4の4基を確認したが、主柱穴とは考え難い。何れも円形ないし楕円形を呈し、規模は径35～70cm前後、深さ20～45cmを測り、黒褐色土を主体にする。

床面下：床面下の一部を残して、僅かな掘り込みと、地山礫を除去した浅い凹みを確認した。地山礫層を底面とし、大小の礫が露呈している。床面下の埋土は、1層とした暗褐色土。

遺物：土器の出土はなく、未掲載遺物に黒曜石製の剥片がある。

所見・時期：硬化した床面の一部を確認したことから建物と認定したが、その詳細は不明な点が多い。出土土器がなく、建物の時期は決めかねるが、隣接する4区19号竪穴建物の状況と近いことから弥生時代中期後半か。

4区21号竪穴建物

(第481～484図、第28・217表、PL.146・147・267・268)

平成27年度の調査で検出した。建物の南側は調査区外となる。本遺跡の中で、弥生時代後期のガラス小玉を最も多く出土した建物である。

位置：4-B区の東端に位置し、北側6.0mに4区31号竪穴建物、西側4.5mに4区17号竪穴建物がある。

グリッド：Z・2A-63・64

座標値：X=61,126～61,134 Y=93,312～93,319

形状：長方形

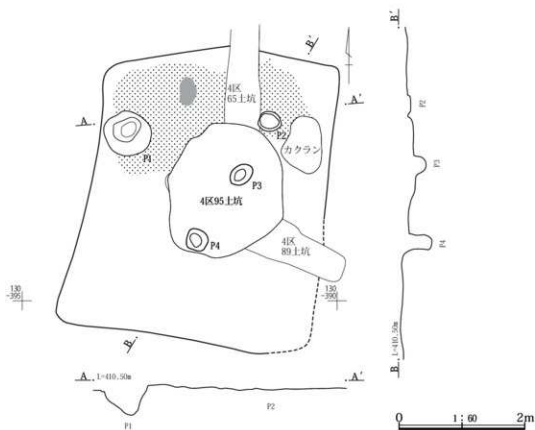
規模：長軸(7.70)m 短軸6.00m 壁高13～41cm

長軸方向：N-7°-W 床面積：(39.80)m²

埋没土：1層の黒褐色土と2層の暗褐色土を主体とし、

3層とした壁際のロームブロックを含む黒褐色土とに分層できる。埋土中には、大小の自然礫が少量含まれ、人為的な埋没の可能性が高い。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。壁高は13～41cmを測り、全体に垂直気味に立ち上がる。また、壁面には、縦に筋状となる



第480図 4区20号竪穴建物 床面 平・断面図

痕跡が確認され、精査の結果、壁際に粗く間隔をもって巡る径10cm程の壁際ピットを計11カ所検出した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。

炉：2箇所に炉を検出した。炉1は建物の中軸上中央北側に位置し、主柱穴P1・2間のやや北側にある。地床が浅い掘り込みをもち、炉内南側には棒状の枕石が短軸方向に据えられ被熱している。炉底面は、一部が被熱して焼土化している。炉の規模は、長さ83cm、幅65cm、深さ11cmを測る楕円形を呈する。炉2は建物中央の西側にあり、地床が長軸74cm、短軸68cm、深さ8cmを測る楕円形を呈し、枕石はなく、底面の一部が被熱している。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP5から構成され、細長い五角形状を呈する。主柱穴上面は楕円形ないし円形(長軸50～62cm、短軸40～55cm)で、中位以下は東西方向に長い楕円形(長軸30～45cm、短軸17～28cm)となり、深さ45～60cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。P5は径30cm、深さ14cmと浅く、黒色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P13とP18、P14とP17、P15とP16)が配置されている。これら壁柱穴は、概ね円形で径35～55cm、深さ20～35cmを測り、黒褐色土や暗褐色土を主体としている。

床面下：ローム面が床面となり、床面下は存在しない。
遺物：遺物の出土量は非常に多く、建物の南半に集中する。土器の出土は、床面直上ないし床付近からの出土がかなり多く、埋土中からの出土も多い。炉1の南側床直に10の高杯が、1の大型壺の胴部は建物中央の西側となる炉2周辺に潰れた状態で、建物中央南東寄りの床付近には集中して4・5・8等の甕が出土し、建物中央南西側の床付近においても3・6・9といった甕類が集中して出土している。なお、1に接合する口縁部は4区24号竪穴建物から出土している。一方、ガラス小玉は、13点全てが建物南東端の東壁際に集中して床付近から出土している。

出土遺物として、土器10点、石器1点、ガラス小玉13点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1と2があり、大型壺となる1は2段の複合口縁部に短沈線状の刻み目を施し、括れ部に柳描連塵

文、肩部に羽状意匠の縦位柳描曲線文を描く。2は短い折返し複合口縁に刻み目を施し、外面には縦・斜位の刷毛目を施す。甕には3～9があり、口縁下に柳描波状文や柳描連塵文を描き、8には口縁部から括れ部に柳描条痕文を縦位に施している。また、10は高杯の脚部である。

石器には、11の細粒輝石安山岩製の節理面を残した打製石斧がある。

ガラス小玉は、12～24の計13点がある。

未掲載遺物には、同時期の土器細片、石器には二次加工のある剥片(黒色頁岩製)、他に黒曜石製の剥片がある。

所見・時期：本遺跡の弥生時代後期の建物の中で、最も多くのガラス小玉を出土した建物である。また、壁際の壁際ピットは、本建物以外にも4区17・18号竪穴建物や4区24号竪穴建物で確認されており、建物の壁構造を補う痕跡と推測できる。一方、出土土器の接合状況からすると、近接する4区24号竪穴建物出土土器と接合していることが確認されており、建物の存在が極めて近い時間帯にあることを窺わせている。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区22号竪穴建物

(第485図、第28・218表、PL.147・268)

平成27年度の調査で検出した。建物の北半は調査区外となり、4区5号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の北端西寄りの北壁際に位置し、竪穴建物の東半を時期の異なる4区5号竪穴建物と重複し、さらに東側に4区5号竪穴建物に重複する4区6・23号竪穴建物と近接する。また、同時期の遺構としては、東側に4区6号竪穴建物と重複して4区4号竪穴建物があり、南西側7.5mに4区14号竪穴建物がある。

グリッド：2・1・2J-55・56

座標値：X=61,170～61,175 Y=93,272～93,277

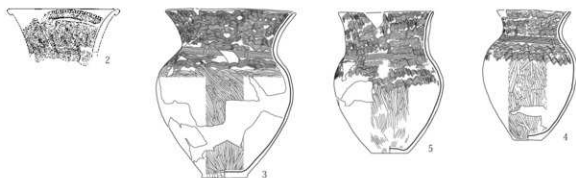
重複：本建物の東半には、4区5号竪穴建物と重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：長方形

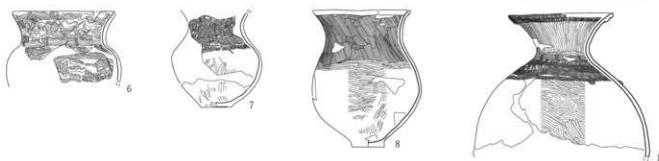
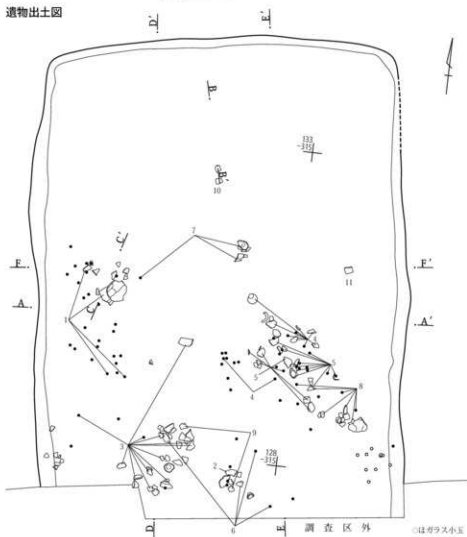
規模：長軸(4.00)m 短軸4.04m 壁高20～67cm

長軸方向：N-31°-W 床面積：(11.68)m²

第4章 検出された遺構と遺物

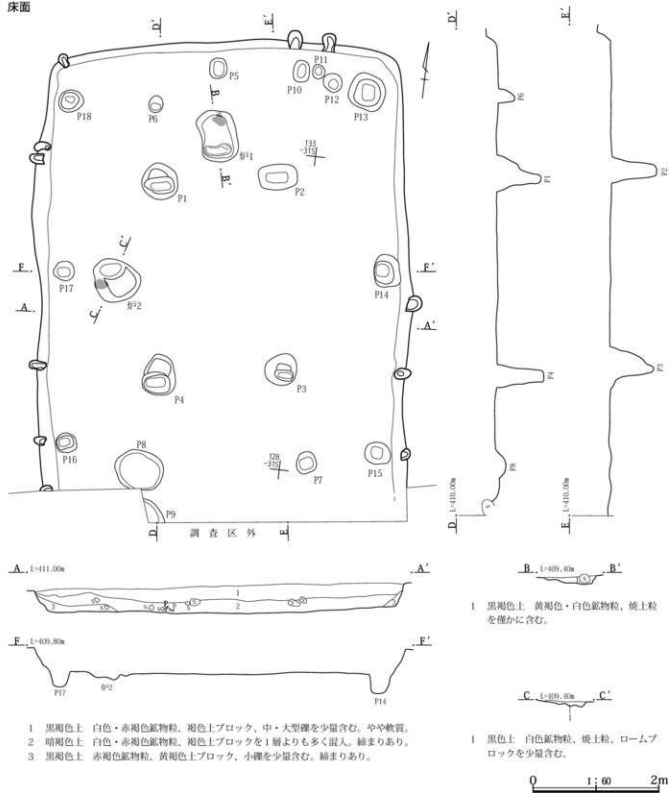


遺物出土図

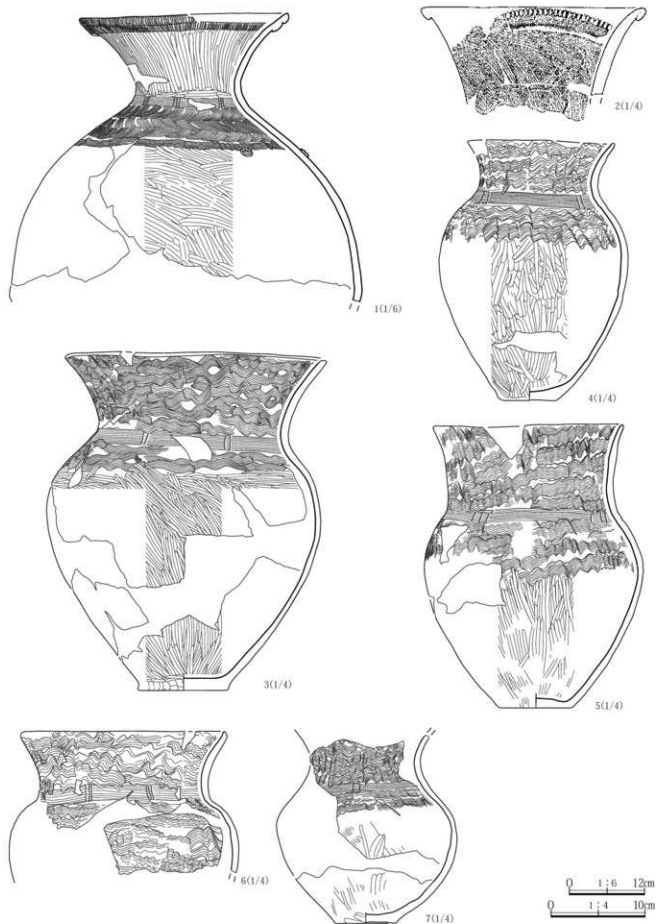


第481図 4区21号竪穴建物 遺物出土図

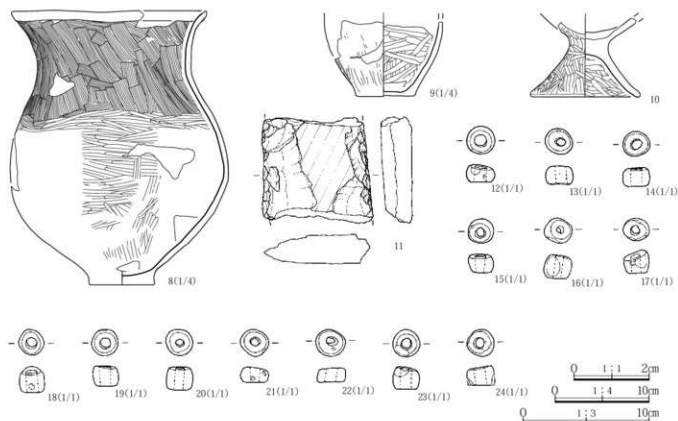
床面



第482図 4区21号竪穴建物 床面 平・断面図



第483図 4区21号竖穴建物 出土遺物(1)



第484図 4区21号竪穴建物 出土遺物(2)

埋没土：1層の黒褐色土と2層の暗褐色土を主体とし、3層を挿んで壁際に4層としたロームブロックを含む褐色土とに分層できる。埋土中および床直上には、大型の自然礫がみられ、人為的な埋没の可能性が高い。床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体に硬化が著しい。壁高は20～67cmを測り、全体に垂直気味に立ち上がる。

炬：炬は検出されていないが、被熱により僅かに焼土化した箇所が床面上に確認されている。

柱穴：主柱穴は、P1・2とした南半部の2本を検出した。北半は調査区外となるため、主柱穴の構成形状は不明。円形を呈し、径40cm前後、深さ50～75cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

貯蔵穴：南東隅付近の南壁際に検出した。規模は長軸75cm、短軸47cm、深さ39cmを測る楕円形を呈する。埋土は黒褐色土で、底面付近から土器片が出土している。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置し、壁際から25～30cmほど内側に2基のピット(P3・4)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈する。埋土は汚れたロームを多く含む褐色土を主体とする。このP3と

P4の間隔は、芯々で80cmを測る。

床面下：ローム面が床面となり、床面下は存在しない。遺物：遺物は埋土中からの出土が多く、その中で1の壺は床付近からの出土である。また、貯蔵穴内からも比較的に多くの土器片が出土している。

出土遺物として、土器11点と土製品1点、石器1点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1～3・7があり、1は括れ部に柳描連麗文、3は柳描T字文を施し、2は折返し複合口縁に柳描横線文、7は柳描波状文を施す。甕には4～6・9・10があり、口縁下に柳描波状文や柳描連麗文を描き、8の台付甕にはボタン状貼付文を配する。11は高杯の脚部である。

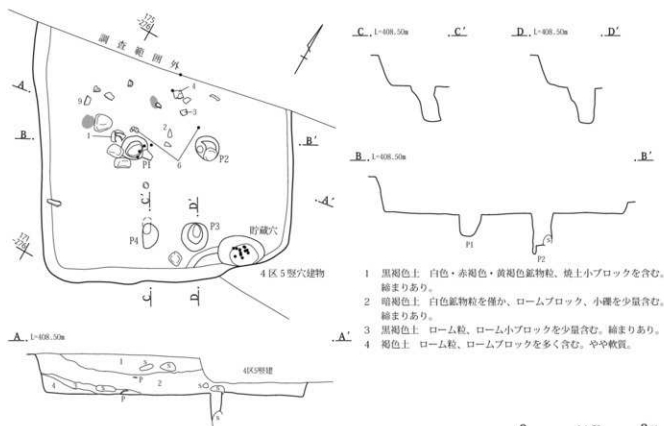
土製品には12の紡輪があり、指頭状の押圧痕を残すやや粗い整形で、中央に径8mmの穿孔をもつ。

石器には13の細粒輝石安山岩製の打製石斧がある。

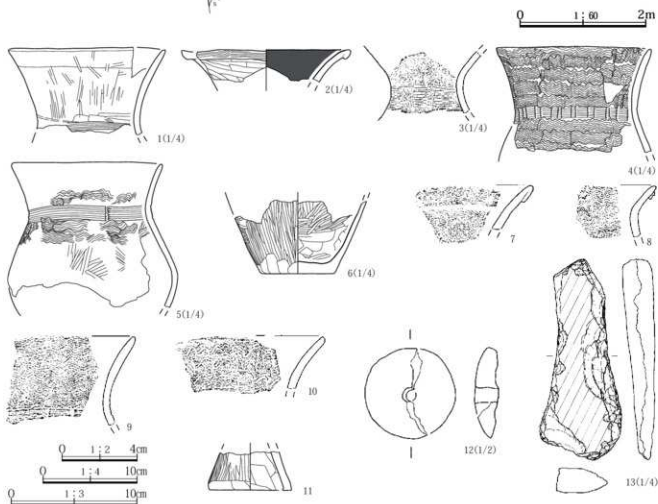
未掲載遺物には、同時期の土器片、さらに二次加工剥片が出土している。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

第4章 検出された遺構と遺物



- 1 黒褐色土 白色・赤褐色・黄褐色鉱物粒、焼土小ブロックを含む。締まりあり。
- 2 暗褐色土 白色鉱物粒を僅か、ロームブロック、小礫を少量含む。締まりあり。
- 3 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。締まりあり。
- 4 褐色土 ローム粒、ロームブロックを多く含む。やや軟質。



第485図 4区22号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

4区24(A・B)号竪穴建物

(第486～491図、第28・219表、PL.148～150・268～271)

平成27年度の調査で検出した。拡張を伴う大型建物で、拡張後を24A竪穴建物、拡張前を24B竪穴建物として記述する。

位置：4-B・C1区に跨がり、4-B区のほぼ中央北端に位置する。東側9.3mに4区31号竪穴建物、南東側4.5mに4区17号竪穴建物、南側6.5mに4区18号竪穴建物、西側1.8mに4区25号竪穴建物が近接する。

グリッド：2B・2C-67・68

座標値：X=61,135～61,144 Y=-93,331～93,338

形状：拡張後の24A竪穴建物は、隅丸長方形を呈する大型建物で、拡張前の24B竪穴建物の北壁を1.5～1.8m、東壁を1.0m、西壁を0.8m、南壁を0.7mほど各方向へ広げた状態で、北側を広く拡張しながらも全方向へ拡張させた形となる。その結果、拡張前の24B竪穴建物は、24A竪穴建物の内側にあり、24A竪穴建物に比べるとやや小さい隅丸長方形を呈する。

24A竪穴建物規模：長軸0.43m 短軸5.91m 壁高25～50cm

24A竪穴建物長軸方向：N-11°-E

24A竪穴建物床面積：48.91㎡

24A竪穴建物埋没土：1・2層の黒褐色土を主体とし、壁際に3層としたロームブロックを含む褐色土に分層できる。埋土中下位および床直上には、多くの炭化物や炭化材・被熱した焼土塊、さらには多量の遺物が出土している。

24A竪穴建物床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化し、部分的に被熱による焼土化がみられる。特に、拡張前の24B号竪穴建物部分は拡張後の床面より微妙に低く、硬化の著しい暗褐色土となるが、レベル差はあまりない。壁高は25～50cmを測り、全体にやや垂直気味に立ち上がる。また、西壁面は被熱して部分的に焼土化が著しい。さらに、壁面には、縦に筋状となる痕跡が確認され、精査の結果、壁際に粗く間隔をもって巡る径10cm前後の壁際ピットを計17カ所検出した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。

24A竪穴建物炉：2箇所に炉を検出した。炉1は建物の中軸上北側に位置し、主柱穴P1・2間で、24B号竪

穴建物北壁部分にある。地床炉で浅い掘り込みをもち、炉内南側には棒状の枕石が短軸方向に据えられ被熱している。炉底面中央は、被熱して焼土化している。炉の規模は、長さ70cm、幅52cm、深さ5cmを測り、建物中軸方向に長い楕円形を呈する。炉2は建物中央の南西寄りであり、地床炉で長軸52cm、短軸30cm、深さ7cmを測る。建物の短軸方向に長い楕円形を呈し、炉内東側には棒状の枕石が短軸方向に据えられている。

24A竪穴建物貯蔵穴：検出されていない。

24A竪穴建物柱穴：主柱穴はP1～8の8本と、さらに中軸上の北壁付近にあるP9から構成され、細長い五角形状を呈する。但し、P7・8は入口施設となるP20・21の外側脇に配置され、他の主柱穴とは異なる構造上の柱の可能性もある。P1～6の主柱穴上面は楕円形(長軸40～50cm、短軸30～37cm)で、中位以下は東西方向に長い楕円形(長軸25～30cm、短軸14～23cm)となり、深さ50cm前後を測り、埋土はロームブロックを多量に含む褐色土や黄褐色土を主体とする。P7・8は円形に近く、径45～55cm、深さ30cm前後を測り、黒褐色土を主体とする。P9は南北方向に長い楕円形で、長軸40cm、短軸26cm、深さ35cmを測り、黒色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P11とP19、P12とP18、P13とP17、P14とP16)が配置されている。これら壁柱穴は、楕円形ないし円形で長軸30～40cm、短軸18～37cm、深さ35～60cmを測り、黒褐色土や黄褐色土を主体としている。

24A竪穴建物入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置し、壁際から28cmほど内側に2基のピット(P20・21)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、長軸48cm、短軸22～26cm、深さ21～29cmを測り、底面は北側に大きく寄る。埋土はロームブロックを多く含む黒褐色土を主体とする。このP20とP21の間隔は、それぞれ140cmを測り、他の建物入口施設よりかなり広い。

24B竪穴建物規模：長軸7.00m 短軸4.03m

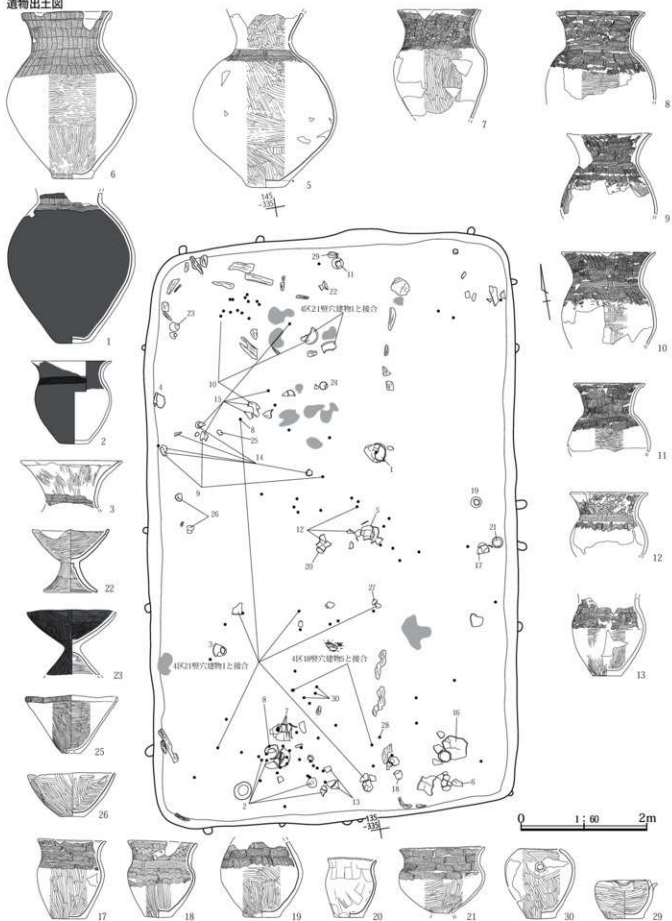
24B竪穴建物長軸方向：N-10°-E

24B竪穴建物床面積：25.11㎡

24B竪穴建物埋没土：先述したように、拡張前の24B号竪穴建物床面は、拡張後の24A号竪穴建物床面より微妙に低いので、あまりレベル差がなく、硬化した暗

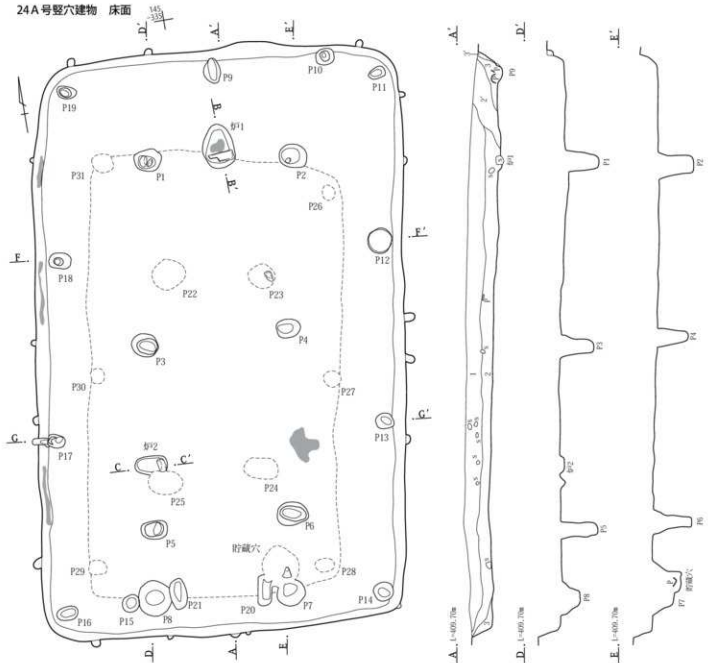
第4章 検出された遺構と遺物

遺物出土図

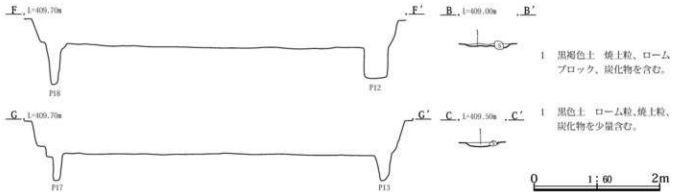


第486図 4区24号竪穴建物 遺物出土図

24A号竪穴建物 床面

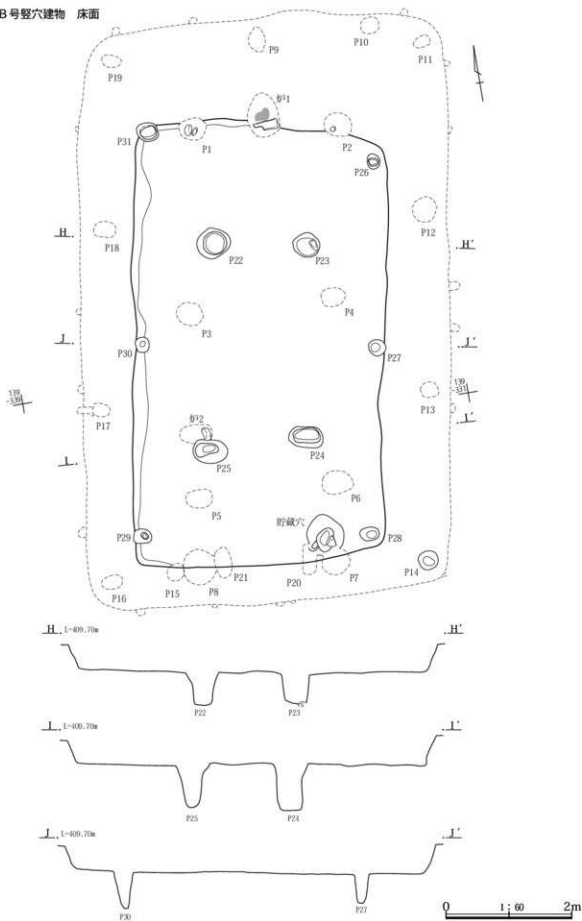


- 1 黒褐色土 黄褐色鉱物粒、ロームブロックを少量含み、大型礫が混入する。締まりあり。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを少量、焼土粒、炭化物を僅かに含む。
- 3 褐色土 ロームブロック、炭化物を少量含む。

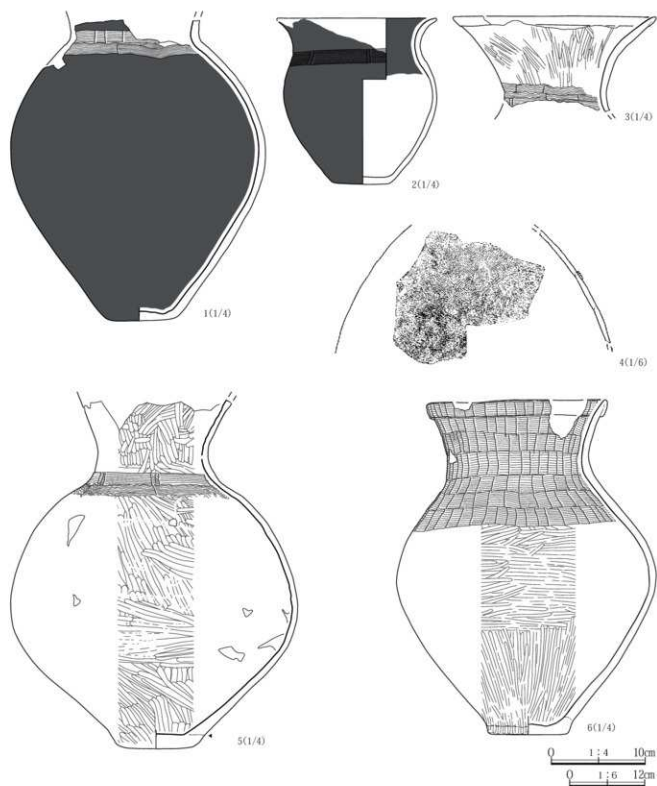


第487図 4区24A号竪穴建物 床面 平・断面図

24B号竪穴建物 床面

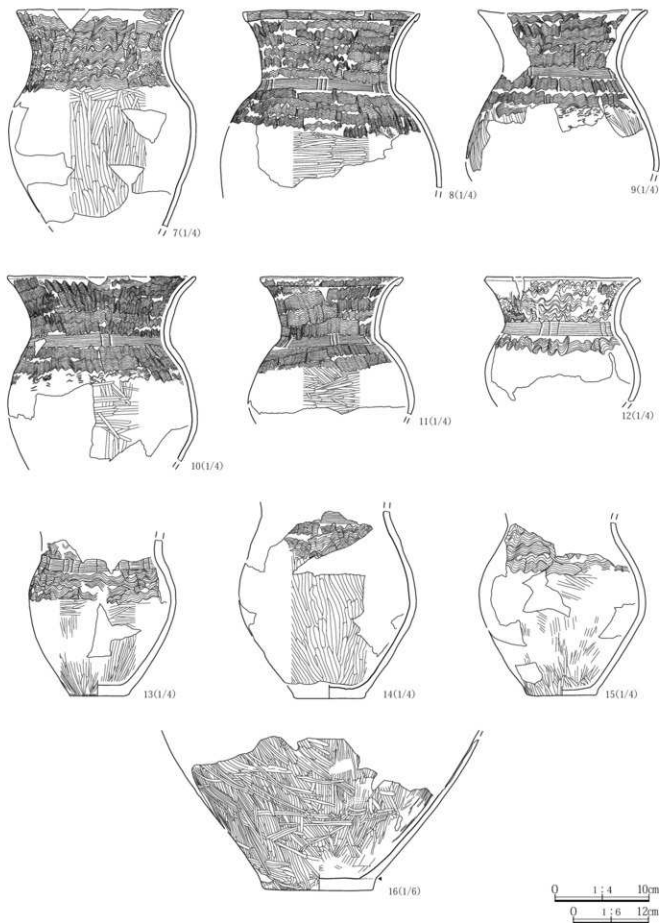


第488図 4区24B号竪穴建物 床面 平・断面図

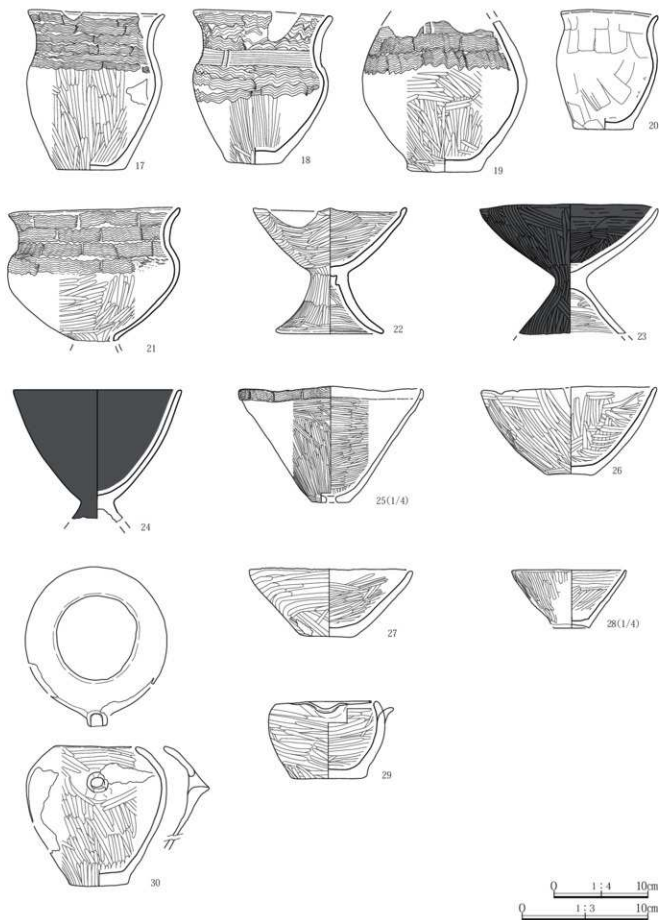


第489図 4区24号竪穴建物 出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第490図 4区24号竖穴建物 出土遺物(2)



第491図 4区24号竪穴建物 出土遺物(3)

褐色土(上面は24A号竪穴建物床面)が僅かに残る。

24B竪穴建物床面・壁：先述したように、床面は24A号竪穴建物床面より微妙に低いのみで、24A号竪穴建物の床面とはほぼ同一面にある。24A号竪穴建物床面と同様に、ほぼ平坦。壁は、建物拡張により全方向の壁をなくし、詳細は不明。

24B竪穴建物炉：検出されていない。

24B竪穴建物貯蔵穴：南東隅付近の南壁際に位置し、規模は径60cm前後、深さ45cmを測り、円形を呈する。埋土は黒褐色土で、埋土下位から土器片が出土している。

24B竪穴建物柱穴：主柱穴はP22～25の4本で構成され、長方形を呈する。主柱穴上面は円形ないし楕円形(長軸45～55cm、短軸33～55cm)で、中位以下は東西方向に長い楕円形(長軸30～40cm、短軸25～30cm)となり、深さ50～70cmを測り、埋土は黒褐色土や黄褐色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P26とP31、P27とP30、P28とP29)が配置されている。これら壁柱穴は、楕円形ないし円形で長軸23～30cm、短軸18～25cm、深さ28～42cmを測り、黒褐色土を主体としている。

24B竪穴建物入口施設：検出されていない。

床面下：ローム面が床面となり、床面下は存在しない。

遺物：遺物の出土量は非常に多く、建物全体に散在する。

土器の出土は、床面直上ないし床付近からの出土がかなり多く、埋土中からの出土も多い。29の完形品の片口鉢と11の甕は建物北壁中央の壁際床直から正位で、そのやや南側に22の高杯が横転した状態で出土。炉1の脇に4区21号竪穴建物出土土器1(第483図)に接合した大型甕の口縁部が床付近からの出土。23の高杯は建物西壁北寄りの壁際床直から出土。19の小型甕は建物東壁中央の壁際床直から正位で出土。建物中央付近にも遺物は多く、床直出土土器には横転した1の甕と潰れた5の甕がある。さらに、建物南半の南壁付近にも遺物は集中し、南東隅付近の床直からは6の甕と18の小型甕、入口施設付近の床直土器には7・8の甕等の出土がある。なお、大型の甕の底部である16は、南東隅付近の埋土中からの出土であるが、4区18号竪穴建物出土土器片が接合している。他に、炭化材や木炭ブロック・焼土塊も多く出土している。炭化材・木炭ブロック・焼土塊は建物の北西隅付近から中央部にか

けて集中し、建物南半においても炭化材は点在する。

出土遺物として、土器30点を図示した。土器は全て弥生時代後期の樽式土器で、壺に1～4があり、1は括れ部に櫛描連文と肩部に粗雑な櫛描波状文を描き、外面および内面胴部中位に赤色塗彩を施す。2は括れ部に櫛描連文、外面および内面肩部にまで赤色塗彩を施す。3は括れ部に櫛描波状文と櫛描連文を施し、4は肩部に縦位櫛描羽状文や櫛描波状文を描き、ボタン状貼付文を配する。甕には5～20があり、5は括れ部に櫛描連文と櫛描波状文を、6は短い折返し複合口縁の口縁部から肩部に等間隔止の櫛描連文を描く。7～15は口縁下に櫛描波状文や櫛描連文を描き、17～19の小型甕にも同様な文様が描かれる。20は無文である。また、21は脚部を欠く台付甕で、口縁下に櫛描波状文を描く。さらに、22～24は高杯で、23・24の外面と杯部内面に赤色塗彩を施す。25～29は鉢であるが、25は底部に穿孔をもつ有孔鉢で、複合口縁部に櫛描波状文を描く。26～28は無文で、28は小型鉢、29は口唇部を摘み出した片口鉢である。そして、30は胴部中位に孔を穿ち、その下半に片口を付けた無文の注口土器である。

未掲載遺物には、同時期の土器片多量にある。

所見・時期：24B竪穴建物から24A竪穴建物への拡張を伴う大型建物である。拡張後の24A竪穴建物は、出土した炭化材や焼土化した壁面の状況から、焼失家屋の可能性が極めて高い。また、壁際の壁際ピットは、本建物以外にも4区17・18号竪穴建物や4区21号竪穴建物で確認されており、建物の壁構造を補う痕跡と推測できる。一方、出土土器の接合状況からすると、近接する4区18・21号竪穴建物出土の土器と接合していることを確認しており、本建物とそれらの建物の存在が極めて近い時間帯にあったことを窺わせている。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区25号竪穴建物

(第492図、第28・220表、PL.150・271)

平成27年度の調査で検出した。小型の建物である。

位置：4-B区のほぼ中央北寄りに位置し、西側1.8mに4区25号竪穴建物が近接し、南南東側8.7mに4区18号竪穴建物がある。

グリッド：2A・2B-69

座標値：X=61,134~61,139 Y=93,340~93,344

形状：隅丸長方形

規模：長軸4.35m 短軸3.47m 壁高15~33cm

長軸方向：N-18°-W 床面積：11.98㎡

埋没土：1層の暗褐色土を主体とし、壁際付近の2層とした黒褐色土とに分層できる。埋土中下位および床直上には、炭化物や炭化材が出土している。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化し、部分的に被熱による焼土化がみられる。壁高は15~33cmを測り、垂直気味に立ち上がる。また、壁面には、縦に筋状となる痕跡が確認され、精査の結果、壁際に粗く間隔をもって巡る径10cm前後の壁際ピットを計16カ所検出した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。

炉：炉は建物の中軸上北側に位置する。地床¹で浅い掘り込みをもち、炉内南側には枕石(扁平礫)が短軸方向に据えられ被熱している。炉²底面北側は、被熱して焼土化している。炉²の規模は、長さ68cm、幅40cm、深さ7cmを測り、建物中軸方向に長い楕円形を呈する。

貯蔵穴：南東隅の壁際に位置し、規模は径35cm前後、深さ13cmを測り、円形を呈する。埋土は黒褐色土で、貯蔵穴の周囲に土手状の高まりをもち、

柱穴：主柱穴は、建物中軸上の両端壁際に位置するP1・2の2本で構成されると考えられる。径25cm前後、深さ53cmを測る円形で、底面は建物の外側に寄る。埋土は黒褐色土を主体とする。

入口施設：南壁付近の中央東側に位置し、貯蔵穴とP2の間で、壁際から20cmほど内側に2基のピット(P4・5)がある。建物の長軸方向に向く楕円形を呈し、長軸25cm前後、短軸20cm、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色土。P4とP5の間隔は、芯々で75cmを測る。

遺物：土器は埋土中からの出土が多く、炉²の西側に3の台付甕が出土している。他に、炭化材が床面付近に点

在する。

出土遺物として、土器5点を図示した。土器は弥生時代後期の樽式土器で、1・2の甕の口縁下に櫛描波状文が描かれ、3の台付甕は複合口縁の口縁から肩部に櫛描波状文とボタン状貼付文を配する。高杯には4・5があり、4の杯部内外面に赤色塗彩を施す。

未掲載遺物には、同時期の土器片が多くある。

所見・時期：出土した炭化材や焼土化した床面の状況から、焼失家屋の可能性がある。また、壁際の壁際ピット存在から、他建物と同様に、建物の壁構造を補う痕跡と推測できる。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

4区31号竪穴建物

(第493・494図、第28・226表、PL.155・273・274)

平成27年度の調査で検出した。4区30号竪穴建物と重複する。

位置：4-C1区のほぼ中央南寄りに位置し、時期の異なる4区30号竪穴建物と重複する。南側6.0mに4区21号竪穴建物、南西側5.5mに4区17号竪穴建物、西側9.3mに4区24号竪穴建物がある。

グリッド：2B~2D-64・65

座標値：X=61,140~61,146 Y=93,316~93,322

重複：本建物の南半には、4区30号竪穴建物が大きく重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：隅丸長方形

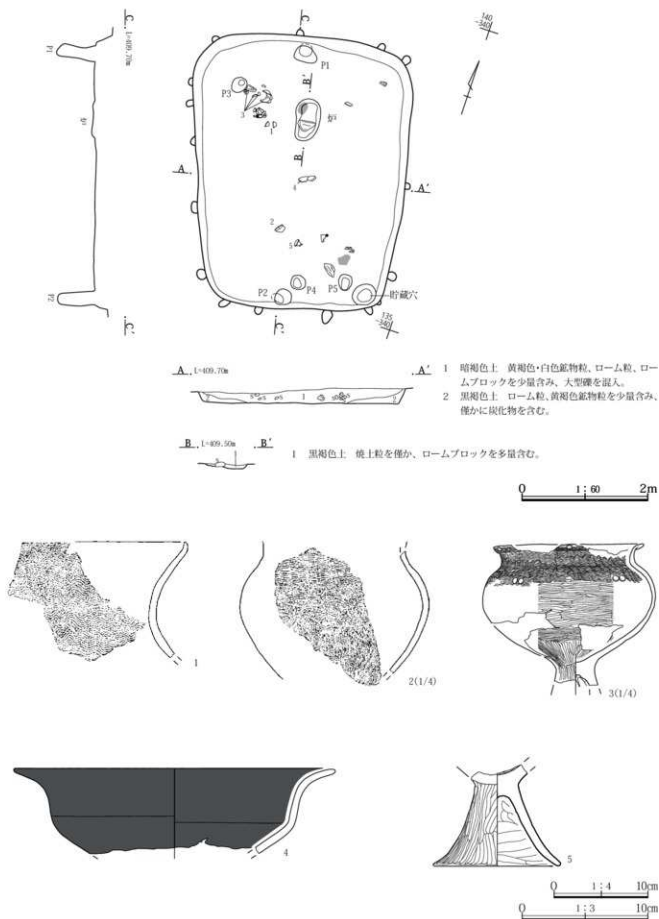
規模：長軸6.34m 短軸4.72m 壁高0.7~47cm

長軸方向：N-17°-W 床面積：24.88㎡

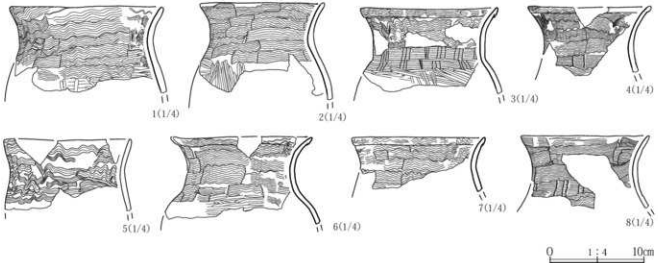
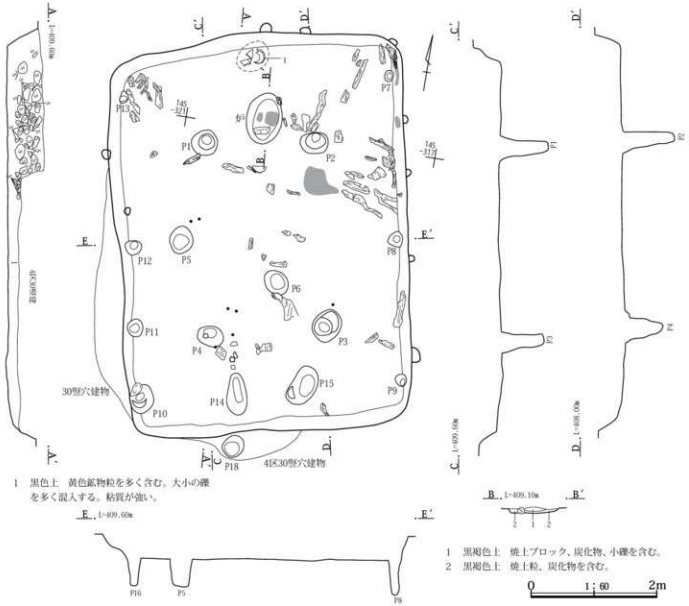
埋没土：1層の黒褐色土を主体とし、層中には大小の自然礫を多量に含む。また、埋土中下位および床直上には、炭化物や炭化材が多く出土している。なお、多量の自然礫は、人為的に投棄された状況にあったことから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化し、被熱による焼土化が数カ所にみられる。壁高は7~47cmを測り、全体に斜位に立ち上がる。また、北東隅付近の東壁面は、被熱して部分的に焼土化が著しい。さらに、壁面には、縦に筋状となる痕跡が確認され、精査の結果、壁際に粗く間隔をもって巡る径

第4章 検出された遺構と遺物

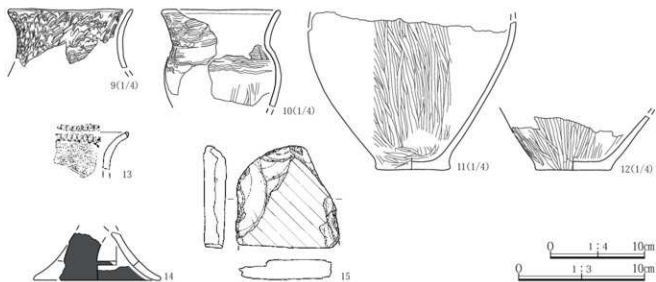


第492図 4区25号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物



第493図 4区31号竪穴建物 床面・断面図、出土遺物(1)

第4章 検出された遺構と遺物



第494図 4区31号竪穴建物 出土遺物(2)

10cm前後の壁際ピットを計9カ所検出した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。
 竪穴：竪穴は建物の中軸上北側に位置し、主柱穴P1・2間のやや北寄りにある。地床が浅い掘り込みをもち、竪穴内側には棒状の杖石が短軸方向に据えられ被熱している。竪穴底面中央は、被熱して焼土化している。竪穴の規模は、長さ82cm、幅58cm、深さ6cmを測り、建物中軸方向に長い楕円形を呈する。

主柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成され、長方形を呈する。主柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸40～45cm、短軸33～40cm、深さ62～75cmを測り、埋土は黒色土と明黄褐色土を主体とする。また、東壁と西壁の壁際には、それぞれ対応する壁柱穴(P7とP13、P8とP12、P9とP10)が配置されている。これら壁柱穴は、楕円形ないし円形で長軸18～45cm、短軸14～34cm、深さ36～64cmを測り、黒色土と明黄褐色土を主体としている。

入口施設：南壁付近のほぼ中央に位置し、壁際から15～20cmほど内側に2基のピット(P14・15)がある。共に建物の長軸方向に向く長楕円形を呈し、長軸65cm、短軸30～35cm、深さ47cmを測り、底面は北側に大きく寄る。埋土は黒色土と明黄褐色土を主体とする。このP14とP15の間隔は、芯々で110cmを測る。

遺物：遺物は礫と共に埋土中からの出土が多い。床面上出土には、建物北壁中央の壁際に1の甕が出土している。他に、炭化材が床面付近に多く出土し、建物北

半に集中する。

出土遺物として、土器14点と石器1点を図示した。土器は弥生時代後期の樽式土器で、甕には13の1点がある。甕には1～12があり、口縁下に櫛描波状文や櫛描連塵文が描かれ、11・12は無文の胴下半部。高杯には14があり、脚部に三角形または四角形状の透かし孔をもち、外面および内面裾部の一部に赤色塗彩が施されている。

石器には、15の細粒輝石安山岩製の節理面を残した打製石斧がある。

未掲載遺物には、同時期の土器片、石器には黒曜石製と赤碧玉製の二次加工のある剥片、他に黒曜石製と黒色頁岩製の剥片がある。

所見・時期：出土した炭化材や焼土化した壁面の状況から、焼失家屋の可能性が極めて高い。また、壁際の壁際ピットの存在から、他建物と同様に、建物の壁構造を補う痕跡と推測できる。建物の時期は、出土土器から弥生時代後期後半の樽式期である。

(3) 竪穴遺構

本調査区で検出された弥生時代の遺構は、4-D区の第2面調査において1基が検出された。明確な炉等の建物要件を確認できなかったことから、本報告では竪穴遺構として扱うこととした。

以下、記述する。(第29表 4区竪穴遺構一覧を参照)

4区1号竪穴遺構 (第495図、第29表)

平成27年度の調査で検出した。調査時は、4区15号竪穴建物として調査を行ったが、炉や柱穴等の建物に付随する施設は確認できなかった。

位置：4-D区のほぼ中央に位置し、北西側1.3mに4区2号竪穴建物が近接し、北北東側8.0mに4区1号竪穴建物、東側14.5mに4区3号竪穴建物、南南東側15.5mに4区8号竪穴建物、南南西側14.0mに4区12号竪穴建物、西側6.0mに4区11号竪穴建物がある。

グリッド：2F-52・53

座標値：X=61,156~61,159 Y=-93,256~93,259

形状：隅丸方形を呈する。

規模：長軸2.72m 短軸2.42m 壁高17~23cm

長軸方向：N-53°-E 床面積：5.18㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を主体とし、層中には大小の自然礫を含む。

床面・壁：床面は暗褐色土中にあり、ほぼ平坦となるが、北東部がやや高い。また、硬化面は弱く、中央付近の床面に炭化材や灰、焼土を確認した。壁高は17~23cmを測り、斜位に立ち上がる。

出土遺物：遺物の出土量は少なく、弥生時代後期の樽式土器の細片と、黒曜石製の剥片が出土したのみである。

所見・時期：炉や柱穴等の建物に付随する施設を確認できなかったことから、竪穴遺構として扱った。出土遺物も少なく、時期等の詳細は不明であるが、弥生時代の遺構の可能性が高い。

(4) 土坑

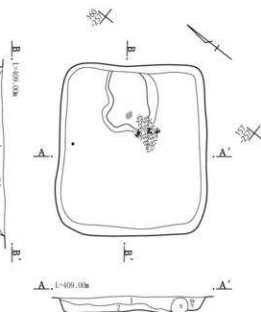
本調査区で検出された弥生時代の土坑は、4-B区の第2面調査において1基が検出されている。

以下、記述する。(第30表 4区土坑一覧を参照)

4区128号土坑 (第495図、第30表)

平成27年度の調査で検出した。

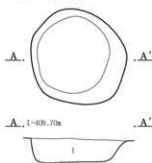
位置：4-B区の東寄りに位置し、4区17号竪穴建物の



- 1 黒褐色土 黄褐色・白色鉱物粒、小礫を少量含む。締まりあり。
2 黒褐色土 黄褐色鉱物粒、焼土を含む。1・2層間に大型礫が混入。締まりあり。

0 1; 60 2m

4区128号土坑



- 1 黒褐色土 赤褐色鉱物粒、礫を含む。締まりあり。

0 1; 40 1m

第495図 4区1号竪穴遺構 床面、4区128号土坑 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物

北側1.0mに近接する。北東側4.8mに4区31号竪穴建物、南東側6.0mに4区21号竪穴建物、西側6.5mに4区24号竪穴建物がある。

グリッド：2 B-65・66

座標値：X=61,136・61,137 Y=-93,324・93,325

形状：円形

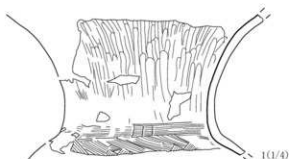
規模：長軸1.06m 短軸1.00m 壁高26cm

長軸方向：N-22°-W

埋没土：ロームブロックを少量含む黒色土を主体とする。

底面・壁：底面は平坦で、円形を呈する。壁高は26cmを測り、直立気味に立ち上がる。

所見・時期：出土遺物もなく時期等の決め手に欠くが、周囲の状況および埋没土の土質から、弥生時代の遺構の可能性が高い。

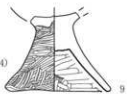
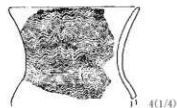
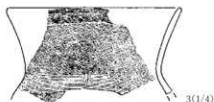


(5) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない代表的な遺物を第496図に示した。

1・2は甕で、1の括れ部に櫛描連簾文と櫛描羽状文、2の折返し複合口縁には篋状貝で縦・横位沈線文を施している。3～6は甕で、口縁下に櫛描波状文や櫛描連簾文を描く。7・8は台付甕であり、口縁下に甕と同様な文様を描き、7にはボタン状貼付文を配する。また、9・10はいずれも高杯の脚部であり、10の脚部外面および内部面には赤色塗彩が施されている。さらに、11は摘み部が残存する無文の蓋である。

他に、図示していないが細粒輝石安山岩製の石鏃が1点出土している。(第232表、PL.276)



第496図 4区弥生時代遺構外出土遺物

第3項 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

本調査区で検出された古墳時代の遺構は、調査区の西側に当たる4-A区には検出されず、調査区中央から東側の4-C・D区に散漫に点在する。しかし、本調査区の西側となる1～3区においては数多く検出されている。基本層序とした4-A区北壁IV層上面、4-B区北西壁VII層上面、4-D区北壁および南壁でのVI層中位を確認面とした第2面調査で、4-C・D区に竪穴建物を主とする5世紀から7世紀にかけての集落が検出された。この集落を構成する遺構には、竪穴建物6棟である。検出された建物の配置状況から、集落の広がりには調査区外となる北・東・南側にまで展開するものと推測される。また、本調査区では検出されなかったが、温川西岸沿いに点在する四戸の古墳群の存在からも、古墳時代の遺構が大きく展開することは言うまでもない。

(2) 竪穴建物

本調査区で検出された古墳時代の竪穴建物は、第2面調査において4-C1区に2棟、4-C3区に1棟、4-D区に3棟の計6棟の建物が検出された。

以下、各建物ごとに記述する。(第28表 4区竪穴建物一覧を参照)

4区9号竪穴建物

(第497～499図、第28・207表、PL.137・138・261・262)

平成27年度の調査で検出した。4区14号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の北西隅に位置し、時期の異なる4区14号竪穴建物と重複する。東南東側3.5mに4区10号竪穴建物、南側28.5mに4区16号竪穴建物がある。

グリッド：2G・2H-56・57

座標値：X=61,163～61,168 Y=93,279～93,284

重複：本建物の西側を、4区14号竪穴建物の南東側が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

形状：正方形

規模：長軸5.03m 短軸5.03m 壁高13～36cm

長軸方向：N-1°-W 床面積：21.76㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を主体とし、壁際付近の3層とした暗褐色土とに分層できる。埋土中下位および床直上には、炭化材が出土している。また、層中に大小の自然礫を多く含むことから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、特にカマド前付近は著しく硬化する。また、中央付近の床面や南壁面には、地山礫が露出する。壁高は13～36cmを測り、斜位に立ち上がる。

カマド：東壁中央のやや南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-89°-Eを向き、遺存状態は良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長1.08m、幅0.9mを測る。袖は壁から50cmほど突き出るように残存し、右袖の先端に袖石が確認された。また、燃焼部の両側には壁石が配され、燃焼部内壁は被熱している。煙道部での壁石はない。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より僅かに低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。カマド内にも礫が散在することから、石組みのカマドであった可能性を残す。

貯蔵穴：南東隅付近に位置し、規模は長軸71cm、短軸59cm、深さ44cmを測り、楕円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

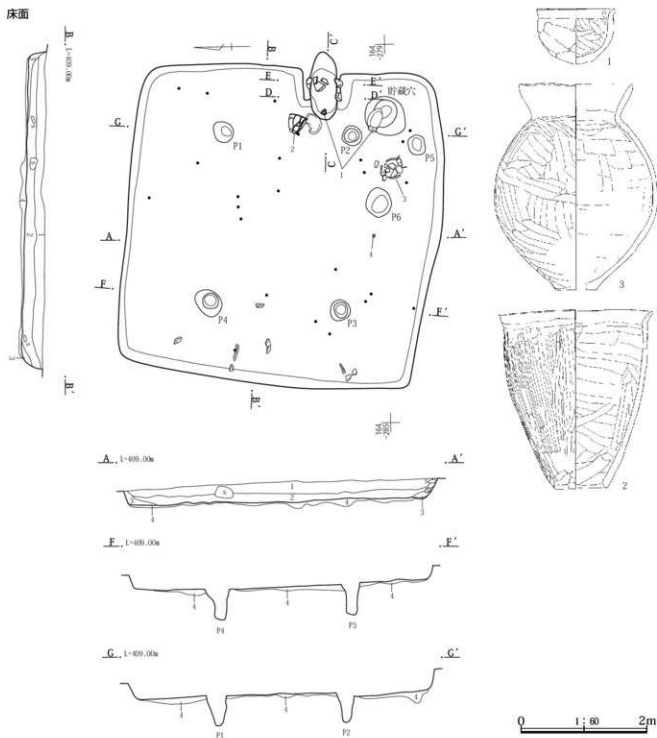
柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成され、東西方向にやや長い長方形を呈する。主柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸30～45cm、短軸30～35cm、深さ44～48cmを測り、埋土は黒褐色土と暗褐色土を主体とする。他に、南壁付近にP5・6の2基があり、楕円形で長軸30～40cm、短軸25～30cm、深さ15cm前後を測り、埋土は黒褐色土を主体としている。

床面下：床面下は、僅かな掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。全体に凹凸の著しい底面となり、礫面が露出する。床面下の埋土はロームブロック混じりの黒褐色土で、上面は硬い床面を構築している。

遺物：遺物は埋土中からの出土も多いが、カマド前付近に2の櫃と扁平な大型礫、貯蔵穴西側の床面直上からは3の甕が出土している。また、P6の西側床面直上からは、4の小玉が出土している。他に、西壁付近の床近くからは、炭化材が出土している。

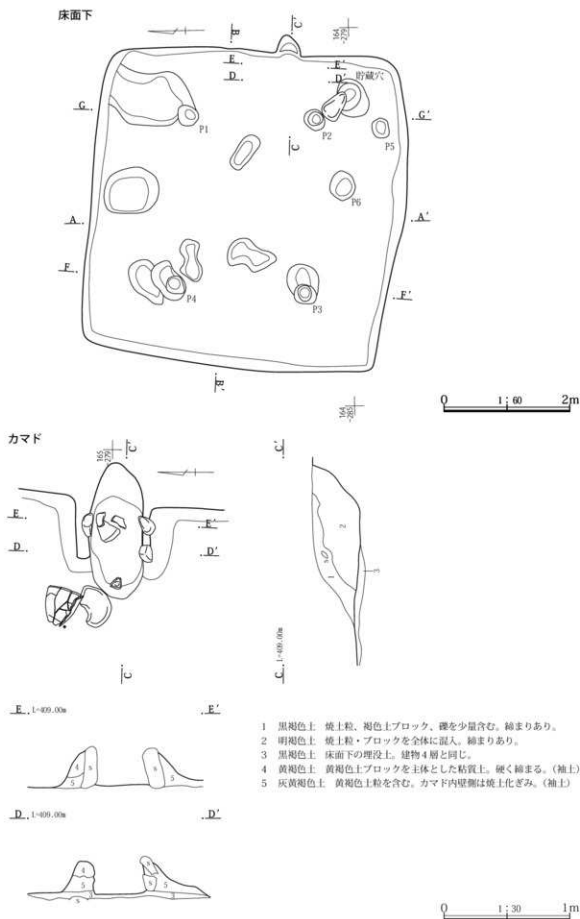
出土遺物として、土器3点と玉1点を図示した。土

床面

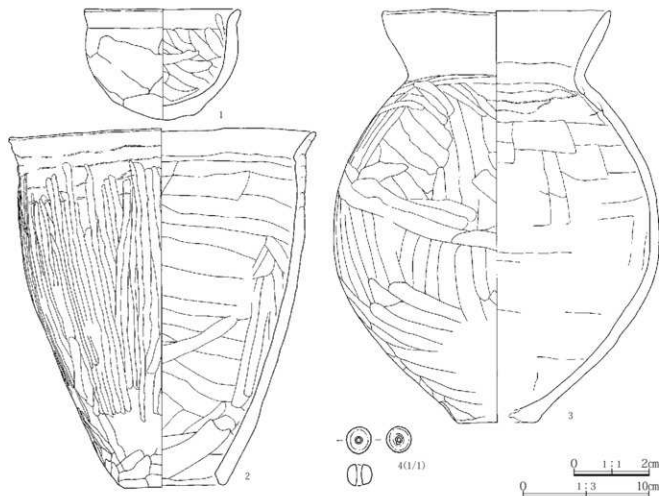


- 1 黒褐色土 黄褐色鉱物粒、白色鉱物粒、礫を少量含む。締まりあり。
- 2 黒褐色土 黄褐色鉱物粒、焼土を含む。1・2層間に大型礫を混入する。締まりあり。
- 3 暗褐色土 僅かに赤褐色鉱物粒を含む。締まりあり。
- 4 黒褐色土 ロームブロックと黒褐色土の混在土。上面が住居床面となる。(床下上)

第497図 4区9号竪穴建物 床面 平・断面図



第498図 4区9号竪穴建物 床面下、カマド 平・断面図



第498図 4区9号竪穴建物 出土遺物

師器に1の鉢、2の甕、3の甕がある。

石製品には、4の蛇紋岩製の小玉がある。径7mm、厚さ6mm、孔径約1mmを測り、丁寧な研磨整形の施されたオリブ黒色した玉である。

未掲載遺物には、同時期の土器片と黒曜石製の剥片がある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性がある。建物の時期は、出土土器から5世紀後半の建物と考えられる。

4区10号竪穴建物

(第500～503図、第28・208表、PL.138・139・262・263)

平成27年度の調査で検出した。4区11号竪穴建物と重複する。

位置：4-D区の中央付近に位置し、時期の異なる4区11号竪穴建物と重複する。南南西側24.2mに4区16号竪穴建物、西北西側3.5mに4区10号竪穴建物がある。

グリッド：2F・2G-54～56

座標値：X=61,157～61,163 Y=93,269～93,276

重複：本建物の南東隅を、4区11号竪穴建物の北西隅が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が古い。

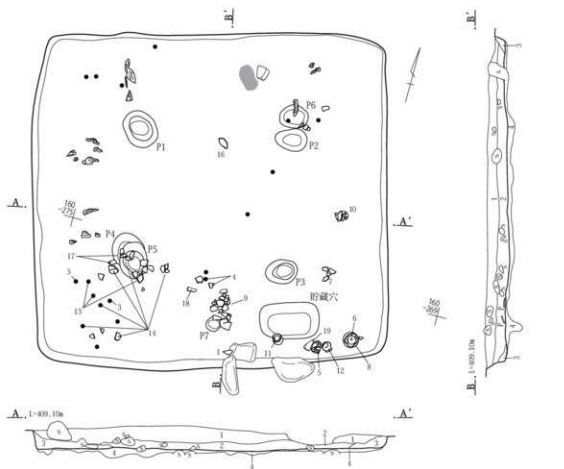
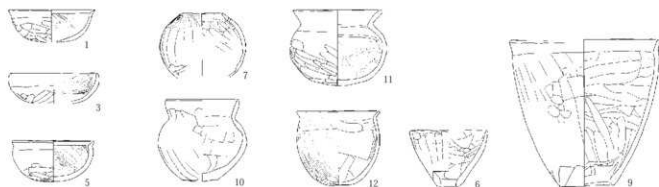
形状：正方形

規模：長軸5.85m 短軸5.66m 壁高7～45cm

長軸方向：N-13°-W 床面積：27.20㎡

埋没土：1・2層の黒褐色土を主体とし、壁際付近の3層とした暗褐色土とに分離できる。埋土中下位からは、炭化材が出土している。また、層中に大小の自然礫を多く含むことから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、建物中央付近を中心に硬化が著しい。北壁付近の床の一部に、被熱による焼土化を確認した。また、四方の壁面には、地山礫が露出する。壁高は7～45cmを測り、垂直ぎみに立ち上がる。

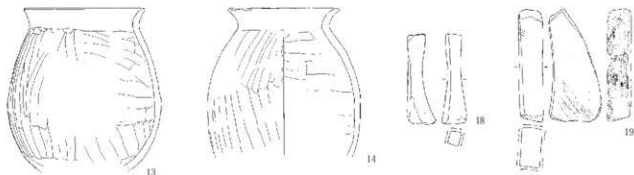


A. 1:400, 10m

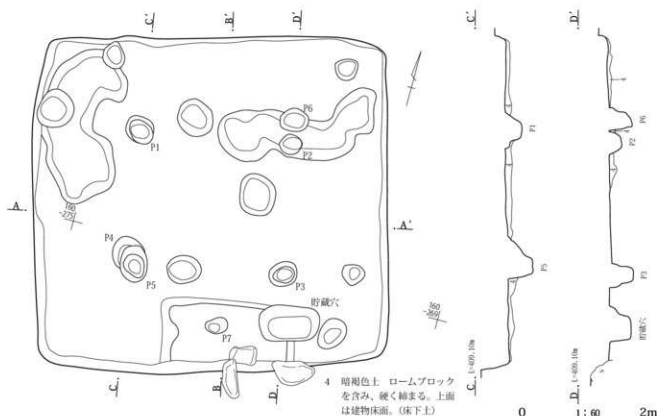
B. 1:60, 10m

- 1 黒褐色土 赤褐色・黄褐色・白色鉱物粒を少量、大型礫を含む。締まりあり。
- 2 黒褐色土 1層と同様であるが、中・小の礫や炭化物を多く含む。締まりあり。
- 3 暗褐色土 1・2層より明るく、白色鉱物粒を少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロックを含み、硬く締まる。上面は建物床面。(床下上)

0 1:60 2m



第500図 4区10号貯穴建物 床面 平・断面図



第501図 4区10号竪穴建物 床面下 平・断面図

貯蔵穴：南東隅付近の南壁際位置し、規模は長軸94cm、短軸57cm、深さ30cm前後を測り、長方形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

柱穴：主柱穴はP1～4(5)の4本で構成され、概ね正方形を呈する。P4とP5はほぼ同位置にあり、深さからすればP5が本来の主柱穴と考えられる。主柱穴上面は楕円形で、長軸50～60cm、短軸35～50cm、深さ28～36cmを測り、埋土は黒褐色土と褐色土を主体とする。他に、P2脇にP6、南壁中央付近にP7の2基があり、円形ないし楕円形で、長軸25～43cm、短軸25～35cm、深さ30cm前後を測り、埋土は黒褐色土を主体としている。

床面下：床面下は、僅かな掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。凹凸の著しい底面となり、礫面が露出する。床面下の埋土はロームブロックを含む暗褐色土で、上面は建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は比較的に多く、建物の南側に集中する傾向にある。土器の出土は、床面直上ないし床付近からの出土がかなり多い。南東隅付近の南壁際からは、8の壺と6の有孔鉢が入れ子状態で、11・12の小

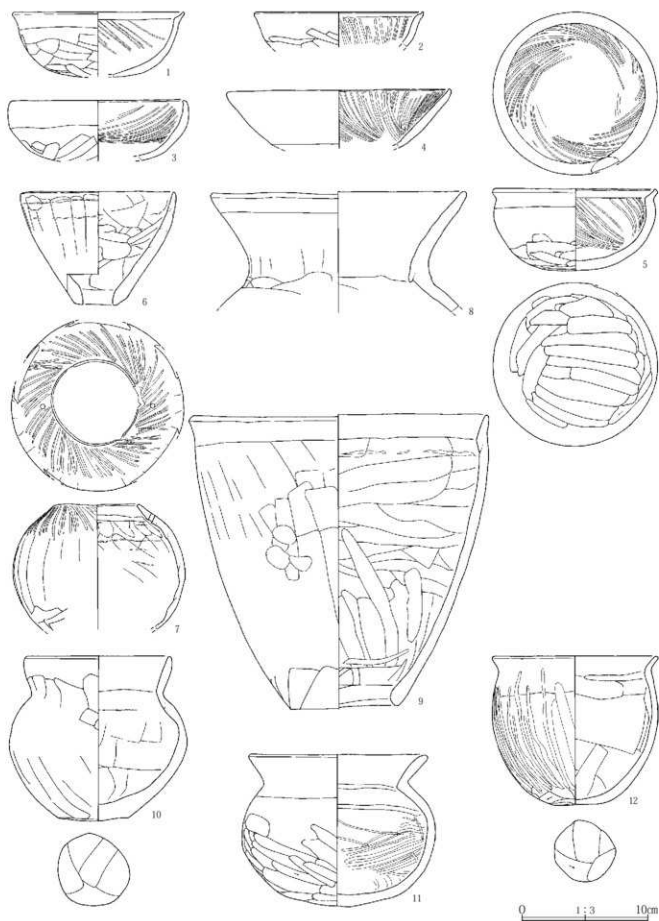
型甕、5の鉢、19の砥石がまとめて床面上出土している。また、4の高杯や9の甕はP7脇の床面上から、18の砥石もその近くからの出土である。3の杯、13・14の甕はP4・5脇の床面上から出土している。他に、炭化材等は、建物の西壁付近に残存するものが多い。

出土遺物として、土器17点と石製品2点を図示した。土器には多くの器種がある。1～3は内面へら磨きの杯であり、1・2は内斜口縁となる。4は内面へら磨きの高杯(体部)。5は内面へら磨きの内斜口縁の鉢で、6は有孔鉢。7は外面上位がへら磨きの壺で、8は壺の口縁部。9は甕。10～12は小型甕で、13～17は甕および甕の底部である。

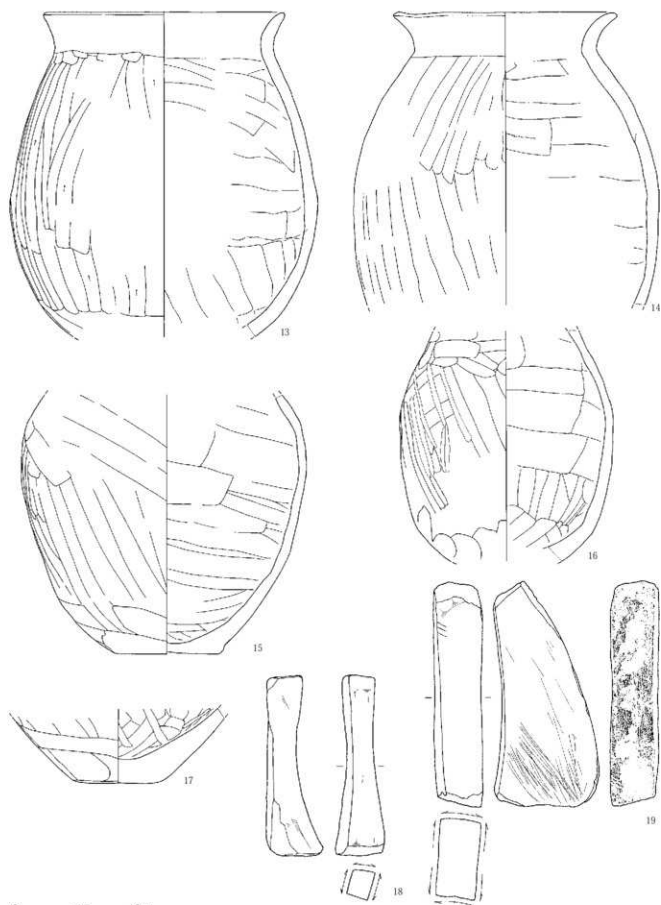
石製品としては、18の流紋岩製の砥石、19のデイサイト製の砥石がある。

未掲載遺物には、同時期の土師器杯・甕片が多量にある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性がある。建物の時期は、出土土器から古墳時代となる5世紀中頃に比定でき、カマドをもつ前段階に相当する。



第502図 4区10号竪穴建物 出土遺物(1)



第503図 4区10号竖穴建物 出土遺物(2)

4区16号竪穴建物

(第504図、第28・213表、PL.142・265)

平成27年度の調査で検出した。建物の南半は調査区外となる。

位置：4-D区の南端西寄りの南壁際に位置し、北側28.5mに4区9号竪穴建物、北北東側24.2mに4区10号竪穴建物がある。

グリッド：2A-56・57

座標値：X=61,131~61,134 Y=-93,279~93,284

形状：正方形か

規模：長軸(3.00)m 短軸(3.38)m 壁高0.6~12cm

長軸方向：N-43°-E 床面積：(6.21)㎡

埋没土：1層のAs-Kkを多量に含む耕作土下に、2層のAs-Kkを含まない黒褐色土が堆積し、3層の黒褐色土が本建物の埋没土となる。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、カマド前から建物中央付近に硬化を確認した。壁高は0.6~12cmを測り、調査区南壁の土層断面では垂直ぎみに立ち上がる。

カマド：東壁の中央付近に位置し、カマドの主軸方位はN-33°-Eを向き、遺存状態は良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長1.23m、幅0.82mを測る。袖は壁から55cmほど突き出るように残存し、両袖の先端に袖石が確認された。また、燃焼部の右壁には壁石が1石のみ配される。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より僅かに低くなり、煙道部は斜めに緩く立ち上がる。カマド前に被熱した大型礫が出土していることから、焚口部先端(袖部先端)が鳥居状の石組みであった可能性が高い。

貯蔵穴：カマドの右側に位置するが、規模等は不明。埋土は黒褐色土を主体とする。

柱穴：主柱穴と考えられるP1のみを確認した。径50cm、深さ20cmを測る円形で、埋土は黒褐色土を主体とする。

床面下：床面下は、僅かな掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面は凹凸が著しく、礫面が露出する。床面下の埋土は黄色・焼土粒を含む黒褐色土で、上面は建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は少ない。カマド脇から1の杯、カマド内から2の甕の底部が出土している。

出土遺物として、上記の土師器2点を図示した。

未掲載遺物には、同時期の土師器杯・甕片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀前半の建物と考えられる。

4区26号竪穴建物

(第505・506図、第28・221表、PL.151・271)

平成27年度の調査で検出した。極めて、残存状況の悪い建物である。なお、第1面調査で検出された4区110号土坑と重複する。

位置：4-C1区の中央北寄りに位置し、南側12.3mに4区30号竪穴建物、西南西側9.0mに4区28号竪穴建物がある。

グリッド：2F・2G-63・64

座標値：X=61,157~61,161 Y=-93,313~93,318

形状：横長長方形

規模：長軸5.04m 短軸4.09m 壁高0.2~0.9cm

長軸方向：N-89°-E 床面積：19.72㎡

埋没土：1層の礫を混入する黒褐色土を主体とする。

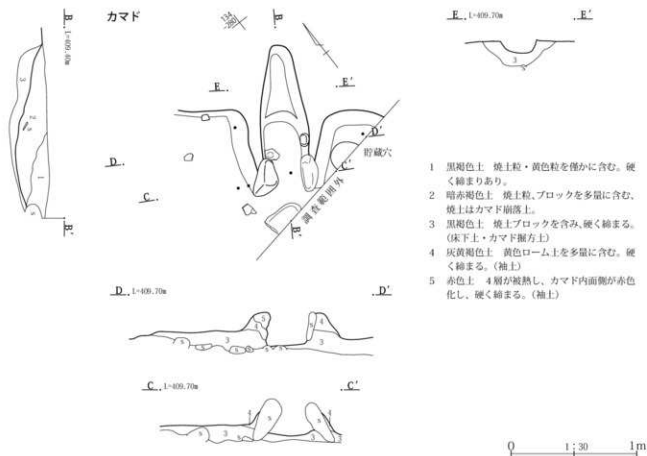
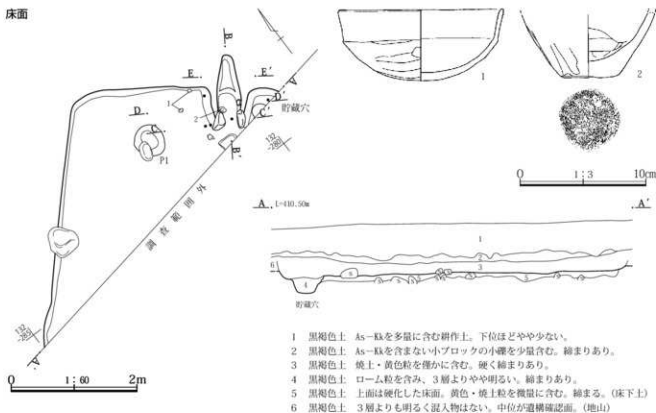
床面・壁：床面は暗褐色土下位にあり、ほぼ平坦であるが小礫が床全体に露出し、カマド周辺から建物中央にかけてやや硬化する。壁高は2~9cmと浅く、斜めに立ち上がる。

カマド：北壁の中央付近に位置し、カマドの主軸方位はN-22°-Eを向き、遺存状態は極めて悪い。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部は不明。規模は全長(1.50)m、幅(1.20)mを測る。袖は壁から110cmほど突き出るようにあったと考えられ、両袖の先端となる袖石を確認した。燃焼部の中央には支脚石、燃焼部の左内壁には壁石が残存している。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面よりやや低くなる。なお、袖石に使用された石材は、未固結凝灰岩である。以上の状況から、本建物のカマドは石組みであった可能性が考えられる。

貯蔵穴：カマドの右側となる北東隅付近に位置し、楕円形を呈する。規模は長軸100cm、幅70cm、深さ22cmを測る。埋土は黒色土を主体とする。

柱穴：主柱穴はP1~4の4本で構成され、概ね正方形を呈する。主柱穴上面は円形で、径30cm前後、深さ25

床面



第504図 4区16号竪穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物

～34cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

床面下：床面下は、8～15cm前後の掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面はローム上面にあり、大小の凹凸が著しく、地山礫が露出する。また、建物中央北寄りと西壁際に床下土坑を検出した。床下土坑1は長方形を呈し、長軸114cm、短軸75cm、深さ12cmを測る。床下土坑2は小型な長方形を呈し、長軸70cm、短軸50cm、深さ8cmを測る。床面下の埋土は黒褐色土で、上面は硬化した建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は少なく、カマドの右袖脇となる貯蔵穴上面から2の甕が出土し、3・4の白玉は建物中央の床面直上から、5の白玉は貯蔵穴底面から出土している。

出土遺物として、土器2点と石製品3点を図示した。

1は内面へラ磨きの土師器杯、2は土師器の甕である。また、石製品の白玉3点の石材は、3・4が蛇紋岩製、5が滑石製である。

未掲載遺物には、同時期の土師器の杯・甕片が少量ある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から6世紀前半の建物と考えられる。

4区27号竪穴建物

(第507・508図、第28・222表、Pl.151・152・271)

平成27年度の調査で検出した。建物の北隅は調査区外となる。

位置：4-C1区の北端西寄りの北壁際に位置し、南西側5.5mに4区28号竪穴建物と重複する4区29号竪穴建物がある。

グリッド：2G・2H-65-67

座標値：X=61,161～61,167 Y=93,324～93,330

形状：方形

規模：長軸4.65m 短軸4.47m 壁高30～46cm

長軸方向：N-45°-E 床面積：推定18.30㎡

埋没土：1層の黒褐色土および2・3層の暗褐色土を主体とする。2層下位には、炭化物・小炭化材が多く含まれる。なお、1層中に中小の自然礫が多く含まれることから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、全体が硬化している。床面付近には、多くの炭化材を出土

している。また、地山礫層を掘り抜くように竪穴建物が構築された結果、壁面には礫層が露出する。壁高は30～46cmを測り、全体に垂直気味に立ち上がる。

カマド：北東壁のほぼ中央に位置し、カマドの主軸方位はN-44°-Eを向き、遺存状態は良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長1.6m、幅0.82mを測る。袖は壁から60cmほど突き出るように残存し、両袖の先端に袖石が確認された。また、燃焼部の両内壁には壁石が配され、壁石は被熱している。煙道部での壁石はない。焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より低くなり、燃焼部奥から煙道部は斜めに立ち上がる。袖石や燃焼部壁石から、石組みのカマドであった可能性を残す。

貯蔵穴：カマドの右側となる東隅付近に位置し、規模は一边65cm前後、深さ75cmを測る方形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成され、ほぼ方形を呈する。主柱穴上面は円形ないし楕円形で、長軸44～60cm、短軸38～50cm、深さ70cm前後を測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

壁周溝：カマドが位置する北東壁以外の、東南・南西・西北の3方向の壁際に巡り、幅15cm前後、深さ7cmを測る。埋土は、ローム粒やロームブロックを含む褐色土。

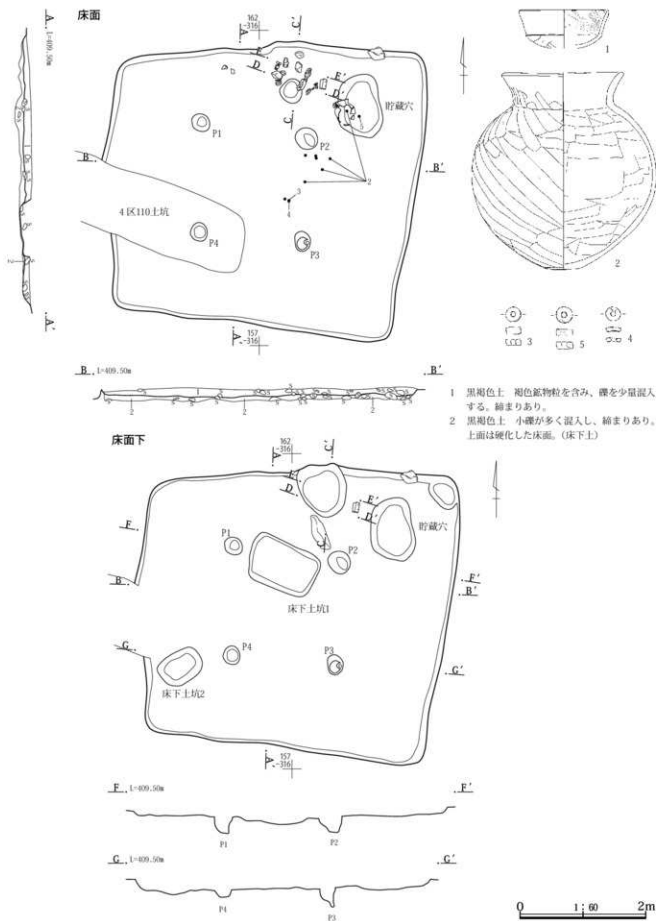
床面下：床面下は、15cm前後の掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面は凹凸が著しく、東側と西側の一部が一段低くなる。床面下の埋土は、明黄褐色土でロームブロックと暗褐色ブロックの混土を主体とし、上面は建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は少ない。南東壁中央付近の壁際床付近から1の杯、カマド内から2・5の杯が出土している。

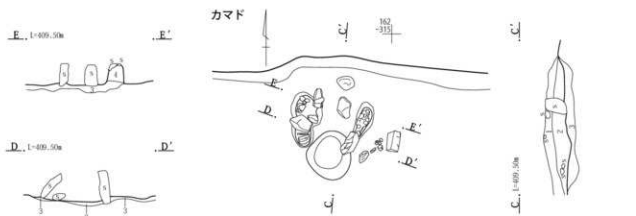
出土遺物として、土師器6点を図示した。1～5の内面へラ磨きの杯、6の甕の底部がある。

未掲載遺物には、同時期の土師器杯・甕片がある。

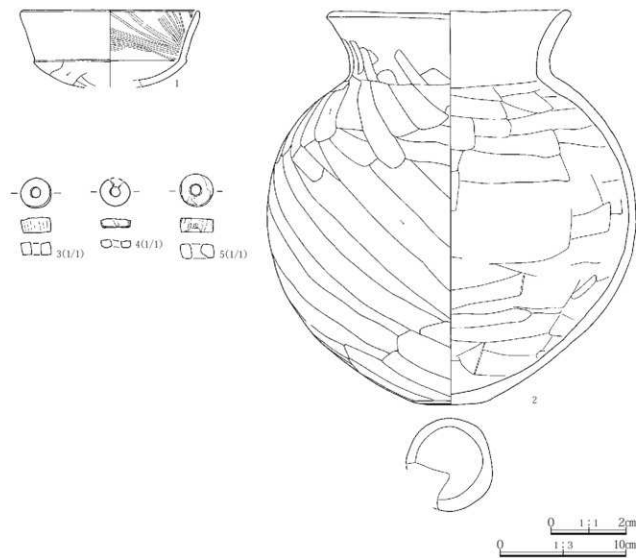
所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性がある。建物の時期は、出土土器から5世紀末から6世紀初頭の建物と考えられる。



第505図 4区26号竪穴建物 床面、床面下 平・断面図



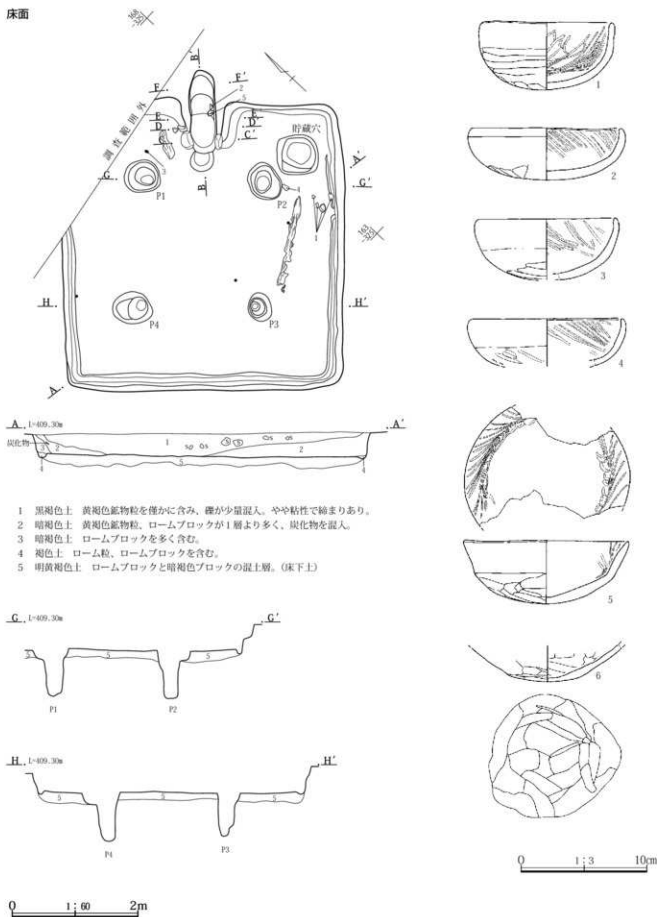
- 1 黒褐色土 白色鉱物粒、焼土粒、礫を少量含む。建物1層と同じ。
- 2 明褐色土 焼土粒、焼土ブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒、炭化物を僅かに含む。建物2層に相当。(カマド床下土)
- 4 黒褐色土 灰黄褐色土・焼土を少量含み、締まりあり。(袖土)



第506図 4区26号竪穴建物 カマド 平・断面図、出土遺物

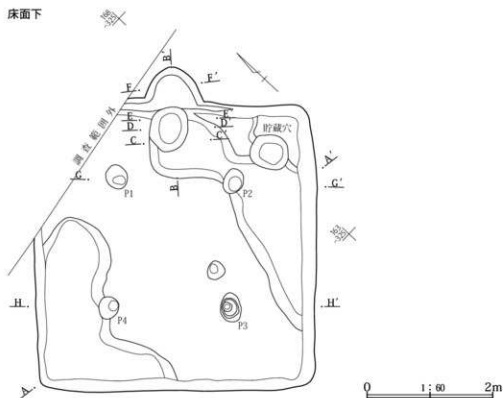
第4章 検出された遺構と遺物

床面

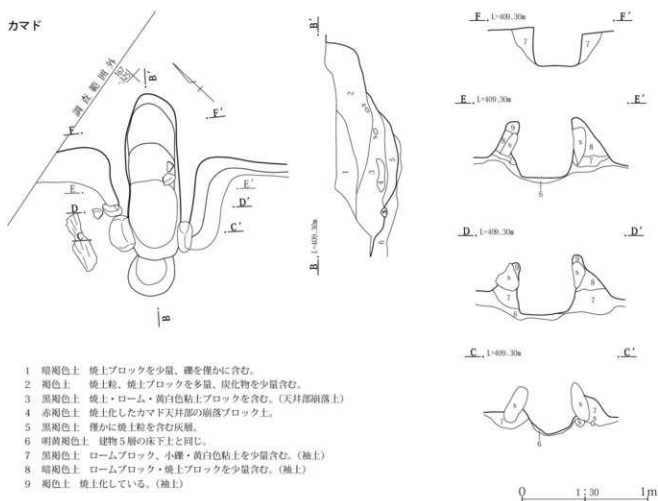


- 1 黒褐色土 黄褐色鉱物粒を僅かに含み、礫が少量混入。やや粘性で締まりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色鉱物粒。ロームブロックが1層より多く、炭化物を混入。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 4 褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
- 5 明黄褐色土 ロームブロックと暗褐色ブロックの混上層。(床下上)

第507図 4区27号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物



カマド



- 1 暗褐色土 焼土ブロックを少量、礫を僅かに含む。
- 2 褐色土 焼土粒、焼土ブロックを多量、炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土・ローム・黄白色粘土ブロックを含む。(天井部崩落土)
- 4 赤褐色土 焼土化したカマド天井部の崩落ブロック土。
- 5 黒褐色土 僅かに焼土粒を含む灰層。
- 6 明黄褐色土 建物5層の床下土と同じ。
- 7 黒褐色土 ロームブロック、小礫・黄白色粘土を少量含む。(焼土)
- 8 暗褐色土 ロームブロック・焼土ブロックを少量含む。(焼土)
- 9 褐色土 焼土化している。(焼土)

第508図 4区27号竪穴建物 床面下、カマド 平・断面図

4区32号竪穴建物

(第509・510図、第28・227表、PL.156・274)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-C3区の東際に位置し、北東側に4区14号竪穴建物が近接する。

グリッド：2F-G-58-59

座標値：X=61,158~61,163 Y=-93,288~93,293

形状：隅丸長方形

規模：長軸4.80m 短軸3.79m 壁高25~39cm

長軸方向：N-16°-E 床面積：16.15㎡

埋没土：4・5層の黒褐色土を主体とし、床面付近に7層とした暗褐色土とに分層できる。埋土中下位および床直上には、炭化物や炭化材が出土している。

床面・壁：床面は基本層序4-D区北壁VI層に相当する礫層中にあり、ほぼ平坦で、部分的に硬化している。壁高は25~39cmを測り、垂直気味に立ち上がる。なお、

北東隅付近に土坑状の掘り込みを確認した。規模は長軸85cm、短軸75cm、深さ15cmを測る楕円形。

炉：炉は確認できなかった。

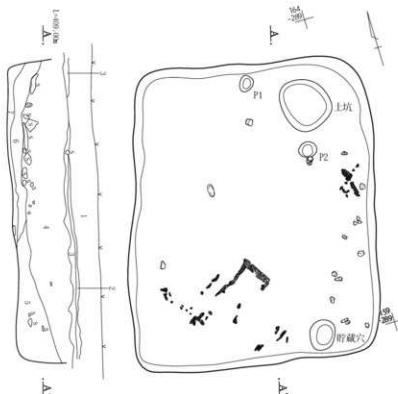
貯蔵穴：南東隅の壁際に位置し、規模は長軸48cm、短軸40cm、深さ25cmを測り、楕円形を呈する。

柱穴：主柱穴は不明だが、P1・2を検出した。径25cm前後、深さ15cmを測る円形。

遺物：遺物の出土量はやや多く、南東側にまとまって出土しているが、埋土中からの出土がほとんどである。

出土遺物として、土師器10点と石器2点を図示した。土器はすべて土師器である。1・2は内面へら磨きで内斜口縁の杯、3は鉢の底部、4・5は高環の杯部と脚部で、外面にへら磨きが施されている。6は小型甕で、7は甕。8~10は甕の底部で、8の外面にはへら磨きが施されている。

石器には11の石鏝と12の磨石があり、共に細粒輝石



- 1 灰黄褐色土 表土 As-Kkを多量に含む。(基本土層序4-D区北壁I・II層に相当)
- 2 鈍い黄褐色軽石層 As-Kkの一次堆積層。(基本土層序4-D区北壁III層に同じ)
- 3 灰黄褐色灰層 As-Bの一次堆積層。灰層をとし、下部に細かな軽石が堆積。(基本土層序4-D区北壁IV層に同じ)
- 4 黒褐色土 小型の内礫を多く含む。(基本土層序4-D区北壁V・VI層に相当)
- 5 黒褐色土 4層に近似するが、炭化物を少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子を少量含み、小礫を含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子を僅かに含む。

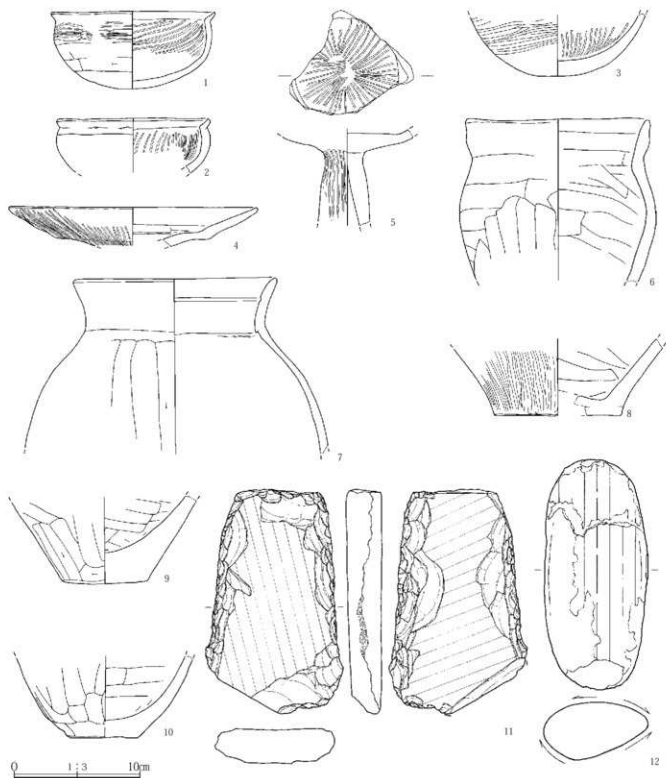


第509図 4区32号竪穴建物 床面 平・断面図

安山岩製である。11は両側辺に両面加工、先端刃部には希薄な二次加工が認められ、長さ(17.7)cm、幅(10.9)cm、厚さ2.8cmを測る。12は全面が磨面となり、長さ18.1cm、幅8.2cm、厚さ4.5cmを測る。

未掲載遺物には、同時期の土器片が多くある。

所見・時期：出土した炭化材の状況から、焼失家屋の可能性はある。建物の時期は、出土土器から古墳時代となる5世紀中頃に比定でき、カマドをもつ前段階に相当する。



第510図 4区32号竪穴建物 出土遺物

第4項 古代(7世紀後半以降)の遺構と遺物

(1)概要

本調査区で検出された古代の遺構は、調査区の西側に当たる4-A区では極めて希薄で、調査区中央から東側の4-C・D区に散漫に点在する。しかし、本調査区の西側となる1～3区においては数多く検出されている。基本層序とした4-A区北壁IV層上面、4-B区北西壁VII層上面、4-D区北壁および南壁でのVI層中位を確認面とした第2面調査で、4-A2区に土坑が、そして4-C・D区に竪穴建物を主とする7世紀後半から9世紀にかけての集落が検出された。この集落を構成する遺構には、竪穴建物7棟(内、1棟は不明な点の多い建物)、土坑16基がある。検出された建物の配置状況から、集落の広がりには調査区外となる北・東・南側にまで展開するものと推測される。

(2)竪穴建物

本調査区で検出された古代(7世紀後半以降)の竪穴建物は、第2面調査において4-C区に3棟、4-D区に4棟の計7棟の建物が検出された。

以下、各建物ごとに記述する。(第28表 4区竪穴建物一覧を参照)

4区5号竪穴建物

(第511図、第28・203表、PL.134・260)

平成27年度の調査で検出した。建物の北側は調査区外となり、4区6・22・23号竪穴建物と重複する。調査時は、4区6・23号竪穴建物に先行して調査を行った。

位置：4-D区の北端西寄りの北壁際に位置し、建物の東側に4区23号竪穴建物、南東隅を4区6号竪穴建物と重複し、西半は時期の異なる4区22号竪穴建物と重複する。また、南側24.0mに4区13号竪穴建物がある。
グリッド：21・2J-55

座標値：X=61,172～61,175 Y=93,270～93,274

重複：本建物の西半には、4区22号竪穴建物が重複するが、遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が新しい。また、東側に重複する4区23号竪穴建物は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が新しい。4区6号竪穴建物との重複では、出土土器から本建物

の方が古い。

形状：方形か

規模：長軸(3.46)m 短軸(3.14)m 壁高0.7～47cm

長軸方向：N-86°-W 床面積：(8.73)㎡

埋没土：1・2層の暗褐色土を主体とし、壁際付近の3層とした明暗褐色土とに分層できる。なお、調査範囲内の北壁の土層断面では、1層よりも上層に、上位から順に基本土層1層のAs-Kkを多量に含む耕耕作土、1層のAs-Kkを多量に混在する耕作土、II層のAs-Kk層、III層となるAs-BPの灰層と下部に軽石層が薄く堆積し、さらにIV層の小礫を含むやや粘性質な暗黒褐色土という層順となる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、カマド周辺から建物中央にかけて硬化している。本建物の床面は、重複する4区6・23号竪穴建物床面より低い位置にあり、4区22号竪穴建物床面は本建物より深い。壁高は47cmを測り、ほぼ垂直気味に立ち上がる。

カマド：建物の北壁は調査範囲外にあるため詳細は欠くが、北壁の東寄りに(北東隅にかなり寄った)位置し、カマドの主軸方位は概ねN-20°-Eを向き、遺存状態は良好である。燃焼部・煙道部の状況は不明で、調査区内での規模は全長(0.31)m、幅(0.75)を測る。袖は壁から突き出るように残存し、両袖の先端に袖石が確認された。また、燃焼部の右内壁には壁石が配され、壁石は被熱している。焚口部から燃焼部の底面にかけでは、建物床面よりやや低くなる。細部に不明な点を残す。

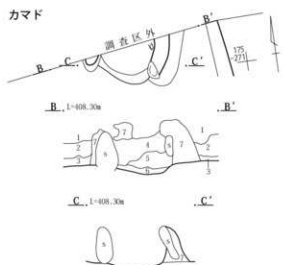
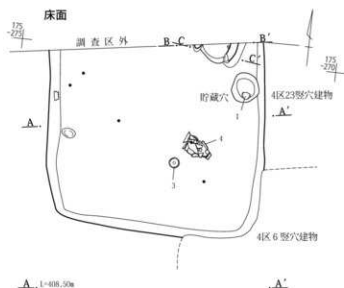
貯蔵穴：カマドの右側となる北東隅付近に位置し、規模は径45cm前後、深さ15cmを測るやや浅い円形を呈する。埋土は暗褐色土を主体とする。

床面下：4区22号竪穴建物と重複する西半では判然としませんが、東半では3～5cm前後の浅い掘り込み面をもつ。埋土は黒褐色土で、上面が硬化した建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は少なく、その大部分が埋土中からである。1の杯は東壁付近の上位から、3の蓋・4の甕は建物中央付近の埋土下位から出土している。

出土遺物として、土器4点を図示した。1・2は土師器杯で、2は内面へラ磨き。3は完形の須恵器の蓋、4は土師器の甕である。

未掲載遺物には、同時期の土師器杯・甕片が少量あ

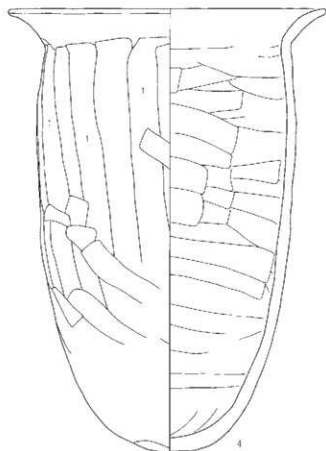
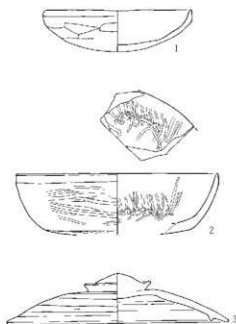


- 1 暗褐色土 混入物が少なく暗い。粘質弱い。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、黄色軽石を微量に含む。1層よりやや明るい。
- 3 明暗褐色土 炭化物を少量、ローム粒を含む。粘質で締まりあり。

- 1 暗褐色土 建物1層と同じ。
- 2 暗褐色土 建物2層と同じ。
- 3 明暗褐色土 建物3層と同じ。
- 4 黄褐色土 黄褐色粘質土ブロックを多く含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロックを多量に混在する。
(壁底部内壁崩落土か)
- 6 暗褐色土 焼土粒を多く含む。
- 7 黒褐色土 黄褐色粘質土ブロックを強かに含む。
(補土)

0 1:60 2m

0 1:30 1m



0 1:3 10m

第511図 4区5号竪穴建物 床面、カマド 平・断面図、出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

る。

所見・時期：重複の新旧関係は、4区22号竪穴建物→本建物、4区23号竪穴建物→本建物→4区6号竪穴建物の順となる。建物の時期は、出土土器から7世紀末の建物である。

4区6号竪穴建物

(第512・513図、第28・204表、PL.135・260)

平成27年度の調査で検出した。4区4・5・23号竪穴建物と重複する。調査時は、4区5号竪穴建物調査の後に、4区23号竪穴建物と共に調査を行った。

位置：4-D区の北端西寄りの北壁付近に位置し、建物の北側に4区5号竪穴建物および4区23号竪穴建物、南東隅に時期の異なる4区4号竪穴建物が重複し、南南西側21.5mに4区13号竪穴建物がある。

グリッド：2H・2I-54・55

座標値：X=61,169~61,173 Y=-93,268~93,272

重複：本建物の北側に接するように重複する4区23号竪穴建物とは、土層断面の観察から本建物の方が新しい。また、北西隅に重複する4区5号竪穴建物とは、出土土器から本建物の方が新しい。さらに、東側に重複する4区4号竪穴建物とは、本建物のカマドが上位に検出されていることから本建物が高い。

形状：横長長方形

規模：長軸(4.16)m 短軸3.29m 壁高18~29cm

長軸方向：N-6°-W 床面積：(10.21)㎡

埋没土：1層とした、小ブロックを全体に多く含む明暗褐色土を主体とする。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、カマド周辺から建物中央にかけて硬化している。本建物の床面は、重複する4区5・23号竪穴建物の床面より高い位置にある。壁高は18~29cmを測り、やや垂直気味に立ち上がる。

カマド：東壁の中央南寄りに位置し、カマドの主軸方向はN-87°-Eを向き、遺存状態は極めて良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長0.78m、幅1.1mを測る。袖は壁から74cmほど突き出るように残存し、両袖の先端に袖石が確認され、両袖石間に長い平石が二つに折れた状態にあった。この平石は、長さ123cm、幅40cm、厚さ9cmを測り、

鳥居状となる焚き口部の天井石である。また、燃焼部の奥寄りには、長さ93cm、幅60cm、厚さ26cmを測る扁平な垂円礫が残存し、燃焼部奥側から煙道部に至る天井石となっている。燃焼部から煙道部の内壁には壁石が配され、これら袖石を含めた壁石および天井石のカマド内面側は被熱している。焚き口から燃焼部の底面にかけては、建物床面より低くなり、燃焼部奥には段を有し、煙道部は斜めに立ち上がる。なお、袖の構築にあたっては、内部に扁平な垂円礫を芯材としている。以上の状況から、本建物のカマドは良好な遺存状態にある石組みのカマドであった。

貯蔵穴：カマドの右側となる南東隅に位置し、規模は長軸100cm、短軸80cm、深さ17cmを測る楕円形を呈する。埋土は黒褐色土を主体とする。

床下土坑：西壁中央の壁際に楕円形を呈する床下土坑を検出した。規模は長軸77cm、短軸48cm、深さ23cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

床面下：3~5cm前後の浅い掘り込み面をもち、埋土は黄色ロームブロックを含む鈍い黄褐色土で、上面が硬化した建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は多く、その大方がカマド周辺および埋土中からである。1~3の杯はカマド前の床面直上から、5の甕はカマド内から出土している。

出土遺物として、土器6点を図示した。1・2は内面へう磨きの土師器杯、3・4は須恵器の杯、5・6は土師器の甕である。

未掲載遺物には、同時期の土師器・須恵器の杯、甕片が多量にある。

所見・時期：重複の新旧関係は、4区4号竪穴建物→本建物であり、4区23号竪穴建物→4区5号竪穴建物→本建物の順となる。建物の時期は、出土土器から8世紀第3四半期と考えられる。なお、カマドは良好な石組み構造。

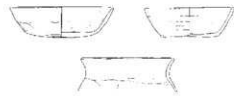
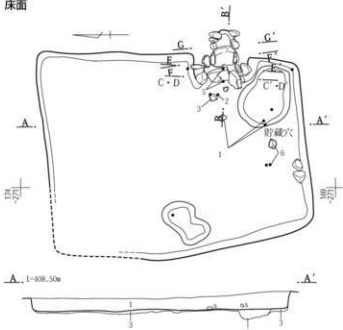
4区13号竪穴建物

(第514・515図、第28・211表、PL.141・265)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央西寄りに位置し、北側24.0mに4区5号竪穴建物があり、さらに北北東側21.5mに4区5号竪穴建物と重複する4区6号竪穴建物がある。

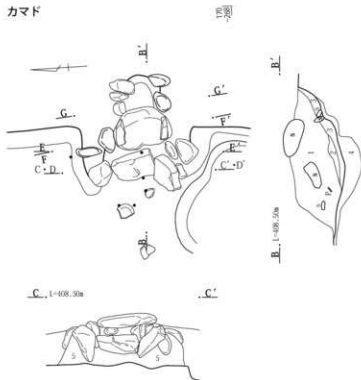
床面



- 1 暗褐色土 ローム粒・小ブロックを全体に多く含む。
- 2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含み明るく、締まりあり。(貯蔵穴)
- 3 鈍い黄褐色土 黄色ロームブロックを含み、硬く締まる。(床下土)

0 1:60 2m

カマド

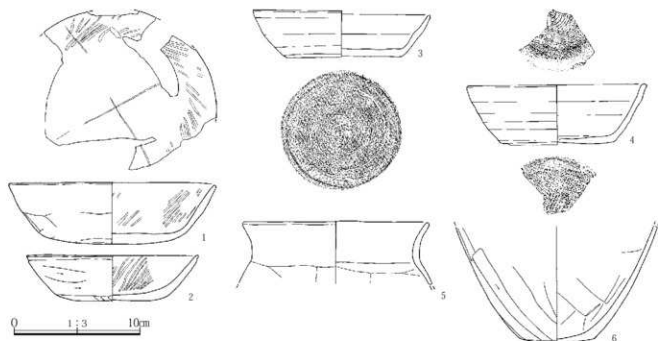


- 1 暗褐色土 建物1層と同じであるが、層中に大型の暗褐色土ブロックを含み、層下位ほど黒く焼土粒を少量含む。
- 2 明赤褐色土 焼土ブロック・粒が主体である。
- 3 暗赤褐色土 焼土粒を多く、やや灰を含む。極かに粘性あり。
- 4 黒褐色土 ロームブロック、焼土、炭化物を多く含む。締まりあり。(カマド側方土)
- 5 黒褐色土 焼土粒、汚れたローム大ブロックを少量含む。硬く締まる。(袖土)
- 6 鈍い黄褐色土 汚れたローム土を多量に、焼土粒も多く含む。硬く締まる。(袖土)

0 1:30 1m

第512図 4区6号竪穴建物 床面、カマド 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第513図 4区6号竪穴建物 出土遺物

グリッド：2C・2D-56

座標値：X=61,144~61,148 Y=93,275~93,279

形状：方形

規模：長軸3.21m 短軸3.04m 壁高11~41cm

長軸方向：N-76°-E 床面積：7.88㎡

埋没土：1層の黒褐色土を主体に、壁際の2層とした暗褐色土とに分層できる。なお、1層下位に大小の自然礫が多く含まれることから、人為的な埋没と考えられる。床面・壁：床面は暗褐色土下位ないしローム上面にあり、ほぼ平坦で、カマド周辺から建物中央にかけて硬化しているが、部分的に大小の地山礫が露出する。壁高は11~41cmを測り、やや垂直気味に立ち上がる。

カマド：東壁の中央南寄りに位置し、カマドの主軸方向はN-94°-Eを向き、遺存状態は極めて良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に突出し、規模は全長1.1m、幅(1.62)mを測る。袖は壁から94cmほど突き出るように残存し、両袖の先端に袖石状の石を確認したが異なる可能性もある。燃焼部の奥寄りには、長さ88cm、幅60cm、厚さ26cmを測る扁平な垂円礫が残存し、燃焼部奥側から煙道部に至る天井石となるが、燃焼部寄りにややずれている可能性もある。燃焼部から煙道部の内壁には壁石が配され、これら壁石および天井石のカマド内面側は被熱している。焚き口から燃

焼部の底面にかけては、建物床面より低くなり、燃焼部奥には段を有し、煙道部は斜めに立ち上がる。なお、袖の構築にあたっては、内部に扁平な垂円礫を芯材としている。以上の状況から、本建物のカマドは良好な遺存状態にある石組みのカマドであった。ただし、焚き口部の天井石は、カマド周辺に出土していない。

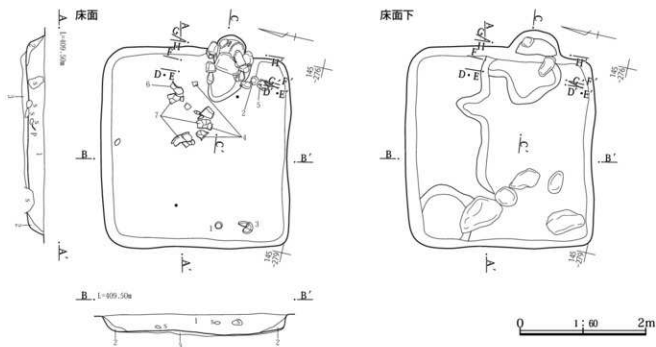
床面下：床面下は、5~10cm前後の掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面は大小の凹凸が多く、南側と北西隅がやや低くなる。床面下の埋土は黒色土で、上面は硬化した建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は多く、その大方がカマド周辺および埋土中からである。カマドの右袖脇から出土した2の杯と5の甕のうち、5は正位で床面直上から出土。4の櫃、6・7の甕はカマド前周辺の床面直上ないし床付近からの出土。1・3の杯は西壁際の埋土上位から出土している。

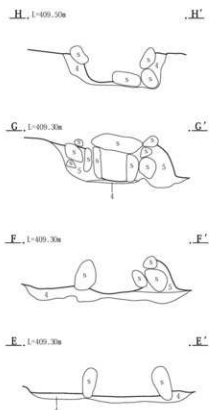
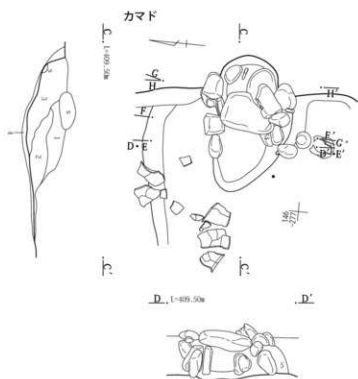
出土遺物として、土器7点を図示した。1は土師器の杯、2・3は須恵器の杯、4は土師器の櫃、5~7は土師器の甕である。

未掲載遺物には、同時期の土師器・須恵器の杯、甕片がある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から8世紀第2四半期と考えられる。なお、カマドは良好な石組み構造。



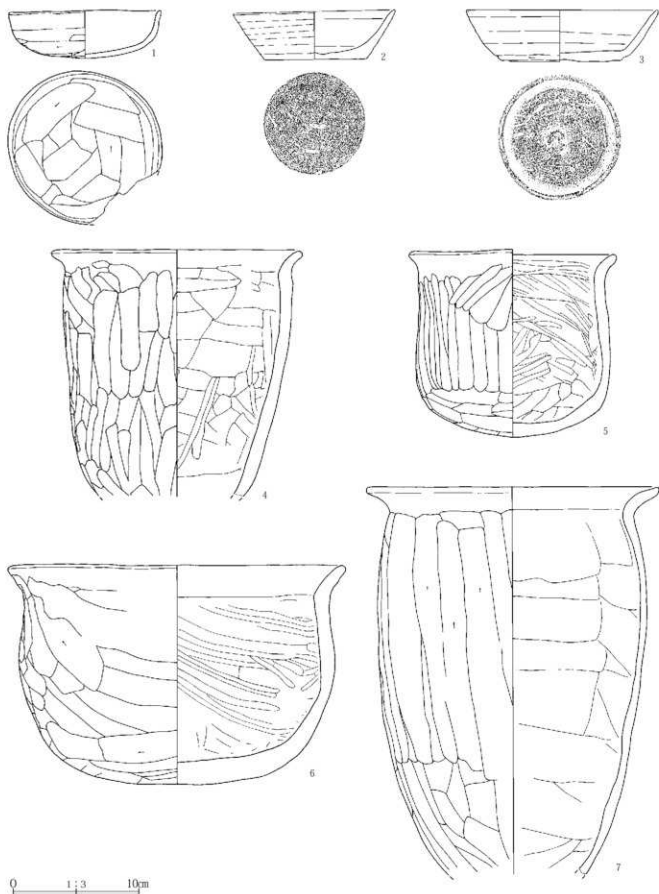
- 1 黒褐色土 白色鉱物粒、褐色土ブロックを少量、大小の礫を混入。締まりあり。
- 2 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む。締まりあり。
- 3 黒色土 ローム粒を微量含む。粘質で、上面は硬化した床面。(床下土)



- 1 黒褐色土 建物1層と同じ。少量の焼土粒を僅かに含む。
- 2 黒色土 黄褐色鉱物粒、焼土を微量含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒、黄褐色土ブロックを少量含む。
- 4 黒色土 ローム粒を微量含む。粘質で硬く締まる。(床下土)
- 5 黒褐色土 白灰色粘質土ブロックを少量含む。硬く締まる。(焼土)

第514図 4区13号竪穴建物 床面、床面下、カマド 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第515図 4区13号竪穴建物 出土遺物

4区23号竪穴建物 (第516図、第28表、PL.148)

平成27年度の調査で検出した。建物の北側は調査区外となり、4区5・6号竪穴建物と重複する。調査時は、4区5号竪穴建物調査の後に、4区6号竪穴建物と共に調査を行った。

位置：4-D区の北端西寄りの北壁際に位置し、建物の南側を4区6号竪穴建物、西側を4区5号竪穴建物と重複する。また、東側には時期の異なる4区4号竪穴建物が隣接する。

グリッド：2 I・2 J-54・55

座標値：X=61,173~61,175 Y=-93,268~93,271

重複：本建物の南側に重複する4区6号竪穴建物とは、土層断面の観察から本建物の方が古い。また、西側に重複する4区5号竪穴建物は、遺構確認および土層断面の観察から本建物の方が古い。

形状：方形か

規模：長軸(2.63)m 短軸(1.96)m 壁高26~38cm

長軸方向：N-7°-W 床面積：(4.13)m²

埋没土：1層の暗褐色土と、2層の明暗褐色土に分層できる。

床面・壁：床面はローム土中にあり、ほぼ平坦で、建物

床面



0 1:90 2m

第516図 4区23号竪穴建物 床面 平・断面図

中央付近は硬化している。本建物の床面は、重複する4区5号竪穴建物床面より高い位置にあり、4区6号竪穴建物床面よりやや低い。壁高は26~38cmを測り、やや垂直気味に立ち上がる。

カマド：検出されていない。調査区外の北壁に位置する可能性が高い。

遺物：出土していない。

所見・時期：重複の新旧関係は、本建物→4区5号竪穴建物→4区6号竪穴建物となる。不明な点が多いものの、建物の時期は、新旧関係から7世紀後半か。

4区28号竪穴建物

(第517~519図、第28・223表、PL.152~154・272)

平成27年度の調査で検出した。建物の北西を僅かに4区29号竪穴建物と重複する。

位置：4-C区の中央西寄りに位置し、東北東側9.0mに4区26号竪穴建物、南東側8.5mに4区30号竪穴建物がある。

グリッド：2 E・2 F-66・67

座標値：X=61,150~61,156 Y=-93,326~93,332

重複：本建物の北西隅付近が、4区29号竪穴建物の南壁と重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が新しい。

形状：方形

規模：長軸5.36m 短軸5.04m 壁高34~55cm

長軸方向：N-75°-E 床面積：22.48m²

埋没土：1・2層の暗褐色土と黒褐色土を主体に、壁際の3層とした黒色土、壁周溝の4層とした黒褐色土とに分層できる。なお、1・2層中に遺物と共に自然礫が多く含まれることから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はローム中にあり、ほぼ平坦で、カマド周辺から建物中央にかけて硬化している。また、カマド前付近の床には、白黄色粘質土が薄く張り床状に広がっていた。自然礫層を掘り抜いた建物のため、各壁面には大小の地山礫が露出する。壁高は34~55cmを測り、やや垂直気味に立ち上がる。

カマド：北壁の中央やや東寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-14°-Eを向き、遺存状態は良好である。燃焼部は壁の内側にあり、煙道部が外側に短く突出し、規模は全長0.89m、幅0.93mを測る。袖は壁から55cm

第4章 検出された遺構と遺物

ほど突出し、両袖の先端となる袖石を確認した。燃焼部の内壁は被熱して焼土化が著しい。焚口部から燃焼部の底面にかけては建物床面よりやや低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。

貯蔵穴：南東隅付近からカマドの右側となる北東隅の東壁際に、4基の貯蔵穴を検出した。南東隅付近の貯蔵穴を1、北東隅を貯蔵穴2、東壁中央北寄りを貯蔵穴3、東壁中央南寄りを貯蔵穴4とした。貯蔵穴1は不整形円形を呈し、径70cm前後、深さ15cmを測り、黒褐色土を埋土とする。貯蔵穴2は楕円形を呈し、長軸50cm、幅43cm、深さ13cmを測り、黒褐色土を埋土とする。貯蔵穴3は楕円形を呈し、長軸63cm、幅55cm、深さ20cmを測り、褐色土を埋土とする。貯蔵穴4は円形を呈し、径60cm、深さ10cmを測り、褐色土を埋土とする。

柱穴：主柱穴はP1～4の4本で構成され、概ね正方形を呈する。主柱穴上面は楕円形ないし円形で、P1は長軸74cm、幅56cm、P2～4は径60cm前後、深さ55～65cmを測り、埋土は黒褐色土を主体とする。

壁周溝：カマド部分を除く全ての壁際に巡り、幅18cm前後、深さ6～10cmを測る。埋土は、建物4層とした黒褐色土。

床面下：床面下は、5～20cm前後の掘り込みと、地山礫を除去した凹みを確認した。底面はローム中にあり、大小の凹凸が著しい。また、建物中央付近から南西側の底面が、一段低くなる。床面下の埋土は、ロームブロックと暗褐色土ブロックの混在する黄褐色土で、上面は硬化した建物床面となる。

遺物：遺物の出土量は比較的多いものの、その多くは埋土中からである。カマドの左側には、2の杯が床面付近、5の椀が埋土下位からの出土。10の甕の胴下半はカマド内の埋土中。3の杯は南壁付近の埋土下位から出土している。他は、埋土中の中・上位からの出土である。唯一の床面直上からの出土は、14の勾玉であり、カマド前から出土した。

出土遺物として、土器13点と石製品1点の計14点を図示した。1～4は土師器の杯、5は須恵器の杯蓋、6は須恵器の椀、7～10は土師器の甕である。また、11は土師器甕の胴上部に、墨書で人顔が描かれた(人面墨書土器)破片である。12・13は外面に平行叩き目をもつ須恵器の甕胴部片。さらに、石製品である14の

勾玉は滑石製である。

未掲載遺物には、同時期の土師器の杯・甕片が多量にある。

所見・時期：本建物は重複する4区29号竪穴建物より新しいものの、出土土器ではほぼ同時期の須恵器杯を出土させていることから極めて近い時期の可能性をもつ。本建物の時期は、出土土器から7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

4区29号竪穴建物 (第520図、第28・224表、PL.154)

平成27年度の調査で検出した。建物の南東を僅かに4区28号竪穴建物と重複する。

位置：4-C区の西壁付近に位置し、北東側5.5mに4区27号竪穴建物がある。

グリッド：2E-2G-67・68

座標値：X=61,153～61,160 Y=93,330～93,336

重複：本建物の南壁の一部を、4区28号竪穴建物の北西隅が重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が旧い。

形状：不整形長方形

規模：長軸5.66m 短軸4.82m 壁高0～0.8cm

長軸方向：N-37°-W 床面積：推定24.58㎡

埋没土：1層とした赤褐色鉱物粒を少量含む黒褐色土が主体となる。

床面・壁：床面は暗褐色土中にあり、ほぼ平坦で、中央付近が硬化している。壁高は8cm以下と浅く、垂直気味に立ち上がる。

炉・カマド：検出されていない。

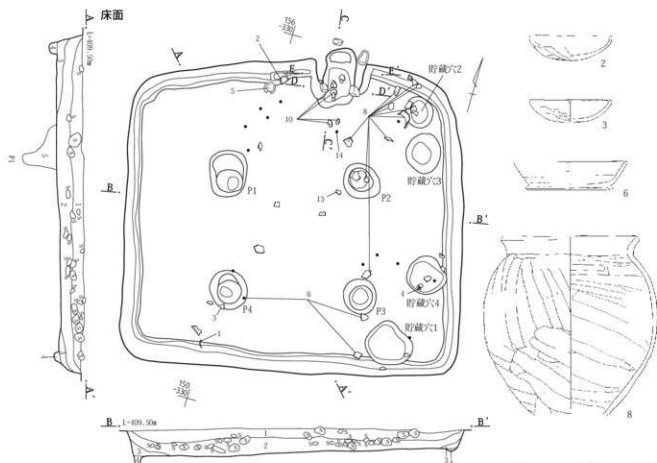
柱穴：中軸上の南壁付近に、P1を確認した。楕円形で、長軸70cm、短軸30cm、深さ41cmを測り、埋土はロームブロック含む黒褐色土である。

遺物：出土遺物は極めて少なく、床面直上に1の須恵器の椀底部が出土している。

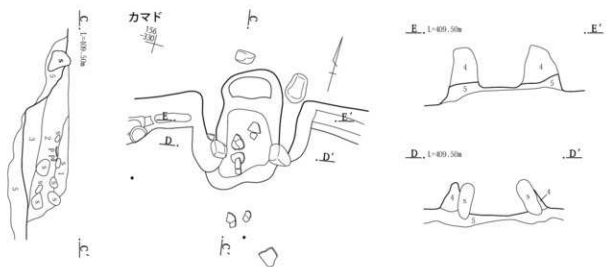
出土遺物として、上記の須恵器の椀底部を図示した。

未掲載遺物には、土師器の甕小片が数片ある。

所見・時期：カマド等も検出されず、遺物も少ないが、時期は8世紀前半か。

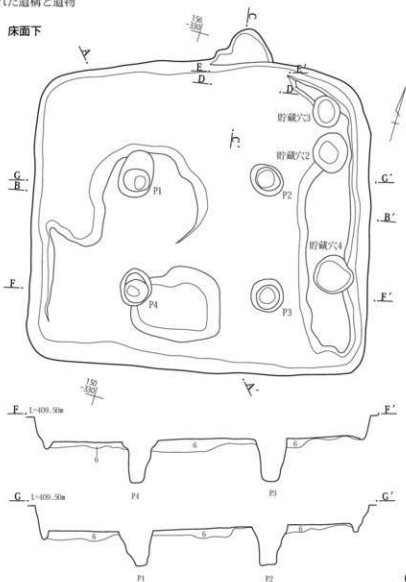


- 1 暗褐色土 黄褐色土小ブロックと礫を少量混入する。締まりあり。
- 2 黒褐色土 黄褐色土小ブロック微量、拳大の礫を混入。締まりあり。
- 3 黒色土 黄褐色土粒、黄褐色土中ブロックを含む。締まりあり。
- 4 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを微量、礫を僅かに混入。
- 5 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。上位に黄土粒、炭化物を少量含む。(P1)



- 1 暗褐色土 建物1層と同じ。僅かに灰色粘土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 建物2層に相当。僅かに灰色粘土ブロックを含み、礫を混入。
- 3 鈍い黄褐色土 黄土ブロックが多量、ロームブロック・中ブロックを少量混入する。
- 4 黒褐色土 黄白色粘土が多く混入する。硬く締まり、粘性あり。(油土)
- 5 鈍い黄褐色土 黄土粒、ロームブロックが多く混入。(床下土)

第517図 4区28号貯穴建物 床面、カマド 平・断面図



第518図 4区28号竪穴建物 床面下 平・断面図

4区30号竪穴建物

(第521・522図、第28・225表、PL.154・155・272・273)

平成27年度の調査で検出した。4区31号竪穴建物と重複する。

位置：4-C区の中央南寄りに位置し、本建物全体が時期の異なる4区31号竪穴建物の南側と重複する。北側12.3mに4区26号竪穴建物、北西側8.5mに4区28号竪穴建物がある。

グリッド：2B・2C-64・65

座標値：X=61,139~61,144 Y=93,317~93,322

重複：本建物が、4区31号竪穴建物の南側で大きく重複する。遺構確認および土層断面の観察から、本建物の方が新しい。

形状：不整形

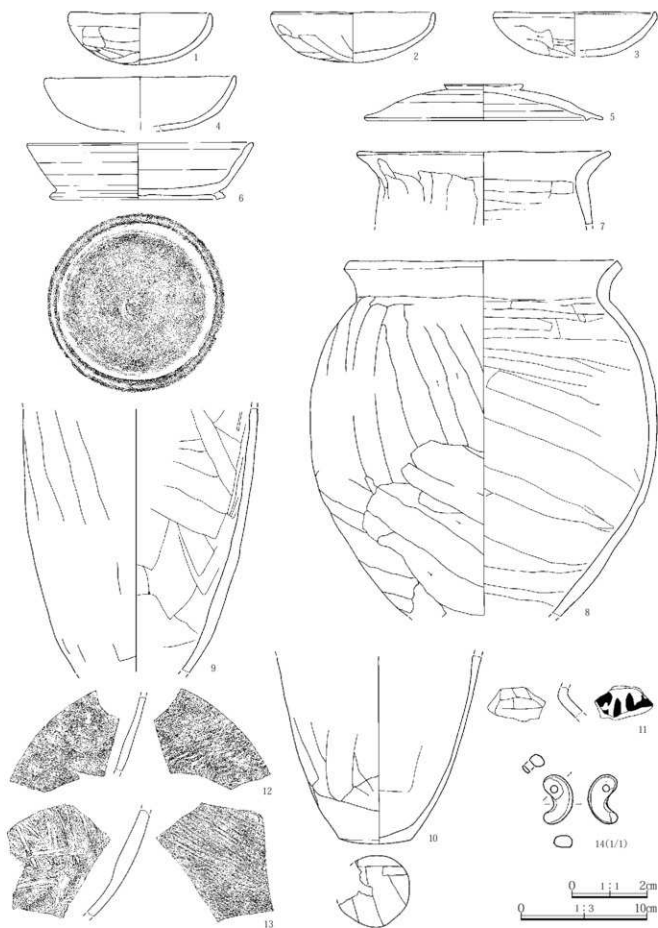
規模：長軸4.46m 短軸3.36m 壁高0.7~36cm

長軸方向：N-2°-W 床面積：13.05㎡

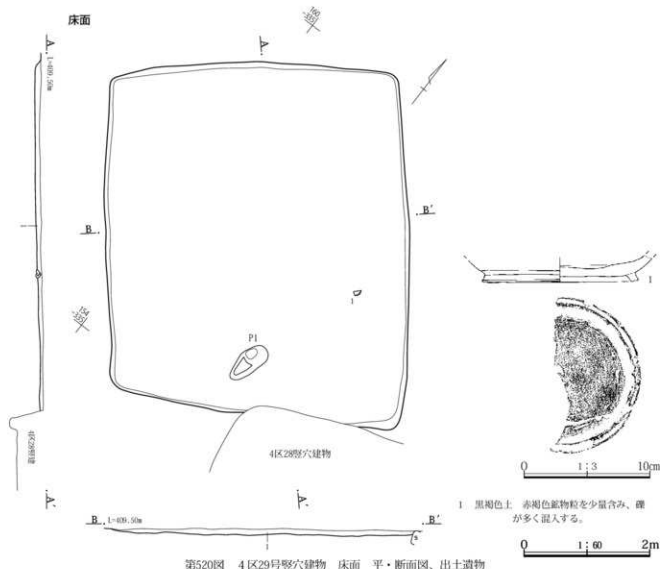
埋没土：1層の黒褐色土を主体とし、建物南半の埋土中には多量の礫が混入する。このことから、人為的な埋没と考えられる。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、カマド周辺から建物中央にかけて硬化している。また、自然礫を多量に含む地山層を掘り抜いた建物のため、各壁面には大小の地山礫が露出する。壁高は36cmを測り、やや垂直気味に立ち上がる。

カマド：東壁の中央南寄りに位置し、カマドの主軸方位はN-108°-Eを向き、遺存状態は極めて良好である。燃焼部は壁の外側から内側にあり、煙道部が外側に大きく突出し、規模は全長2.00m、幅1.85mを測る。右袖は壁から112cm、左袖は壁から70cmほど突き出るように残存し、両袖の先端に袖石を確認した。燃焼部の



第519図 4区28号竪穴建物 出土遺物



第520図 4区29号竪穴建物 床面 平・断面図、出土遺物

奥寄りの右袖上部には、長さ50cm、幅40cm、厚さ16cmの扁平な垂円礫と、長さ36cm、幅32cmの扁平な垂円礫が残存し、燃焼部上部に架かる天井石と思われる。燃焼部から煙道部の内壁には壁石が配され、これら壁石および天井石のカマド内面側は被熱している。焚き口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面より低くなり、煙道部は斜めに立ち上がる。なお、袖の構築にあたっては、内部に扁平な礫を芯材としている。以上の状況から、本建物のカマドは良好な遺存状態にある石組みのカマドであった。ただし、焚き口部の天井石は、カマド周辺に出土していない。

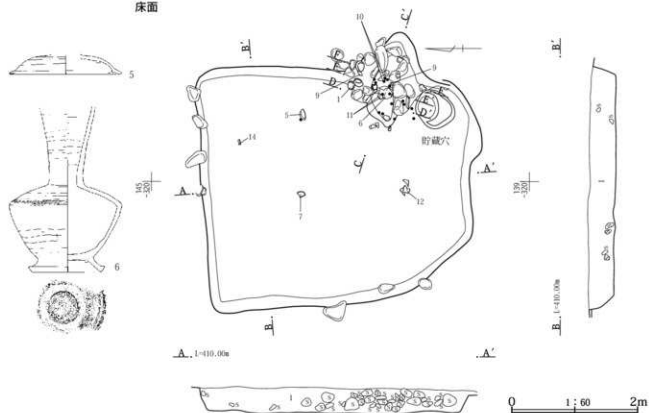
貯蔵穴：南東隅に位置し、不整形円形を呈する。規模は、径60cm前後、深さ24cmを測り、黒褐色土を埋土とする。床面下：掘り方に相当する床面下については、4区31号竪穴建物との重複により不明な点が多く、明確な床面下は検出できなかった。

遺物：遺物の出土量は比較的多く、その大半は埋土中からである。特にカマドの埋土中からが多く、6の長頸壺、9の台付甕、10・11の甕が出土している。他に、5の蓋はカマド周辺の床面直上からの出土である。

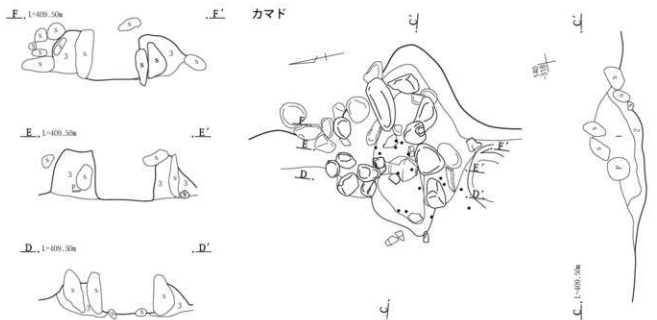
出土遺物として、土器13点と石製品1点の計14点を図示した。1～4は土師器の杯で、3は内面ヘラ磨き。5は須恵器の蓋で、6は須恵器の口縁部を欠く長頸壺。7は須恵器の長頸壺の口縁部で、8は壺の高台部。9～11は土師器の甕であるが、9は台付甕の底部。12は外面に平行叩き目をもつ須恵器の甕の口縁部で、13は底部。また、石製品である14の砥石は砥沢石製である。未掲載遺物には、同時期の土師器の杯・甕片が多量にある。

所見・時期：建物の時期は、出土土器から8世紀初頭と考えられる。なお、カマドは石組み構造。

床面



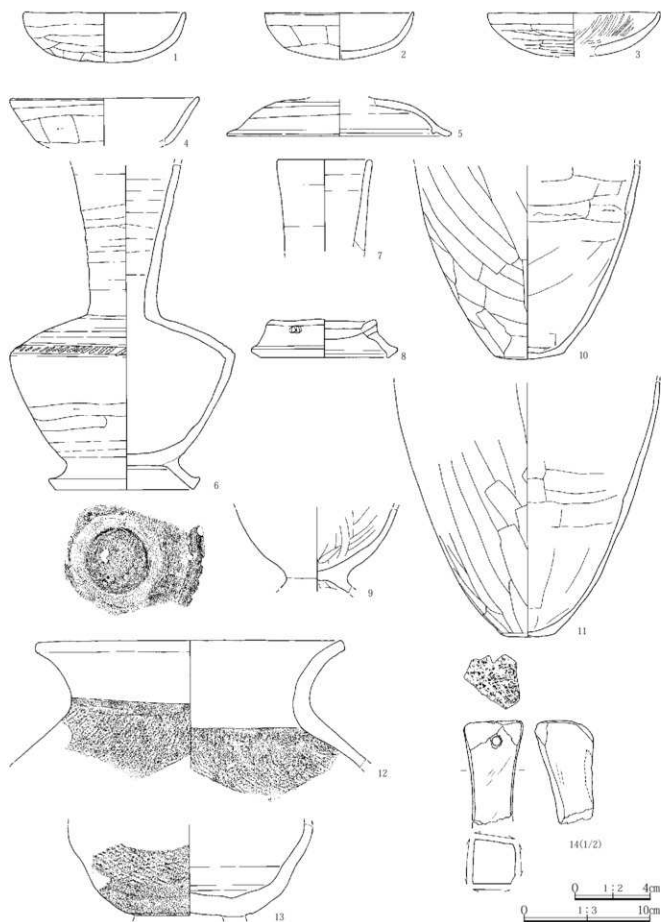
1 黒褐色土 黄色・赤褐色鉱物粒を多く含む。礫を多量に混入。粘質で締まりあり。



- 1 黒褐色土 建物1層と同じ。焼土粒、焼土ブロック、炭化物を少量含む。
- 2 黒色土 1層より黒く、焼土ブロックを多く含む。
- 3 鈍い黄褐色土 白色粘土層を含み、硬く締まる。(焼土)

第521図 4区30号貯穴建物 床面、カマド 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物



第522図 4区30号竪穴建物 出土遺物

(3)土坑

本項に記す土坑は、古墳時代から古代に位置づけられる土坑をまとめた。検出された土坑は、調査区の西側となる4-A区から東側の4-D区に散在的に広がり、計16基を数える。土坑の形状には、円形、楕円形、隅丸長方形があり、その埋没土も第1面で検出された中世以降の土坑とは大きく異なる。

以下、各土坑ごとに記載する。(第30表 4区土坑一覧を参照)

4区95号土坑 (第523図、第30表、PL.161)

平成27年度の調査で検出した。4区20号竪穴建物と4区65・89号土坑と重複する。

位置：4-A区の中央南寄りに位置し、4区20号竪穴建物のほぼ中央に本土坑が重複する。東側に4区19号竪穴建物がある。

グリッド：2A-79

座標値：X=61,130~61,132 Y=93,390~93,392

検出状況：第2面調査時に、4区20号竪穴建物と共に検出された。残存状況は悪く、底面には地山礫が露出する。重複の新旧は、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(B類)

規模：長軸2.15m 短軸1.71m 壁高14cm

長軸方向：N-22°-E

埋没土：混入物の少ない黒褐色土。

所見・時期：時期は不明であるが、埋土にAs-Kkを含まないことから、弥生時代中期以降で、As-Kk降下以前と考えられる。

4区96号土坑 (第523図、第30表、PL.161)

平成27年度の調査で検出した。4区19号竪穴建物と重複する。

位置：4-A区の中央南東寄りに位置し、4区19号竪穴建物の北東隅に本土坑が重複する。西側に4区20号竪穴建物がある。

グリッド：2A-77

座標値：X=61,132・61,133 Y=93,380・93,381

検出状況：第2面調査時に、4区19号竪穴建物と共に検出された。残存状況は悪く、底面には地山礫が露出

る。重複の新旧は、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.97m 短軸0.56m 壁高12cm

長軸方向：N-82°-E

埋没土：黄褐色土ブロックを少量含む暗褐色土。

所見・時期：時期は不明であるが、埋土にAs-Kkを含まないことから、弥生時代中期以降で、As-Kk降下以前と考えられる。

4区99号土坑 (第523図、第30表、PL.161)

平成27年度の調査で検出した。4区4・5号土坑と重複する。

位置：4-D区の南東隅付近に位置し、第1面調査時の4区4・5号土坑と重複する。南側に4区100号土坑、西側に4区101号土坑および弥生時代の4区8号竪穴建物がある。

グリッド：2C-49・50

座標値：X=61,141~61,143 Y=93,244~93,246

検出状況：第2面調査時に検出された。大型の円形土坑で、底面は平坦。重複する4区4・5号土坑との新旧は、埋土の差異からも明らかに本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸m1.74m 短軸1.58m 壁高21cm

長軸方向：N-23°-W

埋没土：赤褐色粒を全体に含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区100号土坑 (第523図、第30表、PL.161)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の南東隅付近に位置し、北側に4区99号土坑、西側に4区101号土坑および弥生時代の4区8号竪穴建物が近接する。

グリッド：2C-50

座標値：X=61,140・61,141 Y=93,245・93,246

検出状況：第2面調査時に検出された。やや小型の円形土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：円形

第4章 検出された遺構と遺物

規模：長軸0.79m 短軸0.76m 壁高18cm
埋没土：黄褐色土ブロックを少量含む暗黒褐色土。
所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区101号土坑（第523図、第30表、PL.161）

平成27年度の調査で検出した。
位置：4-D区の南東隅付近に位置し、東側に4区99号土坑、南東側に4区100号土坑、西側に弥生時代の4区8号竪穴建物が近接する。
グリッド：2C-50
座標値：X=61,141・61,142 Y=93,246・93,247
検出状況：第2面調査時に検出された。やや楕円気味の土坑で、底面は小さく平坦。遺物等の出土はない。
形状(分類)：楕円形(A類)
規模：長軸1.01m 短軸0.83m 壁高55cm
長軸方向：N-71°-W
埋没土：黄褐色土ブロックを少量含む黒褐色土。
所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区102号土坑（第523図、第30表、PL.161）

平成27年度の調査で検出した。
位置：4-D区の中央南壁付近に位置し、東側に弥生時代の4区8号竪穴建物、西側に弥生時代の4区12号竪穴建物が近接する。
グリッド：2B-52・53
座標値：X=61,138・61,139 Y=93,259・93,260
検出状況：第2面調査時に検出された。楕円形の土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。
形状(分類)：楕円形(A類)
規模：長軸1.06m 短軸0.68m 壁高23cm
長軸方向：N-10°-W
埋没土：黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土。
所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区103号土坑（第524図、第30表、PL.161）

平成27年度の調査で検出した。
位置：4-D区の中央南西寄りに位置し、北側に弥生時

代の4区11号竪穴建物、南側に4区104・105号土坑が近接する。

グリッド：2D-54

座標値：X=61,148・61,149 Y=93,267

検出状況：第2面調査時に検出された。やや小型の円形土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.72m 短軸0.70m 壁高35cm

埋没土：黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区104号土坑（第524図、第30表、PL.162）

平成27年度の調査で検出した。
位置：4-D区の中央南西寄りに位置し、北側に4区103号土坑、南側に弥生時代の4区12号竪穴建物、西側に4区105号土坑が近接する。
グリッド：2D-54
座標値：X=61,145~61,147 Y=93,265・93,266
検出状況：第2面調査時に検出された。円形の土坑で、底面は平坦となるが円形の凹みをもつ。遺物等の出土はない。
形状：円形
規模：長軸1.39m 短軸1.32m 壁高32cm
埋没土：黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土。
所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区105号土坑（第524図、第30表、PL.162）

平成27年度の調査で検出した。
位置：4-D区の中央南西寄りに位置し、東側に4区104号土坑が近接する。
グリッド：2D-54・55
座標値：X=61,145・61,146 Y=93,269・93,270
検出状況：第2面調査時に検出された。やや小型の楕円形土坑で、底面は小さく地山礫が露出。遺物等の出土はない。
形状(分類)：楕円形(A類)
規模：長軸0.74m 短軸0.56m 壁高28cm
長軸方向：N-33°-W

埋没土：黄褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土。
 所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区124号土坑（第524図、第30表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。
 位置：4-C区の中央北寄りに位置し、すぐ南側に4区125号土坑が隣接する。
 グリッド：2F・2G-65
 座標値：X=61,159 Y=93,323

検出状況：第2面調査時に検出された。やや小型の楕円形土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.85m 短軸0.50m 壁高17cm

長軸方向：N-71°-W

埋没土：赤褐色鉱物粒を含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区125号土坑（第524図、第30表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。
 位置：4-C区の中央北寄りに位置し、すぐ北側に4区124号土坑が隣接する。
 グリッド：2F-65
 座標値：X=61,158・61,159 Y=93,323

検出状況：第2面調査時に検出された。やや小型の楕円形土坑で、底面は平坦。埋土中に弥生時代後期の土器細片が1点出土。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.75m 短軸0.61m 壁高15cm

長軸方向：N-77°-W

埋没土：ロームブロック、礫を少量含む黒褐色土。

所見・時期：土器の出土はあるが、混入の可能性が高く、時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区126号土坑（第524図、第30表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。
 位置：4-C区の中央やや北寄りに位置し、北側に4区124・125号土坑、北東側に4区127号土坑が近接する。

グリッド：2F-65

座標値：X=61,155・61,156 Y=93,322・93,323

検出状況：第2面調査時に検出された。円形の土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.93m 短軸0.88m 壁高17cm

埋没土：赤褐色鉱物粒を含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区127号土坑（第524図、第30表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。
 位置：4-C区の中央北寄りに位置し、東側に平安時代の4区26号竪穴建物、西側に4区124～126号土坑が近接する。

グリッド：2F-64・65

座標値：X=61,156～61,158 Y=93,319・93,320

検出状況：第2面調査時に検出された。長方形の土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.47m 短軸1.03m 壁高14cm

長軸方向：N-76°-W

埋没土：赤褐色鉱物粒を含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区129号土坑（第524図、第30表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。
 位置：4-C区の中央西寄りに位置し、西側に4区130号土坑が近接する。
 グリッド：2E-67

座標値：X=61,150・61,151 Y=93,332～93,334

検出状況：第2面調査時に検出された。円形の土坑で、底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.30m 短軸1.20m 壁高cm

埋没土：黄褐色・白色鉱物粒を少量含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区130号土坑 (第524図、第30表、PL.163)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-C区の中央西寄りに位置し、東側に4区129号土坑が近接する。

グリッド：2E-67・68

座標値：X=61,151~61,153 Y=-93,334~93,337

検出状況：第2面調査時に検出された。楕円形の土坑で、

底面は段をもつ。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(B類)

規模：長軸2.70m 短軸1.40m

長軸方向：N-53°-W

埋没土：黄褐色鉱物粒を含む黒褐色土。

所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区131号土坑 (第524図、第30表、PL.163)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-A2区の南東隅に位置する。

グリッド：2D-74

座標値：X=61,146~61,148 Y=-93,367~93,369

検出状況：第2面調査時に検出された。楕円形の土坑で、

底面は平坦。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

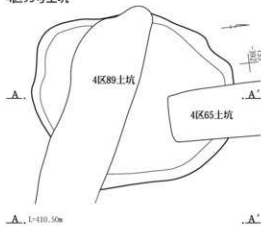
規模：長軸1.75m 短軸1.42m 壁高19cm

長軸方向：N-87°-W

埋没土：白色粒を含む黒褐色土と灰黄褐色土。

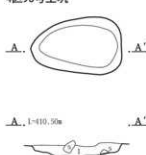
所見・時期：時期は不明。埋土にAs-Kkを含まないことから、As-Kk降下以前と考えられる。

4区95号土坑



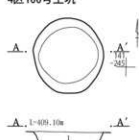
1 黒褐色土 赤褐色・白色鉱物粒を少量含む。

4区96号土坑



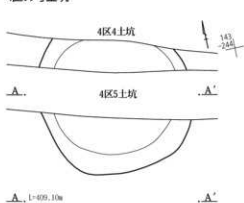
1 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

4区100号土坑



1 暗黒褐色土 黄褐色・赤褐色鉱物粒、黄褐色土ブロックを少量含む。

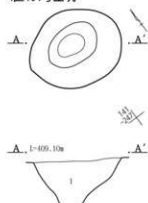
4区99号土坑



1 黒褐色土 赤褐色粒を全体に含む。やや粘質。

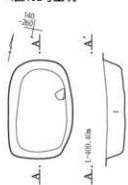


4区101号土坑



1 黒褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。やや粘質で、締まりあり。

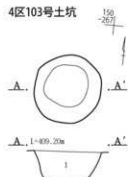
4区102号土坑



1 黒褐色土 焼土・炭化粒、黄褐色土ブロックを僅かに含む。やや粘質。

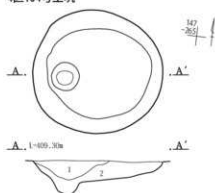
第523図 4区95・96・99～102号土坑 平・断面図

4区103号土坑



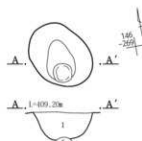
1 暗褐色土 焼土・炭化粒、黄褐色土ブロックを僅かに含む。締まりあり。

4区104号土坑



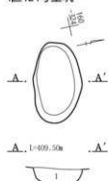
1 黒褐色土 黄褐色土小ブロックを少量含む。
2 黒褐色土 焼土・炭化粒、黄褐色土ブロックを僅かに含む。締まりあり。

4区105号土坑



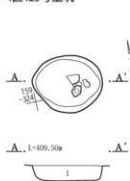
1 黒褐色土 焼土・炭化粒、黄褐色土小ブロックを僅かに含む。締まりあり。

4区124号土坑



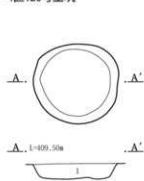
1 黒褐色土 赤褐色鉱物粒を含む。締まりあり。

4区125号土坑



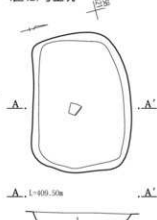
1 黒褐色土 ロームブロック、礫を少量含む。

4区126号土坑



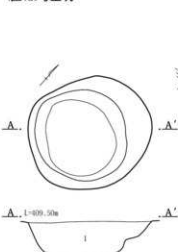
1 黒褐色土 赤褐色鉱物粒、礫を含む。締まりあり。

4区127号土坑



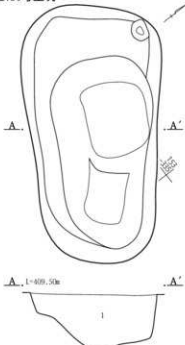
1 黒褐色土 赤褐色鉱物粒、礫を含む。締まりあり。

4区129号土坑



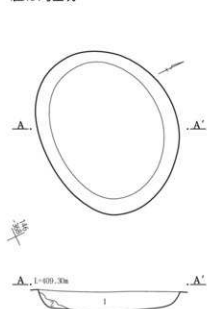
1 黒褐色土 黄褐色・白色鉱物粒を少量含む、礫が混入。

4区130号土坑



1 黒褐色土 黄褐色鉱物粒を含み、礫が混入。

4区131号土坑



1 黒褐色土 白色粒を少量含む。
2 灰黄褐色土 白色粒子を僅かに含む。



第524図 4区103～105・124～127・129～131号土坑 平・断面図

第5項 中世以降の遺構と遺物

(1)概要

本調査区で検出された中世以降の遺構は、土坑や竪を主とし、調査区全体に広がる。基本層序とした4-A区北壁Ⅱ層上面、4-B区北西壁V層上面、4-D区北壁および南壁でのV層上面を確認面とした第1面調査で、土坑112基、復旧坑とした石を廃した坑20基、溝2条、他に竪7区画を検出した。

(1)土坑

検出された土坑は、調査区の西側となる4-A区から東側の4-D区に至る全域に広がり、計112基を数える。土坑には各種の形態・規模があり、その主な形態には円形、方形、長方形、楕円形、長楕円形等がある。これら各形態の中でも長方形、楕円形、長楕円形については、その規模(特に、長さ)により分類ができ、2.0m以下の短い類をA類、2.0～5.0mのやや長い類をB類、5.0～10.0mの長い類をC類、10.0mを超える極端に長い類をD類とした。また、単独の場合や、列状に群をなす場合もみられる。

以下、各形態を代表する土坑ごとに記載する。(第30表 4区土坑一覧を参照)

4区1号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央東側の東壁付近に位置する。南側に4区2号土坑が近接して併走する。

グリッド：2G-48-49

座標値：X=61,161・61,162 Y=93,238～93,241

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.04m 短軸0.46m 深さ14cm

長軸方向：N-74°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区2号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。東端が4区2号復旧坑と重複する。

位置：4-D区の中央東側の東壁付近に位置する。北側に4区1号土坑が近接して併走する。

グリッド：2F・2G-48・49

座標値：X=61,159～61,161 Y=93,236～93,243

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区2号復旧坑との新旧は、本土坑の方が古い。底面には、長軸方向壁際に2列の工具痕が確認できた。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸(7.23)m 短軸0.42m 深さ28cm

長軸方向：N-72°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区3号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。東端は調査区外へ延びる。

位置：4-D区の南東隅の東壁際に位置する。南側に4区4・5号土坑が近接して併走する。

グリッド：2C・2D-48～50

座標値：X=61,141～61,146 Y=93,235～93,247

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、かなり長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面には、部分的であるが長軸方向壁際に2列の工具痕が確認できた。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(D類)

規模：長軸12.58m 短軸0.48m 深さ71cm

長軸方向：N-70°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区5号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の南東隅付近に位置する。北側に4区3・4号土坑が近接して併走する。

グリッド：2C-49・50

座標値：X=61,141~61,144 Y=-93,241~93,253

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面には、部分的であるが長軸方向壁際に2列の工具痕が確認できた。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸7.82m 短軸0.47m 深さ27cm

長軸方向：N-74°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区7号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。4区8号土坑と重複する。

位置：4-D区の中央東寄りの南壁付近に位置し、南端部を4区8号土坑西端部と重複する。南端の南側には同一方向に走行する4区16号土坑が近接する。

グリッド：2B・2C-51

座標値：X=61,137~61,141 Y=-93,250~93,252

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区8号土坑との新旧は、土層断面の観察から本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸4.31m 短軸0.57m 深さ55cm

長軸方向：N-20°-E

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区8号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。4区7号土坑と重複する。

位置：4-D区の中央東寄りの南壁付近に位置し、西端部と4区7号土坑南端部が直行するように重複する。

西端の南側には直行する方向に4区16号土坑が近接する。

グリッド：2B-50・51

座標値：X=61,137・61,138 Y=-93,248~93,252

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区7号土坑との新旧は、土層断面の観察から本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸3.89m 短軸0.53m 深さ37cm

長軸方向：N-80°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。華大の円礫を含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区9号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央東寄りの南壁付近に位置する。東側に4区7号土坑、南側に4区10号土坑が近接する。

グリッド：2C-51

座標値：X=61,141・61,142 Y=-93,252

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸1.06m 短軸0.42m 深さ26cm

長軸方向：N-4°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。細かな礫を含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区10号土坑 (第525図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央東寄りの南壁付近に位置する。北側に4区9号土坑、東側に4区7号土坑が近接する。

グリッド：2C-51

座標値：X=61,140 Y=-93,253・93,254

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検

第4章 検出された遺構と遺物

出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.63m 短軸0.42m 深さ16cm

長軸方向：N-63°-W

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区13号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。4区14号土坑と重複する。

位置：4-D区の北西隅付近に位置し、西端部と4区14号土坑が直行するように重複する。東側には4区12号土坑や4区1号島が近接する。

グリッド：2H・2I-56・57

座標値：X=61,168・61,169 Y=93,280~93,283

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区14号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸(2.81)m 短軸0.61m 深さ41cm

長軸方向：N-83°-E

埋没土：As-Kkを混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区14号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。4区13号土坑と重複する。

位置：4-D区の北西隅付近に位置し、東辺に4区13号土坑の西端が直行するように重複する。西側に4区106号土坑が近接して併走する。

グリッド：2H・2I-57

座標値：X=61,167~61,171 Y=93,282~93,284

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。同規模な2基の土坑が重複していることを確認した。重複の新旧は不明。また、重複する4区13号土坑との新旧も不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸4.18m 短軸0.69m 深さ83cm

長軸方向：N-11°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。下部に人頭大の円礫が入る。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区17号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央南東寄りに位置し、東側に4区6号土坑が近接して併走する。

グリッド：2D・2E-50・51

座標値：X=61,148~61,150 Y=93,249・93,250

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面には、部分的であるが長軸方向壁際に2列の工具痕が確認できた。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.04m 短軸0.49m 深さ44cm

長軸方向：N-12°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区18号土坑 (第526図、第30表、PL.156)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の東壁中央付近に位置し、北西側に4区19号土坑が近接する。

グリッド：2G-47

座標値：X=61,163・61,164 Y=93,230・93,231

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.97m 短軸0.95m 深さ15cm

埋没土：As-Kkを僅かに含む黒褐色土で、拳大の円礫を含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区19号土坑 (第526図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の東壁中央付近に位置し、南東側に4区18号土坑が近接する。

グリッド：2G・2H-47

座標値：X=61,164・61,165 Y=-93,232・93,233

検出状況：4-D区北・南壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：楕円形(A類)

規模：長軸0.87m 短軸0.79m 深さ17cm

長軸方向：N-36°-W

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土で、拳大の円礫を含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区27号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。4区28号土坑と重複する。

位置：4-A1区の東壁中央付近に位置し、本土坑中央に4区28号土坑が直行するように重複する。北側には同方向を向く4区70号土坑が近接する。

グリッド：2C-75

座標値：X=61,141・61,142 Y=-93,371~93,373

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区28号土坑との新旧は、土層断面の観察および混入するAs-Kkの量比から、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.11m 短軸0.74m 深さ51cm

長軸方向：N-63°-W

埋没土：As-Kkと黄褐色土ブロックを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区28号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。4区27・29・30号土坑と重複する。

位置：4-A1区の東壁中央付近に位置し、本土坑の北

側と4区27号土坑が直行するように重複し、南側を4区29・30号土坑が直行するように重複する。西側には4区52号土坑が近接して併走する。

グリッド：2B・2C-75

座標値：X=61,138~61,142 Y=-93,371~93,374

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区27号土坑との新旧は、土層断面の観察から本土坑の方が古い。また、4区29・30号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸4.43m 短軸0.51m 深さ64cm

長軸方向：N-28°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区29号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。東端は調査区外へ延び、4区28・52号土坑と重複する。

位置：4-A1区の東壁際中央に位置し、本土坑の西側に4区28号土坑が直行するように重複し、西端が4区52号土坑と重複する。南側には、同規模な4区30・31・32号土坑が近接して併走する。

グリッド：2B・2C-75・76

座標値：X=61,137~61,140 Y=-93,370~93,376

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区28・52号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸(6.58)m 短軸0.51m 深さ48cm

長軸方向：N-63°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。なお、南側の4区30・31・32号土坑と一体と考えられる。

4区30号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。東端は調査区外へ延び、4区28号土坑と重複する。

位置：4-A1区の東壁際中央に位置し、本土坑の西側に4区28号土坑が直行するように重複する。北側には4区29号土坑、南側には4区31・32号土坑が近接して併走する。

グリッド：2B-75・76

座標値：X=61,136~61,139 Y=93,370~93,376

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区28号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸6.19m 短軸0.39m 深さ39cm

長軸方向：N-62°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。なお、併走する4区29・31・32号土坑と一体と考えられる。

4区31号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。東端は調査区外へ延びる。

位置：4-A1区の東壁際中央に位置する。北側には4区29・30号土坑、南側には4区32号土坑が近接して併走する。

グリッド：2B-75・76

座標値：X=61,135~61,139 Y=93,371~93,376

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸5.88m 短軸0.45m 深さ23cm

長軸方向：N-61°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。なお、併走する4区29・30・32号土坑と一体と考えられる。

4区32号土坑 (第527図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。東端は調査区外へ延びる。

位置：4-A1区の東壁際中央に位置する。北側に4区29・30・31号土坑が近接して併走する。

グリッド：2B-75・76

座標値：X=61,135~61,138 Y=93,371~93,376

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(C類)

規模：長軸5.93m 短軸0.38m 深さ36cm

長軸方向：N-61°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。なお、併走する4区29・30・31号土坑と一体と考えられる。

4区35号土坑 (第528図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央東寄りに位置する。西側に4区35・76号土坑が近接する。

グリッド：2B-76

座標値：X=61,136・61,137 Y=93,377~93,379

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長方形にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面には、大型の地山礫が露出する。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.16m 短軸0.76m 深さ32cm

長軸方向：N-67°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区36号土坑 (第528図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央東寄りに位置する。東側に4区1号溝、南側に4区35号土坑が近接する。

グリッド：2C-76・77

座標値：X=61,141~61,143 Y=93,378~93,381

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。また、同規模な2基の土坑が重複していることを確認した。重複の新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.35m 短軸0.65m 深さ50cm

長軸方向：N-65°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区37号土坑 (第528図、第30表、PL.157)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央東寄りに位置する。北側に4区36号土坑、南側に4区69号土坑が近接する。

グリッド：2C-76・77

座標値：X=61,140・61,141 Y=93,378~93,380

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長方形にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.09m 短軸0.65m 深さ17cm

長軸方向：N-66°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区44号土坑 (第528図、第30表、PL.158)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の中央西寄りに位置する。北側に4区43号土坑、東側に4区45号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-72・73

座標値：X=61,132~61,135 Y=93,357~93,360

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸3.42m 短軸0.63m 深さ49cm

長軸方向：N-31°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区45号土坑 (第528図、第30表、PL.158)

平成27年度の調査で検出した。4区46号土坑と重複する。

位置：4-B区の中央西寄りに位置する。北側に4区43号土坑、西側に4区44号土坑が近接する。

グリッド：2A-72

座標値：X=61,132~61,134 Y=93,355~93,357

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区46号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.22m 短軸0.99m 深さ9cm

長軸方向：N-68°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区51号土坑 (第528図、第30表、PL.158)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の中央西寄りに位置する。東側に4区60号土坑が近接する。

グリッド：2B-71

座標値：X=61,139 Y=93,351・93,352

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：径0.66m前後 深さ13cm

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区53号土坑 (第528図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。

第4章 検出された遺構と遺物

位置：4-A1区の中央東寄りに位置し、北側と4区76号土坑、南側に4区96号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-77

座標値：X=61,134~61,137 Y=93,380・93,381

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸3.40m 短軸0.65m 深さ17cm

長軸方向：N-5°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区54号土坑 (第528図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央東寄りに位置する。南東側に4区36号土坑、南西側に4区59号土坑が近接する。

グリッド：2C・2D-77

座標値：X=61,144・61,145 Y=93,381・93,382

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、短い長方形にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面に段をもつ。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(A類)

規模：長軸1.12m 短軸0.78m 深さ72cm

長軸方向：N-61°-W

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区55号土坑 (第529図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央東寄りに位置し、東側に4区69・76号土坑が近接する。

グリッド：2B・2C-77

座標値：X=61,138~61,140 Y=93,382・93,383

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸2.11m 短軸0.58m 深さ37cm

長軸方向：N-14°-E

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区56号土坑 (第529図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。4区58号土坑と重複する。

位置：4-A1区の中央南東寄りに位置する。本土坑の西側に4区58号土坑の東端が重複する。西側に4区57号土坑が隣接する。

グリッド：2A-77

座標値：X=61,133・61,134 Y=93,383・93,384

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、方形にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区58号土坑との新旧は、埋土および土層断面の確認から、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.85m 短軸0.84m 深さ11cm

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区57号土坑 (第529図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。4区58号土坑と重複する。

位置：4-A1区の中央南東寄りに位置する。本土坑の南側を4区58号土坑が重複する。東側に4区56号土坑が隣接する。

グリッド：2A・2B-77・78

座標値：X=61,134・61,135 Y=93,384・93,385

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、方形にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区58号土坑との新旧は、埋土および土層断面の確認から、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸(0.52)m 短軸0.98m 深さ21cm

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区58号土坑 (第529図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。4区56・57号土坑と重複する。

位置：4-A1区の中央南東寄りに位置する。本土坑の東端に4区56号土坑、北側に4区57号土坑が重複する。南側に4区94号土坑が近接する。

グリッド：2A・2B-77・78

座標値：X=61,133~61,135 Y=93,384~93,387

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、帯状にAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。底面には、大型の地山礫が露出する。重複する4区56・57号土坑との新旧は、いずれよりも本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長方形(B類)

規模：長軸3.29m 短軸0.55m 深さ31cm

長軸方向：N-64°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区60号土坑 (第529図、第30表、PL.159)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の中央西寄りに位置する。西側に4区51号土坑が近接する。

グリッド：2B・2C-70

座標値：X=61,139・61,140 Y=93,348・93,349

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。4区51号土坑に極めて類似する。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸0.75m 短軸0.68m 深さ30cm

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区74号土坑 (第529図、第30表、PL.160)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央やや南寄りに位置する。南東側に4区66・67号土坑が近接する。

グリッド：2B-80

座標値：X=61,135・61,136 Y=93,395・93,396

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、円形にAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状：円形

規模：長軸1.11m 短軸0.96m 深さ7cm

長軸方向：N-50°-E

埋没土：褐色土ブロックを僅かに含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面であることから中世以降と考えられるが、時期は不明。

4区80号土坑 (第529図、第30表、PL.160)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の中央南壁付近に位置する。北側に4区2号溝、西側に4区81号土坑が近接する。

グリッド：Z-67・68

座標値：X=61,125~61,127 Y=93,334~93,338

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、長くAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.96m 短軸0.56m 深さ43cm

長軸方向：N-60°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区81号土坑 (第529図、第30表、PL.160)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-B区の中央南壁付近に位置する。北側に4区2号溝、東側に4区80号土坑が近接する。

グリッド：Z-69

座標値：X=61,125・61,126 Y=93,340・93,341

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、方形にAs-Kk混在土が埋没した状態で

第4章 検出された遺構と遺物

検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.94m 短軸0.93m 深さ22cm

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区83号土坑（第529図、第30表、PL.160）

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区の中央南東寄りの南壁付近に位置する。

東側に4区84号土坑、西側に4区82号土坑が同方向に走行して近接する。

グリッド：Z・2A-81

座標値：X=61,129~61,131 Y=93,399~93,402

検出状況：4-A区北壁Ⅱ層上面を遺構確認面とした第1面調査で、帯状にAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸2.75m 短軸0.62m 深さ31cm

長軸方向：N-62°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区107号土坑

(第530・531図、第30・228表、PL.162・275)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-C1区の中央西寄りに位置する。北側に4区122号土坑がある。

グリッド：2E-68

座標値：X=61,150・61,151 Y=93,336~93,338

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kk混在土が埋没した状態で検出された。土坑の中位以下に、人頭大の礫が多く入る。埋土中より、白玉1点が出土。

形状(分類)：長楕円形(A類)

規模：長軸2.04m 短軸0.62m 深さ38cm

長軸方向：N-79°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土。

遺物：第531図1に示した1の滑石製の白玉1点が出土し

ているが、混入遺物である。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区109号土坑（第530図、第30表、PL.162）

平成27年度の調査で検出した。4区110号土坑と重複する。

位置：4-C1区の中央北寄りに位置する。本土坑の東側に4区110号土坑の西端と重複する。北側に4区108号土坑、東側に4区2号高が近接する。

グリッド：2G-65・66

座標値：X=61,160・61,161 Y=93,323~93,326

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、As-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区110号土坑との新旧は、埋土および土層断面の確認から、本土坑の方が古い。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(B類)

規模：長軸3.27m 短軸0.41m 深さ67cm

長軸方向：N-80°-W

埋没土：As-Kkを多量に混在する黒褐色土で、下位にロームブロックを含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区110号土坑

(第530・531図、第30・228表、PL.162・275)

平成27年度の調査で検出した。4区109号土坑、4区2号高と重複する。

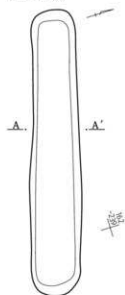
位置：4-C1区の中央北寄りに位置する。本土坑の西側に4区109号土坑、東側を4区2号高と重複する。南東側に4区114号土坑が近接する。

グリッド：2F・2G-63~65

座標値：X=61,157~61,162 Y=93,314~93,324

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、幅広い帯状にかなり長くAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区109号土坑および4区2号高との新旧は、いずれよりも本土坑の方が新しい。量は少ないが、埋土中より土師器や須恵器片が出土。

4区1号土坑

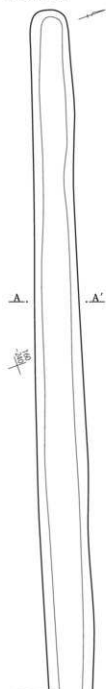


A, l=409.00m A'



1 黒褐色土 As-Kk軽石を少量含む。

4区2号土坑

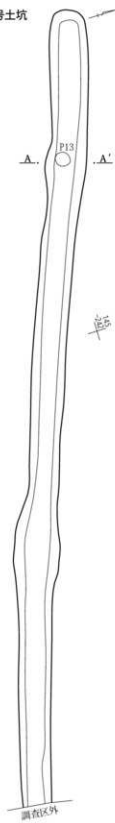


A, l=409.00m A'



1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

4区3号土坑



A, l=409.50m A'

A, l=409.50m A'

A, l=409.50m A'

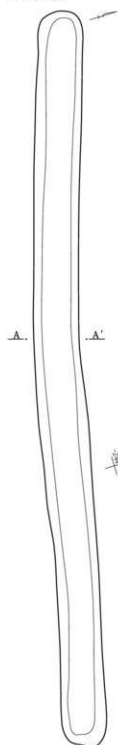
A, l=409.50m A'



0 1:40 1m

1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

4区5号土坑



A, l=409.50m A'

A, l=409.50m A'

A, l=409.50m A'

A, l=409.50m A'

1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

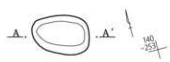
4区9号土坑



A, l=409.70m A'

1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

4区10号土坑



A, l=409.70m A'

1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

0 1:40 1m

2号復旧坑

A, l=409.00m A'

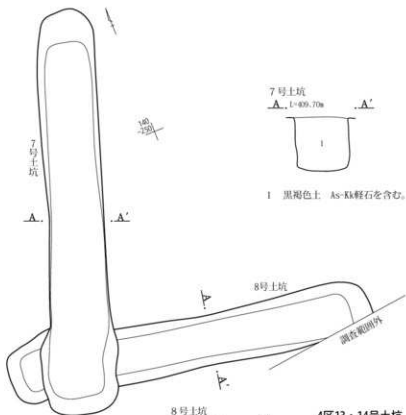


1 黒褐色土 As-Kk軽石を含む。

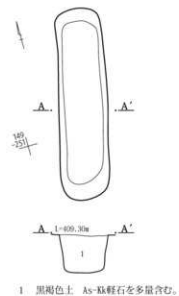
調査区外

第525図 4区1～3・5・9・10号土坑 平・断面図

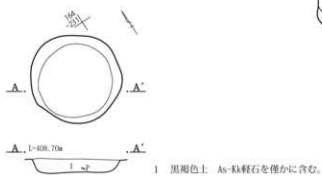
4区7・8号土坑



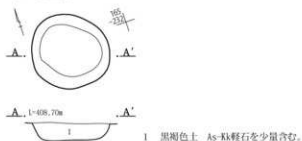
4区17号土坑



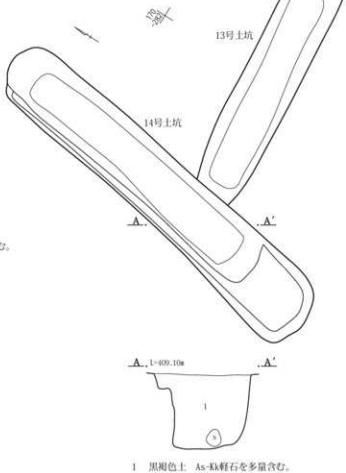
4区18号土坑



4区19号土坑



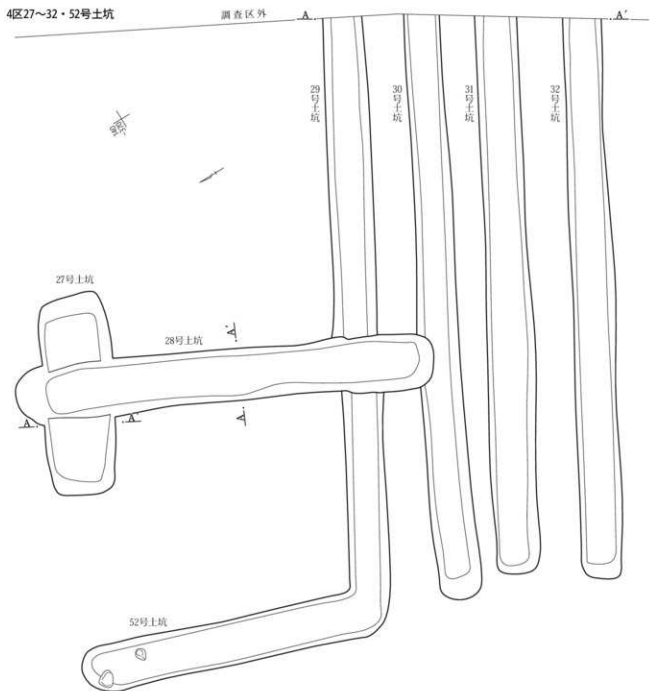
4区13・14号土坑



第526図 4区7・8・13・14・17～19号土坑 平・断面図

4区27～32・52号土坑

調査区外

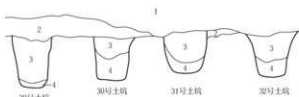
27号土坑
A, L=410.10m

1 黒褐色土 As-Kk軽石、黄褐色土ブロックを少量含む。

28号土坑
A, L=410.10m

1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

A, L=410.80m

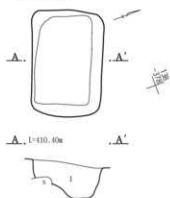


1 暗褐色土 As-Kk軽石を含む。表土(現代の耕作土)。
 2 暗褐色土 As-Kk軽石を含む。旧耕作土。
 3 黒褐色土 As-Kk軽石を多量に含む。
 4 褐色土 As-Kk軽石を僅かに含む。やや粘性あり。

0 1:40 1m

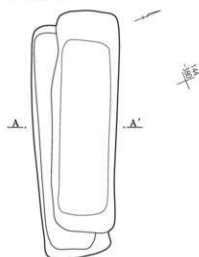
第527図 4区27～32・52号土坑 平・断面図

4区35号土坑



1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区36号土坑



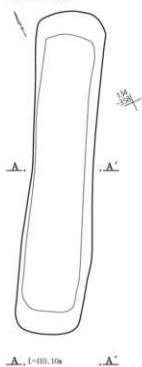
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区37号土坑



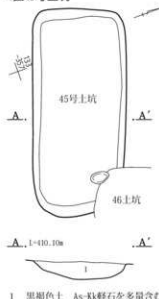
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区44号土坑



1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区45号土坑



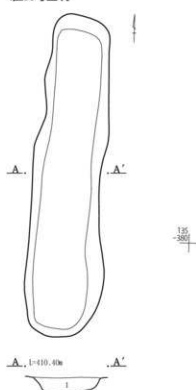
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区51号土坑



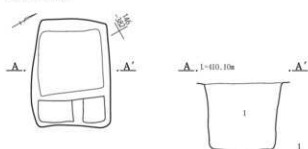
1 黒褐色土 As-Kk軽石を少量含む。

4区53号土坑



1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区54号土坑

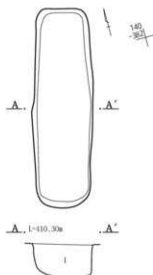


1 黒褐色土 As-Kk軽石を少量含む。



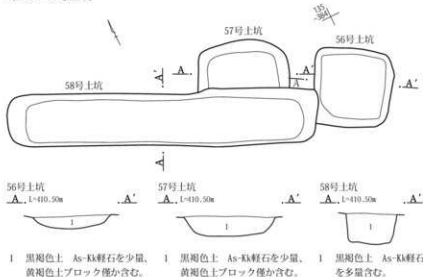
第528図 4区35～37・44・45・51・53・54号土坑 平・断面図

4区55号土坑



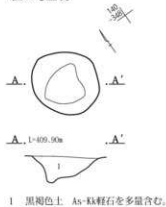
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区56～58号土坑



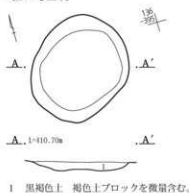
1 黒褐色土 As-Kk軽石を少量、黄褐色土ブロック層を含む。 1 黒褐色土 As-Kk軽石を少量、黄褐色土ブロック層を含む。 1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区60号土坑



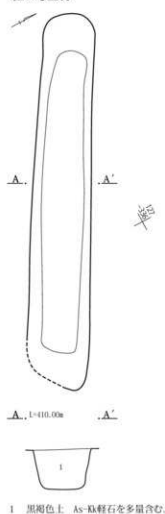
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区74号土坑



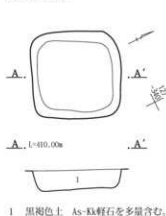
1 黒褐色土 褐色土ブロックを微量含む。

4区80号土坑



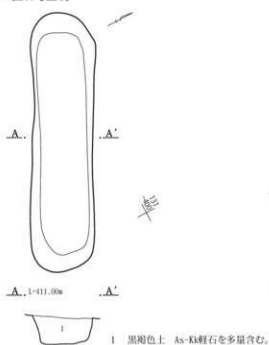
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区81号土坑



1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。

4区83号土坑



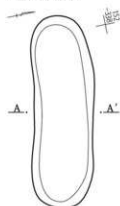
1 黒褐色土 As-Kk軽石を多量含む。



第529図 4区55・58・60・74・80・81・83号土坑 平・断面図

第4章 検出された遺構と遺物

4区107号土坑



A-A' l=410.00m A'-A'



1 黒褐色土 As-珪軽石を多量含む。

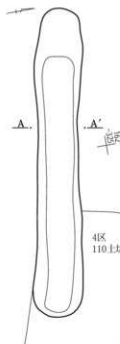
4区110号土坑

A-A' l=410.00m A'-A'



- 1 黒褐色土 As-珪軽石を少量含む。やや粘質。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを混入。

4区109号土坑



A-A' l=410.00m A'-A'



- 1 黒褐色土 As-珪軽石を多量含む。下位にロームブロックを混入。

0 1:40 1m

第530図 4区107・109・110号土坑 平・断面図

形状(分類): 長方形(D類)

規模: 長軸10.72m 短軸0.99m 深さ52cm

長軸方向: N-69°-W

埋没土: As-Kkを少量含む黒褐色土。

遺物: 第531図2に示した須恵器の平瓶があり、他に土師器の杯・甕片が出土している。いずれも混入遺物である。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区114号土坑 (第531図、第30表、PL.162)

平成27年度の調査で検出した。4区2号畠と重複する。

位置: 4-C1区の中央北東寄りに位置する。本土坑の東端が4区2号畠と重複する。北西側に4区110号土坑が近接する。

グリッド: 2E・2F-63

座標値: X=61,154・61,155 Y=93,611~93,314

検出状況: 4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした

第1面調査で、As-Kk混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区2号畠との新旧は、本土坑の方が新しい。遺物等の出土はない。

形状(分類): 長楕円形(B類)

規模: 長軸3.43m 短軸0.53m 深さ49cm

長軸方向: N-77°-W

埋没土: As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期: 検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区118号土坑 (第531図、第30表、PL.162)

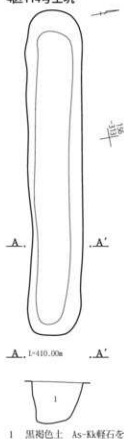
平成27年度の調査で検出した。

位置: 4-C1区の中央南寄りに位置する。東側に4区116・117号土坑、南西側に4区119号土坑が近接する。グリッド: 2C-66

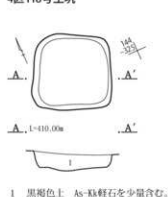
座標値: X=61,143・61,144 Y=93,325・93,326

検出状況: 4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、方形にAs-Kk混在土が埋没した状態で

4区114号土坑



4区118号土坑



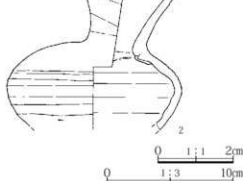
4区119号土坑



4区107号土坑



4区110号土坑



第531図 4区114・118・119号土坑 平・断面図、107・110号土坑 出土遺物

第4章 検出された遺構と遺物

検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.81m 短軸0.79m 深さ15cm

埋没土：As-Kkを少量含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区119号土坑（第531図、第30表、PL.162）

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-C1区の中央南寄りに位置する。北東側に4区118号土坑が近接する。

グリッド：2C-66

座標値：X=61,141・61,142 Y=93,327・93,328

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、方形にAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。遺物等の出土はない。

形状：方形

規模：長軸0.80m 短軸0.74m 深さ30cm

長軸方向：N-18°-E

埋没土：As-Kkを僅かに含む黒褐色土。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区132号土坑（第30表）

平成30年度の調査で検出した。4区133号土坑と重複する。

位置：4-A2区の南西際位置する。

グリッド：2E・2F-76・77

座標値：X=61,151~61,153 Y=93,375~93,382

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、かなり長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区133号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸7.70m 短軸0.50m 深さ23cm

長軸方向：N-60°-W

埋没土：As-Kkを含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

4区133号土坑（第30表）

平成30年度の調査で検出した。4区132号土坑と重複する。

位置：4-A2区の南西際位置する。

グリッド：2D・2E-75・76

座標値：X=61,148~61,151 Y=93,370~93,377

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、かなり長くAs-Kkの混在土が埋没した状態で検出された。重複する4区132号土坑との新旧は不明。遺物等の出土はない。

形状(分類)：長楕円形(C類)

規模：長軸8.30m 短軸0.60m 深さ43cm

長軸方向：N-61°-W

埋没土：As-Kkを含む。

所見・時期：検出面が第1面で、埋土にAs-Kkを混在することから、時期は中世以降と考えられる。

(4)復旧坑

本項で復旧坑とした遺構は、邪魔となる石を廃することを目的とした坑で、所謂「ヤックラ」と称される類である。この復旧坑は、調査区の東側となる4-D区に計20基を検出した。復旧坑には幾つかの形態がある。

以下、形態を代表する復旧坑について記載する。(第32表 4区復旧坑一覧を参照)

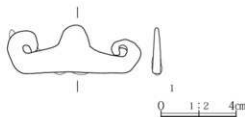
4区1号復旧坑

(第532図、第32・229表、PL.163・275)

平成27年度の調査で検出した。復旧坑の北側の一部は調査区外となる。

位置：4-D区の中央北端の北壁際位置する。西側に4区5号復旧坑が近接する。

グリッド：2I・2J-51・52



第532図 4区1号復旧坑 出土遺物

座標値：X=61,172~61,176 Y=93,251~93,259

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、長く帯状に礫が詰まった状態で検出した。礫は下位の礫層中に含まれる自然石で、人頭大以上から拳大の垂円礫が主体となり、長い土坑状の掘り込みの底面から多量に詰められた状況にあった。遺物に第532図1の火打金が出土している。

形状：不整形長方形

規模：長さ8.32m 幅0.82~1.4m 深さ33cm

長軸方向：N-62°-W

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区2号復旧坑（第32表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。4区2号土坑と重複する。

位置：4-D区の中央東側の東壁付近に位置する。南側に4区3号復旧坑が近接する。

グリッド：2F・2G-47・48

座標値：X=61,158~61,162 Y=93,233~93,236

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、長台形となる土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、下位の礫層中に含まれる自然礫が、人頭大以上から拳大の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に詰められた状況にあった。4区2号土坑と重複するが、本復旧坑の方が新しい。遺物の出土はない。

形状：長台形

規模：長さ3.8m 幅1.4~3.0m 深さ32cm

長軸方向：N-14°-E

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区3号復旧坑（第32表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央東側の東壁付近に位置する。北側に4区2号復旧坑が近接する。

グリッド：2E-47・48

座標値：X=61,151~61,155 Y=93,233~93,238

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第

1面調査時に、不整な土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、下位の礫層中に含まれる自然礫が、人頭大から拳大の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に詰められた状況にあった。遺物の出土はない。

形状：不整形

規模：長さ5.8m 幅2.28m 深さ11cm

長軸方向：N-59°-E

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区4号復旧坑（第32表、PL.163）

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央東寄りに位置する。北側に地山礫層が大きく露出する。

グリッド：2G・2H-49

座標値：X=61,162~61,165 Y=93,240・93,241

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、長細い長方形となる土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、下位の礫層中に含まれる自然礫が、長さ0.8mもの大型礫や人頭大から拳大の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に出土している。遺物の出土はない。

形状：長方形

規模：長さ3.2m 幅0.61m 深さ14cm

長軸方向：N-7°-E

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区5号復旧坑（第32表、PL.164）

平成27年度の調査で検出した。復旧坑の北側は調査区外となる。

位置：4-D区の中央北端の北壁際に位置する。東側に4区1号復旧坑が近接する。

グリッド：2J-53

座標値：X=61,175・61,176 Y=93,260~93,262

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、長方形となる土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、下位の礫層中に含まれる自然礫が、人頭大から拳大の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に出土している。遺物の出土はない。

第4章 検出された遺構と遺物

形状：長方形

規模：長さ(1.13)m 幅1.72m 深さ30cm

長軸方向：N-40°-E

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区7号復旧坑 (第32表、PL.164)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央北東寄りに位置する。東側に露出する地山礫層、西に4区8号復旧坑が近接する。

グリッド：2H-50・51

座標値：X=61,166・61,167 Y=93,249~93,251

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、楕円形となる土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、拳大前後の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に出土している。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長さ1.91m 幅1.15m 深さ9cm

長軸方向：N-74°-E

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

4区14号復旧坑 (第32表、PL.164)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-D区の中央西寄りに位置する。西側に小範囲に露出する地山礫層が近接する。

グリッド：2E・2F-54・55

座標値：X=61,154~61,156 Y=93,269・93,270

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査時に、楕円形となる土坑の状態を検出した。土坑状の掘り込み内には、人頭大から拳大前後の垂円礫を主体とし、掘り込み底面に多量に出土している。遺物の出土はない。

形状：楕円形

規模：長さ1.76m 幅1.19m 深さ26cm

長軸方向：N-15°-W

所見・時期：所謂「ヤックラ」と称される類で、その時期は近世以降と考えられる。

(5)溝

検出された溝は、調査区の西側となる4-A区および4-B区にそれぞれ1条の計2条が検出された。

以下、溝ごとに記載する。(第33表 4区溝一覧を参照)

4区1号溝 (第533図、第33表)

平成27・30年度の調査で検出した。溝の北側は調査範囲外(未調査部分)へ延びる。

位置：4-A1区のほぼ中央西寄りから4-A2区の西側を経て、北側に延びる。

グリッド：2C~2F-76・77

座標値：X=61,142~61,155 Y=93,377~93,381

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長く帯状に黒褐色土のAs-Kk混泥土が埋没した状態で、両調査年度時に検出された。4-A1区では残存状況は悪く、部分的に途切れるかたちで検出された。遺物の出土はない。

規模：長さ14.30m 幅0.35m 深さ4cm

横断面形状：V字状

走行方向：N-16°-W

所見・時期：緩斜面に直行して南北方向に延びる溝と考えられ、その時期は中世以降と考えられる。

4区2号溝 (第533図、第33表、PL.160)

平成27年度の調査で検出した。溝の西側は調査区外へ延びる。

位置：4-B区の中央南側に位置する。

グリッド：2-67~69

座標値：X=61,125~61,129 Y=93,331~93,341

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、細長く帯状に黒褐色土のAs-Kk混泥土が埋没した状態で検出された。残存状況は悪く、溝の西側部分は検出できなかった。その西端は、4区43号土坑に続く可能性もある。

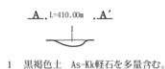
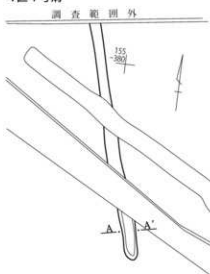
規模：長さ10.5m 幅0.46m 深さ10cm

横断面形状：U字状

走行方向：N-66°-W

所見・時期：緩斜面に平行する方向に延びる溝と考えられ、その時期は中世以降と考えられる。

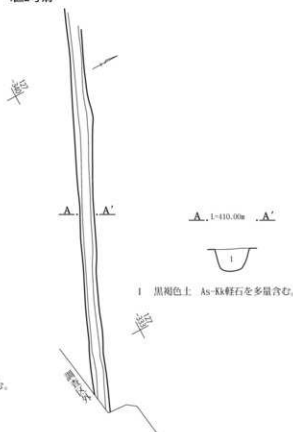
4区1号溝



145-380



4区2号溝



第533図 4区1・2号溝 平・断面図

(6) 畝

検出された畝は、4-A区に2区画、4-C区に4区画、4-D区に1区画の計7区画を検出した。

以下、各畝の区画ごとに記載する。(第34表 4区畝一覧を参照)

4区1号畝 (第534図、第34・320表、PL.164・275)

平成27年度の調査で検出した。畝の北側は調査区外となり、4区12号土坑と重複する。

位置：4-D区の北端中央西寄りの北壁際に位置し、東側には4区5・9号復旧坑、南に4区12・15・20号復旧坑や4区24号土坑がある。

グリッド：2H～2J-54～57

座標値：X=61,167～61,175 Y=93,265～93,281

検出状況：4-D区北壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は、あまり良好ではない。溝状となる畝間列が検出されたのみで、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に平行する方向にあり、畝間底面には若干の凹凸がみられる。重複する4区12号土坑との新旧は、本畝の方が古い。

区画規模：長さ15.8m、幅8.5m

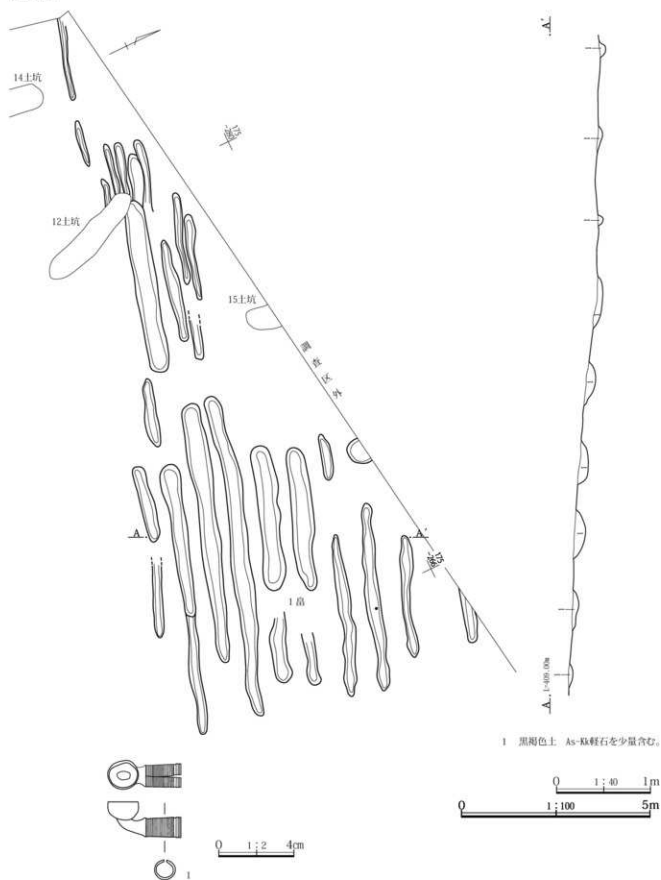
畝長15.8m 畝間間隔80.0cm前後

畦高19cm 畦数10条

畝間方向：N-72°-W

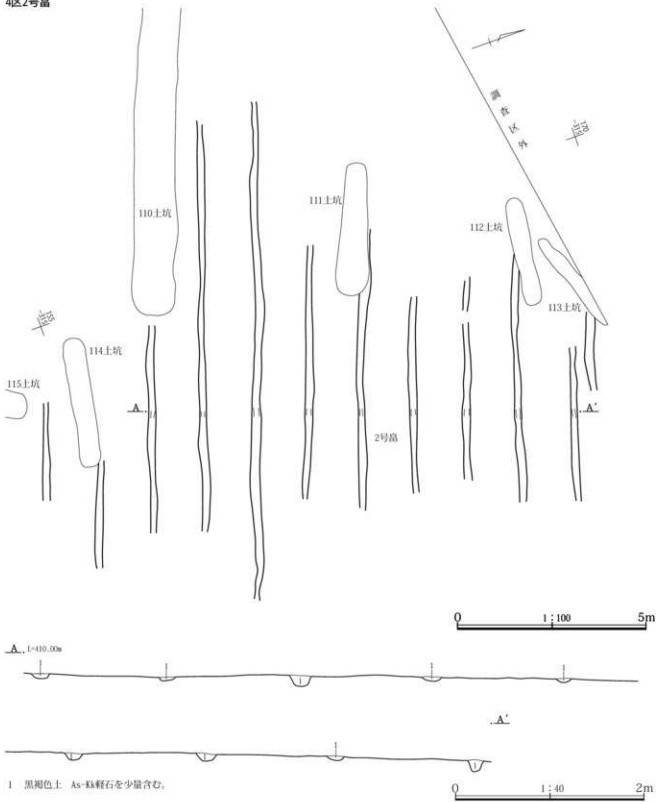
所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畝の時期は中世以降と考えられる。

4区1号墓



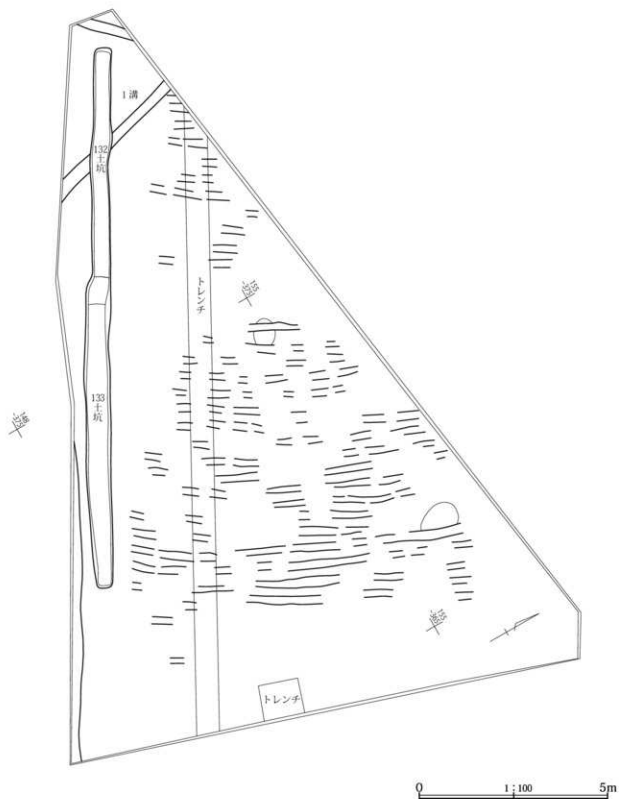
第534図 4区1号墓 平・断面図、出土遺物

4区2号畠



第535図 4区2号畠 平・断面図

4区4号畠



第536図 4区4号畠 平面図

第4章 検出された遺構と遺物

4区2号畠 (第535図、第34表、PL.164)

平成27年度の調査で検出した。4区110～114号土坑と重複する。

位置：4-C1区の中央北寄りに位置する。

グリッド：2E～2H-62～64

座標値：X=61,153～61,168 Y=93,305～93,318

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は、良くない。幅狭で浅い溝状となる畝間列が検出されたのみで、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に平行する方向にある。重複する各土坑との新旧は、いずれも本畠の方が古い。

区画規模：長さ14.7m、幅13.3m

畝長13.3m 畝間間隔140cm前後

畦高13cm 畦数12条

畝間方向：N-71°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

4区3号畠 (第538図、第34表)

平成27年度の調査で検出した。

位置：4-A1区のほぼ中央に位置する。

グリッド：2B・2C-78・79

座標値：X=61,138～61,144 Y=93,387～93,396

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は悪く、幅狭で浅い溝状となる畝間列が検出されたのみで、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に平行する方向にある。

区画規模：長さ19.70m、幅2.08m

畝長19.70m 畝間間隔90cm前後

畦高12cm 畦数3条

畝間方向：N-61°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

4区4号畠 (第536図、第34表、PL.164)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-A2区のほぼ全面にある。

グリッド：2D～2F-74～77

座標値：X=61,148～61,157 Y=93,387～93,396

検出状況：4-A区北壁II層上面を遺構確認面とした第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は悪く、幅狭で浅い溝状となる畝間列が途切れ途切れに検出され、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に直行する方向にある。

区画規模：長さ15.00m、幅8.90m

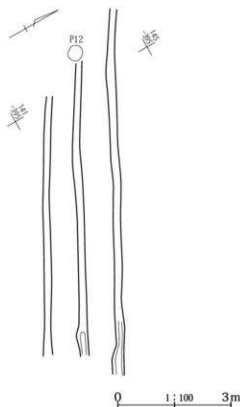
畝長8.90m 畝間間隔25cm前後

畦数28条

畝間方向：N-27°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

4区3号畠



第538図 4区3号畠 平面図

4区5号畠 (第537図、第34表、PL.164)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-C2区のほぼ全面に広がる。

グリッド：2E～2G-68～72

座標値：X=61,150～61,163 Y=93,337～93,358

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした

第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は悪く、幅狭で浅い溝状となる畝間列が途切れ途切れに検出されたものの、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に平行する方向にある。

区画規模：長さ16.30m、幅15.90m

畝長16.30m 畝間間隔55cm前後

畦数26条

畝間方向：N-66°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

4区6号畠 (第34表)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-C3区の北半に位置する。

グリッド：2H・2I-58～60

座標値：X=61,165～61,171 Y=93,288～93,295

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした

第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は極めて悪く、幅狭で浅い溝状となる畝間列が途切れ途切れに検出されたが、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に直行する方向にある。

区画規模：長さ7.35m、幅3.10m

畝長7.35m 畝間間隔25cm前後

畦数12条

畝間方向：N-18°-E

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

4区7号畠 (第34表)

平成30年度の調査で検出した。

位置：4-C3区の南半に位置する。

グリッド：2E～2G-59・60

座標値：X=61,154～61,162 Y=93,290～93,296

検出状況：4-B区北西壁V層上面を遺構確認面とした

第1面調査で、溝状となる畝間列に黒褐色土のAs-Kk混在土が埋没した状態で検出された。残存状況は極めて悪く、幅狭で浅い溝状となる畝間列が途切れ途切れに検出されたが、畝の状況は不明。検出された畝間列は、緩斜面に平行する方向にある。

区画規模：長さ8.45m、幅5.80m

畝長5.80m 畝間間隔40～50cm前後

畦数13条

畝間方向：N-80°-W

所見・時期：検出面およびAs-Kk混在土による埋没であることから、本畠の時期は中世以降と考えられる。

第6項 遺構外出土遺物

本調査区での第1・2面調査で出土した、古墳時代以降の遺構に伴わない代表的な遺物を扱う。遺構外出土遺物には、土器と金属製品がある。他にも、陶磁器類の細片は多くある。

以下、種別ごとに記載する。

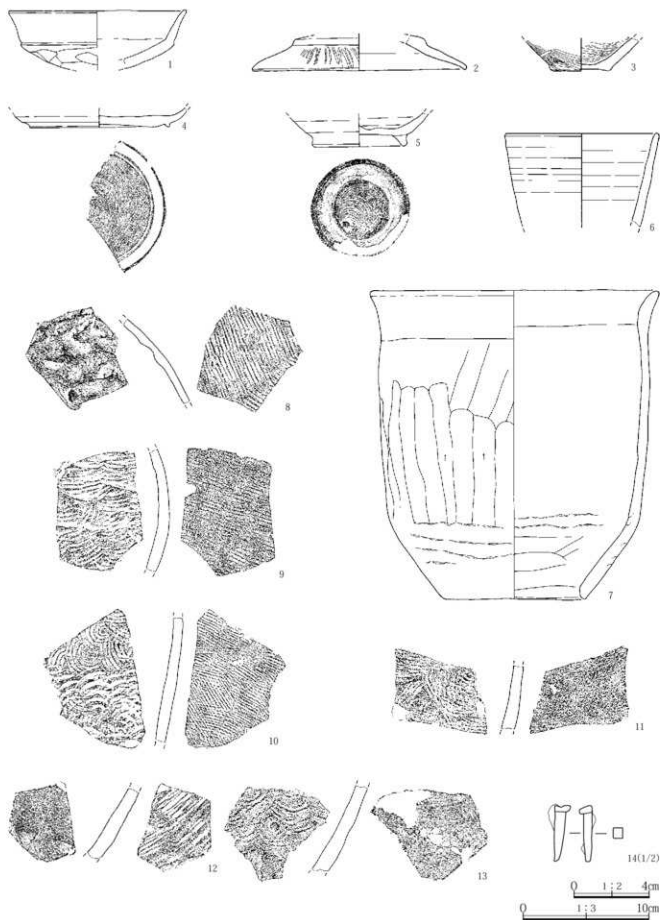
(1)土器類(第539図、第233表、PL.276)

古墳時代以降の土器として14点を図示した。土器器には1の杯、2の高杯の脚部、3の鉢の底部がある。須恵器には4・5とした碗の底部、6の壺の口縁部があり、7は甗である。さらに、8～13とした内外面に叩き目をもつ甕の胴部片がある。

(2)金属製品(第539図、第233表、PL.276)

出土した金属製品には細かな鉄製品が多い。その中から釘1点を図示した。

第4章 検出された遺構と遺物



第539図 4区古墳時代以降遺構外出土遺物

第 5 章 自然科学分析

第5章 自然科学分析

本遺跡の位置する東吾妻町周辺には、権名山や浅間山以外にも、中部地方や九州地方といった遠方の火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰していることは、周辺遺跡における発掘調査で明らかとなっている。本遺跡においても、複数の火山灰が各調査区で確認され、遺跡全体に堆積していることは先述したとおりであり、各テフラの同定と降下年代を知ることが必要不可欠となった。そこで、すでに年代が明らかにされている指標テフラの検出同定を目的として、平成25年度調査および平成28年度調査時に株式会社火山灰考古学研究所に分析業務を委託して実施した。

平成25年度調査では1区南西壁旧河道部における堆積物を対象に、平成28年度調査では2区66・99号竪穴建物埋没土、東深掘地点および西深掘地点の計4箇所の堆積物を対象に分析した。その火山灰(テフラ)分析の結果からは、1区南西壁旧河道部での2層の成層したテフラ層は、浅間火山噴出の1108(天仁元)年とされる浅間Bテフラ(As-B)と、1128(大治3)年とされる浅間粕川テフラ(As-Kk)であることがわかった。

また、本遺跡調査においては、多数の焼失竪穴建物が検出され、遺存度の良好な炭化材が出土している。それら焼失竪穴建物は、弥生時代後期から平安時代に至る多時期にわたることが出土土器から判明しており、各時期の竪穴建物に用いられた炭化材の樹種を明らかにする必要性があった。このため、炭化材の樹種同定を目的に、平成25年度調査時にパリオ・サーヴェイ株式会社委託して実施した。また、平成30年度整理では、平成27・28年度調査で出土した炭化材の樹種同定を株式会社加速器分析研究所に委託し、併せて同炭化材の実年代を知る必要性から放射性炭素年代測定を委託して実施した。

平成25年度調査の樹種同定では、1区20号竪穴建物出土炭化材を対象に分析した結果、エノキ属を主体とし、クリ、ヤマグワ、カエデ属、ヌルデの広葉樹が確認された。平成30年度整理では、各時代の竪穴建物出土の炭化材計18点を樹種同定対象とした結果、4区12号竪穴建物では4点がクリ、1点がタケ亜科。4区18号竪穴建物は3点

全てがクリ。4区24号竪穴建物は3点全てがクリ。2区86号竪穴建物は4点全てがクリ。2区39号竪穴建物は2点がクリ、1点がエノキ属であり、クリが竪穴建物の用材として多用されていることがわかった。

一方、竪穴建物と鍛冶遺構出土の炭化材計7点を放射性炭素年代測定対象とした結果では、4区12号竪穴建物(弥生時代後期)は 1880 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は78~207calADの範囲で78~139calAD (63.6%)。4区18号竪穴建物(弥生時代後期)は 1870 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は80~209calADの範囲で80~142calAD (55.6%)。4区24号竪穴建物(弥生時代後期)は 1900 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は81~126calAD (68.2%)。4区10号竪穴建物(5世紀前半)は 1640 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は388~427calAD、(68.2%)。3区12号竪穴建物(6世紀後半~7世紀前半)は 1590 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は423~534calADの範囲で487~534calAD (43.7%)。2区39号竪穴建物9世紀第3四半期)は 1210 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は423~534calADの範囲で789~869calAD (61.7%)。1区1号鍛冶遺構(時期不明)では 610 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は1306~1396cal ADの範囲で示され、14世紀頃の年代値であった。

さらに、平成30年度整理では、墓壇より出土した人骨の鑑定分析を橋崎修一郎氏(大妻女子大学博物館)に委託して実施した。その結果、1区1号墓壇(土坑墓)出土人骨は推定年齢約30歳代~40歳代の男性と推定され、頭を北にした横臥(側臥)屈葬の土葬。1区2号墓壇(土坑墓)出土人骨は性別不明の未成年者と推定され、頭を北にした土葬であることが判った。共に、中世の墓壇出土人骨である。

以下、分析の報告を掲載する。

第1節 火山灰分析(1区)

1. 1区南西壁旧河道部の土層順序

1区南西壁旧河道部では、礫層(層厚25cm以上、礫の最大径97mm)、礫混じり褐色砂層(層厚6cm、礫の最大径28mm)、暗褐色土(層厚9cm)、成層したテフラ層(層厚5cm)、砂混じり褐色土(層厚4cm)、成層したテフラ層(層厚cm)、黒みがった暗灰色土(層厚8cm)、粒径がよくそろった石質岩片層(層厚4cm、岩片の最大径3mm)、黄色がかかった灰色軽石混じり灰色土(層厚10cm、軽石の最大径13mm)、灰色土(層厚9cm)、黄色がかかった灰色土(層厚5cm)、灰色表土(層厚11cm)が認められる。

2層の成層したテフラ層のうち、下位のテフラ層は、下部の粗粒の褐色軽石層(層厚2cm、軽石の最大径20mm)と、上部の成層した黄色砂質細粒火山灰層(層厚3cm)からなる。一方、上部のテフラ層は、下位より青灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm)、正の級化構造をもつ灰色がかかった黄色細粒軽石層(層厚4cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径4mm)、かすかに成層した灰色軽石を多く含む黄灰色軽石層(層厚25cm、軽石の最大径29mm、石質岩片の最大径12mm)、青灰色石質岩片層(層厚1cm、石質岩片の最大径14mm)、青灰色細粒火山灰層(層厚2cm)、灰色軽石混じり暗青灰色粗粒火山灰層(層厚1cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm)、灰色軽石混じり青灰色砂質細粒火山灰層(層厚3cm、軽石の最大径17mm、石質岩片の最大径3mm)、灰色細粒軽石に富む青灰色砂質細粒火山灰層(層厚4cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径5mm)、灰色軽石混じり灰色砂質細粒火山灰層(層厚5cm、軽石の最大径10mm、石質岩片の最大径4mm)からなる。

これらの2層の間の砂混じり褐色土の層には、やや色調が暗く灰色がかかって、炭化物が少量含まれている部分も認められる。

2. テフラ検出分析

(1)分析試料と分析方法

1区南西壁旧河道部においてテフラ層から採取された9試料のうちの7点を対象に、比較的粗粒のテフラ粒子の量や特徴などを定性的に把握するテフラ検出分析を実

施して、試料に含まれるテフラ粒子の特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1)高純度の試料6gを秤量。
- 2)超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3)恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4)実体顕微鏡で観察。

(2)分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。試料9には淡褐色、淡灰色、褐色の軽石(最大径9.8mm)や、スポンジ状軽石型火山ガラスが比較的多く含まれている。褐色のものには、光沢をもつものも含まれている。不透明鉱物をのぞく重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料7には、淡褐色や褐色のスポンジ状軽石型火山ガラスが少量含まれている。不透明鉱物をのぞく重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料5には淡灰色、淡褐色、褐色の軽石(最大径9.8mm)や、スポンジ状軽石型火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物をのぞく重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料4も同様(軽石の最大径14.3mm)であるが、試料5と比較すると軽石や火山ガラスがやや少ない。試料3には、淡褐色、淡灰色、褐色の軽石(最大径7.8mm)やスポンジ状軽石型火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物をのぞく重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料2も同様(軽石の最大径10.1mm)であるが、試料3と比較すると軽石や火山ガラスがやや少ない。試料5から試料3にかけては、異なる色調が斑状に入り混じった軽石も含まれている。

試料1には、淡褐色、淡灰色、褐色、白色の軽石(最大径11.2mm)やスポンジ状軽石型火山ガラスが多く含まれている。不透明鉱物をのぞく重鉱物には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。含まれる軽石はやや円磨を受けていることから、本試料に含まれるテフラ粒子は二次的に堆積した可能性が高い。

3. 考察

1区南西壁旧河道部で認められた2層の両輝石型降下テフラ層については、層相および含まれる軽石粒子の岩相などから、下位より順に1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Bテフラ(As-B、荒牧

表1 四戸遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア		火山ガラス		おもな重鉱物		
		量	色調	量	色調			
1区南西壁旧河道部	1	***	淡褐, 淡灰, 褐, 白	11.2	***	pm (sp)	淡褐, 淡灰, 褐, 白	opx, cpx
	2	**	淡褐, 淡灰, 褐	10.1	**	pm (sp)	淡褐, 淡灰, 褐	opx, cpx
	3	***	淡褐, 淡灰, 褐	7.8	***	pm (sp)	淡褐, 淡灰, 褐	opx, cpx
	4	**	淡灰, 淡褐, 褐	14.3	**	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
	5	***	淡灰, 淡褐, 褐	9.8	***	pm (sp)	淡灰, 淡褐, 褐	opx, cpx
	7				*	pm (sp)	淡褐, 褐	opx, cpx
	9	**	淡褐, 淡灰, 褐 (光沢)	9.8	**	pm (sp)	淡灰, 淡灰, 褐 (光沢)	opx, cpx

***: とくに多い, **: 多い, **: 中程度, *: 少ない, 最大径の単位は, mm.

lw: ハブル型, pm: 軽石型, md: 中間型.

opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石.

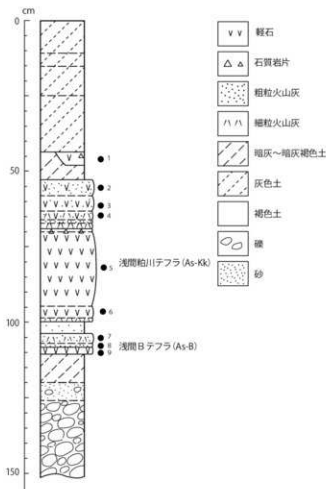


図1 1区南西壁旧河道部の土層柱状図

●: テフラ分析試料の層位, 数字: 分析試料番号

1968, 新井1979)と、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ(As-Kk、早田2004など)に同定される。

4. まとめ

東吾妻町四戸遺跡において地質調査とテフラ検出分析を実施した。その結果、1区南西壁旧河道部で、浅間B



写真1 四戸遺跡1区南西壁旧河道部におけるAs-B(下位)とAs-Kk(上位)の層相, 間に薄い土壌を挟む。

テフラ(As-B、1108年)と浅間粕川テフラ(As-Kk、1128年)の堆積を確認することができた。

文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 筑牧重雄(1968)浅間火山の地質, 地研専報, no.14, p.1-45.
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—, かみつけの里博物館編1108—浅間火山—中世への激動, p.45-56.

第2節 火山灰分析(2区)

1. 調査地点の土層層序

(1) 2区99号竪穴建物埋没土断面

発掘調査の成果から古墳時代と推定されている2区99号竪穴建物の埋没土は、下位より色調がとくに暗い暗褐色土(層厚12cm)、垂角～亜円礫混じりで色調がとくに暗い暗灰褐色土(層厚6cm、礫の最大径54mm)、赤褐色焼土ブロック混じり暗灰褐色土(層厚4cm)、垂角～亜円礫混じり暗灰褐色土(層厚51cm、礫の最大径33mm)、垂角礫混じり暗灰褐色土(層厚14cm、礫の最大径28mm)、成層したテフラ層(層厚5cm)、青灰色砂質細粒火山灰ブロック混じり灰色砂質土(層厚3cm)、暗灰褐色砂質土(層厚5cm)、成層したテフラ層(層厚14cm)、黄褐色軽石を多く含むやや暗い灰褐色土(層厚31cm、軽石の最大径14mm)からなる(図1)。

このうち、下位の成層したテフラ層は、下位より褐色軽石混じりでやや青みがかった灰色砂質粗粒火山灰層(層厚0.8cm、軽石の最大径8mm)と、黄灰色砂質細粒火山灰層(層厚3cm)からなる。一方、上位の成層したテフラ層は、下位より粗粒黄色軽石を含む黄色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径21mm、石質岩片の最大径7mm)、黄褐色軽石層(層厚9cm、軽石の最大径33mm、石質岩片の最大径26mm)からなる。

(2) 2区66号竪穴建物埋没土断面

やはり古墳時代と推定されている2区66号竪穴建物の埋没土は、下位より垂角礫を少し含むやや暗い灰褐色土(層厚3cm、礫の最大径59mm)、垂円～角礫混じりでやや暗い灰褐色土(層厚14cm、礫の最大径62mm)、暗灰褐色土(層厚12cm)、成層したテフラ層(層厚2.7cm)、粒径がよくそろった青灰色粗粒火山砂(層厚2cm)、やや暗い灰褐色土(層厚5cm)、黄色粗粒軽石を含む黄色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径20mm、石質岩片の最大径8mm)、灰褐色軽石を多く含むやや暗い灰褐色土(層厚22cm、軽石の最大径9mm)からなる(図2)。

このうち、成層したテフラ層は、下部の粗粒軽石混じり褐色軽石層(層厚2cm、軽石の最大径38mm、石質岩片の最大径3mm)と、上部の桃色細粒砂質火山灰層(層厚

0.7cm)からなる。

(3) 東深掘地点

段丘面上に位置する東深掘地点では、亜円礫層(層厚60cm以上、礫の最大径242mm、段丘礫層)の上位に、下位より黄色軽石を少し含むやや灰色がかった黄色砂質土(層厚22cm、軽石の最大径11mm)、円磨された黄色軽石を少し含む黄色土(層厚15cm、軽石の最大径12mm)、やや灰色がかった黄色土(層厚12cm)、黒灰色土ブロックを含む暗灰褐色土(層厚16cm)、黄色軽石を少し含む黒灰褐色土(層厚20cm、軽石の最大径5mm)が認められる(図3)。

(4) 西深掘地点

扇状地状地形面上に位置する西深掘地点では、下位より黄色軽石を少量含むやや暗い褐色土(層厚35cm以上、軽石の最大径8mm)、黄褐色軽石を多く含むやや暗い褐色土(層厚18mm)、黄橙～黄白色軽石を少量含む黄灰色がかった褐色土(層厚31cm、軽石の最大径8mm)、やや灰色がかった褐色土(層厚36cm)、円磨された橙褐色軽石を含む黄色がかった褐色土(層厚28cm、軽石の最大径8mm)、黄褐色砂質土(層厚13cm)、亜円礫や砂を含む暗灰褐色土(層厚16cm、礫の最大径78mm)、やや暗い灰褐色粘質土(層厚29cm以上)が認められる(図4)。なお、ところによっては、上位から2層目の亜円礫や砂を含む暗灰褐色土の直下に、礫層が認められる。

2. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

2区99号竪穴建物埋没土断面で認められたテフラ層のうち、上位のテフラ層と、西深掘地点で認められた軽石混じりの土層を対象にして、堆積物中に含まれるテフラ粒子の特徴を明らかにするために、7点の試料についてテフラ粒子の量や特徴を定性的に把握するテフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 電子天秤により試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いて泥分を除去。
- 3) 恒温乾燥器により80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察。

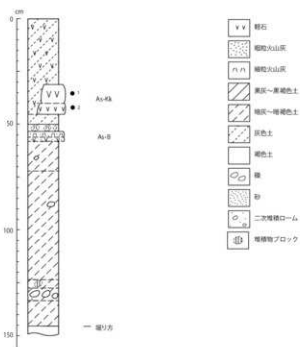


図1 99号竪穴建物覆土断面の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析試料の番号.

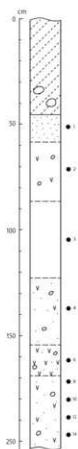


図4 西深掘地点の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析の試料番号.

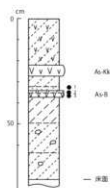


図2 66号竪穴建物の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析の試料番号.

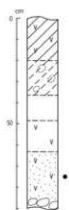


図3 東深掘地点の土層柱状図
●:テフラ分析試料の層位, 数字:テフラ分析の試料番号.



写真1 2区99号堅穴建物埋没土断面壁・試料1(落射光)軽石を軽く粉砕したもの(ϕ 1/4mm)。淡灰色のほか、淡褐色、褐色、灰白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。背後は、1mmメッシュ。



写真2 2区99号堅穴建物埋没土断面壁・試料2(落射光)軽石を軽く粉砕したもの(ϕ 1/4mm)。淡灰色のほか、淡褐色、褐色、灰白色の軽石やスポンジ状軽石型ガラスが多く含まれている。背後は、1mmメッシュ。



写真3 西深掘地点・試料14の顕微鏡写真(透過光)中央周辺など：スポンジ状軽石型ガラス。中央左：繊維束状軽石型ガラス。中央下(有色鉱物)：斜方輝石。

表1 四戸遺跡2区におけるテフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス			おもな重鉱物 (不透明鉱物以外)
		量	色調	最大径	量	形態	色調	
99号竪穴建物 埋没土断面	1	****	淡灰, 淡褐, 褐, 白	33.1mm	**	pn(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx
	2	****	淡灰, 淡褐, 褐, 白	21.2mm	**	pn(sp)	淡灰, 淡褐, 褐, 白	opx, cpx
西深掘地点	6				**	nd, pn(sp)	無色透明, 白	opx, cpx
	8				**	nd	無色透明, 淡灰, 灰	opx, cpx, (am)
	10				**	nd	無色透明, 淡灰, 灰	opx, cpx, (am)
	12				**	nd	無色透明, 淡灰, 灰	opx, cpx, (am)
	14				**	nd, pn(fb)	無色透明, 淡灰, 灰	opx, cpx, (am)

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない,

bw: バブル型, pn: 軽石型, nd: 中間型, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石, am: 角閃石, () : 量が少ないことを示す。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。2区99号竪穴建物埋没土断面で認められたテフラ層のうちの上位のテフラ層には、粒径はやや異なるものの、軽石がとくに多く含まれている¹⁾。軽石の色調は、淡灰色、淡褐色、褐色、濁った感じの白色で、繃状軽石や斑状に色調が異なる軽石も認められる。火山ガラスとしては、これらの軽石の細粒物である軽石型ガラスが比較的多く含まれている。いずれの試料にも、不透明鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

西深掘地点で採取された比較的明色の土壌試料には、分厚い中間型ガラスが比較的多く含まれており、試料によっては、スポンジ状や繊維束状の軽石型ガラスが少量認められる。中間型ガラスの色調は無色透明、淡灰色、灰色で、軽石型ガラスは無色透明や白色を呈する。また、ほとんどの試料で、不透明鉱物以外の重鉱物として、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が認められる。

3. 屈折率測定(火山ガラス)

(1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象試料のうち、2区99号竪穴建物埋没土断面のテフラ層(試料1)と、西深掘地点の明色の土壌(試料14)の2点に含まれる軽石のガラス部や火山ガラスの屈折率測定を実施した。測定は温度変化型屈折率測定法(増原1993)で、測定対象はテフラ検出分析後に篩別で得られた1/8~1/16mm粒子の中の火山ガラスである。

(2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。この表には、群馬県域の後期旧石器時代以降の代表的な指標テフラの火山ガラスの屈折率特性も合わせて示した。2区99号竪穴建物埋没土断面のテフラ層(試料1)に含まれる軽石の火山ガラス部(30粒子)の屈折率(n)は、1.525-1.528である。一方、西深掘地点の二次堆積ローム層(試料14)に含まれる火山ガラス(30粒子)の屈折率(n)は、1.501-1.503である。

4. 考察

2区99号竪穴建物埋没土断面で認められた2層のテフラ層のうち、上位のテフラ層は、層位や層相、そして軽石の火山ガラス部の屈折率特性が、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B、荒牧1968、新井1979、町田・新井1991・2003・2011)に類似していることから、As-Bの噴火の後、1128(大治3)年に浅間火山から噴出した浅間粕川テフラ(As-Kk、早田1991・1996・2004)に同定される。一方、下位のテフラ層は、地点によって若干層相に違いはあるものの、粗粒の軽石を含み大規模な噴火に由来することがわかることから、As-Bに同定される。

また、西深掘地点で認められた明色土(試料14)に含まれるテフラは、軽石の岩相や、火山ガラスの形態や色調、そして屈折率特性、さらに斜方輝石や単斜輝石を多く含むことから、浅間火山軽石流期(荒牧1968)のテフラと考えられる。その中では、約1.5~1.65万年前の浅間板鼻黄色軽石(As-YP、新井1962、町田・新井1992・2003・

第5章 自然科学分析

表2 四戸遺跡2区における屈折率測定結果

試料(テフラ)	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定粒子数	
99号型穴建物覆土断面・試料1	1.525-1.528	30	本報告
西深掘地点・試料14	1.501-1.503	30	本報告
〈関東地方北西部のおもな指標テフラ-AT降灰以降〉			
浅間 A (As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間 B (As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
榛名ニッ岱伊香保(Br-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名ニッ岱渋川(Br-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.499-1.504		3)
榛名有馬(Br-AA, 5世紀)	1.500-1.502		4)
浅間 C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		2)
浅間 D 軽石(As-D, 約4,500年前 ^{*)})	1.513-1.516		2)
鬼界アカホヤ(K-Ab, 約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡軽石(As-Fo, 約8,200年前 ^{*)})	1.508-1.516		2)
浅間総社(As-Sj, 約1.0～1.1万年前 ^{*)})	1.501-1.518		5)
浅間草津(As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色(As-YP, 約1.5～1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2(As-Ok2, 約1.6万年前 ^{*)})	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1(As-Ok1, 約1.7万年前 ^{*)})	1.500-1.502		1)
浅間白糸(As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間秩生(As-Hg, 約1.9万年前 ^{*)})	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色(群) (As-BP Group)	上部	1.515-1.520	1)
	中部	1.508-1.511	1)
	下部	1.505-1.515	1)
始良Tn (AT, 約2.8～3万年前)	1.499-1.500		1)

1)町田・新井(2011), 2)早田(1996), 3)早田(2014), 4)町田ほか(1984), 5)早田(未公表).

本報告および3)：温度変化型屈折率測定法(増原, 1993).

3)以外：温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993).

*：放射性炭素(14C)年代.

2011)や、それに関係すると考えられている浅間草津軽石(As-K、町田・新井1992・2003・2011)に由来する可能性が高い。

本遺跡周辺では、一般的に浅間火山軽石流期に形成された土壌の厚さは比較的薄い。しかしながら、西深掘地点では、土壌が厚く形成されており、しかも容易に同定できる指標テフラ層は認められない。このことから、厚い明色の土壌は、いわゆる二次堆積ローム層の可能性が高い。この堆積物が十分に厚く、河川性の堆積物があまり認められないことから、西深掘地点が位置する扇状地状の地形は、二次堆積ローム層で形成されている可能性がある。

この二次堆積ローム層と、段丘面との関係の詳細は不明であるが、東深掘地点の土層断面からは、段丘面の上位に二次堆積ローム層が堆積しているようにも思われる。今後、本遺跡周辺に降灰しているAs-Kを指標にして、これらの層位関係や、二次堆積ローム層の成因を調べる必要がある。なお、極名火山の南を流れる烏川流域には、後期更新世末期から完新世中期にかけて、複数の泥流堆積物の存在が知られている(古環境研究所2000、早田2011など)。このことから、地震など比較的広範囲に及ぶ事象が関係している可能性があり、本地域の自然史また環境変遷史を語る上で重要と考えられる。

5. まとめ

東吾妻町四戸遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、複数の竪穴建物を覆う表層部の腐植質土壌の中に浅間Bテフラ(As-B、1108年)と浅間粕川テフラ(As-Kk、1128年)の堆積を認めることができた。このことは、発掘調査による竪穴建物の年代推定を支持するものである。また、調査区西部の扇状地状地形域では、厚い二次堆積ローム層を検出することができた。

¹¹: 写真図版に掲載したテフラ粒子(写真1、写真2)は、軽石を軽く粉砕している。

文献

- 新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学要報自然科学編, 10, p.1-79。
- 新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフラクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269。
- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no. 53, p.41-52。
- 新井房夫(1993)温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.138-149。
- 笹牧重雄(1968)浅間火山の地質。地質研専報, no.14, p.1-45。
- 境原 徹(1993)温度変化型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2」, 東京大学出版会, p.149-158。
- 町田 洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 276p。
- 町田 洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス」, 東京大学出版会, 336p。
- 町田 洋・新井房夫(2011)「新編火山灰アトラス(第2刷)」, 東京大学出版会, 336p。
- 町田 洋・新井房夫・藤巻邦彦・小田静夫・杉原重夫(1984)テフラと日本考古学—考古学に関するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928。
- 早田 勉(1990)群馬の自然と風土。群馬県史編さん室編「群馬県史通史編1 原始古代1」, p.37-129。
- 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7。
- 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御店第1テフラより上位のテフラについて—。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267。
- 早田 勉(2003)極名地域の自然環境とその歴史。極名町誌編さん委員会編「極名町誌通史編上巻 原始古代・中世」, p.7-56。
- 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について—。かみつけの里博物館編「1108—浅間火山—中世への激動」, p.45-56。
- 早田 勉(2014)渋川市有馬寺畑遺跡の土層とテフラ。渋川市教育委員会編「有馬寺畑遺跡」, p.197-211。

第3節 樹種同定(1区)

1. 試料

試料は、1区20号竪穴建物から出土した炭化材33点(No.1~33)である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995・1996・1997・1998・1999)を参考にする。

3. 結果

同定結果を表1に示す。1区20号竪穴建物より出土した炭化材は、広葉樹5分類群(クリ、エノキ属、ヤマグワ、ヌルデ、カエデ属)に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ヤマグワ(*Morus australis* Poirét) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では単独または2-4個が複合して斜方向に配列し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。

・ヌルデ(*Rhus javanica* L.) ウルシ科ウルシ属

試料は年輪界で割れた小片である。道管径の変化から環孔材と判断される。孔圏部は4-5列、孔圏外への移行は緩やかで、晩材部では2-5個が塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、

表1 1区20号竪穴建物出土炭化材の樹種同定結果

取上No. (試料名)	状態	種類 (分類群)	取上No. (試料名)	状態	種類 (分類群)
No.1	破片	エノキ属	No.18	破片	エノキ属
No.2	破片	エノキ属	No.19	破片	ヌルデ
No.3	破片	エノキ属	No.20	破片	エノキ属
No.4	破片	ヤマグワ	No.21	破片	エノキ属
No.5	破片	エノキ属	No.22	破片	エノキ属
No.6	破片	エノキ属	No.23	破片	エノキ属
No.7	破片	エノキ属	No.24	破片	エノキ属
No.8	破片	エノキ属	No.25	破片	エノキ属
No.9	破片	エノキ属	No.26	破片	エノキ属
No.10	破片	エノキ属	No.27	破片	エノキ属
No.11	破片	カエデ属	No.28	破片	エノキ属
No.12	破片	エノキ属	No.29	破片	エノキ属
No.13	破片	エノキ属	No.30	破片	エノキ属
No.14	破片	エノキ属	No.31	破片	エノキ属
No.15	破片	エノキ属	No.32	破片	エノキ属
No.16	破片	エノキ属	No.33	破片	エノキ属
No.17	破片	クリ			

壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-10細胞幅、1-100細胞高以上。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。大型の放射組織を持つ特徴から、カエデ属の中でもチドリノキやイタヤカエデ類と考えられる。

4. 考察

1区20号竪穴建物は、竪穴建物西壁中央にカマドを有し、南西隅には貯蔵が確認されている。炭化材は、後世の遺構による破壊を免れた竪穴建物東側半分のはば床面全面より出土している。また、出土状況から、壁際から竪穴建物の中央方向を長軸とする炭化材(Na10・13・21・22)やこれらの試料に直交する炭化材(Na11・14)等が確認でき、垂木等を含む建築部材に由来すると考えられる。なお、分析に供された炭化材の観察では、いずれも破片であり、元の形状を推定できる試料はほとんど確認できなかったが、いずれも樹芯や樹芯に近いと思われる部位が認められなかったことから、分割材が利用されていた可能性がある。

炭化材の樹種同定の結果、エノキ属を主体として、クリ、ヤマグワ、カエデ属、ヌルデの広葉樹5分類群が確認された。試料33点のうち29点がエノキ属であったことから、建築部材はエノキ属を主体とした種類構成であったと考えられる。これらの分類群のうち、エノキ属は、河畔などに生育する落葉高木で、木材はやや重硬である。クリは、二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度・耐朽性が高い。ヤマグワは、河畔に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。カエデ属は、二次林や河畔等に生育する落葉高木で、木材は比較的軽硬で強度が高い。ヌルデは、林縁部や河畔等に生育する落葉小高木で、木材は軽軟で強度は低い。遺跡の立地などを考慮すると、確認された分類群は遺跡周辺に生育していたと考えられ、木材の入手は可能であったと考えられる。なお、樹種構成では、材質的に強度の高いクリ、

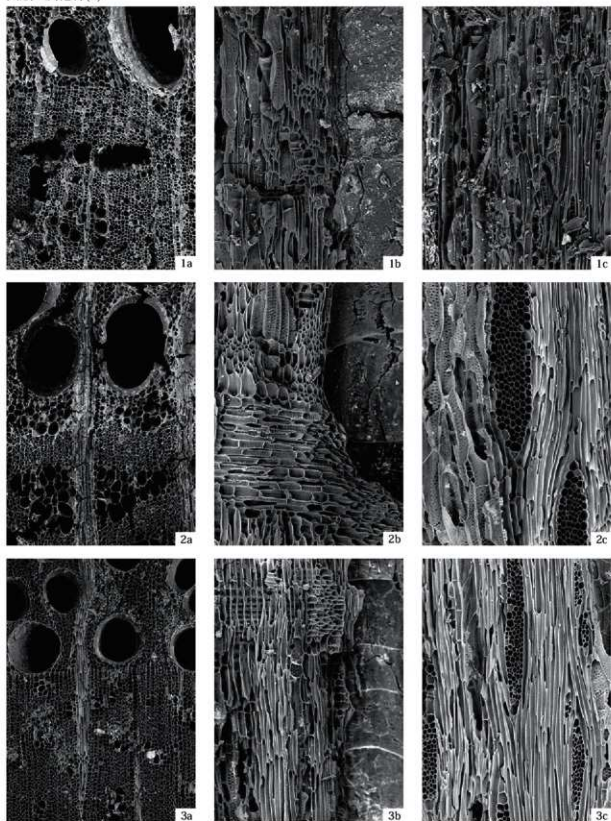
ヤマグワ、カエデ属などが認められるものの、それよりも強度がやや劣るエノキ属が多数を占める状況から、強度よりも入手が容易であること等の背景も想定される。また、竪穴建物南西隅の貯蔵穴付近からは強度の低いヌルデが確認されており、他の木材と同様に利用されたことが推定される。

群馬県内の古墳時代後期の竪穴建物から出土した炭化材の調査事例をみると、遺跡の立地によって利用樹種は異なるものの、クスノ節、コナラ節、クリ等の重硬で強度の高い木材が多く利用される傾向にある(伊東・山田2012)。また、エノキ属の出土事例についてみると、中筋遺跡(渋川市)の5世紀の竪穴建物や、半田剣城遺跡(渋川市)の平安時代の竪穴建物等に確認できるものの少数であり、エノキ属が主体となる事例は確認されていない。本遺跡周辺では当該期の建築部材の調査事例がほとんど無いため、今回のような樹種構成の在り方については、さらに周辺地域での資料の蓄積による検討が望まれる。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181。
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176。
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201。
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-106。
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216。
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p。
島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p。
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p。[Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]。

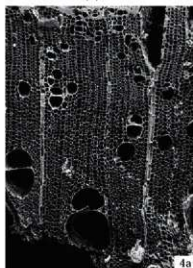
図版1 炭化材(1)



1. クリ(20号堅穴建物; №17)
 2. エノキ属(20号堅穴建物; №1)
 3. ヤマガタ(20号堅穴建物; №4)
- a: 木口, b: 柎目, c: 板目

100 μ m
100 μ m b,c

図版2 炭化材(2)



4.ヌルデ(20号竪穴建物;No19)
5.カエデ属(20号竪穴建物;No11)
a:木口, b:縦目, c:板目

100 μ m a
100 μ m b, c

第4節 樹種同定(2・4区)

1 試料

試料は、弥生時代後期とされる4区12号竪穴建物、4区18号竪穴建物、4区24号竪穴建物から出土した炭化材11点、古墳時代の2区86号竪穴建物から出土した炭化材4点、平安時代の2区39号竪穴建物から出土した炭化材3点の合計18点である。

なお、4区12号、18号、24号、2区39号竪穴建物の4点を含む計7点を対象に放射性炭素年代測定が実施されており、いずれも推定年代とおおむね一致する年代値が示されている。

2 分析方法

各試料について、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面を複製し、アルミ合金製の試料台にカーボンテープで固定する。走査型電子顕微鏡(低真空)で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹2分類群(エノキ属・クリ)とタケ亜科に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を以下に記す。

・エノキ属(*Celtis*) アサ科

環孔材。孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列し、孔圏外の小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~6列、1~50細胞高で鞘細胞が認められる。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属環孔材。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に径を減じた

のち、漸減しながら火災状に配列する。道管の穿孔板は単穿孔板であるが、孔圏外の小道管には希に段数の少ない階段穿孔板が認められることがある。壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列(2列になることもある)、1~15細胞高。

・タケ亜科(*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*) イネ科

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に篩部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

表3 四戸遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料名	出土位置	推定時代	種類	備考
炭1	4区12号竪穴建物	弥生時代後期	クリ	
炭2			クリ	
炭3			クリ	
炭5			クリ	
炭7			タケ亜科	年代測定
炭1	4区18号竪穴建物	弥生時代後期	クリ	
炭2			クリ	
炭3			クリ	年代測定
炭1	4区24号竪穴建物	弥生時代後期	クリ	
炭2			クリ	年代測定
炭3			クリ	
炭1			クリ	
炭2	2区86号竪穴建物	古墳時代	クリ	
炭3			クリ	
炭4			クリ	
炭1	2区39号竪穴建物	平安時代 (9世紀後半)	クリ	
炭2			エノキ属	
炭3			クリ	年代測定

4 考察

各竪穴建物から出土した炭化材には、エノキ属、クリ、タケ亜科が認められた。各種類の材質についてみると、エノキ属は本地域の現生生等からエノキの可能性が高い。エノキは、河畔や後背湿地等に生育する落葉高木であり、木材はやや重硬な部類に入る。クリは、二次林等に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度と耐朽性が高い。タケ亜科は、タケ・ササ類である。本地域では落葉広葉樹林の林床等に生育する種類がある。材は、強靱で強度、耐水性、靱性が比較的高い。

各時代の種類構成をみると、弥生時代後期の竪穴建物3棟から出土した11点は、タケ亜科1点を除く10点がクリに同定された。この結果から、弥生時代後期ではクリを中心とした用材選択が推定される。12号竪穴建物で1点認められたタケ亜科は、材質を考慮すれば、屋根の萱材など、クリとは異なる用途・部位が推定される。

古墳時代の86号竪穴建物から出土した4点も全てクリに同定された。同種の傾向は平安時代の39号竪穴建物で

も見られ、3点中2点がクリに同定されている。この結果から、本遺跡では弥生時代後期から平安時代までクリを主体とした用材選択が継続したことが推定される。

関東地方の竪穴建物出土炭化材の調査では、縄文時代にクリ、弥生時代～古墳時代にクヌギ節やコナラ節の利用が多く、平安時代になるとクヌギ節やコナラ節に混じってクリが利用されること等が指摘されている(千野, 1991; 高橋・植木, 1994)。また、群馬県内の調査事例では、行幸田畑中B遺跡(渋川市)のFAによる火砕流で埋没した竪穴建物から出土した炭化材の多くがクリに同定されている。行幸田畑中B遺跡は、同じくFAの火砕流で埋没した中筋遺跡に近いが、中筋遺跡ではクリは平地建物に僅かに2点認められているのみであり、竪穴建物跡ではオニグルミやコナラ節を主体とする(高橋, 1988)。行幸田畑中B遺跡と中筋遺跡で種類構成が異なる背景には、遺跡の立地環境による植生の違いや、行幸田畑中B遺跡でクリに混じってモモの炭化材が確認される状況から栽培などの生業の影響が指摘されている(Takahashi, 2005)。

本遺跡については、弥生時代から平安時代まで継続してクリが利用されており、行幸田畑中B遺跡とは異なる背景が考えられる。本地域におけるクリ材利用の背景については、周辺地域での調査事例の蓄積と共に地形等の立地環境や他の遺物から推定される生活環境との比較等が望まれる。

文献

- 千野裕道, 1991. 縄文時代に二次林はあったかー遺跡出土の植物性遺物からの検討ー, 東京都埋蔵文化財センター研究論文集, 215-249.
- 林昭三, 1991. 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999. 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 島地謙・伊東隆夫, 1982. 図説木材組織, 地球社, 176p.
- Takahashi Tsutomu, 2005. Timber selection for housing

construction deduced from excavated charcoal from the Mt. Haruna, Gunma, central Japan. 6th PRAC KYOTO2005 Final Program And Abstracts, 109-110.

- 高橋 敦・植木真吾, 1994. 樹種同定からみた竪穴建物構築材の用材選択, PARY00_2, バリノ・サーヴェイ株式会社, 5-18.
- 高橋 敦・馬場健司・橋本真紀夫, 1995. 行幸田畑中B遺跡に関する自然科学分析調査, 「行幸田畑中B遺跡」, 渋川市発掘調査報告書第48集, 渋川市教育委員会, 35-52.
- 高橋利彦, 1988. 中筋遺跡出土炭化材の樹種, 「中筋遺跡 第2次発掘調査報告書」, 渋川市発掘調査報告書第18集, 渋川市教育委員会, 42-47.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998. 広葉樹材の識別 IANAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IANA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

なお、樹種同定については株式会社古生態研究所の協力を得て行った。

第5節 放射性炭素年代測定

1 測定対象試料

測定対象試料は、焼失竪穴建物6棟と竪穴遺構から出土した炭化材7点である(表1)。竪穴建物から出土した炭化材は、いずれも木材の形状をある程度保った状態で出土しており、試料は残存する最外年輪の部位から採取した(樹皮は確認できない)。竪穴遺構の炭化材は小片である。

なお、4区12号、18号、24号、2区39号竪穴建物の4点を含む計18点を対象に樹種同定も実施されている。

2 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基

準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) ¹⁴C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正

年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

弥生時代後期と推定された試料3点(4区12号竪穴建物炭7、18号竪穴建物炭3、24号竪穴建物炭2)の ^{14}C 年代は、 $1900 \pm 20\text{yrBP}$ (4区24号竪穴建物炭2)～ $1870 \pm 20\text{yrBP}$ (4区18号竪穴建物炭3)の間にある。暦年較正年代(1 σ)は、3点のうち最も古い4区24号竪穴建物炭2が $81 \sim 126\text{cal AD}$ の範囲、最も新しい4区18号竪穴建物炭3が $80 \sim 209\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。いずれも弥生時代後期頃に相当し(小林 2009)、推定年代に一致する。

古墳時代と推定された試料2点の ^{14}C 年代は、4区10号竪穴建物炭1が $1640 \pm 20\text{yrBP}$ 、3区12号竪穴建物炭1が $1590 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代(1 σ)は、4区10号竪穴建物炭1が $388 \sim 427\text{cal AD}$ 、3区12号竪穴建物炭1が $423 \sim 534\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示される。古墳時代中期から後期頃に相当し(佐原 2005)、いずれの年代値も推定年代に一致する結果となった。

平安時代と推定された2区39号竪穴建物炭3の ^{14}C 年代は $1210 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は $771 \sim 869\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。平安時代頃に相当し(佐原 2005)、推定年代におおむね一致する結果となった。

推定年代が不明である1区1号鍛冶の土坑1の ^{14}C 年代は $610 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代(1 σ)は $1306 \sim 1396\text{cal AD}$ の間に3つの範囲で示され、14世紀頃の年代値となった。

今回測定された試料はいずれも炭化材であることから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる(古木効果)。今回測定された試料にはいずれも樹皮が確認されていないことから、炭化材となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

また、試料4区12号竪穴建物炭7、18号竪穴建物炭

3、24号竪穴建物炭2の3点が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線 IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾富2009、坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いて3点の試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はいずれも61%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代の はじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82
- 尾富大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾信一郎、松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭、同成社、225-235
- Reiner, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分、佐原眞、ウェルナー・シュタインハウス監修、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集、ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻、学生社、14-19
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木—弥生から古墳へ—、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株)加速器分析研究所、85-90
- Stuiver, H. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-180877	4区12号竪穴建物 炭7	遺構：4区12号竪穴建物	炭化材	AaA	-28.60±0.38	1,880±20	79.17±0.22
IAAA-180878	4区18号竪穴建物 炭3	遺構：4区18号竪穴建物	炭化材	AAA	-27.10±0.41	1,870±20	79.20±0.23
IAAA-180879	4区24号竪穴建物 炭2	遺構：4区24号竪穴建物	炭化材	AAA	-27.33±0.45	1,900±20	78.95±0.22
IAAA-180880	4区10号竪穴建物 炭1	遺構：4区10号竪穴建物	炭化材	AAA	-27.04±0.38	1,640±20	81.58±0.24
IAAA-180881	3区12号竪穴建物 炭1	遺構：3区12号竪穴建物	炭化材	AAA	-30.40±0.44	1,590±20	82.07±0.22
IAAA-180882	2区39号竪穴建物 炭3	遺構：2区39号竪穴建物	炭化材	AaA	-26.03±0.46	1,210±20	85.98±0.25
IAAA-180883	1区1号鍛冶 土坑1	遺構：1区1号鍛冶 C-4グリッド	炭化材	AAA	-27.98±0.43	610±20	92.72±0.24

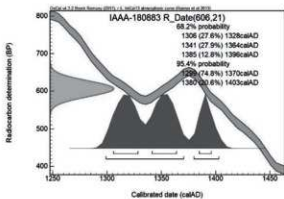
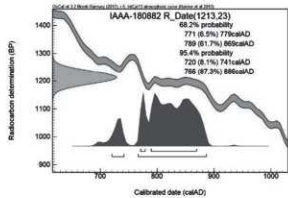
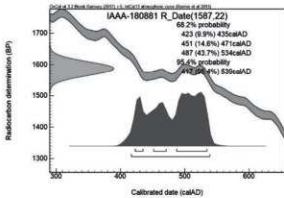
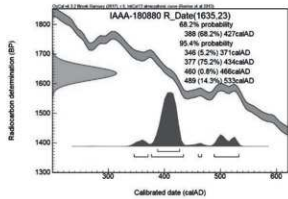
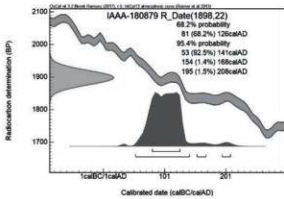
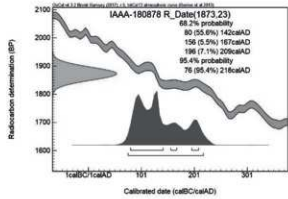
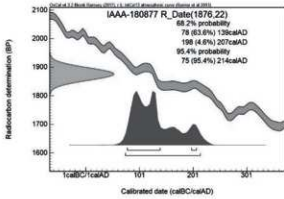
[IAA登録番号：#9206]

表2 放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-180877	1,940±20	78.58±0.21	1,876±22	78calAD-139calAD(63.6%) 198calAD-207calAD(4.6%)	75calAD-214calAD(95.4%)
IAAA-180878	1,910±20	78.85±0.22	1,873±23	80calAD-142calAD(55.6%) 156calAD-167calAD(5.5%) 196calAD-209calAD(7.1%)	76calAD-218calAD(95.4%)
IAAA-180879	1,940±20	78.57±0.21	1,898±22	81calAD-126calAD(68.2%)	53calAD-141calAD(92.5%) 154calAD-168calAD(1.4%) 195calAD-208calAD(1.5%)
IAAA-180880	1,670±20	81.24±0.23	1,635±23	388calAD-427calAD(68.2%)	346calAD-371calAD(5.2%) 377calAD-434calAD(75.2%) 460calAD-466calAD(0.8%) 489calAD-533calAD(14.3%)
IAAA-180881	1,680±20	81.16±0.21	1,587±22	423calAD-435calAD(9.9%) 451calAD-471calAD(14.6%) 487calAD-534calAD(43.7%)	417calAD-539calAD(95.4%)
IAAA-180882	1,230±20	85.80±0.23	1,213±23	771calAD-779calAD(6.5%) 789calAD-869calAD(61.7%)	720calAD-741calAD(8.1%) 766calAD-886calAD(87.3%)
IAAA-180883	660±20	92.16±0.23	606±21	1306calAD-1328calAD(27.6%) 1341calAD-1364calAD(27.9%) 1385calAD-1396calAD(12.8%)	1299calAD-1370calAD(74.8%) 1380calAD-1403calAD(20.6%)

[参考値]

図1 暦年較正年代グラフ(参考)



第6節 出土人骨鑑定

出土人骨報告

1. 1区1号墓壙(土坑墓)出土人骨

(1)人骨の出土状況

人骨は、長軸148cm・短軸111cm・深さ47cmの規模の楕円形土坑から出土している。



写真1 1区1号墓壙出土人骨の出土状況

(2)被葬者の頭位と埋葬状態

人骨の出土位置から、被葬者は頭位を北にして右側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

(3)副葬品

副葬品は、北宋銭の銭貨が2点検出されている。

(4)人骨の出土部位

残存状態はあまり良くないが、ほぼ全身が出土している。

(5)被葬者の個体数

出土人骨には、あきらかな重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6)被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値は比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。同様に、頭蓋骨片の内、後頭骨十字部の外後頭隆起厚は、17.8mmである。破損した中世人骨の計測データでは、外後頭隆起厚は、男性で17.5mm・女性で15.0mmである(長岡・平田、2005)。したがって、総合的に、被葬者の性別は男性であると推定される。



写真2 1区1号墓壙出土人骨[後頭骨]

(7)被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルチンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代~40歳代であると推定される。

2. 1区2号墓壙(土坑墓)出土人骨

(1)人骨の出土状況

人骨は、長軸131cm・短軸80cm・深さ27cmの規模の長方形土坑から出土している。



写真3 1区2号墓壙出土人骨の出土状況[西→]

(2)被葬者の頭位と埋葬状態

人骨の出土位置から、被葬者は頭位を北にして埋葬されたと推定される。しかしながら、他の四肢骨が検出されていないため、正確な埋葬状態は不明である。

(3)副葬品

副葬品は、検出されていない。

(4) 人骨の出土部位

人骨は、わずかに頭蓋骨片のみが検出されており、四肢骨は検出されていない。

(5) 被葬者の個体数

残存状態は非常に悪いが、恐らく、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

(6) 被葬者の性別

出土した後頭骨片は非常に薄いため、被葬者の性別は女性であると推定される。しかしながら、経験則ではあるが、頭蓋骨片のみ検出された場合は、未成年である可能性が高い。その場合、被葬者の性別は不明である。



写真4 1区2号墓出土人骨〔後頭骨〕

(7) 被葬者の死亡年齢

年齢指標となる部位が出土していないため、被葬者の死亡年齢推定は困難である。被葬者の性別の項で述べたように、被葬者は未成年である可能性が高いがため、ここでは、未成年としておく。

まとめ

群馬県東吾妻町大字三島に所在する四戸遺跡の1区1号墓及び1区2号墓の2基から中世の人骨2体が出土した。1区1号墓の被葬者は、約30歳代～40歳代の男性であると推定された。同様に、1区2号墓の被葬者は性別不明の未成年であると推定された。

引用文献

- 長岡明人・平田和明 2005「中世日本人の被葬頭蓋の性別判定」、『Anthropological Science (Japanese Series)』, 113: 17-26

第6章 調査の成果（総括）

第6章 調査の成果（総括）

第1節 集落の変遷について

先述してきたように、本遺跡における1～4区の調査では縄文時代から古代に至る各時代・時期の遺構が多数検出され、各時期に、また継続して竪穴建物を主とした集落が形成されていたことが明らかとなった。ここでは、周辺の中で最も広い四戸の段丘面上に展開する集落形成のあり方について、時期別に第I～XV期に分け、その変遷をまとめてみたい。なお、現在、整理作業が進められている「四戸の古墳群」の状況についてもその概要を加える。

1. 第I期(縄文時代前期前葉)

検出された縄文時代の集落を構成する竪穴建物は、全て縄文時代前期前葉と中葉に位置づけられる竪穴建物であり、その数は計6棟と大型の土坑1基がある。しかし、その配置を見ると、2区の西側北壁際に2区102～104号竪穴建物が近い位置に固まり、3区の西側に3区3・8・25号竪穴建物と3区115号土坑が点在する形で、両者は約100mほど離れた位置関係にある。また、これらの竪穴建物は、両区の北側に寄っており、調査範囲内の南側には展開していないことからすれば、調査範囲外の北側に展開する集落の南端部とみられる(第540図)。集落が展開する位置は、東流する吾妻川が大きく北側へ蛇行する屈曲部の段丘上面にあり、この段丘上面自体も川の蛇行に合わせるように北側へ広く延びる段丘面の括れ部にあたる。

なお、遺構外ではあるが、早期から晩期までの各時期の土器が出土していることから、調査範囲外の広い段丘面上に、他時期の集落が存在する可能性が高い。

2. 第II期(弥生時代中期)

検出された弥生時代の竪穴建物は、第540図下段に示したように、4-A 1区の南側に4区19・20号竪穴建物の2棟を検出したのみで、調査範囲内には他にない。しかし、当地には吾妻川を挟んだ対岸の前畑遺跡や岩櫃山

山頂付近の鷹の巣遺跡といった中期の遺跡が知られ、今調査範囲外に集落の展開する可能性は高い。

3. 第III期(弥生時代後期)

検出された弥生時代後期の集落を構成する竪穴建物は、樽式期に位置づけられる竪穴建物であり、その数は計17棟と竪穴遺構1基を数える。竪穴建物の配置をみると、第540図下段に示したように、3区に3区5号竪穴建物の1棟があるのみで、他は4-B～D区といった4区の東側に集中し(4区1～4・7・8・11・12・14・17・18・21・22・24・25・31号竪穴建物)、しかも周囲に広がる様相を見せている。竪穴建物の規模では、長軸が9～10mを測る大型竪穴建物、長軸7.0m前後の中型竪穴建物、長軸5.0m前後の小型竪穴建物からなり、拡張を伴う竪穴建物が4棟確認された。また、4本の主柱穴をもつ竪穴建物が多い中、長軸方向となる中軸上の北壁寄りにもう1穴加えた五角形をなす主柱穴をもつ竪穴建物が存在する。併せて、竪穴建物の壁際に小ピット(本文記述では「壁際ピット」と称した)が検出された例もあり、建物構造を改めて考えることのできる状況がある。一方、出土土器の接合状況からすると、近接する竪穴建物間での接合が確認されており、極めて近い時間帯に竪穴建物が存在したことを窺わせている。このことは、竪穴建物出土の炭化材での放射性炭素年代測定においても、4区12号竪穴建物は1880±20yrBPで、暦年較正年代は78～139calAD(63.6%)。4区18号竪穴建物は1870±20yrBPで、暦年較正年代は80～142calAD(55.6%)。4区24号竪穴建物は1900±20yrBPで、暦年較正年代は81～126calAD(68.2%)との測定結果が出ている。つまり、本集落は、弥生時代後期の中でも比較的短時間に形成された集落であると考えられる。

一方で、4区東側に位置する「四戸の古墳群」として調査された5区に当たる調査地点では、4区寄りに12棟検出されている。まさに、発掘調査範囲の北・南側にも竪穴建物が広がることを想定すれば、同一段丘面に展開する大規模な集落と考えられ、その数は30棟を優に超えるものと推測される。

4. 第Ⅳ期(4世紀代)

検出された4世紀代の集落を構成する竪穴建物は、2区93・96号竪穴建物と3区6・24号竪穴建物の計4棟からなり、S字状口縁台付甕や埴等を出土させている。竪穴建物の配置をみると、第541図上段に示したように、2区の東端から3区西半に偏っている。前代に比べ、この時期の集落規模は小さく、位置が西へと大きく移動している。

5. 第Ⅴ期(5世紀前半)

検出された5世紀前半の集落を構成する竪穴建物は、3区1・9号竪穴建物と4区10・32号竪穴建物の計4棟からなり、前代とほぼ同数と言える。しかし、竪穴建物の配置をみると、第541図上段に示したように、3区の竪穴建物2棟と4区の竪穴建物2棟には約180mほど大きく間が空く状況がある。

6. 第Ⅵ期(5世紀後半)

検出された5世紀後半の集落を構成する竪穴建物は、2区13・56~58・63・65・75・77・89・95号竪穴建物、3区11・20号竪穴建物、4区9号竪穴建物の計13棟からなり、前代より大幅に増加している。竪穴建物の配置をみると、第541図上段に示したように、4区では前代と同じ位置に1棟のみが存続し、2区の東側から3区西側にかけての範囲に大きく集落が展開している。

一方で、4区東側に位置する「四戸の古墳群」として調査された地点では、4区寄りに5世紀中頃から6世紀初頭にかけての竪穴建物が計7棟検出されている。このことを考慮すると、離れた2地点からなる集落の可能性が考えられる。

7. 第Ⅶ期(6世紀前半)

検出された6世紀前半の集落を構成する竪穴建物は、1区1・11・19・20・22・23号竪穴建物、2区3・7・8・14・18・22・28・37・40・54・55・59・74・76・86・87・100号竪穴建物、3区2・4・21号竪穴建物、4区16・26・27号竪穴建物の計29棟からなる。前代に比べ、さらに急増していることが解る。竪穴建物の配置をみると、第541図下段に示したように、4区では前代とほぼ同じような位置に3棟が点在し、集落の主体は2区を中

心に1区東半から3区西半に展開する。また、2区14・18・22号竪穴建物のように、一竪穴建物内にカマドを複数もつ例からも、継続的に建物の改築を行っている様が見てとれる。

8. 第Ⅷ期(6世紀後半)

検出された6世紀後半の集落を構成する竪穴建物は、1区4・15・17・25・27号竪穴建物、2区4・5・10・25・32・36・41・45・53・81・82・92号竪穴建物、3区13・15・18・23号竪穴建物の計21棟からなる。竪穴建物の配置をみると、第541図下段に示したように、前代まで展開していた竪穴建物はなくなり、1区から3区西半までの間に集約された範囲に集落が展開しており、前代の急増した姿をほぼそのまま維持していた状況が窺える。

さらに、6世紀代としたものの詳細な時期区分ができなかった竪穴建物は、1区6・16・18・24・26号竪穴建物、2区11・17・73・83~85・101号竪穴建物の計12棟があり、分布図には記していない。6世紀前・後半を通じた6世紀代の竪穴建物総数は、6世紀前半の29棟と6世紀後半の21棟、さらに12棟を加えた計62棟を数える。この状況は、調査範囲外にまで広がるであろう集落の規模を想定すれば、かなり大規模に、継続的に営まれた集落であったことが窺えよう。

なお、4区東側に位置する「四戸の古墳群」として調査された地点では、6世紀後半以降の竪穴建物は検出されていない。

9. 第Ⅸ期(7世紀前半)

検出された7世紀前半の集落を構成する竪穴建物は、1区12・14・21・30号竪穴建物、2区2・9・12・68・71号竪穴建物、3区7・12号竪穴建物の計11棟からなり、前代に比べ減少した状況となる。竪穴建物の配置をみると、第541図下段に示したように、1区から3区西半までの間に集落が展開し、前代の集落範囲をほぼそのままに、竪穴建物が散在している状況となっている。

10. 第Ⅹ期(7世紀後半)

検出された7世紀後半の集落を構成する竪穴建物は、2区6・21・62・88・90・91・94号竪穴建物、3区14号

竪穴建物、4区5・23号竪穴建物の計10棟からなり、前代とほぼ同数である。竪穴建物の配置をみると、第542図上段に示したように、2区から3区西半までの範囲に散在的にみられ、規模がやや縮小した観がある。また、距離を置いた4区において、再度、竪穴建物が見られることも新たな状況である。

さらに、7世紀代としたものの詳細な時期区分ができなかった竪穴建物として、2区52号竪穴建物の計1棟がある。

11. 第XI期(8世紀前半)

検出された8世紀前半の集落を構成する竪穴建物は、1区9・10・28～30号竪穴建物、2区20・29・47・70・80号竪穴建物、4区13・28～30号竪穴建物の計15棟からなり、前代よりやや増加した状況である。竪穴建物の配置をみると、第542図上段に示したように、1区から2区までの範囲に散在的にみられ、前代よりやや西側に偏った風にもみられる。また、4区では範囲がやや広がる状況となる。

12. 第XII期(8世紀後半)

検出された8世紀後半の集落を構成する竪穴建物は、2区38・46・49・50・67・69・79・99号竪穴建物、4区6号竪穴建物の計9棟からなり、前代に比べやや減少した状況となる。竪穴建物の配置をみると、第542図上段に示したように、2区内に散在的にみられ、前代よりやや縮小した状況と言える。また、4区でも縮小した状況となる。

13. 第XIII期(9世紀前半)

検出された9世紀前半の集落を構成する竪穴建物は、竪穴建物の配置をみると、第542図下段に示したように、2区27号竪穴建物の1棟のみで、この時期に調査範囲内の集落は大きく減少した状況となっている。また、4区においても竪穴建物の検出はない。

14. 第XIV期(9世紀後半)

検出された9世紀後半の集落を構成する竪穴建物は、1区8・13号竪穴建物、2区15・26・33・34・42～44・48・51・61・66・72号竪穴建物の計14棟からなり、前代

よりかなり増加した状況となる。竪穴建物の配置をみると、第542図下段に示したように、1区から2区までの範囲に広がり、奈良三彩短頸壺を出土させた2区51号竪穴建物より東側には竪穴建物はなく、2区1～5号掘立柱建物が存在するだけである。

15. 第XV期(10世紀)

検出された10世紀代の集落を構成する竪穴建物は、2区に2棟と3区に3棟の計5棟あるが、この内の2区39号竪穴建物と3区16・17号竪穴建物は初頭から前半、2区19号竪穴建物は中頃、3区10号竪穴建物は後半期の竪穴建物である。竪穴建物の配置をみると、第542図下段に示したように、2区と3区に点在し、前代の集落範囲と比べると散在度が増している。また、竪穴建物数も激減し、3区10号竪穴建物以降の建物はなくなる。

なお、遺物の出土や重複がなく、時期不明とした1区2・3・5・32号竪穴建物、2区31・35・78号竪穴建物については、上記の時期別分布には含めていない。

以上、1～4区の調査範囲内における竪穴建物について、時期別の棟数とその分布をみてきた。その状況を要約すると、以下のごとくである。

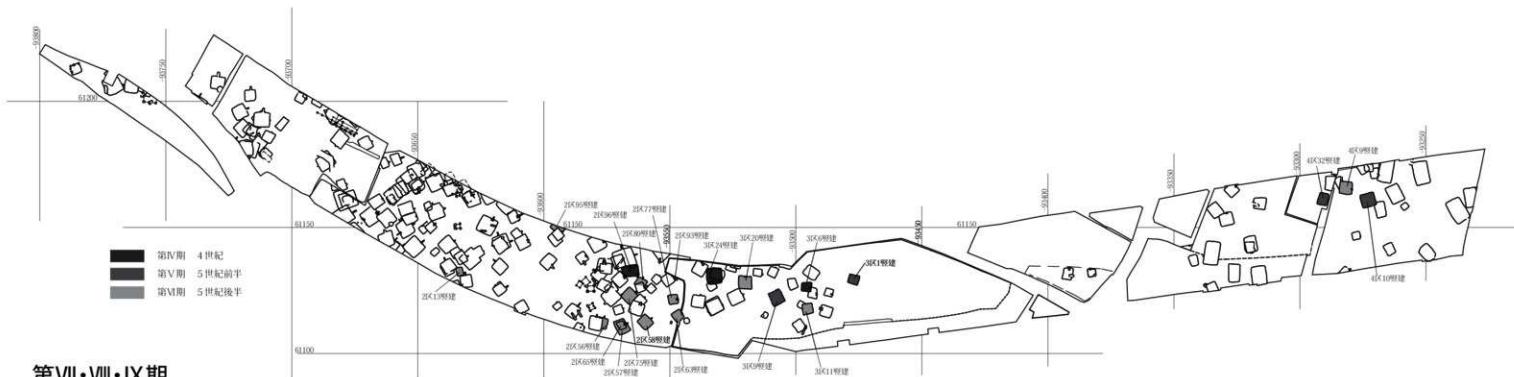
第1期とした縄文時代前期前葉期に段丘面西側へ初めて集落が形成され、その以後の第2期の弥生時代中期になると段丘面中央部へ、第3期の弥生時代後期には段丘面東側へ大規模な集落が形成されるようになる。

そして、古墳時代となる第4期(4世紀代)には集落規模は小さく、段丘面の西へと大きく移動し、第5期(5世紀前半)には同規模であるが段丘面の西側と東側へ分かれる。第6期(5世紀後半)になると竪穴建物が増加し、「四戸の古墳群」の調査状況からすると段丘面東側に集落の中心があった可能性が高い。さらに、第7期(6世紀前半)には竪穴建物が急増し、次代の第8期(6世紀後半)になると集落規模を維持しながら、その範囲は段丘面西側へと集約されていく状況がみえ、続く第9期(7世紀前半)では集落範囲をほぼそのままに竪穴建物が減少する状況がみえてくる。こうした状況は、「四戸の古墳群」の調査で6世紀後半以降の竪穴建物は検出されていないことを考慮すると、5世紀後半に集落規模の増大が始め



第540図 時期別遺構分布図(1)

第IV・V・VI期



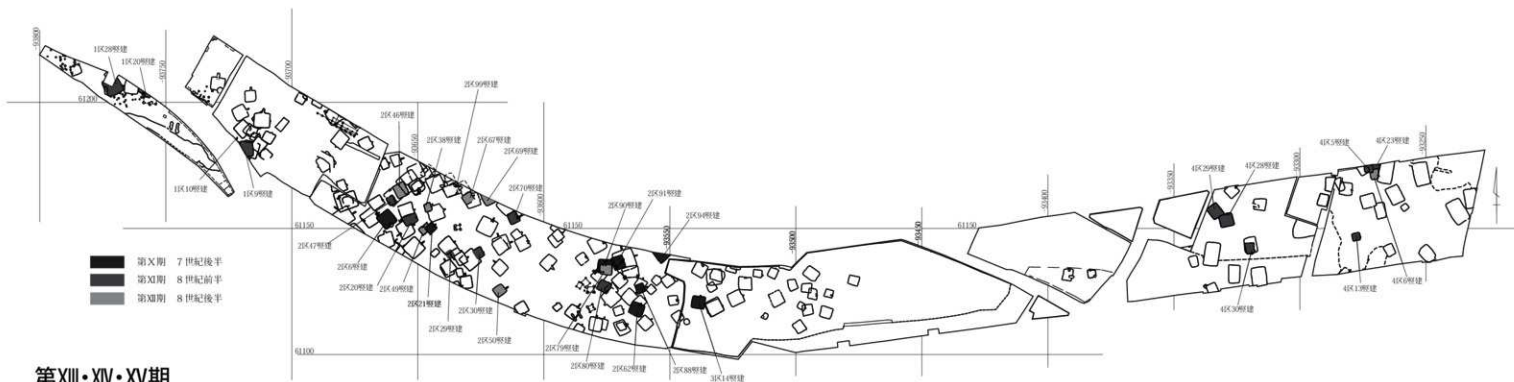
第VII・VIII・IX期



第541图 时期别遺構分布图(2)

0 1:1500 50m

第X·XI·XII期



第XIII·XIV·XV期



第542图 时期别遗构分布图(3)

0 1:1500 50m

り、6世紀代には集落規模のピークとなる中で集落範囲は段丘面西側へ移行し、7世紀前半には集落規模が縮小していくという経過をたどることができる。このことは、群馬大学によって調査された4基の古墳や、当事業団で調査した「四戸の古墳群」での3基の古墳からすれば、四戸遺跡のある段丘の東縁で、温川沿いに点在する四戸古墳群は、6世紀前半から7世紀にかけて造営された古墳群であることが知られており、今調査で明らかとなった古墳時代の集落は、まさに古墳群と直結した集落の変遷および遺構数の増加を示していると言える。

古代(律令期)となる第X期(7世紀後半)では、前代の段丘面西側での集落範囲をやや縮小しながらも、再度、東側へも竪穴建物が展開するという新たな状況となる。続く第XI期(8世紀前半)になると竪穴建物は増加し、段丘面東側でも拡散傾向となるが、第XII期(8世紀後半)になると集落全体が縮小し始め、次の第XIII期(9世紀前半)には竪穴建物が大きく減少している。ところが、第XV期(9世紀後半)になると再び竪穴建物が急増し、集落範囲は段丘面西側の一部に集中するようになり、竪穴建物と掘立柱建物の配置も限定的となっているように見える。そして、第XVI期(10世紀)では竪穴建物が激減し、10世紀後半の竪穴建物を最後に集落形成は途絶えることとなる。

ここに記した四戸遺跡における集落規模の増減や変遷は、あくまでも調査範囲内に検出した竪穴建物からみた状況であり、当然のことながら調査範囲外へもその範囲は拡大することは予測される。また、時期によって集落位置が移り変わっている様子からも、今後の周囲への調査事例を踏まえた再考が要とされる。

第2節 縄文時代の土器について

四戸遺跡で出土した縄文時代の土器には、少ないながらも早期から晩期までの土器がある。その中でも今調査で主体となった前期前葉の土器について、その特徴をまとめたい。

検出された縄文時代の竪穴建物は、前期前葉と中葉期の竪穴建物であり、少ないなりに出土土器から建物の時期は明らかである。その中において、2区102号竪穴建物から出土した第106図1は、二ツ木式土器とは異なる土器であった。この土器は、底部を欠くがほぼ完形となる土器で、欠損部の観察から底部は丸底様の尖底となる。緩い波状口縁の口唇部には刻みをもち、口縁以下に変形した結節状の回転縄文が施されている。胎土には繊維を少量含み、器厚は薄手で、焼成の良好な土器である。こうした器形は、従来から知られている関東地方に分布の主体を置く二ツ木式土器とは異なっており、二ツ木式土器には尖底となる器形は存在しない。二ツ木式土器に併行する周辺地域の土器型式の中で尖底を主体とするのは、長野県を分布の主体とする中越式土器、それと新潟県を中心とした日本海沿岸に多い布目式土器である。中越式土器の特徴としては、胎土が無繊維で器厚が薄く、内面に指頭圧痕をもつことであり、そうした特徴は第106図1にはない。施文される文様からしても、中越式土器とは明らかに異なる。では、布目式土器とはどうであろうか、以下に記述する。

1. 布目式土器の特徴と分布

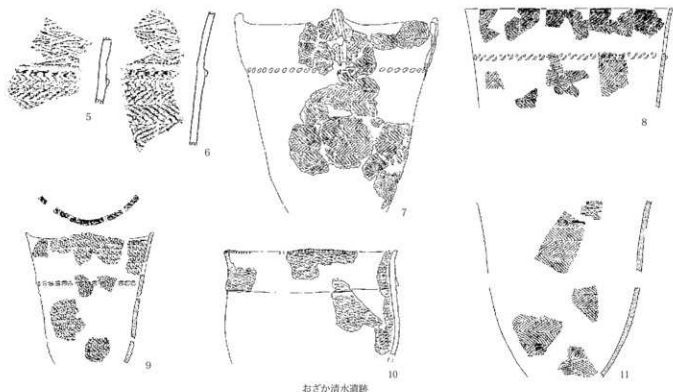
布目式土器は、新潟県新潟市巻町所在の布目遺跡出土土器を標識に型式設定された土器群で、以前より東北地方との関連性を指摘されつつ、新潟県の新潟市周辺に分布することが知られていた。その一方で、2013年に刊行された富山県上津久呂中屋遺跡の報告により、布目式土器が富山県内にまで分布域が拡大していることが知られ、2014年に刊行された新潟県大武遺跡の報告により、布目式土器の内容がより明らかとなった。

〈布目式土器の特徴〉

布目式土器の特徴としては、器形は口縁が波状(緩い波状が多い)ないし平口縁をなす砲弾形の丸底様の尖底



下モ原Ⅲ遺跡



おさか清水遺跡

第543図 新潟県内陸部での布目式土器

を呈し、平底も僅かにある。胎土は繊維を僅かに含み、器厚は薄いことが挙げられる。施文される文様は、口縁以下に施す縄文が主体で、刺突文を併せ施文する。口唇部に爪状の刺突やハ字状となる爪形刺突を施し、口縁部下に口縁部と胴部を区画する刻みをもつ低い隆帯や横位ハ字状刺突で摘まみ上げた低い隆帯が巡る。施文される縄文には羽状縄文が多く、結束および非結束の羽状縄文、結節回転、斜行縄文、閉端環付縄文、網目状摺系文、付加条縄等があり、幅狭に施文される。

大武遺跡では、多くの布目式土器と共に、口縁部文様に摺系側面圧痕と円形刺突からなる主文様を施した二ツ木式土器が出土しており、両型式が併行関係にあることを示している。

〈布目式土器の分布〉

布目式土器の分布は、アチヤ平遺跡や二軒茶屋遺跡によって新潟県北部への分布が知られ、上津久呂中屋遺跡でその分布範囲が富山県にまで大きく広がることが周知されることとなった。また、布目式土器の特徴的な縄文である網目状摺系文に着目した齊藤準は、「布目式期の土器に施文する縄文について」(齊藤2016)の論考の中で、網目状摺系文の原体は布目式土器と二ツ木式土器とは異なるとし、布目式および類似の網目状摺系文の分布として東北方面では秋田県大仙市小出Ⅰ・Ⅱ遺跡および宮城県角田市土浮遺跡、名取市宇賀崎貝塚、七ヶ浜町左道遺跡、富山県では氷見市上津久呂中屋遺跡、射水市南太閤山Ⅰ遺跡、さらに長野県茅野市駒形遺跡を挙げている。



上原1遺跡(群理事業団調査)



居家以岩陰遺跡



榎木Ⅱ遺跡

第544図 群馬県内での布目式土器

一方、新潟県内陸部では、信濃川上流域に位置する津南町下モ原Ⅲ遺跡や十日町市おさか清水遺跡にみることで、群馬・長野県境に近い一帯での状況が明らかとなってきた。第543図1～4に示したように、下モ原Ⅲ遺跡出土資料は、口縁下に口縁部と胴部を区画する刻みをもつ低い隆帯が巡るという布目式特有の土器である。第543図5～11のおさか清水遺跡出土資料には、5・6・11の二ツ木式土器と、9は二ツ木式をベースとした布目式の特徴である横位ハ字状突起で摘まみ上げ風の低い隆帯を合わせもつ土器、8・10の布目式土器、それと7の波頂下に垂下隆帯をもつ中越式土器の特徴と布目式の特徴を合わせもつ土器がある。まさに、土器分布圏の周縁部にみる土器文様の接触した、或いは変容した局地的な土器を生み出している。言い換えれば、同時期に共存した土器型式であることを示している資料である。

では、群馬県内での布目式土器の出土はどのようにしているのだろうか。

2. 群馬県内における布目式土器

群馬県内での布目式土器の出土例は僅かであるが、谷藤の「群馬県内における縄文時代前期の異型式土器」(谷藤2019)で知ることができる。

第544図1・2は長野原町上原1遺跡(当事業団調査分)からの出土資料で、共に微量の繊維を含み、器厚が

薄く、口縁下に口縁部と胴部を区画する低い隆帯が巡る。第544図3・4は同町居家以岩陰遺跡からの出土資料で、共に口縁以下に幅狭な結束羽状縄文を施している。第544図5～9は同町榎木Ⅱ遺跡からの出土資料で、5・6は口縁下に口縁部と胴部を区画する刻みをもつ低い隆帯が巡り、7は器厚の薄い刺突列をもつ木鳥式かと思われる土器、さらに8・9は器厚が薄く、表裏面に指頭圧痕を顕著に残す木鳥式ないしX式土器である。

本遺跡2区102号竪穴建物出土の第106図1の土器は、器形および器厚・胎土から、群馬県内に普遍的に出土する二ツ木式土器とは異なり、先述してきた布目式土器の特徴を色濃く持ち合わせており、むしろ布目式土器として扱うべき資料と判断される。

以上、群馬県内での布目式土器の出土例は、本遺跡を含めた4遺跡で確認でき、分布域の拡大も明らかとなった。群馬県全域で見れば、以前より多くの二ツ木式期の遺跡があることは知られているところであるが、中でも4遺跡は長野・新潟県境寄りの北西部にあり、他の遺跡での布目式土器の出土はない。つまり、地域的に偏っている状況と言えよう。また、出土した土器は、一見すると二ツ木式土器とされがちな土器であり、今後、注意を要する土器である。

第3節 四戸遺跡出土の

弥生土器について

(1) 中期後半の弥生土器

後期を主体とする本遺跡の中で、4区19号竪穴建物(以下竪穴建物を竪建と記す)は唯一中期後半に属する。掲載図示した土器(第479図)はわずか3点だが、簡単にまとめておく。

図示した3点のうち1は甕、2と3は壺である。1の甕は体部中位の破片で、おそらく頸部から膨らみを持たずに体部下半へと続く器形と思われる。文様は全体に縦位の柳描羽状文を施す。羽状文の間隔は密で、縦軸線もほぼそろっている。器形と文様の特徴から、群馬県内の栗林式のなかでは中段階、栗林式編年(石川2012)の2式まで遡るものと思われる。3の壺は、口縁端部が小さく外折し頸部はややくびれた筒形の形状で、口唇部と頸部地文に縄文、頸部に横線と沈線山形文を多段にめぐらせたものである。頸部以下の文様構成が不明ながら、栗林2式の範疇と考えたい。2は壺胴部片で、連弧状の沈線区画内に縄文を充填した文様をめぐらせる。胴部文様が単帯か重帯かは不明である。

以上の特徴から、3点とも中期後半の栗林2式のなかで位置づけられる。本遺跡の存在する吾妻川上流域では、中期後半の資料が稀薄で比較検討ができる状況ではないが、当該期の壺棺が検出された長野原町の立馬1遺跡(財群理文2006)に比べれば、时期的に遡るのは間違いない。

(2) 後期の弥生土器

本遺跡の後期弥生土器は、全て樽式の範疇で理解できる。

ここではさらに後期の中で、編年上の位置づけ、地域色の問題、他型式との関係性について述べる。

器種組成と類型

第545図に本遺跡で見られた器種を網羅し、あわせて同一器種内の類型を掲げた。

壺—器形の違いから、4類型がみられる。第545図-1は、直線的な肩部で胴下半に稜を持ち、柳描T字文を

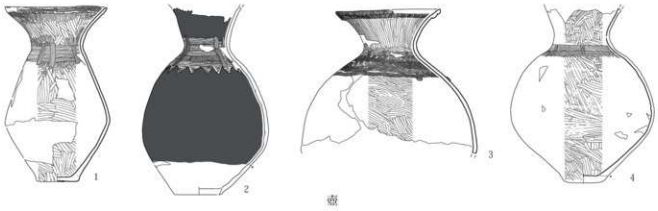
めぐらせた例である。第545図-2は、丸みを帯びた肩以下膨れの器形で、柳描T字文と鋸歯文、胴下半まで赤彩を施す例。第545図-3と4は、ともに球形胴部を持つが、前者は丸みが強く肩に柳描羽状文、後者は肩が張り柳描糜状文と波状文を施す。4例とも樽式壺であるが、第545図-1・2は箱清水式との近似性が高い。第545図-3は富岡型壺(大木1997)と呼ばれるものだが、折返し口縁に北毛地域での在地化が看取される。以上4種のほかに、同様の器形で無文赤彩品がみられる。

甕—頸部が曲線的に屈曲し、体部上が張る器形でほぼ共通し、文様で類型化される。第545図-5・6・9は、頸部糜状文と肩部位にまで柳描波状文を重畳するもので、第545図-5は折返し口縁、同図-6はつまみ上げ口縁、同図-9は口唇上端に平坦を持つ。第545図-7は口頸部に柳描波状文のみ施文する。第545図-8は体部中位付近まで柳描波状文を重畳する類で、口唇部の内傾するナデ面も整形上の特徴である。第545図-13・14は小型甕で、前者は頸部糜状文と肩位までの柳描波状文、後者は口頸部に柳描波状文のみを重畳する。第545図-10は無文で口頸部に丁寧な縦位ハケメを施す。このハケメは柳描文施文前の器面調整に当たるもので、製作当初は施文意図があったと考えられる。第545図-11は口頸部に等間隔止め糜状文を重畳する例で、他に類例をみない。樽式において、柳描波状文を重畳・充填するのが通例だが、本例は糜状文による装飾的効果を創出した特異な例にあたる。第545図-12は口頸部に輪積痕装飾を施した例で、頸部には柳描糜状文がみられる。この装飾は、吉ヶ谷式など南関東の土器型式の強い影響で成立した類型である。

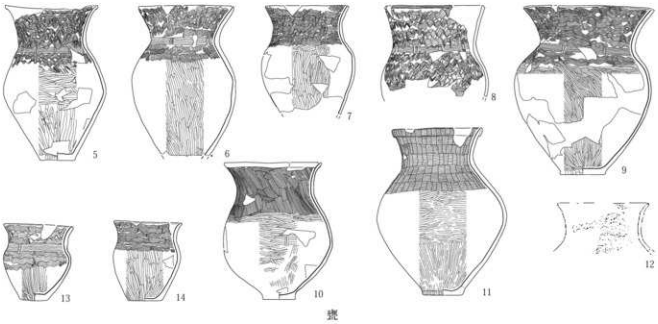
第545図-5・6・7・9・14は、口頸部に文様を集中させる「沼田型」甕(大木2019)、第545図-8・13は体部中位まで施文する文様構成の「高崎型」甕である(註1)。

台付甕—口縁が外反し、体部が上下に潰れた楕円球形の樽式特有の器形で、中型品(第545図-15・16)と小型品(第545図-17)がみられる。文様構成から、柳描波状文のみ(第545図-15)、頸部糜状文と柳描波状文(第545図-16)に分けられ、更なる加飾要素として円形貼付け文がみられる。第545図-17は小型品である。なお、小型品には台付鉢ともいえる短口緑球胴器形(4区11号竪建5)も含まれる。

高杯—有稜外反口縁(第545図-18・19)と単純内筒杯部



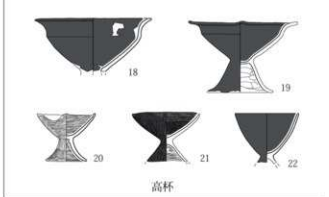
壺



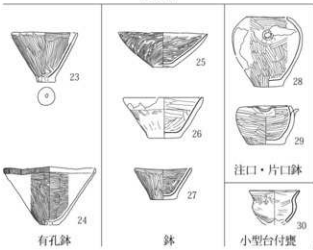
甕



台付甕



高杯



有孔鉢

鉢

小型台付甕



短頸壺

小甕

蓋

第545図 後期弥生土器の器種組成 S=1/8

(第545図-20~22)で構成される。前者は箱清水式で「高杯C」と分類されるものにあたる。第545図-22は深い杯部の形状をもち、樽式では稀少例にあたる。本遺跡での高杯は、器形を問わず赤彩率の高いのが特徴である。

有孔鉢一逆円錐形で、底部中央に円孔を穿つ。口縁形状で単口縁(第545図-23)と折返し口縁(第545図-24)に二分される。有孔鉢における折返し口縁は、必ずしも珍しくないが、4区24号竪建-25は口縁外面に柳描波状文を加飾した例で、樽式ではあまり見られない。

鉢一逆截頭円錐形で、器高の浅いものと深いもの(第545図-25、26)の違いがあるが相対的である。大ききで口径13~14cmの中型品(第545図-25・26)と10cm以下の小型品(第545図-27)がみられる。赤彩量が少なく、高杯と対照的である。

注口・片口鉢一裏体部形状に円筒状の注口か三角形に突出した片口を付ける。形態上の類別をするには出土数が少ない。内外面とも丁寧にみかいており、内面に白色物質の付着がみられる。

小型台付鉢一台式の形状で、口径10cmを超えない小型品である。第545図-30は全形不明だが、円錐形の脚が付くと思われる。台付甕のような煮沸具というより、高杯・鉢に類する機能を想定したい。

短頸壺一頸部の短い甕形に赤彩を施す。煮沸痕や二次的被熱痕は認められず、他遺跡例では蓋繫縛孔もみられることから「貯蔵用」器と考えるべきである。4区24号竪建-2(第545図-31)は頸部に麁状文をめぐらす施文例である。

小甕一甕の器形で口径10cmの小型品である。丁寧なナデ整形で実用品と思われるが、煮沸痕はない。

蓋一浅い円錐形の天井部に、小鉢形の擴みを付ける形状で、蒸気孔のあるもの(第545図-33)とないもの(4区12号竪建-8)がある。

器種組成は壺・甕・台付甕・高杯・鉢・有孔鉢・注口か片口鉢・短頸壺・小型台付鉢・小甕・蓋で構成されており、樽式の基本組成といえる。また、ミニチュアではなく、実用品と考えられる小型の高杯・鉢・小型台付鉢がみられるのは、弥生後期でも新しい段階に属するためであろう。

器種ごとの類別から、本遺跡出土土器の特徴を掲げて

みたい。

壺では、頸~肩部へのT字文の採用があげられる。いずれも柳描直線文を垂下する「T字文C」で、箱清水式におけるT字文を変容少なく採用している。榛名山東~南麓地域の樽式壺では、柳描波状文帯に柳描直線文を垂下する変容T字文か、頸部麁状文の代替として幅の狭いT字文をめぐらすのが主流である。この点で、箱清水式のT字文オリジナルに近い類型といえる。4区4号竪建-1では、頸部T字文に、肩部への柳描波状文と円形貼付文を組み合わせた文様構成がみられ、樽式との融合を示す。このT字文を施文する類型は、なで肩から下半で弱い種をもって膨らみ、急激にすぼまるといった体部器形で共通する。これも箱清水式の強い影響下で成立したためと考える。一方、球形体部に柳描羽状文を施文する富岡型壺(第545図-3)は、樽式2期段階に群馬県南西部の富岡~安中地域で誕生したと考えられる(注1、小山2015)。これが3期の新しい段階以降に群馬県内各地に波及し定着する。4区21号竪建-1は、彎曲した羽状文を描いた変容形で、4区24号竪建-4、4区遺構外-1はオリジナルに近い羽状文である。第545図-4は樽式に最も多い類型であるが、肩部の柳描波状文帯が1帯しかめぐらしていない点で、地域性がみられる。

肩部文様の加飾要素としての鋸歯文(第545図-2)は、樽1~2期に榛名山東南麓地域で多用される。本遺跡の存する吾妻川流域や利根・沼田地域では樽3期段階で消滅していく文様であるが、その最後の姿といえる例だろう。

甕は主に文様構成で類型化を図り、「沼田型」甕(第545図-5~7・9・14)が主体となることが確認された。一方、「高崎型」甕とした第545図-8・13は、肩が強く張る器形や、口縁に内傾する平坦面を残す手法に北信地方の箱清水式との類似性がうかがえる。弥生後期後半における北信地方の箱清水式甕と樽式「高崎型」甕は、いずれも体部中位まで柳描波状文を重畳施文するのが通例であり、両者の判別は器形の特徴と施文範囲の広狭によるしかない。第545図に掲げた甕のうち、器形・文様構成ともに榛名山東南麓の典型的な「高崎型」甕といえるのは少数(4区8号竪建-1、4区17号竪建-2、4区24号竪建-8~11など)である。従って、本遺跡での甕の主体は「沼田型」の文様構成か、箱清水式的な器形をもつもので

構成されるといってよい。第545図-10・11は樽式甕のなかでも異色の存在である。一類型として定着せず、突然変異的に製作されたと考えられる。ただし、両者とも施文範囲からみて沼田型甕と捉えてよく、異系統の影響を考える必要はない。むしろ、口縁に輪積痕装飾を残す第545図-12が、異系統土器の強い影響で誕生した類型である。類別説明の項で述べたように、埼玉県中・西部の古ヶ谷式かこれを介した南関東系土器の影響と考えられ、樽式分布圏内でも南～西地域で多く見られる。これまで、本遺跡を含む吾妻川流域では発見例がほとんど見られなかったが、同じ沼田型甕の分布する利根・沼田地域では後期末～古墳時代前期に波及することが判明している。その伝播が当地域まで及んだものと考えておく。なお、本遺跡の位置が、鳥川流域を介して榛名山東南麓地域と結ばれることから、この方面からの波及も可能性としては残されている。

台付甕は、樽式特有の器形が主体となる。ただし、図示資料の体部以下を欠損する小型甕の中で、やや長胴の台付甕となる例も想定しておきたい。

高杯では、樽式に一般的な有縁外反口縁と椀形杯部の2種が主体となるほか、深い鉢型杯部の第545図-22が注目される。これは北信地方の箱清水式に見られる類型と考えてよいだろう。

樽式土器の地域色

群馬県の後期弥生土器を代表する樽式土器には、主に文様の特徴からいくつかの地域色にわけられることが指摘される。現時点で、四戸遺跡の存する吾妻川流域は、利根・沼田地域と一括され、その表徴として「沼田型」甕がある。壺では特定の地域型式として指定できないが、変容の少ないT字文を多用するとの地域性が指摘できる。また、統計処理を行っていないが、壺と高杯における赤彩率の高さも目立つ。

壺と甕に見られる折返し口縁の出現頻度の偏在性は、樽式に見られる地域性の一要素である。本遺跡地より吾妻川を24kmほど下った榛名山東麓の渋川地域では、壺の過半数が折返し口縁で、刻みや複数段など加飾度の高いことが特色である。本遺跡出土土器を見る限り、加飾度の少ない単調な折返し口縁で、甕では単口縁が主体である。この点で、利根・沼田地域と共通する地域性を指摘

することができよう(註1に同じ)。利根川の上流部に当たる利根・沼田地域では、沼田台地を中心とした遺跡分布でまとまりをみせるが、吾妻川流域では河川に沿った線的な遺跡分布になるため、弥生土器の地域性も河川の上下流域で相違する可能性がある。ただし、報告例の少ない現状で、このことについて検討するのは時期尚早と考える。ほぼ確実に言えるのは、本遺跡の存する地域が吾妻川流域における樽式土器分布圏の北西端に位置していることで、これより西方の吾妻渓谷や上信境の山間にはわずかな出土品が知られる小規模遺跡が点在するだけである。樽式分布圏と北信地方の箱清水式分布圏の交流関係を想定するうえで、四戸遺跡近辺は吾妻川流域における玄関口の役割を帯びていたと考えるのは無理ではあるまい。壺や高杯に北信地方の箱清水式の影響が濃厚なのは、この地理的関係性から当然のことともいえる。

時期的位置づけ

樽式土器は編年上で後期全般に位置づけられ、さらにこれを3ないし4細分する考え方がある。樽式を1～3期に分ける3細分案(飯島・若狭1988)が大方の支持を得ているが、課題がないわけではない。その一つは、榛名山東南麓の樽式土器を基準としたため、これと異なる地域類型の照合に齟齬が生じることである。これについては、地域を限定した編年案を指し、これらを統合化することで実態に即した基準編年を組むことが可能になる。課題のもう一つは、後期後半にあたる樽3期について、実時間の長さに応じた時期細分が進んでいないことである。群馬県南西部の富岡市にある南蛇井増光寺遺跡や中高瀬観音山遺跡では、樽3期の竪穴住居土器が複数で重複する例が知られており、数世代に及ぶ時間幅が予想される。この課題については、型式学的検討から古新2段階に細分できる見通しはあるが、各遺跡での土器様相と先後関係の検討を通じて細分指標を確認することが望ましい。なお、樽式を4細分する考え方(三宅・相京1982)は、概ね古墳時代に入る段階の播磨土器群を4期としたもので、それ以前の1～3期区分についてはほぼ一致しているといえる。

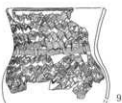
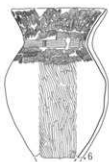
本遺跡出土土器の編年上の位置づけとしては、樽3期の範疇に含まれるが、問題は其中でどの程度の時間幅が見込めるかであろう。

第6章 調査の成果（総括）



1 段階

1~4 22型建



2 段階

5・12-1型建 6・11-12型建 7-8型建 8~10-13-2型建



3 段階

4~16-18-21型建 17-4型建
19-17型建 20-21-23-24-24型建
22-18型建



4 段階

25~27-29-31型建
28-30-25型建

第546図 後期弥生土器の時代区分 S=1/10

本遺跡出土の後期弥生土器について、時期分類したうえで代表器種を示したのが第546図である。最古から最新段階までを4段階に区分してある。新旧の時期判別は、主に甕と壺の器形と文様の対比で措定した。以下、段階ごとの詳細について述べる。

1段階—4区22号竪建に該当資料がみられる。甕は、直線的に伸びた口縁と緩い曲線でくびれる頸部をもつ。体部は丸みを持つ算盤玉形である。第546図-1は口縁～体部に櫛描波状文を重畳する「高崎型」甕で、頸部櫛状文が間隔の狭い2連止めであることから、他の甕と比べて最古段階に位置づけられる。壺は、甕と同形態の口縁部で、頸部は弱い曲線でくびれる。第546図-4では頸部に1条垂下の櫛描T字文をめぐらしている。

2段階—4区2号竪建にまとまった資料が揃う。甕・壺とも口縁の外傾が強まり第546図-5のように外反気味になるものもみられる。また体部上位が丸みを持つため、頸部のくびれが強い彎曲に変わる。甕の頸部櫛状文は、2連止めのほかに3連止め(第546図-6)や横線文(第546図-7)も現れる。壺では、2条一組の垂下によるT地文となる。高杯は、有稜外反口縁のほかに逆円錐形の杯部をもつものが併存する。台付甕は、上方に立ち上がる口縁に算盤玉形の体部で、頸部に2連止め櫛状文をめぐらす(第546図-13)以外に、櫛描波状文のみ施文するものがある。

3段階—4区21・24号竪建に好資料がみられる。甕では、口縁全体が外反し、北信地方に多い頸部のくびれが明瞭で肩の張る倒卵形体部が多くなる。頸部の櫛状文は2～多連止めで、一様に止めの間隔が広い。第546図-19は典型的な「高崎型」甕で、強い彎曲の頸部に球形化した体部をもつ。壺は大きく外反する口縁に、球形化した体部となる。第546図-16と同様の櫛描羽状文を施す富岡型壺は、この段階で見られる。第546図-17は丸みの少ない体部形状だが、頸部屈曲が強い「く」字状であることから、2段階より新しいと判断した。なお、4区24号竪建出土遺物は、壺・甕共に中位で屈折気味に外反する口縁形状や体部の球形化がより進んでいることから、他より新しいといえる。高杯は脚部が低く裾が外反する特徴を持つ。深鉢形の杯部を持つ高杯(第546図-23)や台付甕(第546図-24)でも体部の球形化が進むのが共通する特徴といえる。

4段階—4区31号竪建にまとまった資料がある。甕の口縁は短小化して中位で折れるように外反する。体部の全形は知り得ないが、球形と思われる。台付甕(第546図-30)は前段階よりさらに球形化が進み全体が楕円球形を呈する。高杯の全形は不明だが、低く外反する円錐形脚部(第546図7-29)が付く。

以上の段階区分は、甕・壺といった主要器種の線形的変化と認められ、型式学的断絶は見られない。このことから、1～4段階の土器の変化は時間的連続性を示すとみなすことができる。

さて、以上に掲げた4段階区分について、従来の樽式編年観(若狭1996)と照合するならば、以下のようになる。

1・2・3段階—樽3期、4段階—古墳1期

この対応関係から、本遺跡においては樽3期を3時期細分することが可能である。また、4段階は、指標の一要素と考える外来系古式土器器種の組成参画は見られないが、群馬県平野部では、同じ特徴を持つ土器群に小型器台や東海西部系、北陸系等の外来型式が伴うことが判明している。本稿で試みた時期細分について、他遺跡でも同様に実践され、相互の検証や地域内での編年再構成ができるならば、樽式土器編年細分にむけての有意な一歩となるだろう。

ところで、本遺跡出土土器の類別にあたり、壺・甕・高杯といった主要器種に、北信地方の箱清水式の影響が看取された。従来はT字文のような文様要素が目立っていたが、器形についても留意すべきことが分かってきている。例えば、第545図-1の壺器形は、太頸で直線的なで肩と稜で屈曲する体部が特徴で、箱清水式特有のものである。内側に小さく折れる口縁は樽式にもみられるが、中野・飯山地方でも同様の形態が存在する。甕についても、頸部の屈曲点が明瞭で体部上半が強く張る器形(第546図-14など)は北信地方に多く、東信の佐久地方などでは見られないという(小山2015)。本遺跡での土器の様相をみると、樽式独自の類型と、北信地方の箱清水式の影響を受けた類型、および双方が合体した中間的な類型が混在している。このことは、樽式土器と北信箱清水式の関係性を解き明かす絶好の資料であることを意味する。本稿ではそれを検討する余力を持たないが、まずは前提作業ともいえる両者の時間的併行関係について

て、先に掲げた時期細分案に従い長野盆地南部の箱清水式編年(青木1999)との対応関係を示しておく。

(四戸)1段階—(長野)4段階

(四戸)2段階—(長野)5段階

(四戸)3段階—(長野)6段階

なお、4段階については対比資料が不十分なので掲げないが、御屋敷遺跡出土資料に相当すると考えている。

四戸遺跡の周辺で、後期弥生集落として報告された遺跡に唐堀B遺跡(東吾妻町)がある。ここでは竪穴建物が4棟検出され、短期間営まれた小規模集落と考えられる。この唐堀B遺跡の出土土器を第547図に掲げた。ここで本遺跡出土土器との対比を試みることにする。

第547図-1～3は2号竪建、同図4～8は5号竪建出土土器である。5号竪建出土の甕のうち、第547図-4は樽式の典型的な器形で、文様構成から沼田型甕にあたる。同図-6～8は弓状彎曲の口頸部に肩の張る体部から、北信地方の箱清水式の影響が強いと判断される。同図-5は口径の小さいすばまった形態で、他に類例を見ない。第547図-4は樽3期の最も新しい段階に位置づけられ、他の共伴土器も本遺跡時期区分の3段階に含めてよいと思う。2号竪建出土土器は、短く外反する口縁に球形化した体部から、やはり3段階で捉えておきたい。口縁が短いことから5号竪建→2号竪建の新旧関係は考えてもよい。第547図-5にみる器形は、四戸遺跡の細口の甕(第546図-18)に口縁形状だけは近似する。ただし、中位以下が膨らむ体部形状は同時期の箱清水式にも見られない。当面は、遺跡単位の個性と捉えておく。

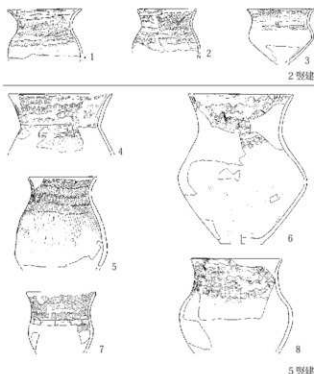
本稿で検討した編年細分の1～4段階について、暦年代を比定する用意はないが、本遺跡の竪穴建物出土炭化材の放射性炭素年代を測定しているので、参考にしていただきたい。ちなみに、年代測定試料の検出された竪穴建物の時期区分は以下のとおりである。

4区12号竪建—2段階

4区18・24号竪建—3段階

年代測定結果では、1900±20yrBP～1870±20yrBPの間にあり、古木効果から実際はこれより新しくなる可能性が指摘されている。土器の編年観による後期後半～古墳時代初頭と対応させると、測定年代はやや古い値になっているようだ。

外来系土器について



第547図 唐堀B遺跡出土土器(1/8)

最後に、伴出した外来系土器について触れておきたい。ここで「外来系」とするのは極めて密接な関係性を持つ箱清水式は含まない。まず取り上げるのは4区7号竪建出土の北陸系高杯(第466図-9)である。脚部下方位は不明だが、浅い皿形の杯部の口縁下に凸帯をめぐらし、中実の脚柱部を持つ形状を呈する。北陸での弥生後期における同類の高杯は、外反する有段の杯部で、さらに脚部下方位も有段で開く形状であることから、本例は形態だけの模倣品なのは間違いない。柱状の脚部はともかく、杯部は樽式と同じ浅い椀形で、外面の凸帯によって段状に見せかけただけに過ぎない。オリジナルに近い高杯は本村東沖遺跡(長野市)100号竪建から出土しているので、北信地方を介した土器情報によるものと考えてよからう。この高杯類型は、樽式の中で定着することはなかったが、脚柱部や外面に凸帯をめぐらす模倣類品の出土例がいくつか知られる。いずれも、後期後半に属し、現状では利根・沼田～吾妻川流域に分布する。いずれ、これについての集成を試みるつもりだが、従来注目されてきた古墳時代

初頭期の北陸系器種とは異なり、弥生後期に遡るものとして留意しておきたい。

「外来系」とするもう一例は、口縁に輪積痕装飾を残す甕(第545図-12)である。これは前述したように、吉ヶ谷式あるいはこれを介した南関東系土器の影響と考えている。吉ヶ谷式では、口縁～体部に粗い斜縄文を施文するのが特徴で、しばしば口頭部に粘土紐輪積痕を残す。本遺跡例と同類は、群馬県南西部の鍋川流域において比較的早く出現しており、そこでは吉ヶ谷式を伴うことが多い。この点を評価するならば、吉ヶ谷式の影響で在地の樽式に輪積痕を装飾要素として採用したと考えておくのが順当だろうと思う。鍋川の上流域に位置する富岡地域では、樽式の地域類型として口縁部を無文とする富岡型甕が普及していた。ここで取り上げた類型も、口縁に輪積痕を残しながらも、それ以上の加飾は行わない。いまだ十分な論証はしていないが、この富岡型甕と吉ヶ谷式の輪積痕装飾の融合が契機になったと考えるのに無理はないと考える。このように想定した場合、本類型の甕は群馬県南西部の鍋川流域からはるばる吾妻川中流域まで持ち運ばれてきたのだろうか。それとも、中間地域で樽式甕の一類型として定着しつつ、次第に群馬県北西部まで伝わったものなのか。この課題については、群馬県内各地域での出現時期や定着の様相、そこから見えてくるであろう波及過程等について正しく認識することから始めたい。とりえず本稿では、樽式分布圏の北西端ともいべき場所にまで到達している事実から提起される課題を指摘するにとどめておく。

註1 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要」38(2020)に詳細論文を掲載予定。

青木一男1999「長野盆地南部の後期土器編年(発表メモ)」『長野県の弥生土器編年発表要旨』長野県考古学会弥生部会 p.76-85

飯島克己・若狭徹1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9 p.28-51

石川日出志2012「栗林式土器編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市歴史遺跡』p.182-191長野県埋蔵文化財センター

大木紳一郎2019「群馬県北部吾妻川流域の後期弥生遺跡について」『研究紀要』37 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.33-52

小山兵夫2015「長野県各地の後期弥生土器と隣接地域間交流」『ゆくものくもの北関東の後期弥生文化—かみつけの里博物館— p.39-48

三宅敦久・相沢建史1982「樽式土器の分類」『第三回三県弥生時代シンポジウム、弥生終末期の土器—四世紀の土器—群馬県資料』p.9-23

若狭徹1996「編年編 各地の編年 群馬県地域」『YAY!』p.223-234

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2006「立馬1遺跡」

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017「唐屋B遺跡」

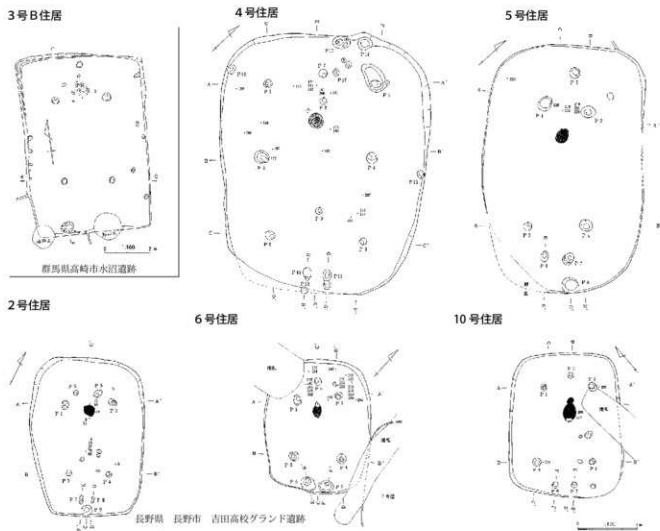
第4節 弥生時代の家屋構造

四戸遺跡で検出された弥生時代後期の竪穴建物計17棟の内、家屋構造を知る良好な事例となる竪穴建物が見つかっている。一つは、通常の4本の主柱穴ではなく、4本+1本の5本の主柱穴をもつ竪穴建物。所謂、屋内棟持柱をもつ竪穴建物である。もう一つは、壁際および壁面に確認された壁際ピットをもつ竪穴建物である。このような主柱穴や壁際ピットをもつ竪穴建物は、群馬県内でも少なく、地域的な様相の可能性も高い。ここでは、このような類例の竪穴建物について周辺地域と比較し、さらにその構造について考えてみたい。

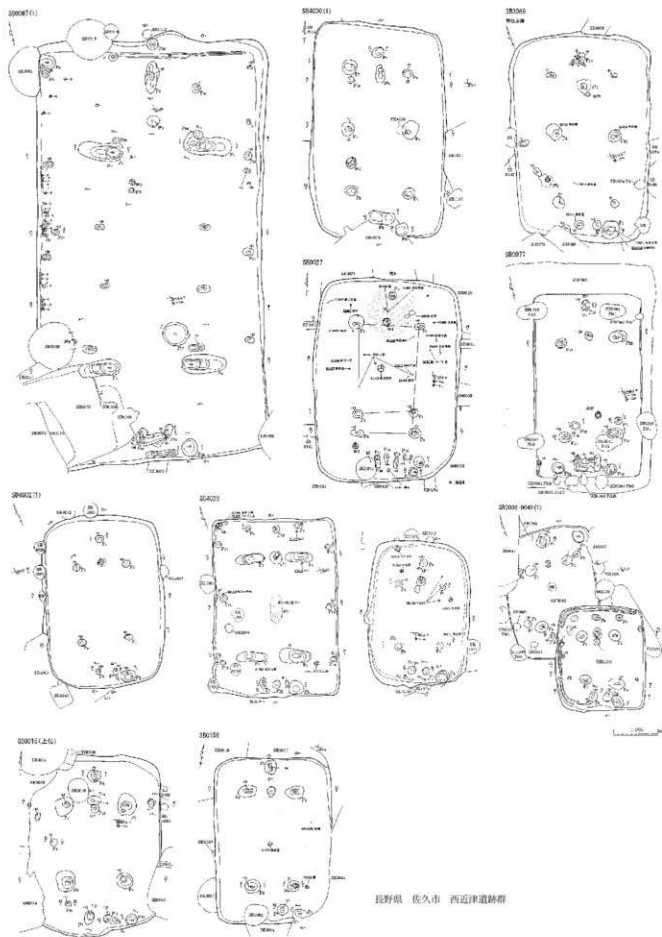
1. 屋内棟持柱をもつ竪穴建物について

四戸遺跡で検出された屋内棟持柱をもつ竪穴建物には、4区1A・B号竪穴建物、4区2号竪穴建物、4区3A号竪穴建物、4区7号竪穴建物、4区18号竪穴建物、4区21号竪穴建物、4区24A号竪穴建物といった拡張の新旧を含む計8棟がある。これらの竪穴建物の主柱穴は、P1～4の4本の主柱穴と、中軸上の北壁付近にあるP5とした棟持柱から構成され、図形的には細長い五角形状を呈するのが特徴である。他に、4区24A号竪穴建物のような長方形に組まれる6本の主柱穴、中軸上の北壁寄りに位置する棟持柱、そして南壁際中央の入り口脇に配置された2本の補強柱をもつ例もある。竪穴建物の規模からすると、大型建物ないし中型建物にみられる。

群馬県内での同様な屋内棟持柱をもつ竪穴建物は、高崎市(旧倉湖村)水沼遺跡で検出された3号B住居の1棟のみである(第548図)。



第548図 屋内棟持柱をもつ竪穴建物(1)



長野県 佐久市 西近津遺跡群

第549図 屋内棟持柱をもつ竪穴建物(2)

一方、隣接する長野県側では、長野市吉田高校グラウンド遺跡での5・6・10号住居が、棟持柱をもつ5本の柱穴からなる。4号住居では、6本の主柱穴と中軸上の棟持柱の例である。さらに、2号住居では、4本の主柱穴の上方向に柱間の狭い1対の柱穴が設けられている例もある(第548図)。

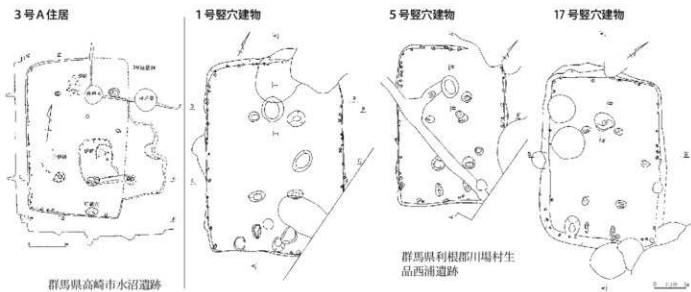
佐久市西近津遺跡群では後期の大規模集落が調査され、長軸の長さが18.1mと13.6mを測る超大型住居を最大とし、8～11mの大型住居、5～8mの中型住居、5m以下の小型住居からなる110棟もの竪穴住居が検出されている。この内、屋内棟持柱の柱穴をもつ竪穴住居は30棟あり、その住居規模は長軸が6mに満たない中型から大型、超大型住居と、住居規模と棟持柱には大きな関連性はみられないようである(第549図)。

以上、周辺地域における屋内棟持柱をもつ竪穴建物の検出例は、群馬県内には極めて少なく、長野県の北信域や東信域に広がっていることが見て取れる。そうした北信域や東信域に接する吾妻地域は、縄文時代においても土器にみる文化的要素を大いに共有してきた地域であったことは知られており、四戸遺跡で検出された屋内に棟持柱をもつ竪穴建物は同様な交渉の結果と考えられる。また、群馬県内においても、吾妻地域での地域的様相と言えるのではなかろうか。

2. 壁際ピットをもつ竪穴建物について

四戸遺跡で検出された壁際ピットをもつ竪穴建物には、4区17・18・21・24A号竪穴建物で確認され、調査時の段階で建物の壁構造を補う痕跡と推測してきた。その検出状況は、壁面に間隔をもって縦の筋状となる痕跡として確認され、精査で壁際に巡る径10cm前後の小ピットであることが判明した。この壁際ピットの深さはまちまちで、床面に達するものもある。また、4区18・24A号竪穴建物での被熱して焼土化した壁面では、縦方向の筋状痕跡は極めて明瞭で、その部分は筋状に焼土化していない。この壁面の焼土化は、壁面に可燃物があつたことによる現象と考えられ、その可燃物は壁に用いられた板材と推測でき、板材を押さえる杭の打ち込まれた痕が壁際の縦方向の筋状痕跡として検出されたものと考えられる。

同様な壁際ピットをもつ竪穴建物は、本遺跡以外にも群馬県内の2遺跡にみることができる(第550図)。高崎市水沼遺跡3号A住居では、全周していないが壁の内側に小ピットを確認できる。また、川場村生品西浦遺跡のJ区1・5・17号竪穴建物では、入り口部を除く壁際の内側に小ピットが連なることを確認できる。この4棟の例と比較すると、小ピットの配される位置に違いがある。本遺跡の場合、壁際ピットは壁の外側ぎりぎりに配されるのが特徴的である。いずれの位置であれ、壁板を押さ



第550図 壁際ピットを持つ竪穴建物

えるための杭の痕跡であることは間違いなからう。

一方で、こうした壁際ピットをもつ竪穴建物例は、北毛地域に散見されるだけで、地域的な様相の可能性がある。

3. 竪穴建物の上屋構造(壁板)について

本遺跡での弥生時代後期の竪穴建物に検出された壁際ピットは、先述してきたように壁板を押さえる杭の痕跡と考えているが、その壁板の存在、或いは壁板の規模を知る良好な事例がある。

2015年に調査され、2017年に報告書が刊行された鴨上1遺跡B区518号住居は、床面上に累々と炭化材が残った弥生時代後期の焼失竪穴建物である(第551図)。調査時の出土状況からすると、壁面は被熱による焼土化が著しく、壁の内側を中心に多くの炭化材が出土した。炭化材の内、建物の四隅にあたる位置にはやや太い丸材が対角方向に、壁沿いには壁際から内側へ何枚もの板材が並ぶように出土した。板材は壁際から1.3~1.5mほどの位置に先端が揃うようにあることから、板材の長さはほぼその長さと思われ、隅の太い丸材も同じ長さである。また、壁際部分には壁面ぎりぎりに細い丸材がまばらに立

ち、横木と考えられる細長い丸材も壁際に出土している。こうした炭化材のあり方は、焼失直後に燃え残った材が横倒し状となった姿と考えられ、板材利用の壁立ちの竪穴建物であったことが理解できる。

この鴨上1遺跡例と本遺跡での検出例を照らし合わせると、壁際ピットが壁板押さえの細い丸材を打ち込んだ痕跡であることが符合し、壁面が焼土化している点でも、壁板をもった上屋構造の建物であったことが判る。なお、壁際ピットとは異なる、径の大きいピットが壁際に規則的に配される竪穴建物も存在し、上屋を支える主柱の補助的な役割をもつ柱穴と理解できる。

図出典文献

- 『倉岡村誌別冊 水沼遺跡』1975 倉岡村
- 『長野吉田高校グランド遺跡』1987 長野市教育委員会
- 『生品西面遺跡Ⅱ』2009 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 『西近津遺跡群』2015 長野県埋蔵文化財センター
- 『茅根遺跡 鴨上1遺跡』2017 群馬県埋蔵文化財調査事業団

3号A住居



群馬県高崎市鴨上1遺跡 B区518号住居

第551図 焼失竪穴建物内の炭化材出土状況

第5節 特異な遺物と四戸遺跡

四戸遺跡における今調査で出土した遺物には、いくつかの特異な遺物がある。その代表的なものに、2区51号竪穴建物から出土した奈良三彩短頸壺がある。さらに、金属製品にも刀装具や各種の工具類があり、県内でも出土例の少ない遺物である。

ここでは、そういった希少性の高い遺物から、吾妻地域における本遺跡の性格や意味を考えてみたい。

1 出土した特異な遺物

〈奈良三彩短頸壺〉

奈良三彩短頸壺は、2区51号竪穴建物の西側の床面直上に正位で、口縁部を一部欠いた状態で出土し、欠けた破片は近くから出土して完形品となった(口絵4を参照)。

口径13.0cm、高さ18.7cm、胴部最大径25.0cm、底径13.9cmを測る大型の奈良三彩短頸壺である。胎土は緻密で夾雑物は無く、素地は白色、施釉範囲は内外面の全面に及ぶ。外面の口縁部から胴部には緑色・透明・褐色の釉薬が施釉され、外面底部と内面は緑色釉のみが施釉されている(内面肩部は帯状に施釉されていない)。口縁部から胴部にかけての外面の釉薬の状態は、緑色をベースに、1段7列の配列からなる5段の網目状の交点に白色(透明)・褐(黄)色の釉薬が配されている。また、外面胴部の一部に器面剥落がみられる(口絵3、第308図-14)。この葉壺形の奈良三彩短頸壺の製作年代は8世紀後半と考えられるが、出土した竪穴建物は他の出土土器から9世紀後半(第4四半期)の建物として年代を考えざるを得ない。製作年代からすると、約1世紀のずれが生じてことになる。その約1世紀のずれの間に、希少性のある奈良三彩短頸壺が何らかの理由で、この遺跡の竪穴建物にもたらされ、そのままに放置されたことは想像に難くない。

〈出土例の少ない金属製品〉

金属製品には、刀装具や腕輪、鍵、そして鑿、鉋、鉋といった各種の工具類がある。

8世紀後半とした2区46号竪穴建物からは、建築に関

わる工具である鑿(第295図-15)が出土している。長さ27.1cm(刃長15.5cm、莖長11.6cm)、最大幅2.2cmを測る大型品で、その大きさは県内でも例を見ない。

9世紀後半(第4四半期)とした2区51号竪穴建物からは、先の奈良三彩短頸壺と共に、建築に関わる工具である先端を欠く鉋(第308図-15)が出土している。残存長14.2cm、幅2.3cmを測り、裏面中軸を凹ませ、基部は刃部から大きく曲がる特徴をもつ。県内では、出土例の少ない遺物である。

同じく、9世紀後半(第4四半期)とした2区61号竪穴建物からは、刀装具(第314図-32)と鉋(第315図-34)が出土している。刀装具は、袋状となる先端が丸い状態で、柄頭の装具と考えられる。また、鍛冶に関わる工具である鉋は、長さ32.8cm、最大幅2.0cmを測る大型品であり、県内での出土例も少なく、大きさとしては例を見ない。同じ竪穴建物からの出土遺物の中には大型の砥石もあり、鍛冶に関連した遺物が目に付く。

さらに、10世紀前半(第1四半期)とした2区39号竪穴建物からは、鍵(第281図-64・65)と腕輪(第281図-71)が出土している。64の鍵は小型で、環状となり基部に、先端部が両側に折れ曲がる形をとり、扇子や櫃に用いられた可能性がある。65は大型で、直角・垂直に折れ曲がる特徴から、所謂「クルル鉤」であり、倉に用いられた可能性が高い。県内での出土例は少ない。また、71の腕輪は、径4.2cm、幅2.3cmを測り、銅製である。県内での出土例は見当たらない。この小型腕輪は、その大きさから成人が身につける腕輪でないことは明らかで、考えられるのは人形の装着物を想定しよう。さらに人形を想定するならば、仏像が考えられよう。この竪穴建物からの出土遺物には、他に細い釘が穿孔に残存した薄い板状の飾り金具等や、多量の須恵器や灰陶陶器の皿、杯蓋、杯、椀、壺類があり、その出土状態から焼失家屋であることも判っている。

2 希少遺物からみた本遺跡の性格

先述した第6章第1節での集落変遷にあるように、5世紀後半に集落規模が拡大し、6世紀代に最大規模に達する様は、四戸の古墳群の時期にほぼ重なっていることから、その造営に大きく関わる集落であると考えられた。その後の古代においても、集落規模の増減を繰り返した

がら、8世紀前半と9世紀後半に規模を拡大することも判っている。

そうした時代推移の中での集落内には、2区46号竪穴建物出土の鑿のように建築に関わる工人の存在が見え、さらに2区51号竪穴建物出土の鉋からも建築に関わる工人の存在、2区61号竪穴建物出土の刀装具や鋤および大型砥石からは鍛冶に関わる工人の存在が見える。つまり、四戸遺跡の集落内には、他の集落には見られない特殊な建築や鍛冶に関わる工人が居たことを窺わせている。

また、2区39号竪穴建物から出土した2種類の鍵から、扇子や櫛、さらに倉庫といったものが浮かび上がり、集落内に存在していた可能性が高い。さらに、小型腕輪から仏像の存在が考えられ、その仏像を納める場所(施設)もあった可能性がある。

以上、希少遺物からみた本遺跡における集落は、古墳時代の集落を背景に、古代に至っても集落内に各種の工人が存在し、さらには仏像、扇子や櫛、倉庫等も集落内にあったものと考えられる。それは、まさに四戸遺跡の集落の性格を示している事象であり、周辺の小規模集落とは一線を画すると言える。

3 吾妻地域における本遺跡の意味(位置付け)

本遺跡の北東約5kmには、7世紀後半頃の創建とされる吾妻郡内唯一の古代寺院で、上野国内に建立された代表的寺院の一つに挙げられる「金井廃寺」(東吾妻町金井)がある。

後述の第6章第6節にあるように、本遺跡から出土した「吾」や「寺」の文字資料からも、その背景として金井廃寺との関連、さらには金井廃寺の近隣に所在したであろう吾妻評・郡家との関連(郡名を負う郡領氏族との関連)を窺うことができ、本遺跡とは若干の距離があるものの、その密接な関係や影響を受けていたことは想像できよう。

一方で、金井廃寺の西側1kmには、下郷古墳群を擁する下郷遺跡(第7図48・49)がある。平成24年に当事業団が実施した発掘調査では、古代(律令期)の遺構として7世紀末から10世紀第1四半期までの竪穴建物4棟、掘立柱建物4棟、柱穴列が検出され、さらに中空円面硯の出土があり、吾妻郡家(郡衛)の位置が未だ確定していな

い中に一石を投じている(『下郷古墳群』2014 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第588集)。

この下郷古墳群は、本遺跡の東側約4kmに位置し、吾妻川右岸の段丘上で、本遺跡と金井廃寺との間にある。下郷古墳群の調査で検出された遺構と本遺跡での遺構を比較すると、古代の竪穴建物数の推移および石組みカマドをもつといった点が共通し、掘立柱建物の規模と構造(柱穴底面の礎石、柱穴間を繋ぐ布張り)といった点は特に近似する。

先述した大型鑿は、通常の建築物に用いる工具ではなく、大型建築物のための工具と考えられる。また、鉋も通常の集落では用いられない建築工具である。同様に、刀装具も通常の集落での出土は珍しい。大型の鋤や砥石、羽口、椀形鍛冶滓といった鍛冶関連遺物からは、古代の鍛冶遺構の検出はないものの、鍛冶遺構の存在は十分に考えられる。このような各種工具を扱う工人、鍵から扇子や櫛、倉庫といった特異な存在、腕輪からの仏像と仏像を納める場所(施設)があった可能性も指摘することができ、吾妻郡内における本遺跡の意味を考える特徴の一つである。

さらに、大型の奈良三彩短頸壺の出土は、本遺跡の位置付けを考える重要な点である。大型の奈良三彩短頸壺の破片は、県内の数遺跡で出土している。全国的にも小型の奈良三彩短頸壺は多く知られているが、大型品は数少なく、完形品として残る6点の多くは蓋を伴う蔵骨器として著名で、仏教関連遺跡や遺物と強い関連をもっていると考えられる。本遺跡で出土した奈良三彩短頸壺は、8世紀後半に畿内(奈良地域)で製作されたと思われるもので、中央集権制の律令体制の中にあつて、中央から何かの理由で出先機関(地方：上野国)にもたらされ、さらにそれが吾妻郡の地にもたらされ、最終的に本遺跡で終焉を迎えたことは想像に難い。このことが、製作年代と出土遺構との約11世紀の時間のずれということであろう。

当然ながら、吾妻の地にもたらされた場所を考えれば、金井廃寺ないしは吾妻評・郡家ということは言うまでもない。そこから本遺跡へは、先述してきた背景や出土遺物から見た各種工人の存在、等々を考え合わせれば、吾妻評・郡家と密接な関係をもった集落であり、そうした人物が居た地ということになる。併せて、吾妻郡家(郡衛)の位置にも大きく関わる遺跡である。

第6節 四戸遺跡出土の 墨書・刻書土器

1. 種別・年代・器種

東吾妻町の四戸遺跡から合計で16点の墨書・刻書土器が出土した。本遺跡における奈良・平安時代集落の規模から見れば、墨書・刻書土器の出土量は非常に少なく、当該期出土土器総量に占める割合は極めて少ない。16点中、刻書土器は3区遺物集中箇所出土の第419図11と2区48号竪穴建物出土の第300図17の2点のみで、いずれも焼成前の刻書である。

年代別では、8世紀代のものが3点、9世紀後半のものが10点、10世紀代のものが3点である。

また、須恵器が12点、土師器が4点と出土した墨書・刻書土器における須恵器の割合が大きいことも特徴的である。

吾妻郡域から出土する奈良・平安時代の須恵器の供給

源については、現在までのところまだ明確には解明されていないが、常識的に見ても上野国南西部の現・安中市秋間地区や現・高崎市南西部から藤岡市にかけての多野・藤岡地域から峠を越えて製品が運ばれてきたとは考えにくく、利根・沼田地域から、あるいは吾妻郡内における供給を考えるべきであろう。

全国的にみて、墨書・刻書土器に占める土師器・須恵器の割合は、その地における同時期の須恵器・土師器の割合に一致していることが多く、一般的には文字を記すにあたって須恵器あるいは土師器が意図的に選ばれていたケースは少ない。本遺跡出土の墨書・刻書土器に須恵器が占める割合が非常に高いことは、本遺跡における同時期の土器全般の傾向によるものと考えられる。

器形は9世紀後半の2区48号竪穴建物出土の第300図17が須恵器甕、4区28号竪穴建物出土の第519図11が土師器甕である以外の14点は供膳具である杯・椀型土器である。この点は全国的な墨書・刻書土器の傾向と完全に合致している。

第234表 四戸遺跡出土墨書・刻書土器一覧表

番号	時期	出土構	種別	釈文	器種	文字部位・方向
1	8C	1区28号竪建(第74図14)	墨書	「寺」	土師器盤	底部外面
2	8C	1区遺構外(第101図15)	墨書	「寺」	須恵器椀	体部外面正位
3	8C	3区遺物集中(第419図11)	刻書	「丈」	須恵器杯	底部外面
4	9C後	1区遺構外(第101図15)	墨書	□	土師器杯	体部外面正位
5	9C後	1区遺構外(第100図10)	墨書	「田」・「田」	土師器杯	底部外面・体部外面正位二箇所
6	9C後	2区26号竪建(第255図8)	墨書	「吾」	須恵器椀	体部外面側位
7	9C後	2区43号竪建(第288図11)	墨書	「寸」カ「寺」カ	須恵器杯	底部外面
8	9C後	2区48号竪建(第300図17)	刻書	「石」	須恵器甕	体部外面側位
9	9C後	2区51号竪建(第307図1)	墨書	「田」	須恵器杯	体部外面側位
10	9C後	2区61号竪建(第312図11)	墨書	「吾」	須恵器杯	体部外面正位
11	9C後	2区61号竪建(第312図15)	墨書	「太」	須恵器杯	体部外面正位
12	9C後	2区72号竪建(第328図5)	墨書	「」	須恵器杯	底部外面
13	9C後	4区28号竪建(第519図11)	墨書	不明(人面の髭の部分の可能性あり)	土師器器種不明	体部外面
14	10C	2区39号竪建(第277図27)	墨書	「目」	須恵器椀	体部外面正位
15	10C	2区39号竪建(第278図39)	墨書	「致」カ	須恵器椀	体部外面正位
16	10C	2区39号竪建(第278図41)	墨書	「致」カ	須恵器椀	体部外面正位

2. 出土遺構

土器そのものの年代観が奈良時代8世紀のものは、1区28号竪穴建物出土の第74図14、1区遺構外出土の第101図15、3区遺物集中箇所出土の第419図11の僅か3点のみであるため、8世紀の墨書・刻書土器の出土状況について、特徴を指摘することは困難であるが、平安時代9～10世紀のもの13点のうち10点は2区の竪穴建物からの出土である。1遺構から複数の墨書・刻書土器が出土しているのは、10世紀代の2区39号竪穴建物からの3点、9世紀後半の2区61号竪穴建物からの2点で、いずれも墨書土器である。2区39号竪穴建物出土の第278図39と第278図41は共に「牧」とも釈読出来る可能性が高いが、そのように読み切ってしまうにはやや疑問も残る。

平安時代の墨書・刻書土器が出土した遺構は2区に集中しているように見えるが、これは9～10世紀の竪穴建物が2区に集中しているからであって、墨書・刻書土器出土の遺構が調査対処班内の特定箇所集中しているわけではない。

竪穴建物からの出土が主である点も、東日本各地における奈良・平安時代の集落遺跡から出土する墨書・刻書土器の傾向と全く合致している。

3. 記載内容

(1)「寺」

奈良時代8世紀の墨書土器2点は器種も文字記入の部位や方向が異なるが、共に「寺」の1文字が記されている。平安時代9世紀後半～10世紀の墨書・刻書土器で「寺」の文字が記された可能性があるものとしては、9世紀後半の2区43号竪穴建物出土の第288図11がある。文字の全容が判明しているわけではないが、残画から見れば「寺」の文字の下半分の「寸」の部分、もしくは「寺」の文字の省画としての「寸」とも考えることが出来るが、「寸」であれば「村」の省画の可能性もあるので、2区43号竪穴建物出土の第288図11は、現状では「寺」の文字が記されたものと断定することは出来ない。

しかしながら、出土地点は異なるとは言え、1区から明確に「寺」と記された墨書土器が2点出土していることは注目できる。本遺跡の北東約5kmには吾妻郡内唯一の本格的な古代寺院の遺跡で、7世紀後半頃の創建と考え

られる金井廃寺(東吾妻町金井)がある。なお、上野国内において7世紀に建立されたことが明らかな寺院遺跡は、山王廃寺(前橋市総社町)、上植木廃寺(伊勢崎市本間町～上植木本町)、寺井廃寺(太田市寺井町～天良町)と東吾妻町の金井廃寺の四箇所しかなく、上野国内において最も重要な寺院の一つであったことは間違いない。しかも、上野国中央平野部から離れた山間の吾妻郡の地に、早くも7世紀後半には本格的な寺院が建立されていたことは、地域の歴史を考える上で極めて重要と言える。

これら上野国内四箇所の7世紀創建寺院の遺跡のうち、前橋市総社町に所在する山王廃寺からは「放光寺」・「方光」と記された文字瓦が出土し、高崎市山名町所在の山ノ上碑や「長元三年上野国不予解由状案」(所謂「上野国交替実録帳」、東京国立博物館蔵九条家本「延喜式」裏書)定額寺項に見える放光寺の遺跡であることはほぼ確実となったものの、「長元三年上野国不予解由状案」定額寺項に見える法林寺、弘林寺、慈廣寺の三箇寺については、現在までのところ、その遺跡がどこであるのか全く不明である。これら三箇寺が、国家によって国分寺に並ぶ官寺としての扱いを受けた定額寺であることから、大規模な寺院であったことに相違ないので、山王廃寺=放光寺跡を除いた上野国内の三箇所の7世紀建立寺院の遺跡は、これら定額寺三箇所の遺跡と見ることが自然である。そうであるならば、金井廃寺は、「長元三年上野国不予解由状案」定額寺項に見える法林寺、弘林寺、慈廣寺のどれかの遺跡に当たるということになる。

本遺跡と金井廃寺とは若干の距離があるものの、金井廃寺が上野国内に建立された代表的寺院の一つであったことから見れば、金井廃寺が存在していたことから何がしかの影響を本遺跡の地が受けていたことは想像に難くない。本遺跡から出土したこれら2点の「寺」と記された墨書土器が、金井廃寺となんらかの関連を有するか否か、現段階では明確ではないものの、その背景を考える上で、可能性の一つとして約5km離れた地に所在する金井廃寺の存在も考慮に入れておく必要はあるように思われる。

(2)「吾」

平安時代9世紀後半～10世紀代の墨書・刻書土器の中では、まず、2区26号竪穴建物出土の第255図8と2区

61号竪穴建物出土の第312図11に見る「吾」の文字が目されるであろう。器種は共に須恵器であるが、2区26号竪穴建物出土の第255図8は倒位、2区61号竪穴建物出土の第312図11は正位で記されている。各々、文字が記された方向は異なるが、共に本遺跡が存在する吾妻郡の郡名の一部もしくは郡名を負う氏族名が記された可能性が高い。なお、『倭名類聚抄』によれば、上野国吾妻郡は「長田」、「伊参」、「大田」の3郷からなる小郡であり、郡名と名を同じくする「吾妻」郷はないため、「吾」の文字が地名を指しているとなれば郡名以外にはありえない。

吾妻郡家の遺跡は現在までのところ全く検出されておらず、郡家推定地についても未だ定見はない。しかしながら、金井廃寺が7世紀に創建された本格的寺院であったことから考えれば、吾妻評の評督で後の吾妻郡の郡領に補されるような地域きっての有力豪族によって建立された評・郡随一の寺院であったことは間違いないところであろう。全国的に見ても評・郡家遺跡の近隣に7世紀に創建された本格的寺院の遺跡が存在する例は枚挙に暇がなく、これらの寺院のことを「評・郡家付属寺院」とか「評・郡寺」と評・郡家との積極的な関連を想定する研究者も少なくない。評・郡家に近接する7世紀創建寺院と評・郡家との直接的・具体的な関係については、まだ検討の余地や異見も多いところであり、このような寺院については現段階では「評・郡家近接寺院」くらいの用語を使っておくのが良いと思われる。いずれにせよ、それら評・郡家に近接する寺院は、立評と同時に評督に補されたような地域きっての有力豪族によって建立されたことは間違いないところであり、法号とは別の通称としての寺名は評・郡名を負っていたことが史料や出土文字資料によって明らかになっている。このように見れば、吾妻評・郡家は金井廃寺の近隣に存在したとみることが自然であり、金井廃寺の通称は「吾妻寺」であったと考えられる。なお、本県では伊勢崎市上植木町に所在する上野国佐位郡正倉跡（三軒屋遺跡）の北側約1kmに位置する上植木廃寺と、太田市天良町に所在する上野国新田郡庁跡（天良七堂遺跡）の北東約0.5kmに位置する寺井廃寺が郡家近接寺院の例としてよく知られているところであり、それぞれ通称としては「佐位寺」、「新田寺」と称されていたことであろう。

先述した様に金井廃寺は本遺跡の北東約5kmに位置しているので、吾妻評・郡家も本遺跡から約5km圏周辺に存在したと見るのが自然である。このことから見れば、本遺跡から出土した「吾」と記された2点の墨書土器は、郡家あるいは郡家近接寺院との関連、もしくは郡名を負う郡領氏族との関連を示唆する可能性が高いと考えられる。

全国的に見ても、評・郡名ないし評・郡名の一部が記された墨書・刻書土器は評・郡家周辺あるいは評・郡関連施設が存在が考えられる場所、さらには国府の周辺など、評・郡の活動と密接に関連するよう場所及びその周辺から出土している（高島英之「郡名記載墨書・刻書土器小考—群馬県内出土事例を中心に—」群馬県埋蔵文化財調査事業団「研究紀要」28 2010、のち高島英之「出土文字資料と古代の東国」同成社 2016に加筆の上収録）。その点から見れば、本遺跡もまた、郡家周辺地域の一角と言って良い場所であったということになり、これらの墨書土器は、本遺跡の地における歴史的な背景を明らかにする上で、重要な資料と位置付けることが出来る。

なお、群馬県内では、現在までのところ評・郡名ないしその一部が記された墨書・刻書土器が本遺跡出土の事例を除いて42点出土している。車評・群馬郡を意味する「車」、勢多評・郡を意味する「勢多」、佐位郡を意味する「佐」、片岡郡を意味する「片岡」（刻書）、甘楽郡を意味する「甘」、多胡郡を意味する「多胡」「多」、新田評・郡を意味する「新田」「入田」「新」「入」、山田評・郡を意味する「山田」、邑楽評・郡家の厨を意味する「邑厨」「上邑厨」などの事例があるものの、吾妻評・郡を表す文字の出土例としては、これらの資料が初めての事例となる。

（3）「牧」カ

10世紀代と考えられる2区39号竪穴建物からは第278図39・第278図41の2点の「牧」と判読できそうな墨書土器が出土している。不明瞭な点が多く、この2点については、あくまでも釈読の可能性の一つという程度に留めておく。「牧」と明記された墨書・刻書土器は現在までのところ群馬県内からは出土していないが、律令制下の官牧が設置されていた地域である長野県や山梨県などからの出土例はある。

第235表 上野国内御牧9箇所の比定地(『群馬県史通史編2 原始古代2』1991 596頁の表を改定)

番号	牧名	比定地		備考
1	利刈牧	群馬郡	子持村白井・北牧～渋川市南牧一带	『和名類聚抄』群馬郡の項に「利刈郷」がみえ、古くから北群馬郡牧村(子持村～渋川市)に比定される。隣接する渋川市の旧子持村白井字利刈野との関連も想定できる。旧子持村白井一带で最近発掘調査された古墳時代の馬の放牧地跡との関連も想定できる。
2	有馬島牧	群馬郡	渋川市有馬～前橋市荒牧町一带	『和名類聚抄』群馬郡の項に「有馬郷」がみえ、渋川市に有馬の地名がある。渋川市平田中原南原遺跡を有馬島牧の一部を構成する牧跡とみる考え方があり。前橋市荒牧町の「荒牧」を古い牧(古巻、現渋川市)に対する新しい牧とみる考え方もある。
3	沼尾牧	勢多郡・吾妻郡?	渋川市・東吾妻町?	渋川市の旧赤城村に「沼尾田」、吾妻郡東吾妻町にも「沼尾田」あり。
4	拝志牧	勢多郡	前橋市日輪寺町一带	中世「拝志荘」の前身とみて、前橋市日輪寺町一带に比定出来る。
5	久野牧	何根郡?	沼田市・みなかみ町?	「久野」は「長野」の誤記で、「日本後紀」弘仁二年(811)10月5日条にみえる桓武天皇皇子三島葛原親王に賜られた「長野牧」に比定する考え方があり。具体的に、沼田市上久屋町・下久屋町、みなかみ町上牧・下牧などが想定されている。
6	大藍牧	何根郡・吾妻郡?	みなかみ町・嬭恋村?	みなかみ町上牧・下牧にあててる考え方があり。また嬭恋村三原・大世とみる考え方もある。
7	市代牧	吾妻郡?	中之条町?	中之条町市城、東村新巻・奥巻などを比定する考え方が有力である。
8	鹽山牧	甘楽郡	下仁田町～南牧村	下仁田町・南牧村には、東野牧、西野牧、南野牧、馬山などの地名が点在する。また南牧村には大塩沢、塩沢、小塩沢など「鹽山」に類似する地名がある。
9	新屋牧	甘楽郡	甘楽町	『和名類聚抄』甘楽郡の項に新屋郷がみえる。

律令制下、上野国には隣国である武蔵・信濃両国や甲斐国と同様に官牧が設置されており、律令国家きっての貢馬国であったことはよく知られている通りである。

『延喜式』左右馬寮御牧条の上野国内には御牧として9箇所の名が上がっている。

御牧(中略)上野国 利刈牧、有馬島牧、沼尾牧、
 拝志牧、久野牧、市代牧、大藍牧、
 鹽山牧、新屋牧(後略)

また、『政事要略』巻23、年中行事8月下にみえる「二十八日上野勅旨御馬事」の割註には、延喜7～8年(907、908)の例として前掲9牧に加えて、「小栗田」・「平澤」の2牧が挙げられている。

弘仁11年(820)に選定された『弘仁式』主税寮には、すでに甲斐・武蔵・信濃・上野の4箇国から牧馬を京進する際の規定がみられるので、少なくとも9世紀前半には、上野国内に御牧が設置されていたことになる。

なお、奈良市の平城京左京2条3坊長屋王邸宅跡から出土した木簡の中に、「御馬司信濃一口甲斐一口上野二口右」「馬司甲斐二人 上野二口 甲斐四口」「馬司甲斐二人 上野二人 六人」と記載されたものがある。これらの木簡に見える国名は、ちょうど、9世紀段階に御牧が設置された4箇国中の3箇国に当たっている。このことは単なる偶然の一致に依るものではなく、すでに奈良時代初期頃からこれら3箇国が馬飼育の盛んな地域であり、馬の飼育に長けた専門技術者が多数存在していたことを窺わせ、9世紀段階に御牧が設置されたのも必然的帰着であったと見られよう。

これら9御牧の内、利刈牧と有馬島牧は、『和名類聚抄』にみえる群馬郡利刈郷・有馬郷と、また、新屋牧は甘楽郡新屋郷と、それぞれ名称が一致しており、これらの牧はそれらの郷を中心とした場所に設置されたとみて差し支えないだろう。また、拝志牧も、前橋市日輪寺町周辺

一帯に「林」の地名が遺っていることから見れば、その一帯に比定することができる。それら以外の上野国の6箇所御牧は、現在に至るまで比定地が明確ではないものが多いが、沼尾牧、大藍牧、市代牧を吾妻郡内に比定する説もあるので、これらの墨書土器との関連が想定できるかもしれない。

（4）その他

以上の他では、3区遺物集中箇所出土の8世紀の須恵器杯(第419図11)の底部外面に焼成前に刻書された「丈」の文字は、古代氏族丈部氏のウジ名である可能性が考えられる。丈部氏は阿倍氏の同族で、古代東国とくに常陸地方や陸奥国の太平洋岸にかけて広く分布する有力氏族であった。墨書・刻書土器に記された氏族名として千葉県・埼玉県・茨城県・福島県出土の資料を中心に多くの類例がある。

また、9世紀後半の2区48号竪穴建物出土の須恵器甕体部外面に焼成前に刻書された「石」の文字については、あくまでも可能性の一つに過ぎないが石上氏・石上部氏など物部氏同族の氏族名と考えることが出来る。上野国碓氷郡には磯部郷があり、甘菜郡・多胡郡周辺からは物部氏・石上部氏に関わる文字資料がいくつも出土している。高崎市山名町所在の神亀3(726)年銘を有する金井沢碑にも「鍛師磯マ君身麻呂」の名がみえる。いずれにしても上野国に所在した氏族名として、史料上比較的多くみられる氏族名である。

9世紀後半の4区28号竪穴建物出土の第519図11は小破片であるため不明確な部分が多く、確定的なことは言えないが、一案としては、人面墨書土器の髭の部分の表記である可能性が考えられなくもない。

4. まとめ

東吾妻町の四戸遺跡から出土した墨書・刻書土器は16点と集落の規模から見ればあまり多くはないものの、これまで吾妻郡域において古代の文字資料が纏まって出土した事例は殆どないので、その点においても重要である。また、内容的には評・郡名と通じる「吾」の文字が記されたものが2点、また「寺」の文字が2点出土していることは注目できる。本遺跡の北東約5kmに位置する金井庵寺、さらには金井庵寺の近隣に所在したであろう吾妻評・郡

家と本遺跡の地との密接な関連を示唆する文字資料として、本遺跡の歴史的な意義を考える上で重要な資料となり得るものである。

第7節 四戸遺跡周辺の地質について

1 中之条盆地西部の吾妻川中流域の

地形及び地質の概要

群馬県の西部を東に流れる吾妻川は上流部を白根火山や浅間火山に挟まれ、東流して吾妻渓谷の狭い谷部を流れ、中之条盆地で幾つかの河川を合わせ、渋川市で利根川に合流する約74kmの河川である。

北東方向から南西方向に約120度向きを変え、狭い吾妻峽谷を抜けると吾妻川は直線的な河谷になり、数段の河岸段丘を形成し、段丘面に人々の生活の場となる田畑や集落になる。

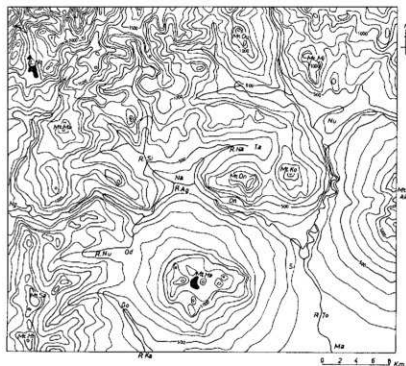
吾妻川の左岸の尾根部に吾妻山(1,182m)や薬師岳(974m)などが吾妻川に並行する。右岸の尾根も海拔900m前後あり、吾妻川の段丘面高度は450mぐらゐるので、尾根部との比高は約500～600m、大局的には直線状の

谷部を形成している。さらに下流の中の条盆地に入ると南流する四万川・名久田川が合流し、南麓を榛名火山、小野子山との間を流れ利根川に出る(第552図)。

中之条盆地には、かつて「古中之条湖」と呼ばれる湖があった(新井, 1962)。中之条盆地の周囲には、かつての湖成堆積物のシルト・砂層・礫層などが厚く堆積し、中之条盆地を広く埋積している。湖成層の年代は、不整合を挟み上・下部層に分かれ、上部層には約31万年前と約49万年前の火山灰の年代が得られている(竹本他, 1987)。

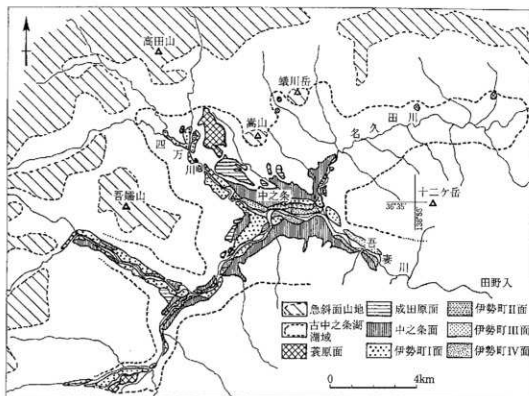
模式的な段丘面のある中之条盆地には上位から麓原面、成田原面、中之条面、沖積面である伊勢町面群に分かれる(第553図)。

中村(1986)によると吾妻川中流域の地質は新第三系が分布し、中新世中期の碎屑岩と中新世後期から鮮新世にかけて形成された火山碎屑岩類からなる(第554図)。



第552図 中之条盆地周辺の切断面図

Go: 糠田, Ma: 前橋, Na: 中之条, Nu: 沼田, Od: 大戸, On: 小野上, Si: 渋川,
R. Ag: 吾妻川, R. Ka: 烏川, R. Na: 名久田川, R. Nu: 温川, R. Si: 四万川, R. To: 利根川
Mt. Ak: 赤城山, Mt. Ha: 榛名山, Mt. Ko: 子持山, Mt. Mi: 三峯山, Mt. On: 小野子山, Mt.
Ou: 大塚山, Mt. Ma: 松岩山, Mt. Sa: 浅間隠山, Mt. Hn: 鼻曲山,
L. No: 野反湖。



第553図 中之条盆地の地形学図[山口, 1975]

2 調査地域周辺の河岸段丘面

吾妻川中流域の段丘面区分をおこなうにあたり、「吾妻町都市計画図」の2,500分の1の基本図(吾妻町都市計画図 昭和51・53年測量)を使用し、空中写真判読から段丘面を区分した(第555図)。判読範囲は吾妻渓谷を出た左岸は松上、右岸は上郷地域から下流の左岸は郷原、右岸は唐堀・四戸地域を経て、北流して吾妻川に合流する温川(めるがわ)までである。

地域高規格道路の「上信自動車道」の掘削工事中における露頭調査と、この工事に関連する橋梁工事に伴うボーリング資料の提供を受け、いくつかの柱状図を作成した。調査地域周辺では「上信自動車道」に伴う橋梁部分の工事を進めており、一部は段丘面の礫層を掘り込んでいたので新鮮な露頭を観察することができた。調査地域では吾妻川右岸に新設道路が計画され、上流の岩島駅付近で吾妻川を跨ぐ橋梁により吾妻川左岸につながる。

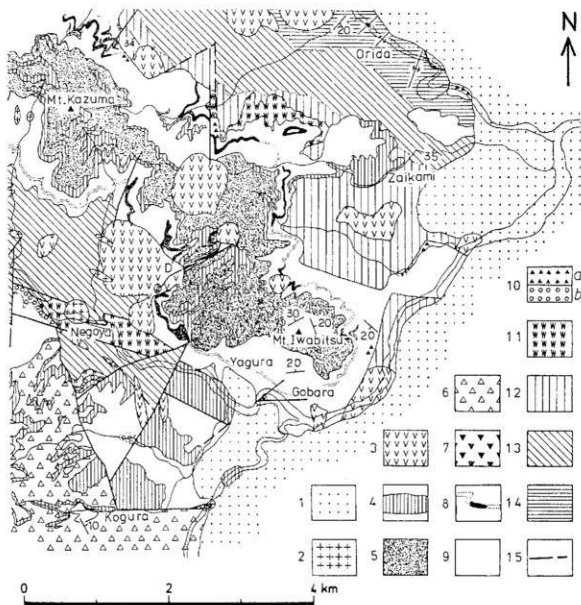
調査地域周辺には数段の河岸段丘と段丘面を覆う山地斜面から堆積した扇状地に分けた。

上位面には温川の西側、吾妻川右岸に2ヶ所の段丘状の平坦面があり、中之条盆地にある成田原(Nr)面に対比

したが地層などの詳細は不明である。

成田原面の下位にある段丘面は中之条(Nk)面であり、温川沿いに連続している。吾妻川に沿っては吾妻渓谷の下流側の両岸に連続するがその分布は下流ほど狭くなる。

調査地域周辺のNk面は中之条泥流堆積物上に上部ローム層の板鼻褐色軽石層群(BPグループ)のバッチ状の軽石層によって直接覆われている露頭(第556図、R-3)を調査した(J R 吾妻線付け替えのための工事露頭で、今は見られない)。この露頭は基盤岩の上に約2mの約2.3～2.4万年前に浅間火山の黒斑山の爆発によって、主に北側の浅間山麓の吾妻川に流れ下り、応楽岩層なだれ、中之条泥流、前橋泥流と呼称され、調査地域では「中之条泥流」と呼ぶ。中之条盆地に見られる巨礫を含む中之条泥流はこの露頭では巨礫は全く含まれておらず、基盤岩上に直接覆ったのか、基盤岩上の中之条泥層を中之条泥流が侵食したのであろうか。おそらく後者であろうと考えている。この露頭での泥流層の岩相は30cm以下の青灰色の安山岩質の角礫が主であった。



第554図 吾妻川中流域の地質図

凡例：1. 第四系，2. 深成岩類，3. 火山岩の貫入岩，4. 輝石安山岩溶岩，5-10. 吾妻果層，〔5. 吾妻山溶岩・凝灰角礫岩部層，6. 小倉溶岩・凝灰角礫岩部層，7. 高間山溶岩・凝灰角礫岩部層，8. 内野溶岩・凝灰角礫岩部層(黒色部は玄武岩質安山岩溶岩)，9. 郷原凝灰角礫岩部層，10. 細尾基底礫岩部層(a. 礫岩層，b. 礫岩層)〕，11. 根古屋溶結凝灰岩層，12-14. 沢渡果層〔12. 在上凝灰岩部層，13. 寺社原軽石凝灰岩部層，14. 折田凝灰質砂岩・泥岩部層〕，15. 断層。
(中村，1986)一部改変

ローム層を挟んで草律黄色軽石層(YPK)≒1.1万年前ごろと考えられている軽石層も堆積している。この軽石層は浅間火山からの噴出物であり、給源火山から北北東方向へ分布している。

一方、遺跡報告書(第236表)の細谷B遺跡の上位面には礫層上にローム、板鼻黄色軽石層(YP)を乗せていると記載されている(第557図、⑤の上位のNk面)。BPグループ軽石層は記載されず、対岸のNk面との地層の相違は今後の検討課題である。

中之条面の下位にある伊勢町(1s)面群は3面に分けた。連続のよい伊勢町I(1s-I)面は調査地域の土流から下流にかけ連続して幅広い平坦な段丘面を形成している。

四戸遺跡付近の上信自動車道の工事露頭では約6m以上の段丘礫層からなり、下限は不明である。万木沢西の工事中の工事露頭(第556図、R-1)では礫径30cmぐらいで揃った大きさの厚さ8mの褐色の砂礫層から構成されている。砂礫層が褐色を呈しているのは吾妻川の酸性河川の影響と考えられる。四戸遺跡調査では礫層頂部の砂礫層を見ると褐色のローム層のようにも見えたが確認すると褐色砂礫層であった。一方、近くのボーリング資料(第556図、B-1)では中之条湖成層を厚さ4mの中之条泥流が覆い、さらに約8mの礫層が乗る。礫層上にはローム層は覆っていない。3つの層の間は不整合関係である。

四戸遺跡の北側、吾妻川の攻撃斜面側には30mの急崖が広がり、河床から地層がよく見える。第556図のB-1と同じような地層が堆積し、吾妻川河床から約15mの高さまで水平に堆積している中之条湖成層がみられる。中之条湖成層の下限は河床以下にある。

1s-II面の段丘礫層は基盤岩上に約6mの段丘礫層を乗せている。1s-II・IIIとも狭い段丘面で調査された遺跡は少ない。

吾妻川中流域の広い面積を占める1s-I面上に多くの遺跡が占めている。Nk面上は上流から上郷A遺跡(第1表②)、松谷松下遺跡(⑦)、細谷B遺跡の上位面(⑤)である。②遺跡ではX1層にYPK、⑦遺跡では1Xのローム層上にYPKが覆う。⑤遺跡の上位面では砂礫層の上にローム層とYPが覆うと記載されている。これらの遺跡はローム層とYP・YPKがあるのでNk面である。

1s-I面を浅間火山から流れ下った天明泥流堆積物(1783・天明三年に流下)に覆われる遺跡は、上流から③遺跡、⑤遺跡の下位面である。③遺跡の報告書の写真の中に天明三年の浅間泥流堆積物中に10人が囲む大きさの巨岩が遺跡内に貯留していることが報告されている。泥流層の厚さについては不明である。この現象から見ても泥流の流下の凄まじさが理解できるであろう。

中之条盆地の下流域の金島にある「金島の浅間石」も浅間火山の天明泥流によって運ばれた同一のもので、畑の中に見ることができる。

さらに下流の④遺跡の1s-I面には天明泥流は覆っていない。当然泥流堆積物は、水と岩石等の混合した流体で、河川に沿って低いところを流れる。調査地域の上部の1s-I面の段丘面上を覆って流れただけで、さらに川幅が広くなると段丘面をオーバーフローせず、河川部分を流下する。④遺跡は関他(2016)の報告によると天明泥流はこの遺跡を覆っているようにあるが、第1表④遺跡にある報告書には天明泥流は記載されていない。1s-I面を薄く覆ったのか、耕地整理等で削平されたのであろうか。それとも泥流はこの面にはなかったのだろうか。この付近から下流では1s-I面を天明泥流は覆っていない。

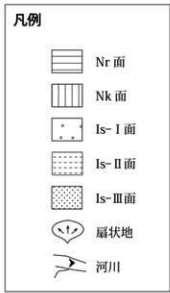
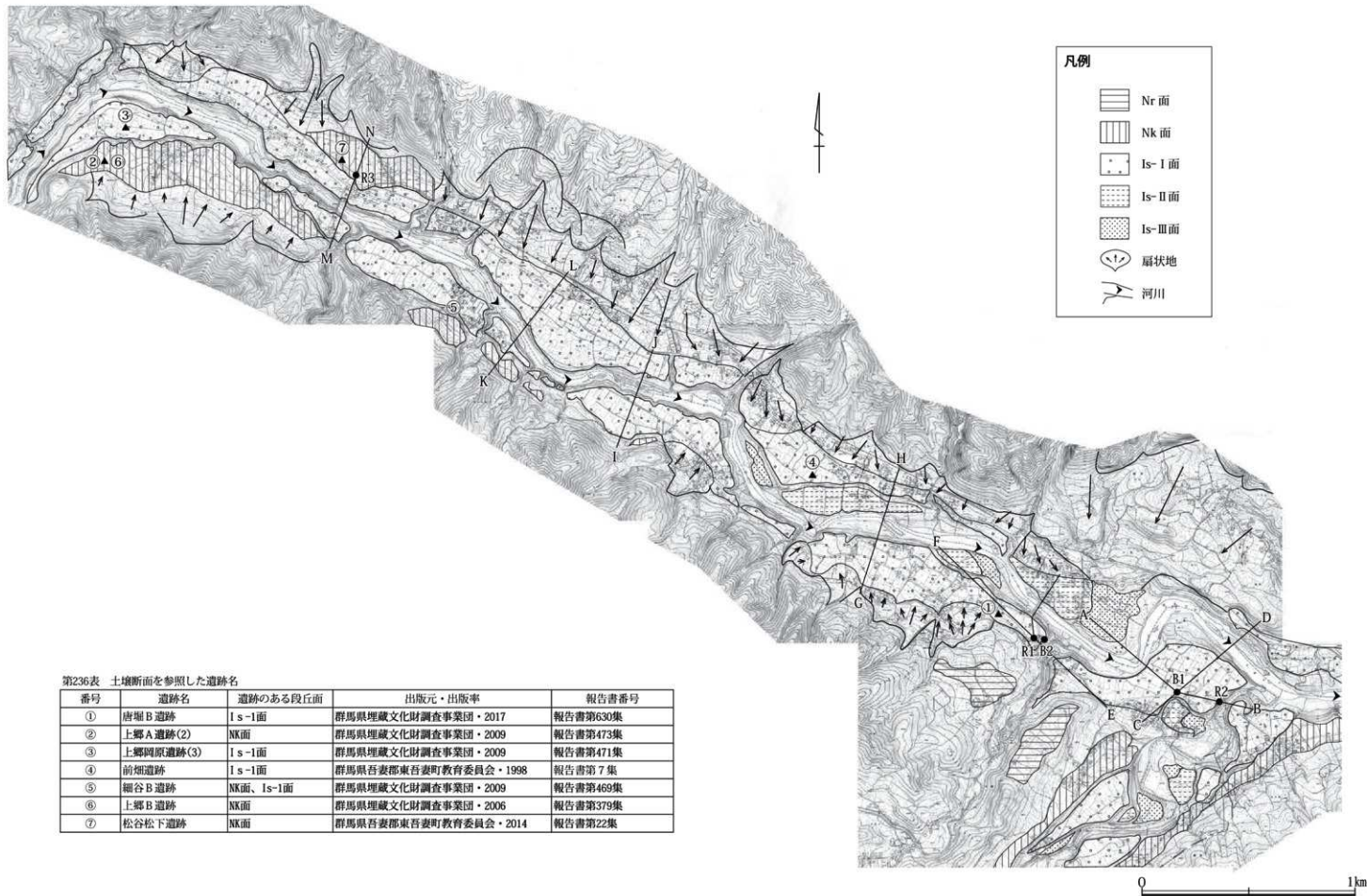
④遺跡の南に崖を挟んで1s-II面がある。この段丘面は泥流が覆っていると考え、東吾妻町教育委員会でこのII面の発掘調査の有無(現、岩島小学校)を訪ねたところ、機械で試掘を入れたが遺跡はなかったので調査はしなかったようである。

なお、第557図は①から⑦までの各遺跡の土層図を乗せた。基本土層なので層厚は表示していない。

4 吾妻川の中流域の段丘地形断面

吾妻川中流域の山麓末端から河岸段丘、河床を横断する断面図を下流からA-B-M-Nまで7断面を、一部、縦断面のE-Fを作成した。ボーリング資料(B)や露頭(R)観察したところも地層を書き入れた(第558・559図)。

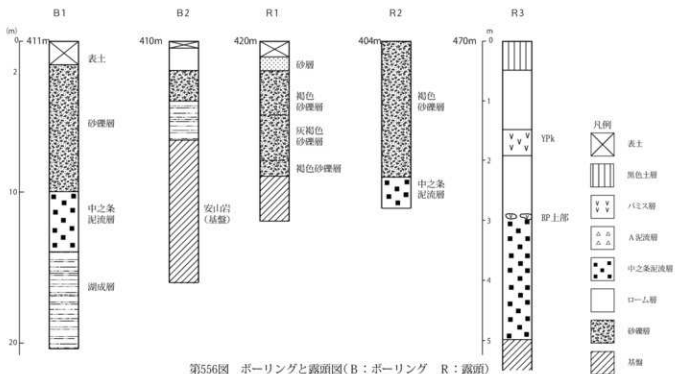
A-B断面の四戸集落のある北西から東に向け、緩く傾斜する1s-I面がある。厚い湖成層の堆積物を不整合に覆う中之条泥流が、それを不整合に覆う約8mの礫層に覆われている。吾妻川の河床が約380mの攻撃斜面側の段丘面頂部が海拔410mあるので、その崖の比高は約



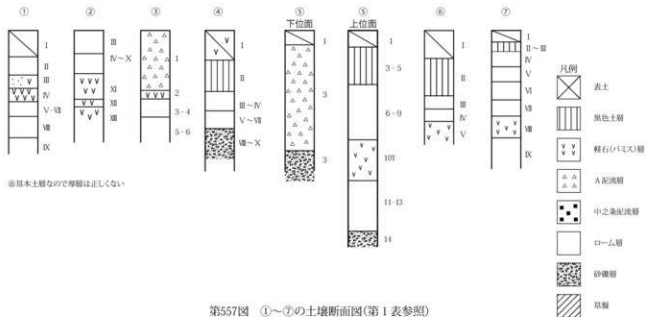
第236表 土壌断面を参照した遺跡名

番号	遺跡名	遺跡のある段丘面	出版元・出版年	報告書番号
①	唐堀 B 遺跡	Is-1 面	群馬県埋蔵文化財調査事業団・2017	報告書第630集
②	上郷 A 遺跡(2)	Nk 面	群馬県埋蔵文化財調査事業団・2009	報告書第473集
③	上郷岡原遺跡(3)	Is-1 面	群馬県埋蔵文化財調査事業団・2009	報告書第471集
④	前畑遺跡	Is-1 面	群馬県吾妻郡東吾妻町教育委員会・1998	報告書第7集
⑤	細谷 B 遺跡	Nk 面、Is-1 面	群馬県埋蔵文化財調査事業団・2009	報告書第469集
⑥	上郷 B 遺跡	Nk 面	群馬県埋蔵文化財調査事業団・2006	報告書第379集
⑦	松谷松下遺跡	Nk 面	群馬県吾妻郡東吾妻町教育委員会・2014	報告書第22集

第555図 吾妻郡流域の段丘面区分図(吾妻町都市計画図 昭和51・53年測量を加筆して作成)(山口原図)



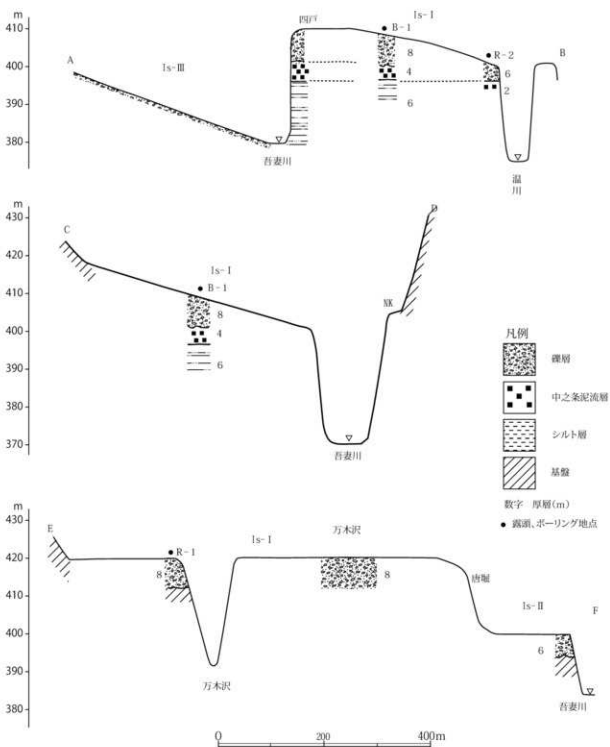
第556図 ボーリングと露頭図(B:ボーリング R:露頭)



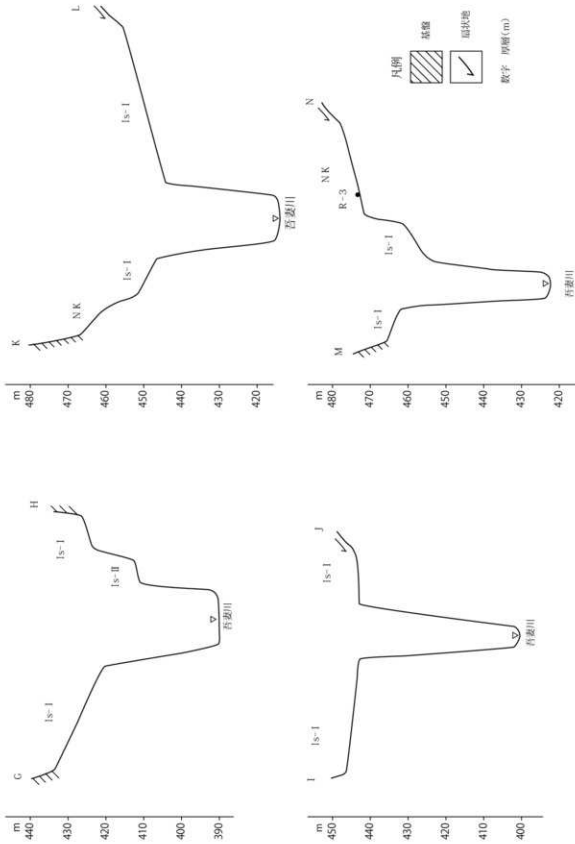
※基本土層なので厚縮は正しくない

第557図 ①～⑦の土壌断面図(第1表参照)

- ①唐堀B道跡 Ⅰ表土 Ⅱ黒褐色土 ⅢAs-Kk ⅣAs-B V-VII黒褐色土(粘性あり) VIII暗灰黄色土 IX暗灰黄色土(砂質)
- ②上郷A道跡(2) Ⅲ黒褐色土(礫あり) Ⅳ褐色土(軽石点在) Ⅴ-X黄褐色火山灰層(礫状・軽石あり) XI浅黄橙軽石層As-Ypk XII褐色土(礫状・硬質)黄褐色火山灰層(軽石多量)
- ③上郷阿原道跡(3) Ⅰ天明泥流層 ⅡAs-A Ⅲ-4黒～褐色土 Ⅴ-6ローム
- ④前畑道跡(森の里) Ⅰ黒色土(As-A)多量を含む Ⅱ黒色土 Ⅲ-Ⅳ黒褐色土(ローム漸移層) Ⅴ-VII砂質ローム層を大量に含む Ⅷ-X褐色土の砂層(大小の河原石10～30cm)
- ⑤細谷B道跡 下位面 Ⅰ黒褐色土 ⅡAs-A泥流 Ⅲ黄褐色粘土質(礫混) 上位面 Ⅰ表土 ⅢAs-A Ⅳ-6黒色土(軽石) Ⅶ-9黄褐色砂質粘土層 10Ypk (50cm) Ⅺ-13黄褐色粘土層 14黄褐色砂礫層
- ⑥上郷B道跡 Ⅰ表土 Ⅱ-Ⅲ黒褐色土 Ⅳロームとの漸移層 ⅤAs-Ypk
- ⑦松谷松下道跡 Ⅰ耕作土 Ⅱ-Ⅲ黒色土 Ⅳローム漸移層 Ⅴローム層 Ⅵ砂質シルト層 Ⅶテフラ層 Ⅷ軽石層As-Ypk (浅間草津軽石層) 1.3-1.4万年前 Ⅷローム層



第558図 吾妻川における断面図(1)



第559図 吾妻川における断面図(2)

30mを有する。

C-D断面はA-B断面を横断するように描いた。Is-I面の山麓で海拔415m、崖端で400m、吾妻川の河床370mなので、同じ交点を通る断面は四戸遺跡のあるところから万木沢を挟んでE-F断面である。四戸～万木沢にかけて、橋脚工事と段丘面を掘り下げていた工事期間に現地見学することができた。褐色のマトリックスの荒砂、円礫の表面を鉄分なのか褐色をした最大径30～40cm、7～8m前後の厚さを持ち、基盤岩に赤褐色の安山岩が見られた。

G-H断面は右岸と左岸にIs-I面、約15mの段丘崖を挟んでIs-II面が左岸に狭く分布する。吾妻川との比高は30～40mである。

I-Jは吾妻川兩岸にIs-I面があり、吾妻川との比高は45mくらいである。

M-N断面は左岸にNk面、第556図のR-3と⑦遺跡の柱状図がある。同じ遺跡内の層序である。この段丘面をNk面に対比した。Is-I面を460m前後にすると吾妻川河床(420m)との比高は40m前後、Nk面と河床との比高は55m前後になる。ちなみにNk面とIs-I面の比高は15m前後であろう。これらのように吾妻川と各段丘面との比高は30～40mで前後である。

Is-I面は連続性ある平坦面で、山麓からの土石流状の扇状地に多くの地域で覆われている。

Nk面・Is-I面を含む段丘面は調査流域でも吾妻川を挟んで両山脚までの幅は約600～700mで、一定の段丘面の幅を有している。田畑や集落、道路も兩岸に広がり、縄文時代から今日まで連続と続く生活の場となっている。

5 吾妻川中流域の段丘面の変遷

中之条礫層を覆うように吾妻川上流部から吾妻渓谷を泥流堆積物が流れ下り、中之条盆地には厚さ数m～20mも中之条泥流堆積物を堆積させ一部に泥流丘地形も認められる。

調査地域の第556図、R-3の露頭では基岩上に約2mの中之条泥流堆積物しか載せていない。さらに下流の第556図、B-1でも湖成層上に中之条礫層を欠き、中之条泥流が約4m堆積し、さらに厚い砂礫層に覆われている。

第555図外の下流域の吾妻川左岸の郷原駅東の切沢の中の露頭では、基盤岩上に約2mの中之条礫層の上位にやや厚い直径1m以上の角礫層を含む中之条泥流堆積物に覆われている露頭がある。このことから考えると吾妻渓谷を流れ下った中之条泥流は中之条礫層を侵食しながら流れ下った「運搬・移動」の地域であったことが考えられる。盆地状の堆積する「場」の中の条地域に厚く堆積したと考えられる。

泥流堆積物を侵食した後に約8mもの礫層を堆積させ沖積面であるIs-I面を形成した。その後、徐々に河床を下げ、Is-II面、さらに伊勢町III面と小規模の段丘面を形成した。

江戸時代後期の天明3(1783)年には浅間火山から天明(As-A)泥流として吾妻川を流れ、狭い吾妻渓谷を流下し調査地域のIs-I面を覆い、流れ下った。下流の前畑遺跡付近からは比較的広い吾妻川の部分を流れ下ったため、唐堀や四戸の集落の乗るIs-I面に乗り上げて覆うことはなかった。

調査地域では2.3～2.4万年以降もいくどとなく火山灰や軽石などの噴石、2度の泥流が吾妻川流域を襲い、地域の人にとっても大きな災害や被害を被ってきた歴史がある。

6 段丘面区分と遺跡の分布

第236表 土壌断面を参照した遺跡名ではハツ場ダム建設関連工事に伴う発掘調査をも取り込み7遺跡を取り上げている。これに加え上信自動車道建設に伴う発掘調査で、四戸遺跡周辺の遺跡を段丘面区分に位置付けてみた。Is-I面として位置づけたのは四戸遺跡・四戸古墳群、万木沢B遺跡、唐堀C遺跡がこれに当たる。Is-II面として位置づけたのは唐堀遺跡である。厚田中村遺跡は新井遺跡のNk面東に位置しておりNk面からは数mの段丘面の田中沢の扇状地形の扇尖部から扇端部にかけての調査であり、H r-F A 下の水田跡、As-B 下水田跡、As-A (天明3年)泥流下の水田跡や土止め用の木組みの柵が検出されている。

Is-I面については露頭の観察やボーリングデータから見る限り、ローム層の堆積はない。この地域に限り現段階ではIs-I面に乗る遺跡を確認できる最古の遺構は縄文時代前期の住居や土坑・埋設土器などである。主な

遺跡としては四戸遺跡・唐堀C遺跡がある。

これらの遺跡の上層観察をした結果からは四戸遺跡におけるローム層に類似している褐色砂礫層は吾妻川の段丘礫層であり、厚さ8mの褐色砂礫層の最上部の堆積物である。

Nk面として地形分類した地点は上部ローム層によって直接覆われている。遺跡としては上郷A遺跡、上郷B遺跡、細谷B遺跡、松谷松下遺跡、新井遺跡などがある。新井遺跡は東西に長い範囲の遺跡であり、東から西にNk面からIs-II面には緩傾斜で移行し、温川右岸で数mの段丘崖となる。主にNk面では縄文時代前期や中期の遺構が存在する。上部ローム層に旧石器の分布の有無を確認するための試掘を行っているが未検出との報告がある。

Is-II面は狭い段丘面であり天明泥流が覆っている。調査された遺跡の数は少なく唐堀遺跡では縄文時代の後期から晩期にかけての遺構が存在する。現河床から凡そ10mの段丘面に位置している。北向き吾妻川に向かっての斜面であり、吾妻川に流れ込む小河川の水場遺構や土坑、微高地には竪穴建物などが検出されている。現段階ではIs-II面で確認できる最古の遺構である。

7 泥流と遺跡

天明3年の浅間泥流の影響を受けたとみられる遺跡は数多くあることが推定できる。例えば前畑遺跡は前述したとおり報告書には記載がないが、関俊明氏らの研究によって周辺の状況から泥流の影響を受けたとされている。天明泥流の及ぼした泥流の被害状況等についての詳細は確認していただくとし、浅間泥流は吾妻川左岸のIs-I面では、その影響を受けた場所があったことが分かっている。地形分類したIs-I面の右岸は左岸に比べ、標高が高く吾妻川に極めて近い部分を除き天明泥流を被った地点が少なかったことも考えられる。

今後、天明3年の泥流下に埋もれた遺跡がIs-I面やIs-II面から検出されれば徐々に段丘面形成の時期や土地利用の実態が明らかになる。

文献

- 「関東盆地西部地域の第四紀編年」1962 新井房夫 群馬大学紀要自然科学編10
- 「東吾妻町・中之条町域における天明泥流到達範囲」2016 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要34 関 俊明・小菅樹多・中島直樹・勢 力
- 「茂閑火山、定桑岩洞など堆積物のテフラ層序」2003 竹本弘幸・久保誠二 日本大学文学部自然科学研究紀要No.38
- 「関東・伊豆小笠原(日本の地形4)」2000 貝塚真平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦 東京大学出版会
- 「中之条盆地の層序とフィッシュ・ラック年代」1987 竹本弘幸・米沢 宏・油井特雄・小池一之 駒沢大地理
- 「群馬県北西部の吾妻川中流域に分布する新第三系-系に中新世後期の陥没盆地について」1986 中村庄八 地球科学40-4
- 「岩槻城跡」1992 群馬県吾妻町教育委員会(吾妻町指定遺跡 保存整備計画策定報告書)
- 「中之条盆地とその周辺の地形」1975 山口一俊 駒沢大学大学院地理学研究 第5号
- 「群馬の火山史」1995 竹本弘幸・久保誠二 みやま文庫140
- 「自然災害考古学」2013 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬県史1」通史編1 原始古代1(p.119-129) 1990 早田 勉 群馬県
- 「岩島村誌」1971 岩島村誌編集委員会
- 「厚田中村遺跡」2018 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第644集
- 「唐堀B遺跡」2017 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第630集
- 「上郷西遺跡」2008 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団第448集
- 「年報33」平成25年度事業概要(p.33-34) 2014 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 「年報34」平成26年度事業概要(p.36-39) 2015 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 「年報35」平成27年度事業概要(p.38-41) 2016 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 「年報36」平成28年度事業概要(p.36-43) 2017 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 「年報37」平成29年度事業概要(p.36-37) 2018 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 「年報38」平成30年度事業概要(p.34-39) 2019 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第8節 まとめ

本書で報告する四戸遺跡は、岩瀬山を望む吾妻川右岸の広い段丘面に位置し、段丘面の東側に四戸の古墳群を擁する遺跡である。その段丘面を東西に貫くように発掘調査が行われ、これまで知られることの少なかった、多くの新たな歴史を解明する資料が得られた。

縄文時代前期前葉期、この地に人々の集落の跡が初めて見られるようになった。それは、今から約6500年前のことで、新潟方面との交渉もすでにあった。調査した範囲からは、この時代の竪穴建物が検出されているが、出土した遺物には中期や後期、晩期の土器があることから、調査範囲外にそういった時期の遺構の展開が予測される。

弥生時代には、著名な岩瀬山山頂下の鷹の巣遺跡を正面に、中期の小規模な集落、そして後期の大規模な集落が営まれていた。この後期の大集落は、吾妻地域の中の最も西奥にあり、出土した土器や竪穴建物には隣接する長野県側との影響を強く受けた地域的な様相が展開されていた。特に、建物内の入口部とは反対方向となる奥壁寄りに、4本の支柱とは別の樹柱が備えられるという、県内ではあまり例を見ない構造をもっていた。

古墳時代になると、4世紀代の集落は小規模であると共に大きく集落位置を移動し、5世紀後半に集落規模が拡大し、そして6世紀代には最大規模に達する。しかも、6世紀代の集落は、段丘面西側へと集約されていく状況となる。こうした推移は、段丘面の東縁(温川沿い)に点在する6世紀前半から7世紀にかけて造営された四戸の古墳群と直結した集落と考えられ、集落の変遷および遺構数の増加はそのことを示していると言える。周辺地の中で、古墳群と古墳群に関わる集落がセットになった遺跡として、重要な遺跡であることが明らかとなった。

さらに、7世紀後半以降の古代(律令期)になっても、集落規模の増減を繰り返しながら、8世紀前半と9世紀後半に規模を拡大するなどの継続的な集落が営まれ、その後激減して10世紀後半の竪穴建物を最後に集落形成は途絶え、平安時代後半には畠や水田といった生産域へと変貌していくこととなる。

その中でも、特に本遺跡で注目されるのは、大型の葉歯形の奈良三彩短頸壺が完形品で竪穴建物から出土したこと

であり、加えて吾妻地域で例のなかった「吾」や「寺」の墨書をはじめとする文字資料、さらに県内では例の少ない各種工具類を含む金属製品の出土である。

全国的にも小型の奈良三彩短頸壺は多く知られているが、大型品は数少なく、完形品として残る6点の多くは蓋を伴う鏡付器として著名で、仏教関連遺跡や遺物と強い関連をもっていると考えられる。本遺跡で出土した奈良三彩短頸壺は、全国で7例目となる希少な壺である。8世紀後半に畿内(奈良地域)で製作されたと思われる、中央集権の律令体制の中において、中央から何かの理由で出先機関である上野国にもたらされ、さらにそれが吾妻郡の地に、そして最終的には本遺跡で終焉を迎えたことは想像に難い。このことが、製作年代と出土遺構との約1世紀の時間のずれの経過であろう。ここに言う吾妻の地とは、金井廃寺ないしは吾妻評・郡家ということは言うまでもない。上野国内に建立された代表的な古代寺院の一つに挙げられる金井廃寺(東吾妻町金井)は、7世紀後半頃の創建とされている。その金井廃寺の近隣に所在したであろう吾妻郡家(郡衙)の位置は、未だ定まっていないのが現状である。

また、「吾」や「寺」の墨書からも、その背景として金井廃寺あるいは金井廃寺の近隣に所在したであろう吾妻評・郡家との関連(郡名を負う郡領氏族との関連)を窺うことができ、密接な関係や影響を受けていたことは想像できよう。さらに、各種工具類を含む金属製品からは、建築や鍛冶の工人の存在が窺え、通常の集落で持ち得ない仏像や鏡(鈎)を伴う厨子や櫃、倉庫等を備えた集落であったことが明らかとなった。

以上、古墳時代以降の四戸遺跡についてまとめると、四戸の古墳群の築造に関わった四戸遺跡集落および集落に暮らす人々は、地域の中心的存在であり、古墳時代から古代までを通じた石組みカマドを伝統的に採用し、さらに古代に至っては金井廃寺や吾妻評・郡家と密接な関係にあった人物が居た集落でもあったことになる。そして、この四戸遺跡を介して吾妻郡家(郡衙)の位置を特定することのできる要因をもった遺跡としても評価でき、金井廃寺の西1kmにある下郷古墳群の辺りが有力視できよう。

報告書抄録

書名ふりがな	しどいせき
書名	四戸遺跡
副書名	上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	668
編著者名	谷藤保彦
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20200316
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	しどいせき
遺跡名	四戸遺跡
所在地ふりがな	あがつまぐんひがしあがつままちおおあざみしまあざしど
遺跡所在地	吾妻郡東吾妻町大字三島字四戸
市町村コード	10429
遺跡番号	119
北緯(世界測地系)	363246.781
東経(世界測地系)	1405242.64
調査期間	20130901-20131130、20140701-20141031、20150501-20151231、20160401-20161231、20180501-20180531
調査面積	22,100.55㎡
調査原因	道路建設
種別	集落/生産
主な時代	縄文/弥生/古墳/古代/中世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴建物1+土坑4-土器・石器/弥生-竪穴建物19+竪穴遺構1+土坑-土器・石器・ガラス玉/古墳-竪穴建物94+土坑-土器・石製品・金属製品/古代-竪穴建物54+竪穴遺構1+掘立柱建物8+土坑+ピット+竪+水田-土器・石製品・金属製品/中世-掘立柱建物2+柱穴別+墓塚2+井戸1+鍛冶遺構1+土坑+ピット+溝+竪
特記事項	縄文時代前期前葉期の集落。弥生時代後期の集落。古墳時代初頭から10世紀まで継続した集落と、その後の生産遺構。特に、9世紀後半の竪穴建物(2区51号竪穴建物)から大型の奈良三彩短頸壺が完形で出土。
要約	吾妻川右岸の段丘面上で、遺跡地の東縁となる温川沿いには四戸の古墳群を擁し、岩櫃山を正面に見る最も広い段丘面に遺跡がある。縄文時代前期前葉、弥生時代中・後期の集落、そして古墳時代から古代にかけての集落が継続的に営まれ、その後に生産域へと大きく変化する。集落は時期によって少しずつ範囲が異なり、5世紀後半に集落規模が拡大し、6世紀代に最大規模に達する。8世紀前半に再び拡大傾向となるが徐々に減少し、9世紀後半に再度規模を拡大する。四戸の古墳群の造営に大きく関わる集落と考えられ、さらには出土した文字資料や奈良三彩短頸壺から、古代においても金井鹿寺や吾妻評・郡家と密接な関連をもった集落であったと考えられる。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第668集

四戸遺跡-本文編2-

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和2(2020)年3月11日 印刷

令和2(2020)年3月16日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田1784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社
